

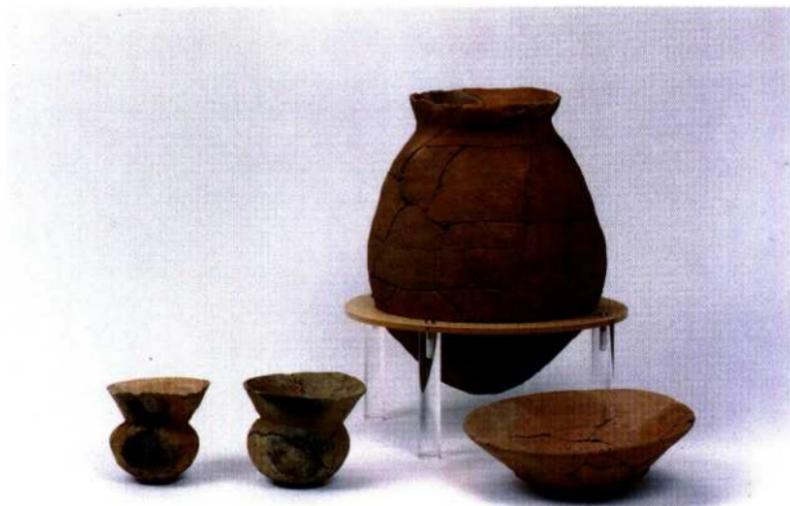
# 牧野小山遺跡 C地点

## 発掘調査報告書

1 9 9 8

岐 阜 県

財団法人 岐阜県文化財保護センター



SB 18 出土土器



SB 25 出土土器

## 序

美濃加茂市南部を西流する木曾川・飛騨川が形成する段丘上には原始より数多くの遺跡が所在し、過去にも多くの発掘調査が実施されています。木曾川と飛騨川の合流点内側に所在する牧野小山遺跡は東西約350m、南北約350mの広大な範囲をもつ大遺跡です。この遺跡西端部分は1972年に県道工事に伴い発掘調査が実施されており、縄文時代、弥生時代、古墳時代後期～古代の住居などの検出が報告されています。

今回実施されました調査は、緑ヶ丘苗畑跡地利用事業に伴うものです。前年度には本遺跡全範囲を対象とする試掘調査を実施しており、その結果100軒以上に及ぶ竪穴住居が確認され、東海地域有数の古代遺跡であることが確認されています。試掘調査時には本遺跡をA～D地区に4区分しておりますが、今年度の調査はC地区を対象とするものです。発見された遺構は古墳時代後期～平安時代に及ぶ竪穴住居39軒、掘立柱建物3棟などがありますが、長い間煮沸具として製作・使用された土師器甕の変遷を明らかにすることができ、古代の人々の暮らしをより鮮明にできたと考えます。

最後に、本報告書が刊行されるまでに発掘・整理作業に参加された方々を始めとして、調査・報告に際して多大なご指導と助言を頂いた文化財関係機関の方々に厚くお礼申し上げます。また、当報告書が古代の生活・精神文化を解明する上で糸口となることを願いますとともに、文化の保護に大きな役割を果たすものとして活用されることを念願して序文といたします。

平成10年3月

(財)岐阜県文化財保護センター

理事長 篠田 幸男

## 例 言

1. 本書は岐阜県美濃加茂市牧野・下米田町小山に所在する牧野小山遺跡（遺跡番号01211-04443）の発掘調査報告書である。
2. 本調査は緑ヶ丘苗畑跡地利用事業に伴うもので、岐阜県より岐阜県教育委員会を通じて委託を受け、発掘調査は財団法人岐阜県文化財保護センターが実施した。
3. 発掘調査は平成8年度に南山大学伊藤秋男教授指導のもとに、佐野康雄・藤岡比呂志が担当した。
4. 整理作業及び報告書作成は佐野康雄が担当し、本書に記載した遺物の実測、トレースは下記の者が行った。  
田中志穂・玉置順子・高井昌子・渡辺真紀子・渡辺由紀・小島和子・丹羽香・丹羽和代・澤村雄一郎  
長谷川幸志・佐野康雄
4. 遺物の写真撮影はスタジオ・ベガに委託して行った。
5. 本書の執筆は第Ⅱ章2を古田靖志氏（岐阜大学教育学部付属小学校教諭）、その他を佐野康雄が執筆・担当した。なお、第Ⅱ章2及び第Ⅲ章2～4の中世の遺物に関して小塩康真、小野木学の協力を得た。
6. 地形測量、空中写真測量は㈱イビソクに委託して実施した。
7. 堅穴住居跡出土の炭化材の放射性炭素年代及び樹種同定は㈱パレオ・ラボに委託して実施した。第Ⅳ章『牧野小山遺跡の住居跡出土炭化材の放射性炭素年代測定および樹種同定』はその報告である。
8. 本書では以下の地図を調整・使用している。  
国土地理院発行1/50,000地形図「美濃加茂」（平成2年）
9. 本報告書作成にあたり、須恵器については渡辺博人氏（各務原市埋蔵文化財調査センター）にご教示を頂いた。その他、下記の方々から数多くの御指導、御協力を賜った。記して感謝を表します。（敬称略）  
井川祥子・大熊茂弘・小川芳範・永井宏幸・西部良治・内堀信雄・村木誠
10. 本書内の図版作成は主として下記の要領で行った。
  - ・遺構実測図の縮尺は、原則として1/30、1/20である。方位は磁北である。
  - ・出土遺物の実測図は、原則として土器1/3、石器・鉄器1/2で統一した。なお、出土遺物ドット図は1/6である。
  - ・出土遺物ドットは土器は赤色ドット、須恵器は緑色ドット、石器は青色ドットで示す。（古墳～古代に限る。弥生期の住居は弥生土器他は赤色ドット、石器は青色ドットで示す。）
  - ・遺構・遺物写真の縮尺は任意である。
11. 土層、土器類の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』によっている。
12. 発掘調査ならび整理には次の方々参加、協力を得た。  
飯田房子・市原茂夫・大竹勇・小川鈿・織部勝美・加藤ふさ・兼松多門・兼松なみ江・成橋美保子  
川合伸子・高井昌子・玉置順子・土屋清子・丹羽鈴子・早川暁・早川美智子・川合津恵・藪下烈  
田中志穂・佐藤千壽子・渡辺真紀子・渡辺由紀・小島和子・丹羽香・丹羽和代
13. 調査記録及び出土品遺物などは財団法人岐阜県文化財保護センターにおいて保管している。

# 目 次

## 序

## 例 言

第Ⅰ章	発掘調査の経過	1
1	調査に至る経緯	1
2	発掘調査の経過と方法	2
第Ⅱ章	遺跡の立地と環境	4
1	遺跡周辺の地形	4
2	遺跡周辺の環境	4
第Ⅲ章	遺構と遺物	6
1	層序	6
2	記述方法	6
3	竪穴住居	8
4	土壙墓・配石墓	101
5	不明遺構	111
6	溝	116
7	掘立柱建物	125
8	土壙	125
9	包含層出土遺物	133
第Ⅳ章	自然科学分析	148
1	牧野小山遺跡の住居跡出土 炭化材の放射性炭素年代測定	148
2	牧野小山遺跡の住居跡出土 炭化材の樹種同定	149
第Ⅴ章	まとめと考察	152
1	集落の変遷	152
2	土壙墓・配石墓	157
3	牧野系甕	158
付 編	牧野小山遺跡試掘調査出土遺物	166

# 挿 図 目 次

1

第 1 図	牧野小山遺跡地形測量図及び 試掘調査トレンチ設定図	1	第 51 図	S B22出土遺物実測図 2	53
第 2 図	遺構全体図	3	第 52 図	S B23出土遺物実測図 1	54
第 3 図	周辺の主要な遺跡分布図	5	第 53 図	S B23遺構実測図・遺物分布図	55
第 4 図	基本層序	6	第 54 図	S B23出土遺物実測図 2	56
第 5 図	S B 1 遺構実測図・遺物分布図	9	第 55 図	S B24出土遺物実測図	57
第 6 図	S B 1 出土遺物実測図	10	第 56 図	S B24遺構実測図・遺物分布図	58
第 7 図	S B 2 遺構実測図・遺物分布図	11	第 57 図	S B25遺構実測図・遺物分布図	60
第 8 図	S B 2 出土遺物実測図	12	第 58 図	S B25出土遺物実測図 1	61
第 9 図	S B 3 出土遺物実測図	13	第 59 図	S B25出土遺物実測図 2	62
第 10 図	S B 3 遺構実測図・遺物分布図	14	第 60 図	S B26出土遺物実測図	63
第 11 図	S B 4 遺構実測図	15	第 61 図	S B26遺構実測図	64
第 12 図	S B 4 出土遺物実測図	15	第 62 図	S B26遺物分布図	65
第 13 図	S B 5 出土遺物実測図	16	第 63 図	S B27遺構実測図・遺物分布図	66
第 14 図	S B 5・6 遺構実測図	17	第 64 図	S B27出土遺物実測図 1	67
第 15 図	S B 5・6 遺物分布図	19	第 65 図	S B27出土遺物実測図 2	68
第 16 図	S B 5 出土遺物実測図 1	20	第 66 図	S B28遺構実測図・遺物分布図	69
第 17 図	S B 6 出土遺物実測図 2	21	第 67 図	S B28出土遺物実測図	70
第 18 図	S B 7 遺構実測図	21	第 68 図	S B29遺構実測図・遺物分布図	71
第 19 図	S B 7 出土遺物実測図	22	第 69 図	S B29出土遺物実測図	72
第 20 図	S B 8 出土遺物実測図	22	第 70 図	S B30遺構実測図・遺物分布図	73
第 21 図	S B 8 遺構実測図・遺物分布図	23	第 71 図	S B30出土遺物実測図	74
第 22 図	S B 9 遺構実測図・遺物分布図	25	第 72 図	S B31遺構実測図・遺物分布図	75
第 23 図	S B 9 出土遺物実測図 1	26	第 73 図	S B31出土遺物実測図	76
第 24 図	S B 9 出土遺物実測図 2	27	第 74 図	S B32出土遺物実測図	77
第 25 図	S B10遺構実測図・遺物分布図	28	第 75 図	S B32遺構実測図・遺物分布図	78
第 26 図	S B10出土遺物実測図	29	第 76 図	S B33出土遺物実測図	79
第 27 図	S B11出土遺物実測図	29	第 77 図	S B33遺構実測図・遺物分布図	80
第 28 図	S B11遺構実測図・遺物分布図	30	第 78 図	S B83・84遺構実測図	82
第 29 図	S B12出土遺物実測図	31	第 79 図	S B83・84遺物分布図	83
第 30 図	S B12遺構実測図・遺物分布図	32	第 80 図	S B83出土遺物実測図 1	84
第 31 図	S B13出土遺物実測図	33	第 81 図	S B83出土遺物実測図 2	85
第 32 図	S B13遺構実測図・遺物分布図	34	第 82 図	S B84出土遺物実測図 1	86
第 33 図	S B14遺構実測図・遺物分布図	35	第 83 図	S B84出土遺物実測図 2	87
第 34 図	S B14出土遺物実測図	36	第 84 図	S B85遺構実測図・遺物分布図	88
第 35 図	S B15遺構実測図	37	第 85 図	S B85出土遺物実測図	89
第 36 図	S B15出土遺物実測図	37	第 86 図	S B87遺構実測図・遺物分布図	90
第 37 図	S B16遺構実測図・遺物分布図	38	第 87 図	S B87出土遺物実測図 1	91
第 38 図	S B16出土遺物実測図	39	第 88 図	S B87出土遺物実測図 2	92
第 39 図	S B17遺構実測図	40	第 89 図	S B88出土遺物実測図	93
第 40 図	S B17出土遺物実測図	41	第 90 図	S B88遺構実測図・遺物分布図	94
第 41 図	S B18出土遺物実測図	41	第 91 図	S B89遺構実測図・遺物分布図	95
第 42 図	S B18遺構実測図・遺物分布図	42	第 92 図	S B89出土遺物実測図	96
第 43 図	S B19遺構実測図・遺物分布図	43	第 93 図	S B出土遺物(石器)実測図 1	97
第 44 図	S B19出土遺物実測図	44	第 94 図	S B出土遺物(石器・鉄器)実測図 2	98
第 45 図	S B20遺構実測図・遺物分布図	46	第 95 図	S B出土遺物(石器・鉄器)実測図 3	99
第 46 図	S B20出土遺物実測図	47	第 96 図	S Z 2 遺構実測図	100
第 47 図	S B21遺構実測図・遺物分布図	48	第 97 図	S Z 2 出土遺物実測図	101
第 48 図	S B21出土遺物実測図	49	第 98 図	S Z 3 遺構実測図	103
第 49 図	S B22遺構実測図・遺物分布図	51	第 99 図	S Z 3 出土遺物実測図	102
第 50 図	S B22出土遺物実測図 1	52	第100 図	S Z 4 遺構実測図	104
			第101 図	S Z 4 出土遺物実測図	104



## 図 版 目 次

<p>図版 1-1 S B 2〔断割後〕(西より)</p> <p>2 S B 5・6 遺物出土状況(東より)</p> <p>3 S B 6(北より)</p> <p>4 S B 8〔断割後〕(西より)</p> <p>5 S B 9(南より)</p> <p>6 S B 10(南より)</p> <p>7 S B 11(南より)</p> <p>8 S B 12(西より)</p>	<p>図版 6-1 S B 10第26図 4</p> <p>2 S B 11第27図 2</p> <p>3 S B 13第31図 1</p> <p>4 S B 14第34図 7</p> <p>5 S B 16第38図 1</p> <p>6 S B 16第38図 2</p> <p>7 S B 16第38図 5</p> <p>8 S B 16第38図 3</p> <p>9 S B 18第41図 1</p> <p>10 S B 18第41図 8</p> <p>11 S B 18第41図 9</p> <p>12 S B 19第44図 1</p> <p>13 S B 19第44図 4</p>
<p>図版 2-1 S B 14遺物出土状況(南より)</p> <p>2 S B 15(西より)</p> <p>3 S B 16(南より)</p> <p>4 S B 17(南より)</p> <p>5 S B 18カマド(南より)</p> <p>6 S B 18〔断割後〕(南より)</p> <p>7 S B 21(南より)</p> <p>8 S B 22(東より)</p>	<p>図版 7-1 S B 20第46図 8</p> <p>2 S B 21第48図 3</p> <p>3 S B 22第50図 6</p> <p>4 S B 22第51図 22</p> <p>5 S B 23第52図 1</p> <p>6 S B 23第54図 6</p> <p>7 S B 24第55図 2</p> <p>8 S B 24第55図 3</p> <p>9 S B 24第55図 7</p> <p>10 S B 25第58図 1</p> <p>11 S B 25第58図 7</p> <p>12 S B 25第58図 4</p>
<p>図版 3-1 S B 25(西より)</p> <p>2 S B 27 Pit 1 遺物出土状況(西より)</p> <p>3 S B 32(南より)</p> <p>4 S B 33(南より)</p> <p>5 S B 85(西より)</p> <p>6 S B 85カマド(西より)</p> <p>7 S Z 3-①(西より)</p> <p>8 S Z 3-②(西より)</p>	<p>図版 8-1 S B 25第58図 6</p> <p>2 S B 25第59図 9</p> <p>3 S B 25第59図 10</p> <p>4 S B 25第58図 8</p> <p>5 S B 25第59図 19</p> <p>6 S B 26第60図 2</p> <p>7 S B 27第64図 1</p> <p>8 S B 27第64図 7</p> <p>9 S B 27第64図 6</p> <p>10 S B 27第65図 9</p> <p>11 S B 27第65図 10</p> <p>12 S B 29第69図 1</p> <p>13 S B 30第71図 3</p>
<p>図版 4-1 S Z 6(南より)</p> <p>2 S Z 8(西より)</p> <p>3 S X 5(南より)</p> <p>4 S D 10(西より)</p> <p>5 S K 51 遺物出土状況(東より)</p> <p>6 S K 50遺物出土状況(東より)</p> <p>7 S H 1(東より)</p> <p>8 S H 2(東より)</p>	<p>図版 9-1 S B 31第73図 2</p> <p>2 S B 31第73図 3</p> <p>3 S B 31第73図 4</p> <p>4 S B 31第73図 5</p> <p>5 S B 32第74図 6</p> <p>6 S B 32第74図 3</p> <p>7 S B 83第80図 5</p> <p>8 S B 83第80図 7</p> <p>9 S B 83第80図 10</p> <p>10 S B 84第82図 14</p>
<p>図版 5-1 S B 1 第5図 5</p> <p>2 S B 2 第8図 1</p> <p>3 S B 2 第8図 2</p> <p>4 S B 2 第8図 4</p> <p>5 S B 2 第8図 6</p> <p>6 S B 3 第9図 1</p> <p>7 S B 5 第13図 1</p> <p>8 S B 5 第13図 2</p> <p>9 同上底部分面</p> <p>10 S B 6 第16図 9</p> <p>11 S B 7 第19図 1</p> <p>12 S B 8 第20図 1</p> <p>13 S B 9 第23図 14</p> <p>14 S B 9 第23図 15</p>	

- 11 S B84第82図 12
- 12 S B84第83図 31
- 13 S B85第85図 1
- 14 S B85第85図 2

- 図版10-1
- 1 S B85第85図 3
  - 2 S B85第85図 4
  - 3 S B87第87図 8
  - 4 S B87第88図 14
  - 5 S B88第89図 4
  - 6 S B88第89図 6
  - 7 S B88第89図 2
  - 8 S B89第92図 5
  - 9 S B89第92図 6
  - 10 S B89第92図 8
  - 11 S B28第95図 36
  - 12 S Z 8 第115図 5
  - 13 包含層第138図 22

- 図版11-1
- 1 S B14第34図 1
  - 2 S Z 2 第97図 出土土器
  - 3 S Z 2 第97図 10・11・12底部外面
  - 4 S Z 6 第104図出土土器
  - 5 S Z 7 第106図出土土器
  - 6 S K50第126図 1
  - 7 S K50第126・127図出土土器
  - 8 S K51第130図出土土器

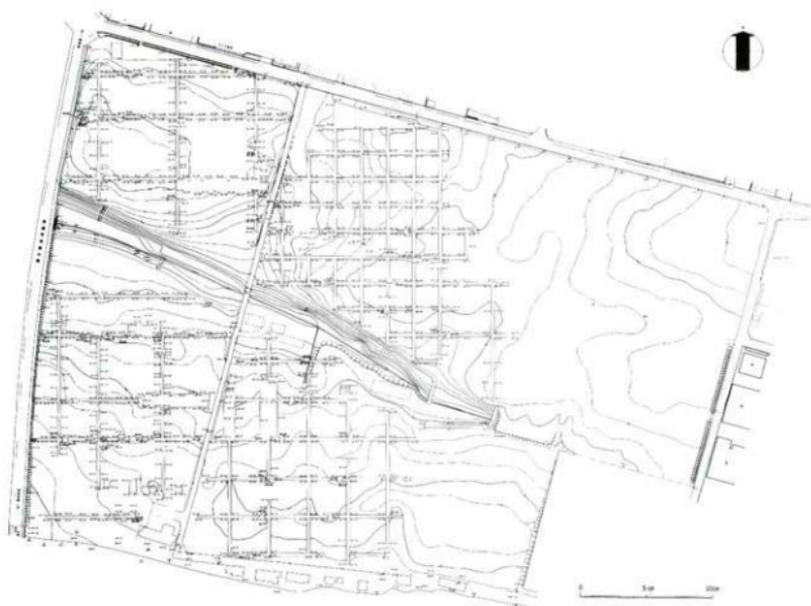
図版12-牧野小山遺跡出土住居址の柱材 1

図版13-牧野小山遺跡出土住居址の柱材 1

## 第I章 発掘調査の経過

### 1 発掘調査に至る経緯

牧野小山遺跡は岐阜県美濃加茂市牧野・下米田町小山に所在する。本遺跡は木曾川・飛騨川の合流点内側の広大な段丘上に立地しており、周辺の段丘上には縄文時代以降の数多くの遺跡が集中している。昭和30年代より苗畑として利用されてきたため遺構の保存状態も良好である。昭和47年遺跡の西端部分が県道工事に伴い発掘調査が実施されている。この調査は道路幅にそう長狭な調査区であったが、縄文時代・弥生時代・古墳時代後期～古代に帰属する竪穴住居などが確認され、遺構の南北方向の広がり約300mにも及ぶことが報告されている。平成7年本遺跡において県事業である緑ヶ丘苗畑跡地利用事業が計画され、これに先立ち遺構の広がり・密集度・遺存状況確認のための試掘調査を財団法人岐阜県文化財保護センターが委託を受け実施した。対象面積が約10万㎡に及ぶため対象地域を大きく4区に区分し、トレンチを任意に設定して調査を実施した。結果、当初現地形は大きく変更されていないと考えていたが、苗畑耕作に伴いある程度の地形の変更がされていることが判明したが、遺構確認面である第V層上面（浅黄橙色土）までは耕作に伴う攪乱が到達することは少なく、5世紀中葉より9世紀後半に帰属する約100軒以上の竪穴住居を確認した。竪穴住居の展開状況から対象範囲全域に遺構が展開することが予想され、東海地方においても最大級の規模を誇る集落遺跡であることが報告されている（佐野 1996）。この結果を基に平成8年度はC区を対象とした発掘調査の委託



第1図 牧野小山遺跡地形測量図及び試掘調査トレンチ設定図



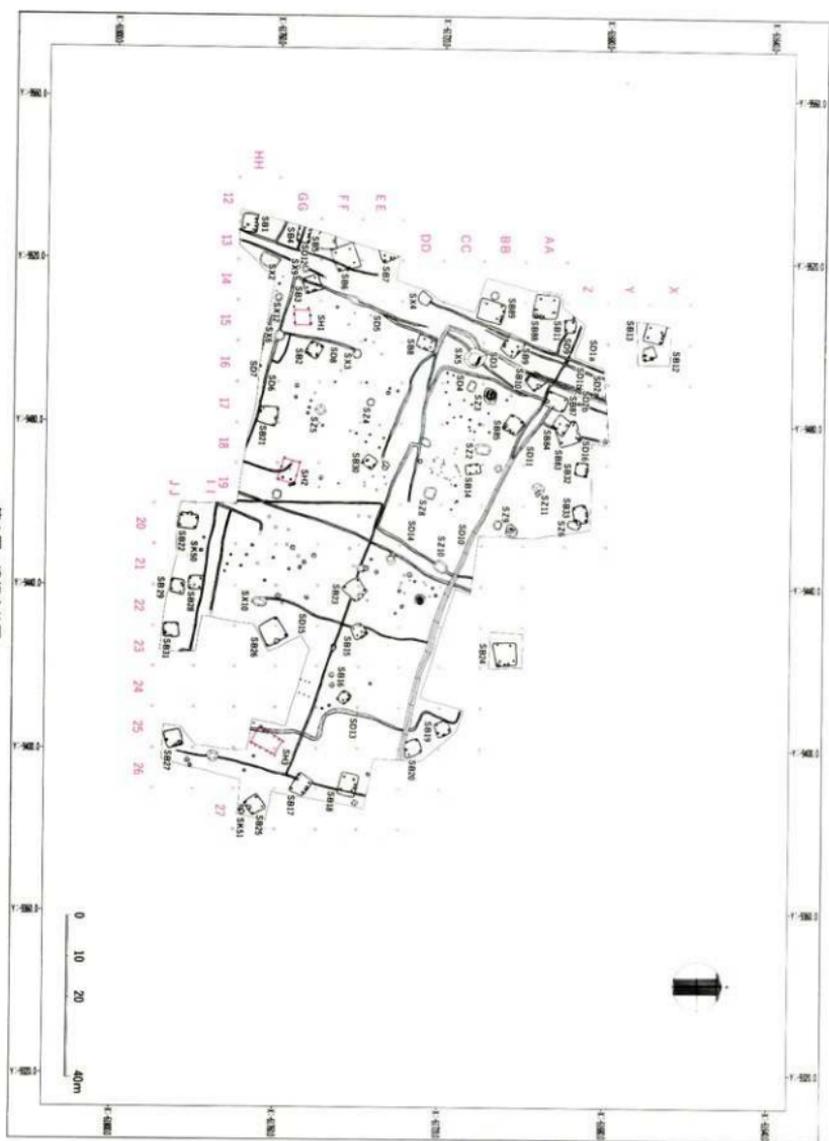
写真1 牧野小山遺跡全景

を受け、当文化財保護センターが実施することとなった。

## 2 発掘調査の経過と方法

今回の調査は緑ヶ丘苗木跡地利用事業に伴う発掘調査である。前年度の試掘調査終了時点ではトレンチの埋め戻し作業を実施したが、今回の対象地域となったC区においては、表土掘削の際の掘り下げレベルの根拠、遺構集中地域の確認のため埋め戻し作業を行わずトレンチ部分を広げた状態で平成8年度対象面積である5,000㎡の調査を実施した。なお、第2図遺構全体図は前述の調査方法によるため前年度トレンチ部分の面積を含んでいる。

平成7年度は、4月より重機により表土除去より開始した。表土除去後遺構確認面である第V層上面（浅黄橙色土）で人力による遺構確認を行い、順次遺構掘削を手掛けた。なお、試掘調査時に国土座標第Ⅷ系の原点を基に全地区を10m方眼分割を行い、そのままのグリッド名を踏襲して使用している。確認できた遺構は堅穴住居、掘立柱建物、土坑、Pit、溝などである。これらは切り合うことなく依存し、攪乱が及ぶことも少ないが量的に多く、また出土遺物数も膨大で、遺構の実測作業、遺物の取り上げ作業には手間取った。また、砂地であるため遺構の保存が難しく、調査が終了した遺構はシートを掛け保存することとした。11月下旬に遺構全体図の空中写真測量を実施した後住居の断削など精査及び図面作成を行い12月上旬一部を残し遺跡内での作業を終了した。以後、遺構図、出土遺物の整理などを実施した。なお、遺構の埋め戻し作業を3月下旬までに終了した。



第2图 遺構全体図

## 第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

### 1 遺跡周辺の地形

牧野小山遺跡は、美濃加茂市南部の平坦面上に位置する。この平坦面は第四期更新世以降に形成された木曾川・飛騨川の河岸段丘面であり、市街地を含む低位段丘面、西部の加茂野地区周辺の中位段丘面、上野地区周辺の高位段丘面に区分されている。本遺跡が位置する木曾川・飛騨川合流点周辺一帯は、この内の低位段丘面に属しており、残されている段丘崖をもとに推定するとさらに四段の平坦面（段丘面）に区分が可能と考えられるが明瞭ではない。段丘崖は、遺跡付近及びその東方の木曾川右岸一帯で木曾川の流向に平行しておよそ東西方向に存在しており、この付近の平坦面（段丘面）が木曾川の影響を受けて形成されたことが窺える。一方、遺跡より西方の飛騨川左岸地域では飛騨川の流向に平行して南北方向に段丘崖が存在したうに前者の平坦面を開析した状態を示すことよりこれらの平坦面（段丘面）が木曾川より後に飛騨川の影響のもとに形成されたことが窺える。

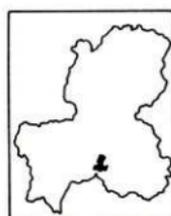
A～D調査区は、4段に区分される平坦面（段丘面のうち）2段目と3段目にまたがった位置に分布しているが、実際には苗畑耕作などにより南に緩やかに傾斜するスロープ状の平坦面の様相を呈している。各段丘面の境界を成す小さな段丘崖からは現在もなお地下水を湧出する地点が認められる。また、地質的には、中村層の凝灰質左岸層を被覆した木曾川起源の堆積物から成っている。その大部分は砂礫で構成されているが、遺跡を包含する上部は雲母を多量に含む砂質シルトから成っている。層内より産出される円礫の多くが濃飛流紋岩であり、他に花崗斑岩、頁岩、砂岩の円礫も含まれている。本遺跡より出土する石器の石材には、頁岩や砂岩起源の緻密なホルンフェルスが多く使用されている。これらは、美濃帯の頁岩や砂岩が熱変成を受けてきたものであり、周辺に産出する岩石の中で硬くて緻密なうえ、比較的加工しやすいという性質を選択的に利用した結果と考えられる。

遺跡の立地は、木曾川の水面から比高が大きく、当時から比較的安定した平坦面であったと考えられる。また、段丘崖よりまとまった地下水が湧出しているので生活のための水の確保も容易であり極めて適した場所であったと考えられる。後述するようにこの周辺一帯が遺跡の密集地域であることはこの理由に拠るものであろう。

### 2 遺跡周辺の環境

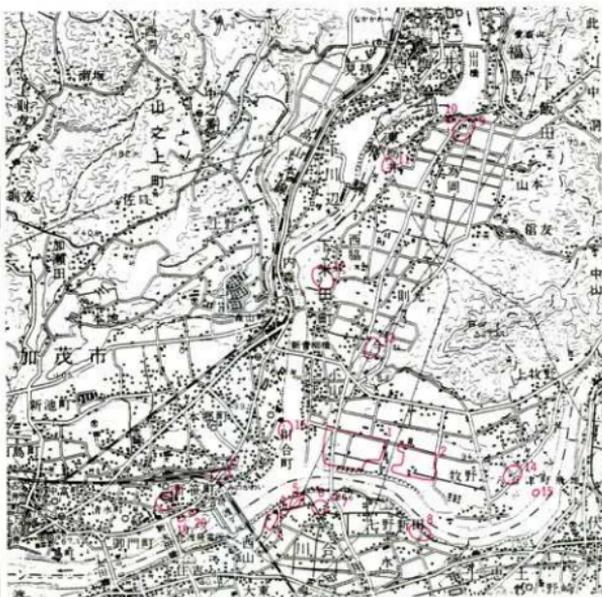
本遺跡の所在する美濃加茂市付近の地形は北部の山地・中央部に広がる丘陵地・南部の木曾川や飛騨川の河岸段丘である平坦面に区分できる。この南部の平坦面は第四期更新世以降に形成された河岸段丘面であり、本遺跡はその中でも現在の市街地を含む低位段丘面に立地している。木曾川・飛騨川の合流点を中心とするこの低位段丘面上に非常に豊かに遺跡が所在することはよく周知されている事実である。しかし、調査された遺跡は多くなく面的な把握が弱いこともあり、地形などから判断する隣接する遺跡との区分一特に集落遺跡一が困難と考えられるものもある。主な調査例を挙げると、縄文時代では神明遺跡が1969年に実施されている。4軒の堅穴住居が検出されており、増子康真氏により牧野小山遺跡（島崎地区遺跡）、中富遺跡（市内中富町）の資料と共に縄文時代中期後半の編年の基礎資料となった遺跡でもある。ただし、中富Ⅰ式～Ⅴ式の変遷に関しては、系統差を指摘する考え

も存在し今後の検討が必要と考えられる。弥生時代は本遺跡（鳥崎地区遺跡）に中期に帰属する12軒の竪穴住居跡の報告があるが、週間Ⅰ式以降遺跡の増大が顕著に認められ、調査例としては今遺跡・為岡遺跡、木曾川対岸の可見市所在の宮之脇遺跡が挙げられる。これらの遺跡は規模的にも拡大しており、今遺跡では古墳時代後期～奈良時代にかけての竪穴住居37軒も確認されている。また、松戸Ⅱ式以降（牧野小山遺跡鳥崎地区遺跡例）当地域を中心とする土器器甕の製作・使用が認められ1つの地域圏を形成しており、川合地区・赤池地区・亀淵地区にかけてかなりの古墳があったとされることと無関係ではないと考えられる。これらが古代に大きく展開した本遺跡の基盤となっていると考えられるが、当時代における加茂郡についての文献資料は断片的である。古代における加茂郡は『和妙類聚草抄』によるならば、殖生・美和・生部・井門・小山・米田・日理・神田・中家・川辺・志麻・駅家郷の12郷が記載されている。場所の比定については一致をみないが、[米田郷]・[小山郷]は上米田、下米田、牧野、小山地区におおよそ比定されると考えられ律令制度下において注目される。また「延喜式」神名帳によると、美濃国の式内社39座のうち当郡内は加茂郡、県主、坂祝、大山、太部、阿夫志奈、神田、佐久太、多為、中山神社の9座が挙げられ著しく遍在していることが指摘されている。これは、県主の祭祀的性格をもつ集団が当郡内にかなり多く存在したことを反映するものであろうか。大宝2年（703年）御野国加茂郡半布里戸籍で著名な半布里遺跡では造籍時の人口は約1200名に及ぶと推定されているが、これに近い集落の存在を想定しても隔絶はないと考えられる。



1. 牧野小山遺跡（1972～前）
2. 岐大農場跡遺跡
3. 宮之脇B地点遺跡（1990）
4. 宮之脇A地点遺跡（1974）
5. 宮之脇A地点遺跡（1990）
6. 川合古墳群（1990～91）
7. 川合遺跡（1973）
8. 牧野遺跡
9. 為岡遺跡（1979）
10. 道上遺跡
11. 光徳寺北遺跡
12. 深沢遺跡
13. 今遺跡（1978）
14. 小日戸遺跡
15. 神明遺跡（1970）
16. 川合東遺跡
17. ニッソ塚遺跡
18. 野原遺跡（1997～98）
19. 亀淵遺跡
20. 赤池1号～3号古墳

（ ）内は調査年次を表す



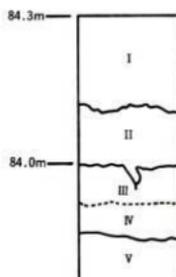
第3図 周辺の主要な遺跡分布図

（国土地理院発行の万分の1（1990年）の地形図を利用して作成したものである。）

## 第Ⅲ章 遺構と遺物

### 1 層 序

遺跡の立地面は中村層の凝灰質砂岩層を被覆した木曾川起源の堆積物からなっている。その上部に遺物を包含する黒褐色シルト質砂質土がのり、現況では北から南に向かって緩やかに傾斜するスロープ状の平坦面となっていた。調査前は旧地形を反映した広大な平坦面の存在を予測したが、前述したとおり苗畑と機能していた時にかなりの改変が行われており、実際の小河川による浸食や段丘形成時の段差などが平坦地化されていることが判明した。特に第Ⅰ・Ⅱ層については、かなりの改変が加わっており、遺物包含である第Ⅲ層の上部を切るが、部分的には遺構確認面であるⅣ層上部まで切っている箇所も存在する。また、南側の木曾川寄り部分は木曾川起源の堆積物内に含まれる砂礫層が表出しており構造は分布しない。以下に第4図を参考に説明を加える。



第4図 基本層序

- 第Ⅰ層 (2.5YR 2/1 黒色土)** 耕作土。粘質な砂質であり、層厚は15～40cmであるが、上位レベルは安定している。
- 第Ⅱ層 (2.5YR 2/1 黒色土)** 耕作土。Ⅰ層と区分したが、本来はⅠ層下部に敷いたと考えられるサバ土 (5YR 7/8 橙色土) を多く包含する部分である。層厚は10～30cmである。第Ⅰ・Ⅱ層中には耕作により原位置より攪乱された遺物を含む。
- 第Ⅲ層 (7.5YR 3/1 黒褐色土)** シルト質砂質土。本来の遺物包含層であるが、上部を第Ⅰ・Ⅱ層により切られている。1972年調査時に黒色土とされているものと対応する。箇所によっては粘質をおびる。
- 第Ⅳ層 (7.5YR 4/3 黒褐色土)** 第Ⅲ層から漸移的に変化し明確な境界は引けない。第BB～DD18区を中心にみられ粘質が強い。第Ⅴ層上部が第Ⅲ層の影響などから土壌化した部分と考えられる。
- 第Ⅴ層 (10YR 8/3 浅黄橙色土)** 木曾川起源の堆積物であり、上部は砂質シルトの層となっている。ただし、南端部は拳大の礫が表出している。堅穴住居などの遺構はこの面上部で確認している。

### 2 記述方法

#### 遺 構

調査によって確認された遺構は堅穴住居 (SB) 39軒、掘立柱建物 (SH) 3棟、土壌墓・配石墓 (SZ) 11基、性格不明遺構 (SX) 7基、溝 (SD) 15条、縄文時代に帰属する土壌墓2基、地土坑 (SK)

・ビット多数である。なお、1995年度の試掘調査で確認した遺構中C地区の竪穴住居・配石墓などの主な遺構についてもここで記述している。遺構名・番号については調査時において付与したものをそのまま使用したため試掘調査時において確認した遺構番号との間に開きがあるが全体図でご確認願いたい。竪穴住居に関しては、位置・平面形（長辺と短辺の長さの違いが1割を目安として方形・長方形を区分）・主軸方位・規模・面積（上場ラインで囲まれた範囲）・時期については表形式で提示する。土壌墓・配石墓については土坑内より中世に帰属する遺物を検出したものを機械的に中世墓としたため、SZ2・3などのように本来他の機能を想定しなければならないもの含まれている可能性がある。また、溝と繋がる土壌については、他の機能を想定したため不明遺構として取り上げている。土壌墓・配石墓・性格不明遺構についても位置・規模・長軸方向を表形式で提示する。溝については、遺構番号が附てあるもの以外は現代の暗渠、排水施設溝である。なお、遺構の帰属時期については、他遺構とも共通するが基本的には出土遺物の時期を記述しており、その遺構そのものの年代観と必ずしも一致するものでない。ただし、遺物の出土位置、状況などから遺構の機能した時期等に係わる問題に言及するには今なお多くの問題があり、ここでは極めて近い時期を提示するという前提に立ておく。

## 遺物

遺構プラン確認後、遺物は出土地点を記録して取り上げ平面、断面分布図を作成した。出土した遺物は縄文時代～中世に及ぶが器種・形態・時期等が判別可能な資料についてはできるだけ図下している。遺物の記述にあたっては、特に中心を占める古代に帰属すると考えられるものについては須恵器は斎藤孝正氏（斎藤 1989・1991）、渡辺博人氏（渡辺 1981・1996）による編年を基に、土師器については既存の報告・研究成果を参考に特に甕については独自の分類を行った。また、中世山茶碗については、藤澤良祐氏の時期区分にしたがっている。

## 甕

- A類 長く外折する口縁をもち、ヨコナデにより口縁端部外面に面をなす、あるいは僅かに上方に引き出すもの。
- B類 長く外折する口縁部をもつ。口縁部内面はハケ後ナデが、外面はナデが施され、口縁部分にかかる胴部調整のハケ上部を消しており、丁寧な調整が認められるもの。また、底部の接合方法として相欠はぎ接合が、底部は平底aとなるもの。
- C類 Bと口縁部形態は類似するが、ナデ調整が退化し内面のハケがのこるもの。相欠はぎ接合及び平底aがみられる。
- D類 口縁部は比較的短く外反し、口縁部内外面の調整がより退化したもの。相欠はぎ接合はみられなくなり、平底bとなる。
- E類 口縁部が短く立ち上がり、胴部外面の調整が体部はナデが主流となるもの。大型品は概して少ない。
- F類 B類の小型甕
- G類 C類・D類の小型甕であり、それぞれG1類・G2類とする。
- H類 E類の小型甕
- I類 資料が少なく上記の区分に分類できないもの。



写真2 相欠はぎ接合1



写真3 相欠はぎ接合2



写真4 相欠はぎ接合3

なお、相欠はぎ接合法とは底部上端、胴部下端に器壁半分程の接合部分（のり代部分）を2～3cm程もち、ある程度時間をおいて半乾燥の状態では接合させる方法である。（写真2～4）底部の形状については円底にリング状の粘土紐を張り付け平底とするものをa、平底のものをbとした。

### 3 竪穴住居

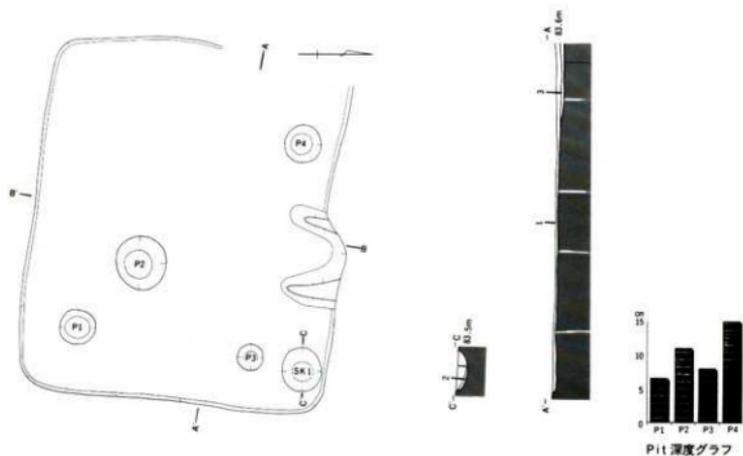
#### SB1（第5図）

位置	HH 12・13	平面形	長方形	主軸方位	N-6°-E
規模 (cm)	350×450×6	面積	16.1㎡	時期	8世紀前～中

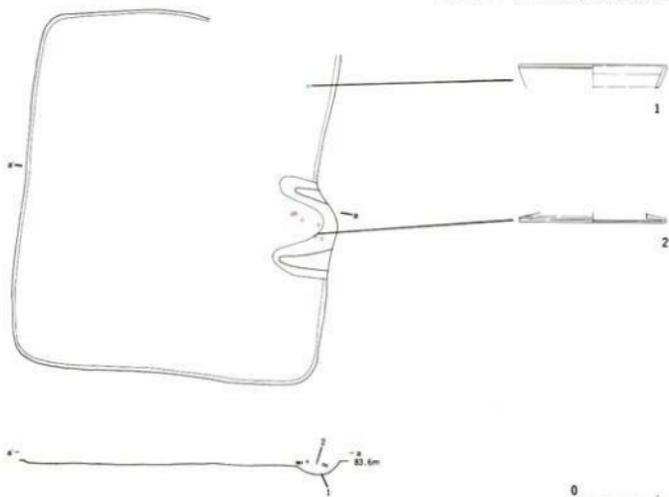
北西コーナー部分を調査区外に置く。南壁部分はわずかに残すのみであり、全体的に覆土の堆積は薄い。地山を振り込み床面とするが、特に硬化部分は認められなかった。カマドは北壁やや東寄りに位置する。両袖部に挟まれた深さ約10cmのすり鉢状のビツが残存する。本住居のみならず全住居に共通するのであるが、煙道部と思われる明確な外部への張り出し部分は認められず壁ラインによりわずかに弧状に外に張り出す構造をもつ。燃焼部と考えられるすり鉢状ビツ内には焼化による赤化は認められなかったが、カマド構築土と考えられる粘質な灰褐色土が堆積していた。Pit 1、3・4が配位的に主柱穴と考えられるが、深さは6.5～15cm程度と浅い。貯蔵穴（SK1）は北東コーナー部分に位置する。50×58cm、深さ12cm程度で浅いすり鉢状を呈する。

#### 出土遺物（第6図1～4・第93図1・2）

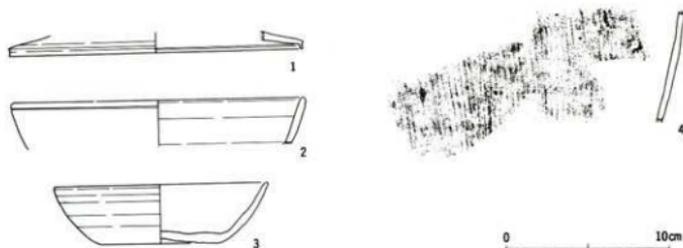
覆土堆積の悪さから12点の遺物を確認したのみである。須恵器坏蓋（1）、須恵器無台坏（2・3）、土師器甕D類（4）、砥石（第93図2）、打製石斧（第93図1）がある。坏蓋はカマド内の出土である。口縁端部は微弱化しているがほぼ垂直に下がっておりシャープである。無台坏は体部が外にひらきながら立ち上がるもので身は浅い。底部外面は未調整である。土師器甕D類は胴部下半部である。ハケ目間隔が広いのが特徴である。砥石は砂岩製の河原石を半割した内面に平坦な砥面、側面に湾曲した砥面をもつ。重量的に置き砥石と考えられる。打製石斧はホルンフェルス製であり、基部分のみ残存する。坏蓋、無台坏より8世紀前～中と考えられ、土師器甕D類が伴うものと考えられる。



1. 7.5YR5(黒褐色)  
砂質土
2. 7.5YR5(黒褐色)  
砂質土、やや粘質
3. 7.5YR5(黒色)  
細かい砂質土、1層により切られる、別遺構覆土か?
4. 5YR5(灰褐色)  
粘質土、カマド下底部分、焼土を混ぜる。



第5図 SB1遺構実測図・遺物分布図



第6図 SB1出土遺物実測図

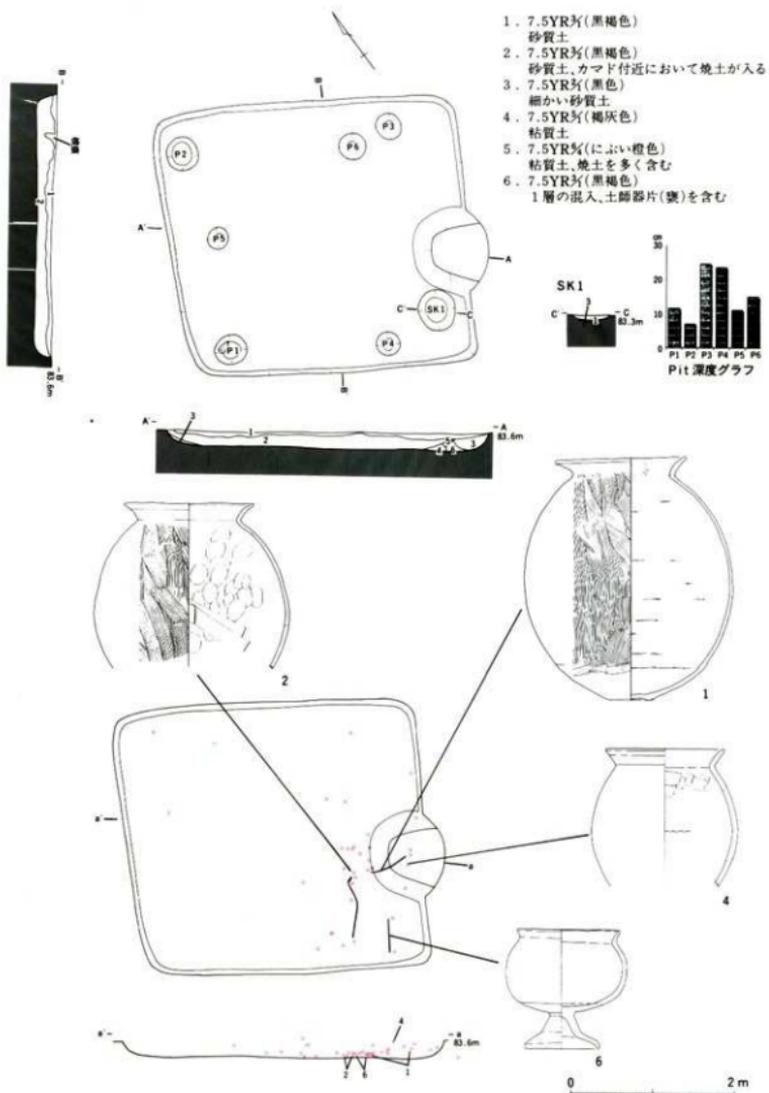
SB2 (第7図)

位置	FF 16・GG 16	平面形	長方形	主軸方位	S-62°-E
規模 (cm)	380×330×24	面積	11.6㎡	時期	6世紀半

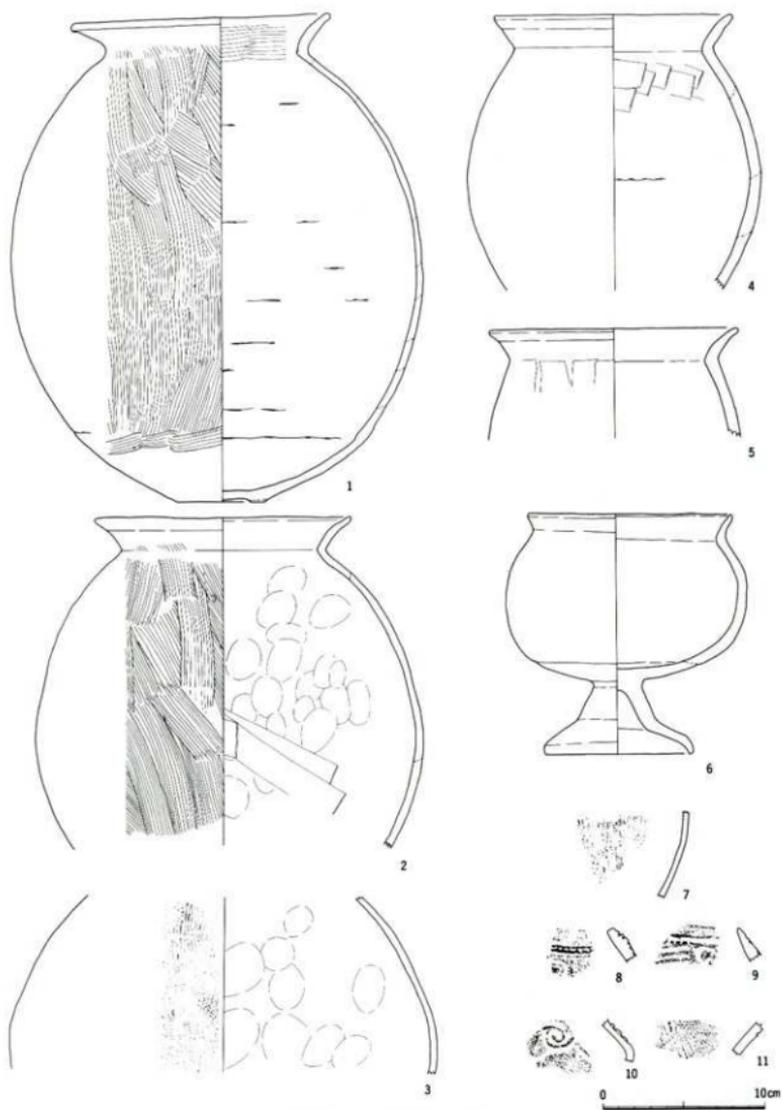
他住居と90°主軸方位を違える。硬くしまった浅黄橙色土をたたきしめ床面とし、安定している。カマドは東壁やや南寄りに構築されており遺存状態は良好である。粘質な褐色土で天井部・袖部を構築するが内部は焼化によりにぶい橙色土化している。燃烧部内底部はほぼ床面と同一レベルで、煙道部方向へ向かって緩やかな傾斜をもって立ち上がる。天井部中央付近には覆土である黒褐色土の流入とともに1・4の土師器甕が検出されている。Pit 1～4が主柱穴と考えられ、7～25cmの深さでばらつきがある。南東コーナー部分に50×40cm 深さ10cm程度の浅いすり鉢状を呈する貯蔵穴をもつ。

出土遺物 (第8図)

38点の遺物を取り上げたが、カマド内及び周辺に集中している。土師器甕B類(1～3・7)、土師器甕H類(4・5)、土師器台付鉢(6)(脚付小型甕)、縄文土器4点(8～11)がある。1の土師器甕はカマド燃烧部内資料とカマド手前の資料が接合し、ほぼ完形をなす。土師器甕B類は口縁部内面に粘土帯を張り付けて肥厚させ、ハケ調整を施す。その後、口縁内外面に丁寧な強い横ナデが施すことを特徴とするが、1の甕はハケ調整が深く抉った部分を一部残している。胴部内面には板ナデ、指頭圧痕、外面は頸部より底部方向へ縦位のハケ、胴部と底部部分の接合部分に相当する「相欠はぎ接合部」には横、斜位のハケを施す。また、底部部分にはナデ調整が行われているのみで、胴部上部からのハケ調整はこの部位までは施されず、底部部分が別パーツとして制作され、胴部と相欠はぎ接合により接合された一つの根拠としてあげられる。この特徴的な相欠はぎ接合方法により結果的に底部付近に段をもつこととなる。胴部外面に施されるハケ調整の上部は、口縁部に施される最終的な横ナデより消されている。底部は本来丸底として作出したものにリング状の粘土紐を添付し断面形態を平底としている(平底a)。甕H類4、5の胴部外面はナデ調整となる。土師器台付鉢の台部は柱状部から裾部にかけて弱い屈曲をもって広がった後、内湾し裾部端部に面をもつ。鉢部外面には焼化による赤化、煤付着が認められる。8～11の縄文土器は覆土上層で検出されたものである。いずれも強いキヤリパー形を呈し、8・11・12は燃糸を地文とし、9は無地文とし沈線、突帯による文様をもつ。土師器甕B類より6世紀前半と考える。



第7図 SB 2 遺構実測図・遺物分布図



第8图 SB2出土物实测图

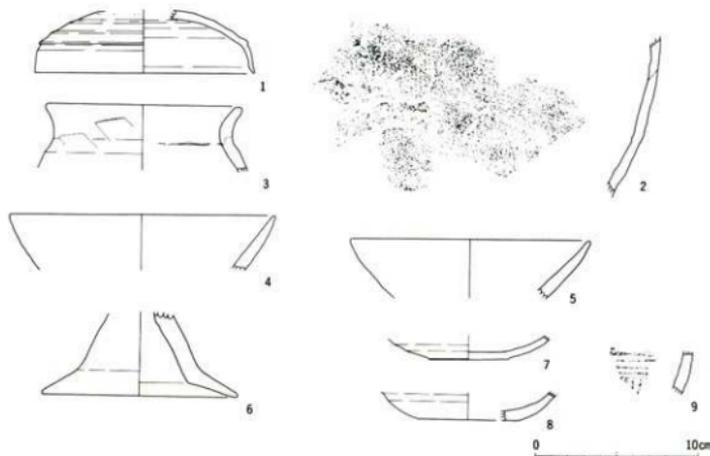
## SB 3 (第10図)

位置	FF 14・GG 14	平面形	方	形	主軸方位	N-69°-E
規模 (cm)	400×420×20	面積	16.5m <sup>2</sup>	時期	6世紀半～後半	

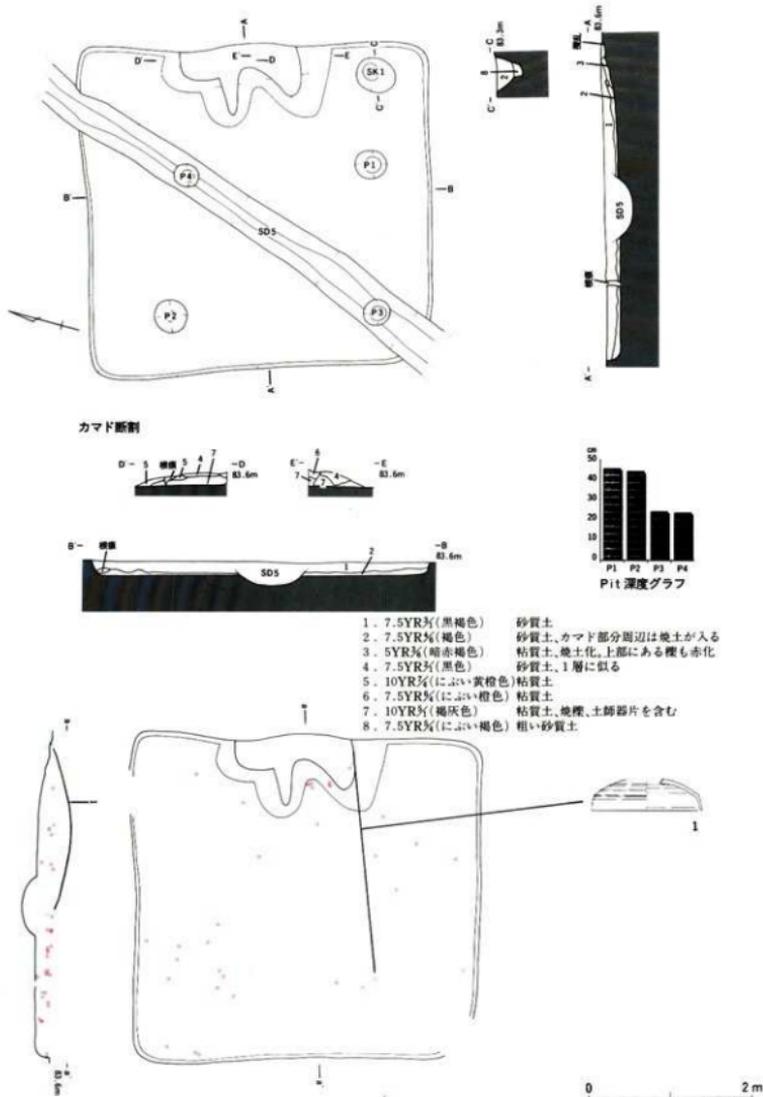
住居中央を南北に延びるSD5により切られる。SB2同様他住居と90°主軸方位を違える。地山を掘り込み、やはり浅黄橙色土をたたきしめ床面としていたと考えられるが、硬化面は認められず床面レベルをやや掘り下げすぎた感がある。カマドは東壁に位置し両袖部を残すが、断ち割り図から見て取れるように左袖部北側にカマド構築土と同様な粘質な褐色土で床面レベルより12cm程高いテラス部分を構築しており、特異な構造をもつ。両袖部内側はよく焼化している。Pit 3・4はSD5の底面より確認できたためその深度は溝底面より25cmを測るが、Pit 1・2は45cmを測り本来の深度と考えられ、この4本が支柱穴と考えられる。南東コーナー部分に48×44cm、深さ33cmを測る貯蔵穴をもつが、その断面形態は先端部が先細りとなる。

## 出土遺物 (第9図)

出土遺物数は41点であり、9点図示した。坏蓋(1)、土師器甕B類(2)、同甕H類(3)、土師器高坏(4～6)、山茶碗(7・8)、弥生土器深鉢(9)などが出土している。1の蓋は天井部は丸みを帯び稜部は上部の強いヨコナデにより、下部に段をつくりだしているが小規模である。口縁部は内湾ぎみに開き端面内面にやや幅広い沈線をめぐらし丸くおさめている。天井部外面には、約1/2程度回転ヘラケズリ調整が施される。高坏は坏部を外傾させ端部を丸くおさめる。脚柱状部は柱状部内面にケズリ、裾部内面にナデが施される。山茶碗及び弥生土器深鉢は覆土上層で検出されている。7・8は藤澤編年第11型式に比定される。9の深鉢胴部外面に粗い条痕が施される貝田町式条痕深鉢である。カマド袖部より検出された坏蓋は「尾張」系4型式に比定され、6世紀中～後半と考える。



第9図 SB3出土遺物実測図

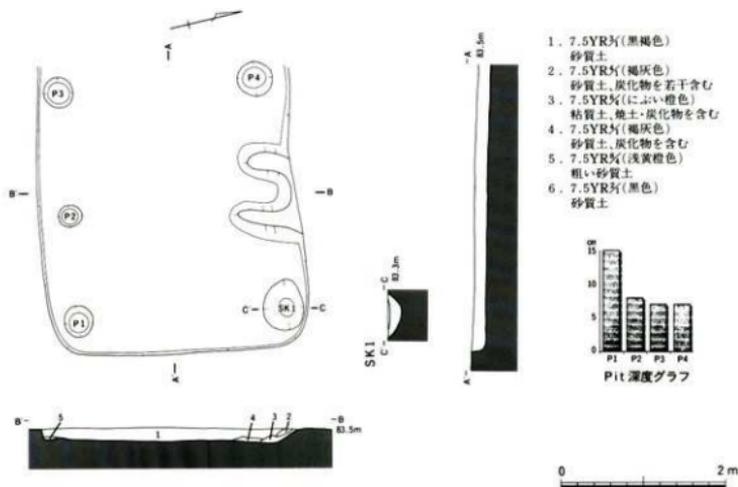


第10図 SB3 遺構実測図・遺物分布図

SB 4 (第11図)

位置	GG 13	平面形	長方形	主軸方位	N-12'-E
規模 (cm)	320×(360)×20	面積	(10.3)m <sup>2</sup>	時期	8世紀代

西壁部分を調査区外に置く。浅黄橙色土をたたくしめ床面としているが、中央付近を東西にSD12によって切られる。カマドは北壁に位置し、両袖部が残存する。袖部は粘質な褐色土により構築されているが補強材として“サバ石”(砂岩)が混入されている。袖部内側はよく焼化しているが、煙道部側への張り出しは顕著にみられない。Pit 1・3・4が配置的に柱穴と考えられるが、深さは7~15cm程度と浅い。Pit 2は入り口の施設に関わるものであろうか。北東コーナー部分に52×60cm、深さ16cmを測る浅いすり鉢状の貯蔵穴をもつ。



第11図 SB 4 遺構実測図

出土遺物 (第12図・第93図3)

24点の出土遺物がある因化可能な資料は土師器甕D類(1)、弥生土器深鉢(2)、打製石斧(第93図3)の3点のみである。土師器甕D類1は口縁部が短く外折し、口縁部内面ハケ、外面横ナデ後胴部にハケが施されている。2は貝田町式条痕深鉢である。外反する口縁外面には横位の、内面には櫛状工具による列点が施されている。打製石斧はホルンフェルス製で、素材となった剥片は縦長である。基部を欠損する。覆土下層より検出している土師器甕D類より8世紀代と考えられる。



第12図 SB 4 出土遺物実測図

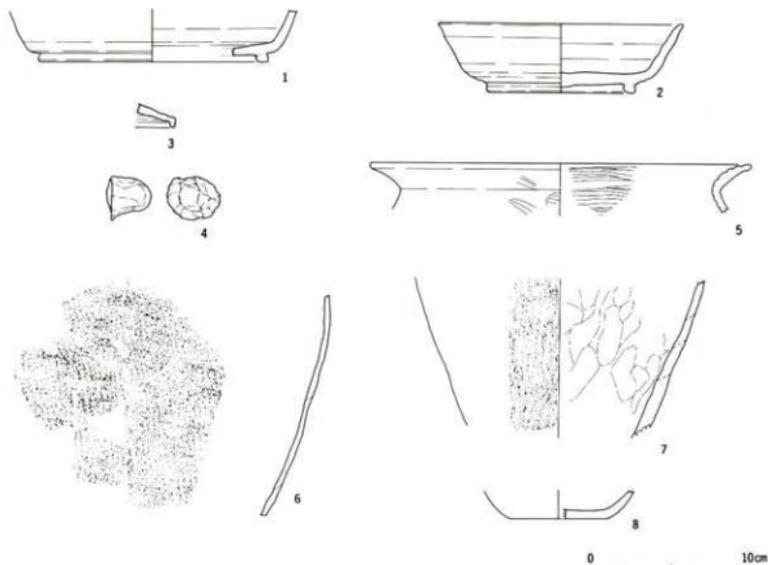
## SB 5 (第14図)

位置	FF 13・GG 13	平面形	長方形	主軸方位	N-2°-E
規模 (cm)	440×(380)×40	面積	(15.0)m <sup>2</sup>	時期	7世紀末～8世紀

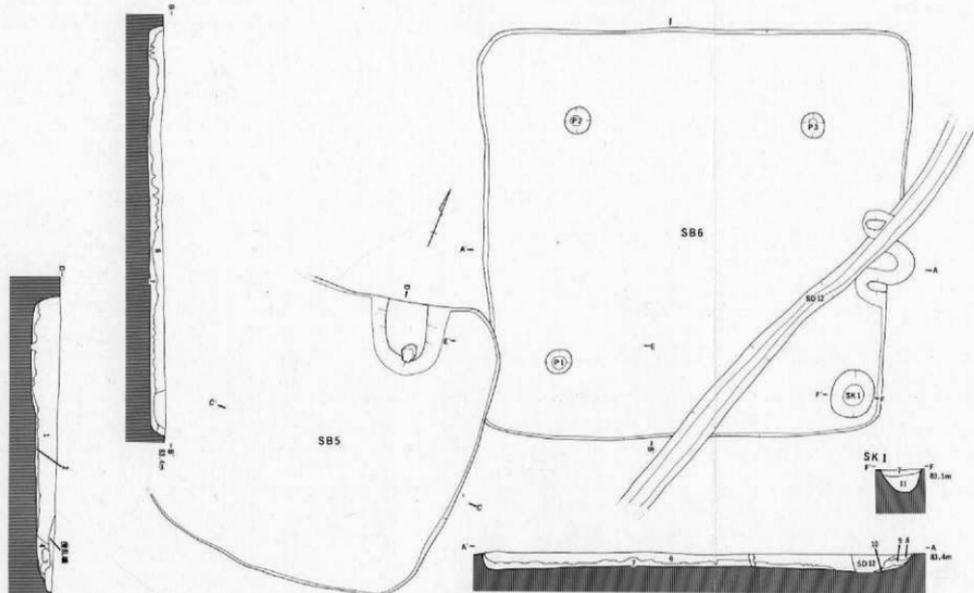
西壁部分を調査区外に置き、北東コーナー部分がSB 6を切る。主覆土である暗褐色土は他と比べしまりがなく、不確定な多くの攪乱が入るためセレクション図に見られる南壁の立ち上がり部分は推定的なものであり、プランもやや歪みを生じている。また、床面も特に硬面、あるいはたたきしめた痕跡が窺われず本来は数cm上位に存在したと考えている。砂岩製の河原石を先端に含むやや黒みを帯びた粘質の褐色土からなるテラス状の張り出しが北壁東寄りに確認できカマド部分に相当すると考えているが、焼土、炭化物は認められなかった。柱穴、貯蔵穴は確認できなかった。

## 出土遺物 (第13・15図・第93図4)

138点の出土遺物があるが、図示できたのは須恵器有台坏(1・2)、須恵器坏蓋(3)、須恵器瓶把手部(4)、土師器甕D類(5・6・7・8)、打製石斧(第93図4)の9点である。有台坏1・2は高台が底面外縁端近くに付けられ、1の高台は断面四角形でやや開きぎみであり、2のそれはやや潰れ気味となる。腰部の稜がやや丸みを帯びるが体部は直線的に外に開きながら立ち上がる。また、2は底部外面に墨書をもつ。坏蓋は口縁端部の折り返しは弱いがほぼ垂直に下がっており、シャープである。5は土師器甕D類の口縁部資料である。その調整手法については退化現象がみられD類と分類したが、甕C類からの過渡の特徴をもつ。6～8はおそらく同一個体資料であり、外面ハケ調整の



第13図 SB 5 出土遺物実測図



SB5・6

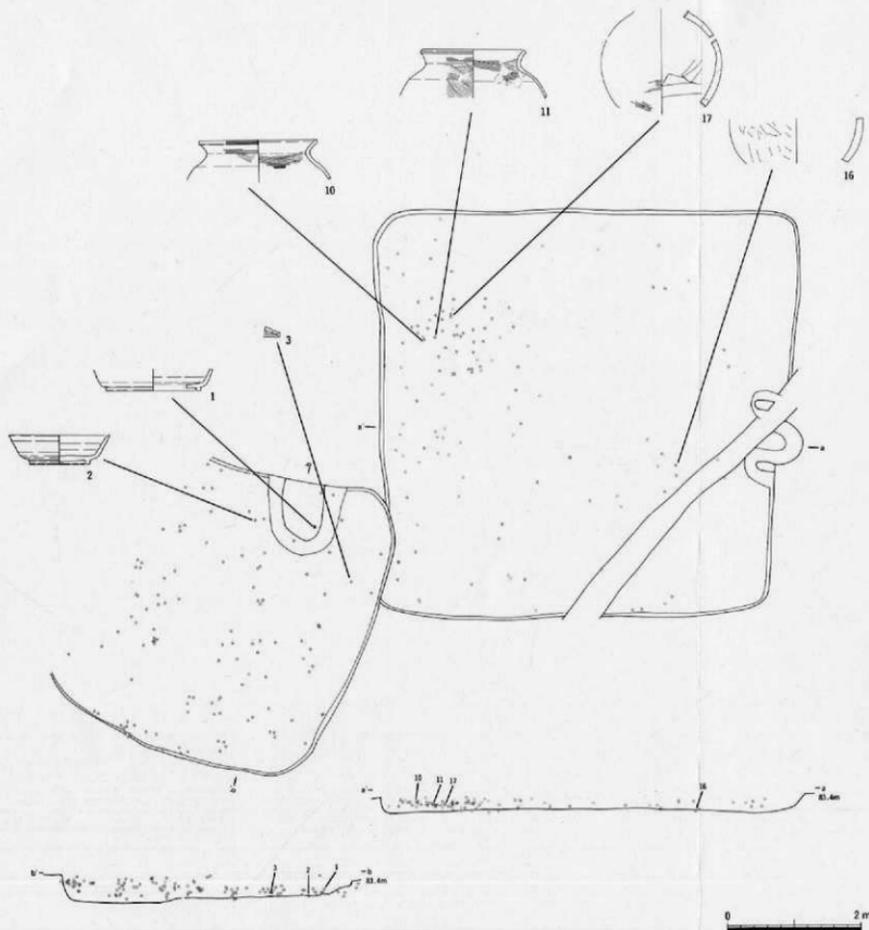
1. 7.5YR5(紅褐色) 砂質土
2. 7.5YR5(赤色) やや粘りい砂質土
3. 7.5YR5(紅褐色) 砂質土、やや粘り
4. 7.5YR5(黒紅褐色) 砂質土、やや粘り
5. 7.5YR5(赤褐色) 砂質土、薄く層状
6. 7.5YR5(赤褐色) 砂質土
7. 7.5YR5(赤褐色) 6層に充ち、黄褐色土をブローチ状に含む やや粘りい砂質土
8. 7.5YR5(赤褐色) 粘り土、赤土を伴う やや粘りい砂質土
9. 7.5YR5(暗赤色) 粘り土、赤土を伴う
10. 5YR5(赤褐色) 風上ブローチ
11. 10YR5(黄褐色) 粘りい砂質土



P1 深さグラフ

0 2 m

第14図 SB5・6遺構実測図



第15图 SB 5・6 遺物分布图

ハケ目間隔がやや幅広で粗雑となり、器壁が非常に薄手となる。底部は平底bである。打製石斧はホルフェルス製で刃部を欠損する。表裏にコーテックスを残し扁平な礫素材であることが分かる。1の有台坪はOB-1号窯式、2はOT-2号窯式の特徴を示し、7世紀末～8世紀初と考える。

#### SB 6 (第14図)

位置	FF 13・14	平面形	方形	主軸方位	S-70°-E
規模 (cm)	630×600×22	面積	35.9m <sup>2</sup>	時期	7世紀後半

SB 5同様不安定な覆土の堆積状況にある。これは北西コーナー付近床面直上より縄文時代中期後半に帰属する土器片が集中して検出されたことも関係があると考えられる。他住居と比べ大型の範囲にはいる。床面は地山を掘りこみ安定したレベルであるが、やや軟弱である。カマドは東壁南寄りに位置するがSD12により切られる。袖部に挟まれた燃焼部分はほぼ床面レベルと同一であり最下部には焼土ブロック、その上部に天井部分を構築していたと考えられる褐色の粘質土が堆積していた。Pit 1～3が配置的に支柱穴と考えられ、もう1基はSD12により切られている。南東コーナー部分に70×60cm、深さ30cmを測る貯蔵穴をもつ。

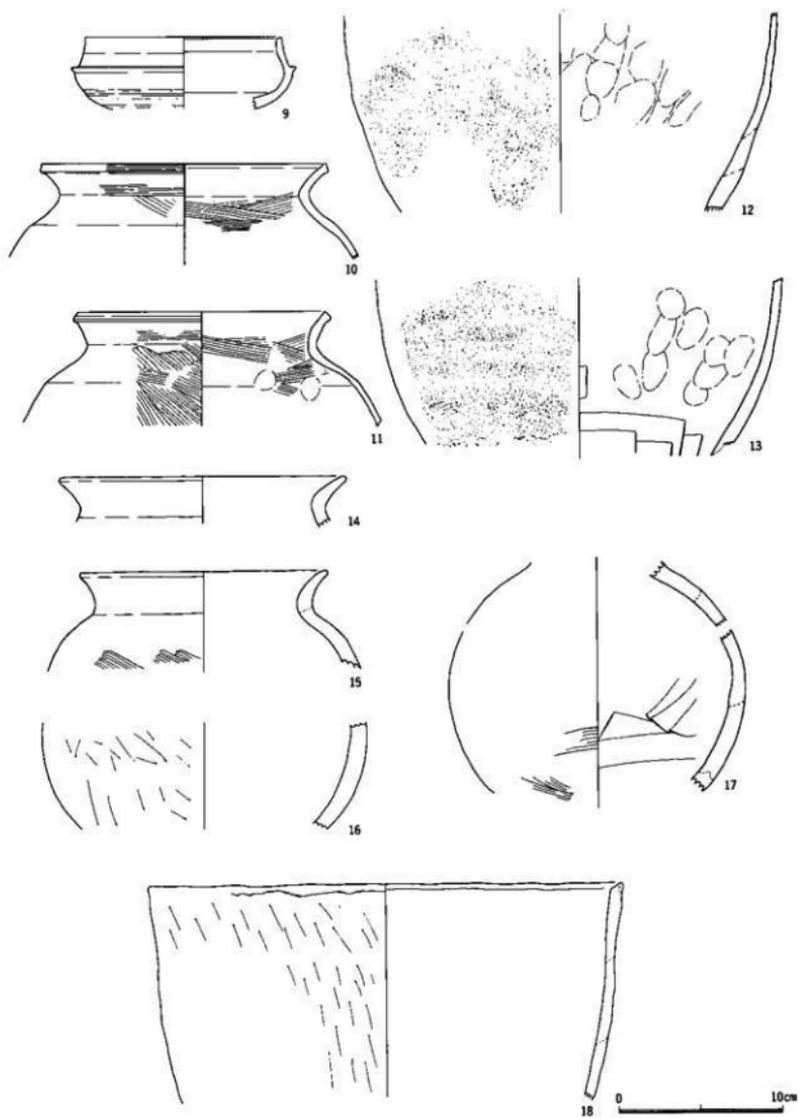
#### 出土遺物 (第15・16・17図・第93図5)

152点の出土遺物があるが、床面直上から縄文土器が検出されたことにより不安定な覆土の堆積状況が考えられ、伴出遺物の確認が困難である。坏身(9)、土師器甕A類(10・11)、土師器甕C類(12)、同甕B類(13)、同甕E類(14)、同甕I類(15～17)、縄文土器深鉢(18・19)、弥生土器深鉢(20・21)、コアブランク(第93図5)を図示した。坏身の底部外面は約1/2までロクロ左回転によるヘラケズリ調整が施される。受部は斜め上方を突き出し、口縁は内傾しながら立ち上がるが端部は直立する。土師器甕A類10・11は遺存状態は悪いが口縁端部を面取り、あるいは僅かにつまみ上げる。また、胴部内面にハケが施されている。土師器甕12は器壁が薄くなりハケもやや粗く甕C類の範囲に入る。土師器甕B類13は底部部分に相欠はぎ接合が認められる胴下半部であり、当箇所内面には板ナデが施されている。15～17は器壁が厚く胎土、器形、調整など他と異なる。縄文粗製深鉢、有紋深鉢は晩期に帰属するものであろう。20・21はいわゆる貝田町式条痕深鉢である。コアブランクは下呂石製の河原石を半割したもののネガ側部分である。その後の剥片剥離は行われていない。坏身はH-11号窯式に比定されるが、覆土上層から出土しており時期の遡るものである。土師器甕A類の様相から7世紀後半と考えられる。

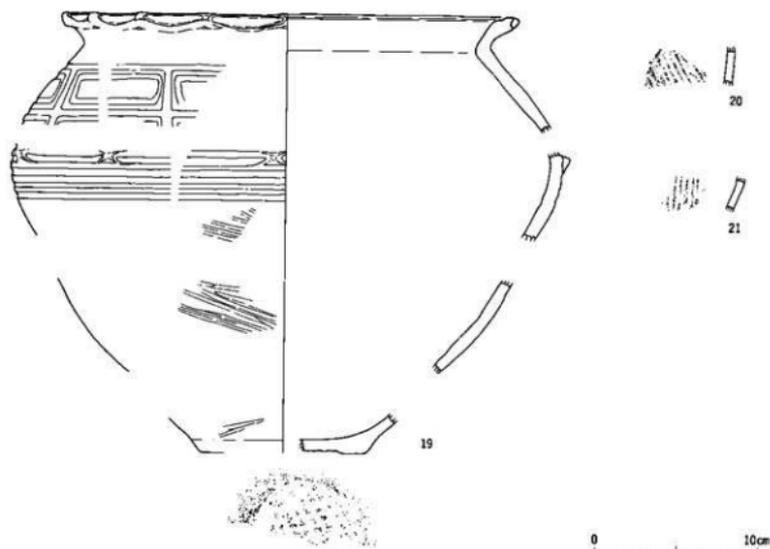
#### SB 7 (第18図)

位置	EE 13・14	平面形	方形?	主軸方位	N-64°-E
規模 (cm)	(340×380)×8	面積	(7.0)m <sup>2</sup>	時期	6世紀代

カマドを含む北東コーナー部分を確認したのみであり大半を調査区外に置く。遺構上部もかなりの掘削を受けており覆土の堆積は薄い。床面は浅黄褐色土をたたくしめカマド周辺では硬化面が広がっていた。カマドは東壁に位置し、両袖部が残っていたが上部をかなり刮削されており、補強材としての河原石を露出させている。燃焼部部分には焼土を多く含む暗赤褐色土が堆積していた。柱穴はPit 1を検出したのみである。北東コーナー部分に66×64cm 深さ16cmを測るすり鉢状の貯蔵穴をもつ。



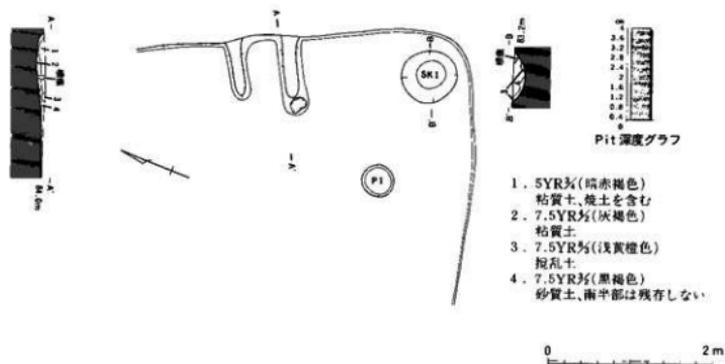
第16图 SB6出土遺物実測図1



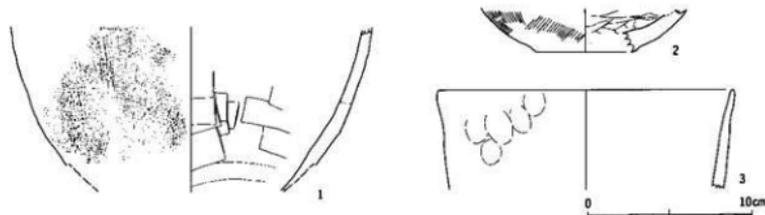
第17図 SB 6 出土遺物実測図 2

出土遺物（第19図）

12点の遺物を検出したのみである。土師器甕B類（1・2）、土師器瓶？（3）を図示したが、他は土師器甕小片である。1の胴部下半資料は底部部分との相欠き接合による接合部分を残す。遺物が少なく詳細は不明であるが第2層より検出している土師器甕B類より6世紀代に位置付けられよう。



第18図 SB 7 遺構実測図



第19図 SB 7 出土遺物実測図

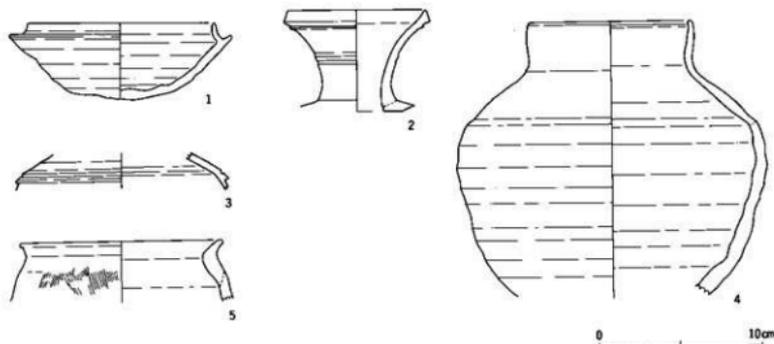
SB 8 (第21図)

位置	DD 15・16	平面形	長方形	主軸方位	S-74°-E
規模 (cm)	(350)×460×26	面積	(15.1)㎡	時期	6世紀末～7世紀初

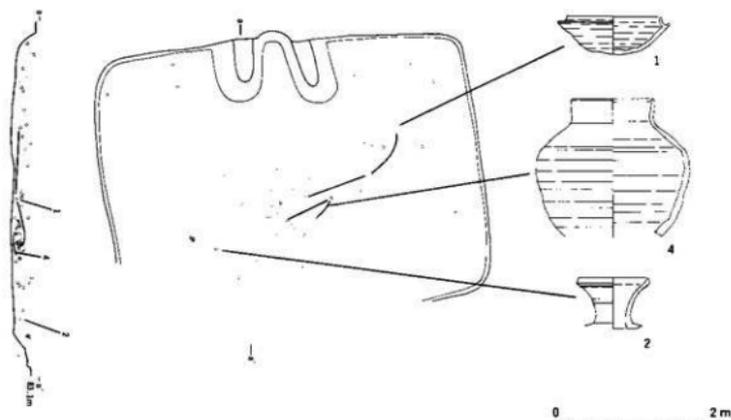
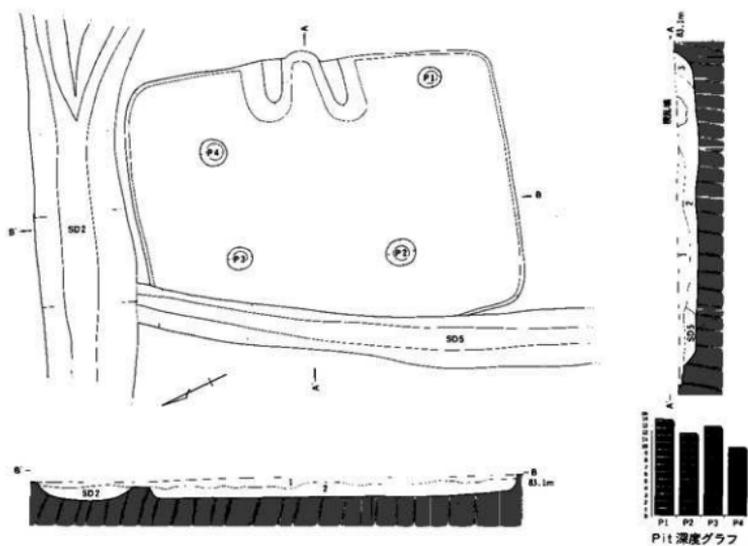
他住居と90°主軸方位を違える。西壁側をSD 5に切れ、北壁をSD 2と接する。床面は地山を掘りこみ浅黄橙色土を5～8cm程度敷き床面とするが、特に硬化面は認められなかった。カマドは東壁は中央に位置しており両袖部が残存する。袖部は粘質な褐色土で構築されており補強材として準大の河原石の混入が認められた。燃焼部分に堆積する黒色土中には若干の焼土小ブロックがふくまれていた。Pitは4基検出しておりPit 2～4が支柱穴を構成すると考えられる。Pit 1がやや南西側へ寄り配置的には貯蔵穴部分に相当するがその規模からはやや疑問を残す。

出土遺物 (第20図)

54点の出土遺物があり、須恵器坏身(1)、須恵器提瓶(2)、須恵器坏蓋(3)、須恵器短頸壺(4)、土師器甕I類(5)を図示した。坏身はロクロ目の凹凸が顕著にみられ調整の粗雑化が窺われる。底部外面には不定方向のナデが、底部内面には当具痕が残る。短頸壺は時期の下のものであろう。土師器は口縁部は短く外反し端部はナア後狭小な面を作出している。坏身は「畿内」系第5型式の特徴をもち、脚付壺はH-44号窯式に比定される資料であり、6世紀末～7世紀初と考えられる。



第20図 SB 8 出土遺物実測図



第21図 SB8遺構実測図・遺物分布図

## SB9 (第22図)

位置	BB15・16	平面形	方形	主軸方位	N-37°-E
規模 (cm)	450×(450)×22	面積	(17.2)m <sup>2</sup>	時期	5世紀末

西壁側をSD1 a・1 bに切られるが、SD1 bは覆土内で終結しており床面までは達していない。厚く黒褐色土が堆積しており、微細な焼土ブロックが多く混入している。床面も部分的に焼化した様相が窺われ漸在的に硬化面が認められた。壁高も40cmを測り安定している。カマドは北壁やや西寄りに位置し両袖部を検出しているが、右袖部先端部分に補強材としての河原石が露出していた。燃焼部相当部分には粘質な褐色土の堆積が残り、カマド構築土と考えられる。Pit1～4が主柱穴と考えられるが、Pit3・4が配置的に東側に寄っている。それぞれの深度は14～17cmを測る。56×56cm、深度16cmを測るSK1、40×36cm、深さ30cmを測るSK2の2基の土坑を検出している。SK1はカマドに相対する側に設けられる貯蔵穴であるが、SK2は規模的には条件をみだが、配置的にやや疑問が残る。

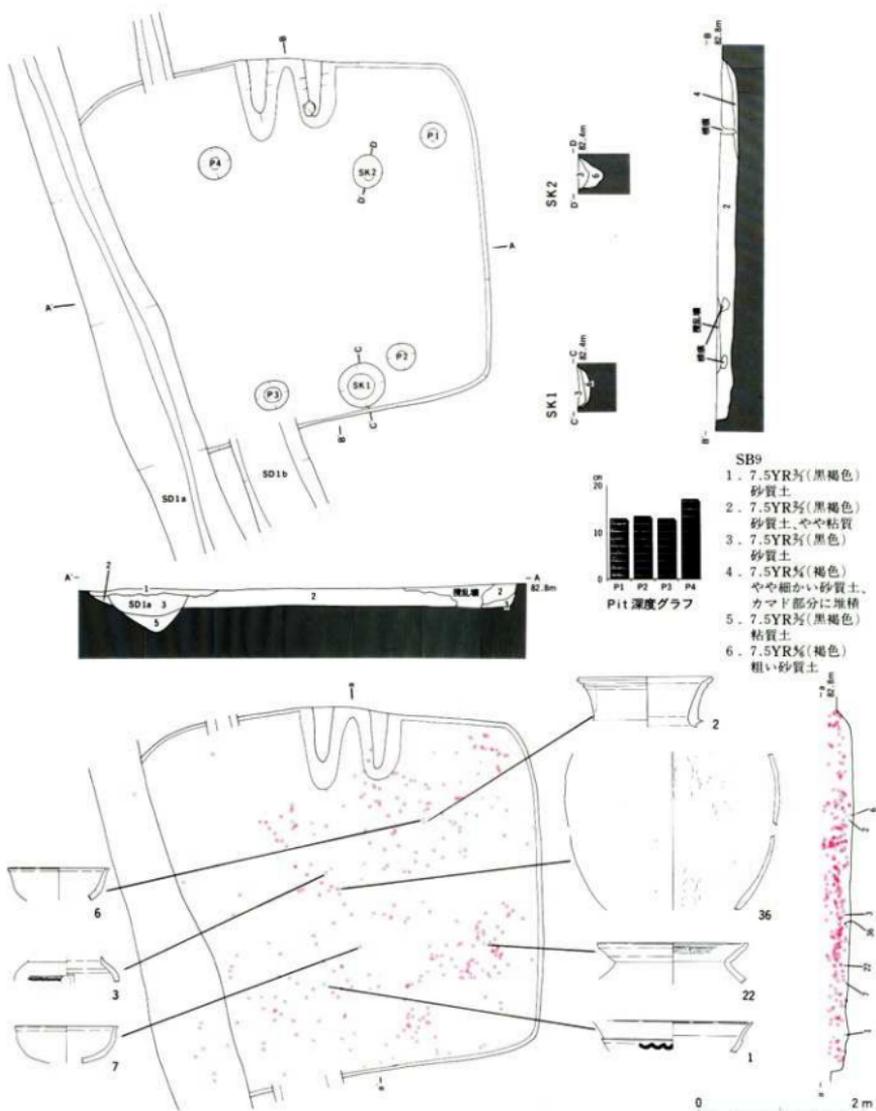
## 出土遺物 (第23・24図・第93図6)

325点の出土遺物数がある。須恵器無蓋高坏(1)、須恵器広口壺(2)、須恵器甕(3)、土師器高坏(4～15)、直口壺(16・17)、土師器壺(18)、土師器甕(19・20)、土師器甕I類(21・24)、土師器甕B類(22・28～30・33・34)、土師器甕C類(23)、土師器甕E類(31)、土師器甕F類(27)、土師器甕H類(25・26・32・36～38)、製塩土器(39)、山茶碗(40・41)、打製石斧(第93図6)を図示した。土師器高坏は坯底部にわずかな稜をもち、坏体部が内湾気味に立ち上がり、端部を反外させるものと斜め上片にのびるものがある。柱状部から裾部にかけては緩やかに広がるが、柱状部内面には、ケズリ、裾部内面にはナデ調整と別々の調整が施されている。土師器甕はB類が多く、胴部外面にナデがいられた小型甕H類が伴出している。土師器甕I類とした22は、口縁部がやや内湾して立ち上がり、端部内面に平坦面をもち他と比較すると異質である。打製石斧はホルンフェルス製で、刃部と基部を欠損する。両側縁部(体部)に磨耗が認められる。無蓋高坏1は猿投窯H-11に比定され、5世紀末と考えられる。土師器高坏、土師器甕B類の存在もこれに伴うものとする。

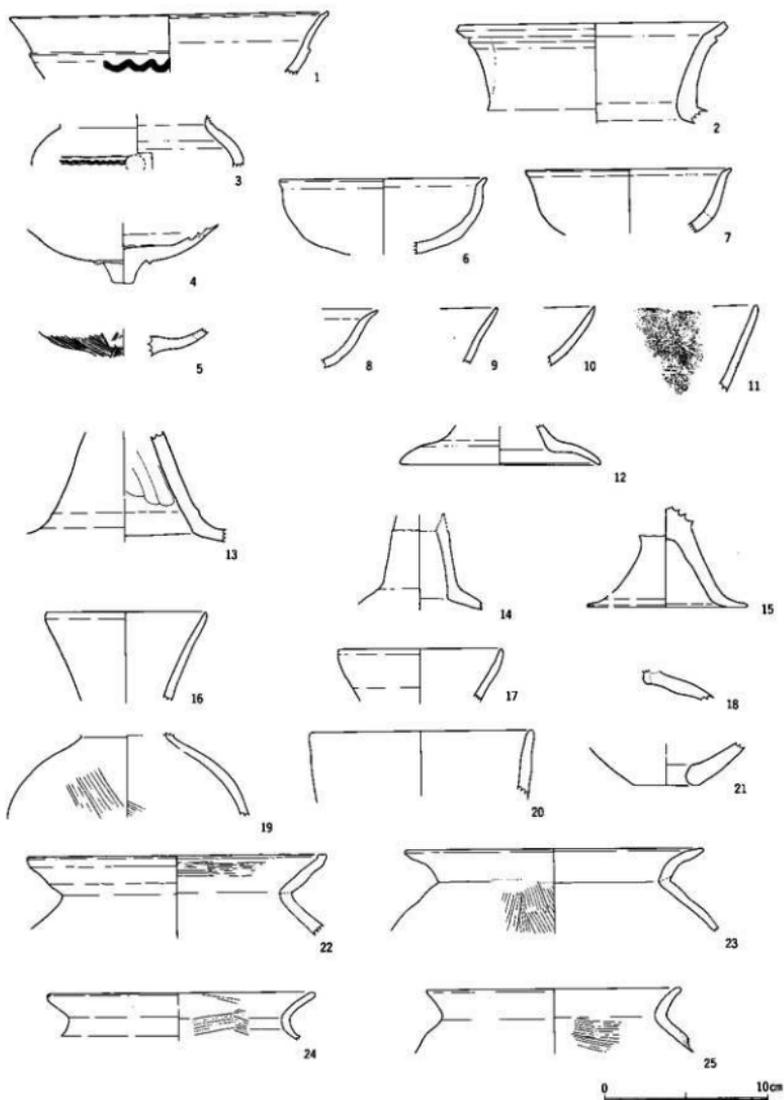
## SB10 (第25図)

位置	AA16・17	平面形	方形	主軸方位	N-45°-E
規模 (cm)	390×390×30	面積	(14.5)m <sup>2</sup>	時期	5世紀末～6世紀初

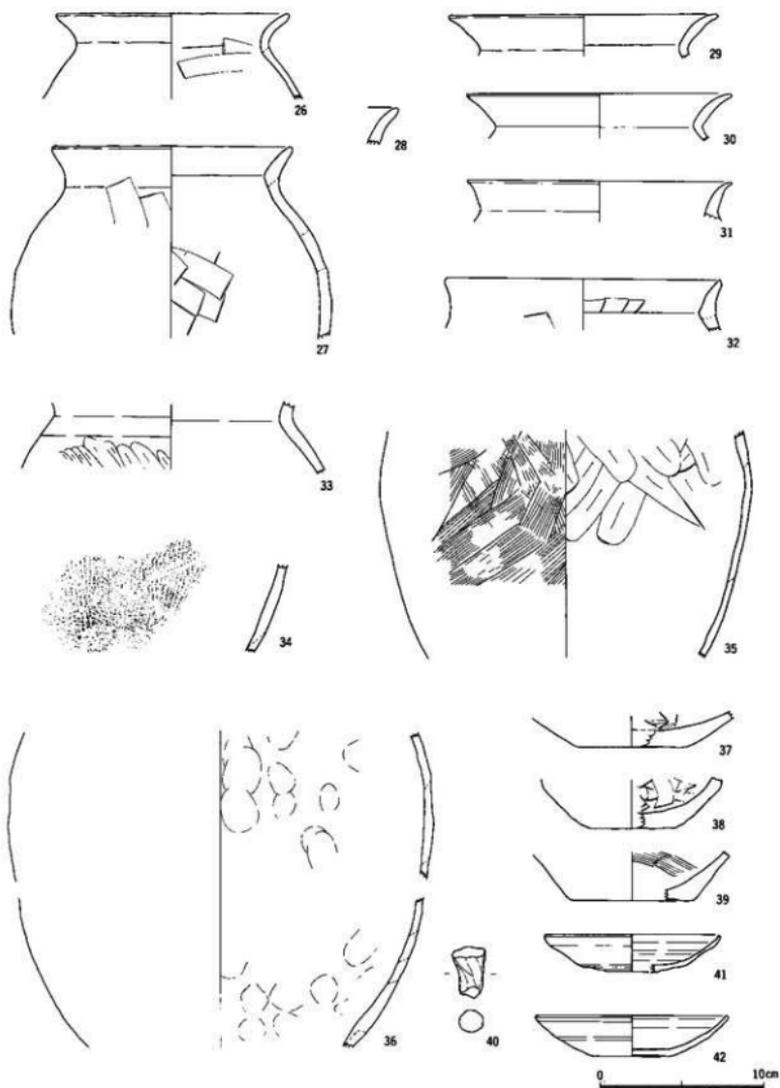
北西コーナーより南壁にかけてSD2 a・SD2 bに切られる。地山を掘り込み床面とする。特に硬化面はないが、床面は安定している。北壁、東壁の立ち上がりは30cm強を測る。カマドは北壁からテラス状に張り出した状態で検出された。これは焼土を含む暗褐色土の上に粘質な灰褐色土が堆積しており、カマドが倒壊した状況を呈していると考えられる。柱穴は3基検出しているがSD2 a・SD2 bに切られた部分との配置関係が不明なため判然としない。Pit3は規模的には小さいが、断面が先細りの形態をとり柱穴の断面形態とは異なり、あるいは貯蔵穴として理解したほうがよいかもしれない。



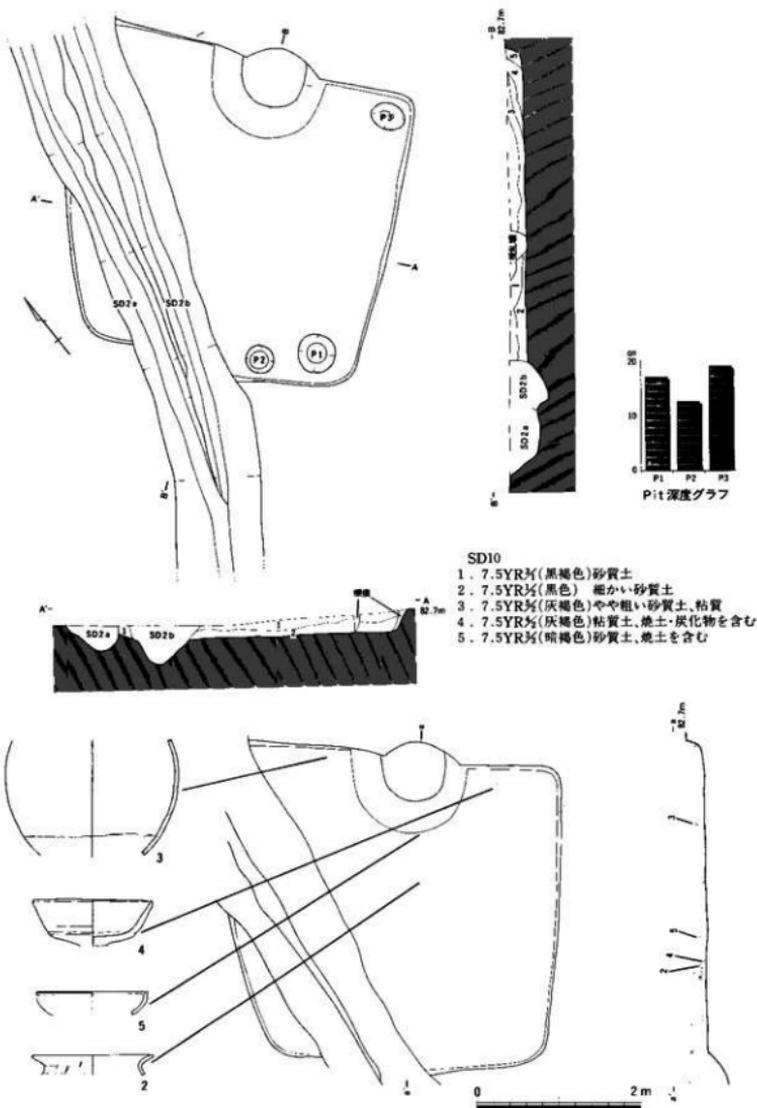
第22図 SB9遺構実測図・遺物分布図



第23图 SB 9 出土遺物実測図 1



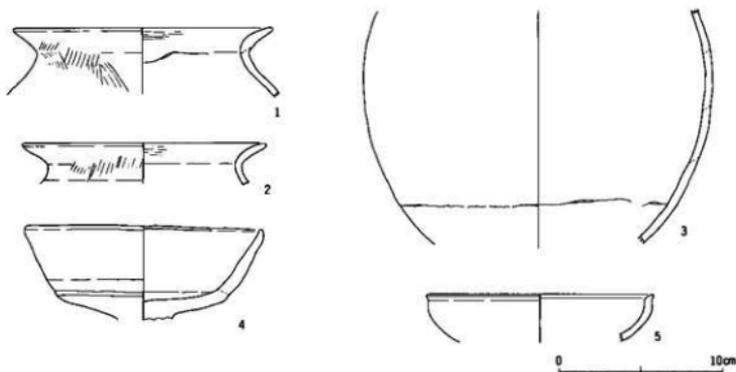
第24图 SB9出土遺物実測図2



第25図 SB 10遺構実測図・遺物分布図

出土遺物（第26図）

SD 2 a・2 b に切られているため出土遺物は23点と少ない。土師器甕B類 2点（1・2）、土師器甕E?類（3）、土師器高坏（4）、土師器坏（5）がある。甕E類は胴下半部資料であり相欠はぎ接合がみられ甕B類に似るが、胴部外面にヘラナアが施されている。高坏は底部部分に僅かに段をもち斜め上方に立ち上がるが端部で僅かに内湾している。坏は口縁端部が外折し、内面に面をもつものである。遺物が少なく詳細は不明であるが、2層より出土しているSB 9と同様な土師器甕B類・高坏・坏より5世紀末～6世紀初と考える。



第26図 SB 10出土遺物実測図

SB11（第28図）

位置	Z 15・AA 15	平面形	長方形	主軸方位	N-0°-E
規模 (cm)	250×330×20	面積	8.6㎡	時期	8世紀前～中葉

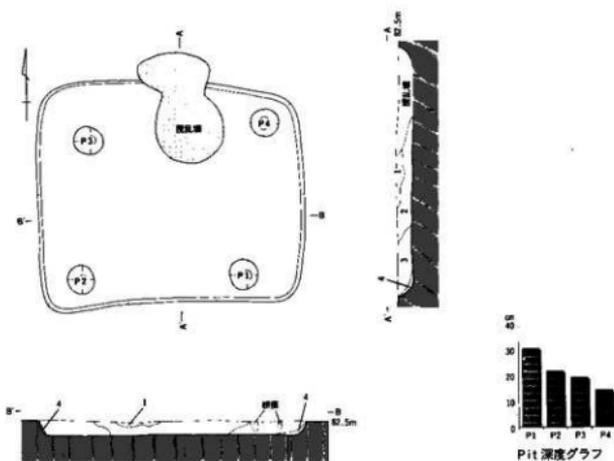
カマド部分に大きく攪乱が入るが主軸方位はほぼ磁北を示す。面積的には小型の範疇に入る。地山を掘りこみ黄橙色土をたたきしめ床面としているが、特に硬化面は認められなかった。Pit 1～4が支柱穴で深度も15～35cmを測りしっかりしている。

出土遺物（第27図）

24点の出土遺物があり、坏蓋（1～4）4点を図示した。1～3は口縁端部の折り返しが極めて微弱な点で共通した特徴をもつ。4は天井部外面に回転ヘラケズリ調整が認められ時期の遡るものである。1～3の坏蓋は美濃須南窯福年IY-15・14に比定され、8世紀前～中葉と考える。

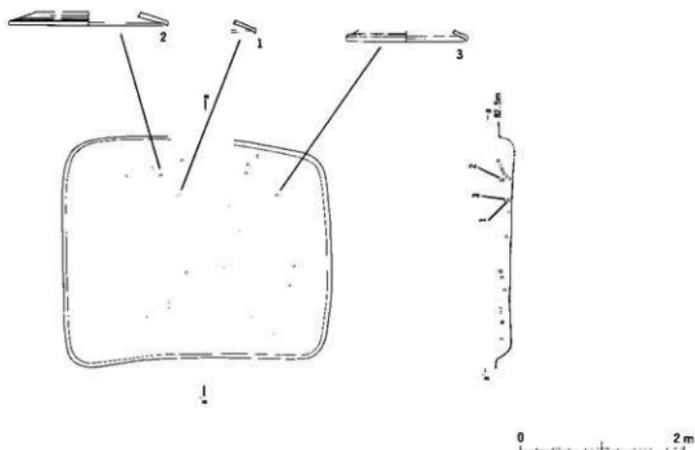


第27図 SB 11出土遺物実測図



SB11

1. 7.5YR5(褐灰色)砂質土、擾乱土
2. 7.5YR5(黒褐色)砂質土
3. 7.5YR5(黒色) 細かい砂質土、やや粘質
4. 10YR5(黒褐色) 細かい砂質土、3層とくらべてやや褐色球が強い



第28図 SB11遺構実測図・遺物分布図

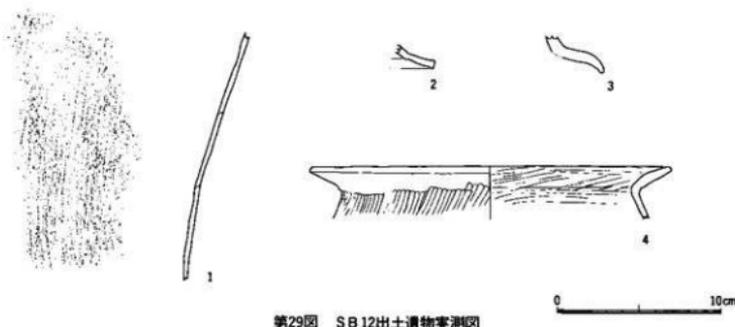
## SB12 (第30図)

位置	X 16・Y 16	平面形	方 形	主軸方位	N-69°-E
規模 (cm)	320×310×20	面積	9.3m <sup>2</sup>	時期	8世紀代

道路下に位置した上部は大きく掘削を受け、特に北壁は大きく攪乱が入っており不確定である。また、覆土もかなりたたきめられた条件下で堆積していた。南西コーナー部分が突出した様相を呈しているのは前述のごとく相対する北壁が攪乱のため不確定な要素をもっているためである。浅黄橙色土をたたきめ床面とし、南半部において硬化面が認められた。カマドは東壁に位置し両袖部を残す。袖部内に1の土師器甕胴部片(第29図1)が補強材として混入されていた。Pit 1は2基検出しているが、Pit 1は40×36cm、深さ19cm程度の規模を掘り貯蔵穴として理解してよい。Pit 2は柱穴の一部と考えられるが他は検出できなかった。

## 出土遺物 (第29図)

22点の出土遺物があり、土師器甕D類(1・4)、須恵器高坏(2)、土師器高坏(3)の4点を図示した。土師器甕4はL縁部内面に粗いハケを残す。1はハケ目間隔が広い。土師器高坏は袖端部が弯曲している。出土遺物数が少なく詳細は不明であるが、袖部補強材として検出された土師器甕D類より8世紀代と考える。

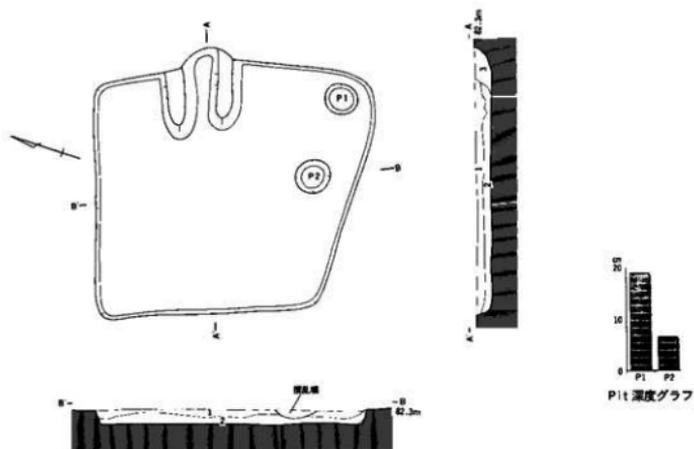


第29図 SB12出土遺物実測図

## SB13 (第32図)

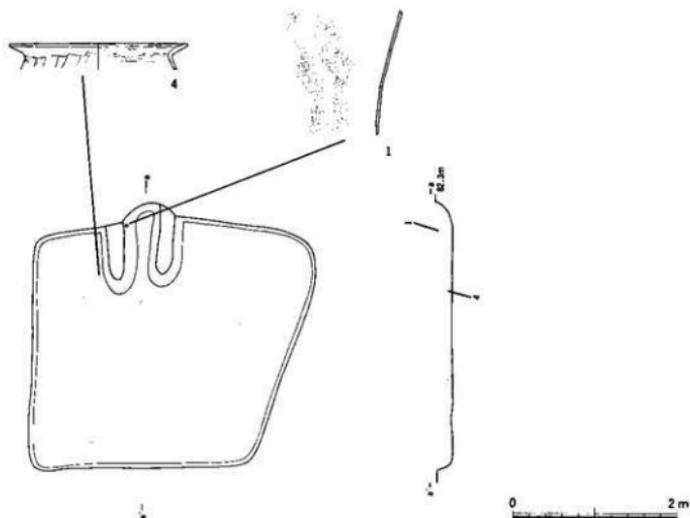
位置	X 15・Y 15	平面形	長 方 形	主軸方位	N-14°-E
規模 (cm)	500×(420)×8	面積	(19.9)m <sup>2</sup>	時期	6世紀後半

道路下に位置し遺存条件はSB12と同様であり、壁高は3~4cm程残すのみである。西壁を調査区外に置く。浅黄橙色土をたたきめ床面とし、カマド周辺部で硬化面が認められた。カマドは北壁東寄りに位置する。両袖部を残すが上部を大きく削削されている。燃焼部分は煙道部方向に向かい緩やかに傾斜しており、奥部に河原石(砂岩製)の石製支脚が床面を数cm掘りこみ縦位に据え付けられていた。石製支脚はカマド構築土である粘質室の褐灰色土に埋設した状態で検出され、その手前部分には焼土ブロックが堆積していた。Pit 1~3は主柱穴を構成すると考えられるが、深度は13~52cmとバラツキが大きい。SK 1は56×66cm、深さ40cmを測る。その断面形態は先細りを呈する。



SB12

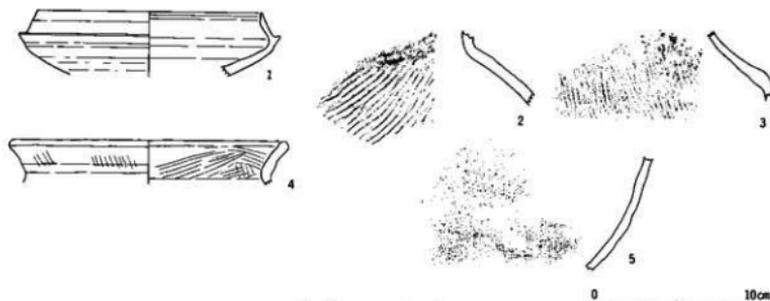
1. 7.5YR7(黒色) かたくしまる
2. 7.5YR7(黒褐色)砂質土、1層と伴に西側部分では判然とせず壁は不確定
3. 10YR7(黒褐色) 砂質土、わずかに炭化物を含む



第30図 SB12遺構実測図・遺物分布図

### 出土遺物 (第31図)

出土遺物数は14点で、須恵器坏身(1)、同甕(2)、土師器甕B類(3~5)を図示した。坏身は底外面は約1/3程度回転ヘラケズリ調整が行われていたものと考えられる。受部は底部との境に強いヨコナデ調整が施されることにより区分され短く斜め上方に突き出している。土師器甕5は口縁部内面がハケ後ナデが行われているが、ハケ調整が残る部分が大きくB~Cへの過渡的様相を示すと考えられる。坏身1は「尾張」4型式に比定されるが、SB3出土坏蓋に近い時期のものと考えられる。甕も内面が板ナデにより磨り消されており6世紀後半と考えられ、カマド内出土の土師器甕B類の年代観と近いと考える。



第31図 SB13出土遺物実測図

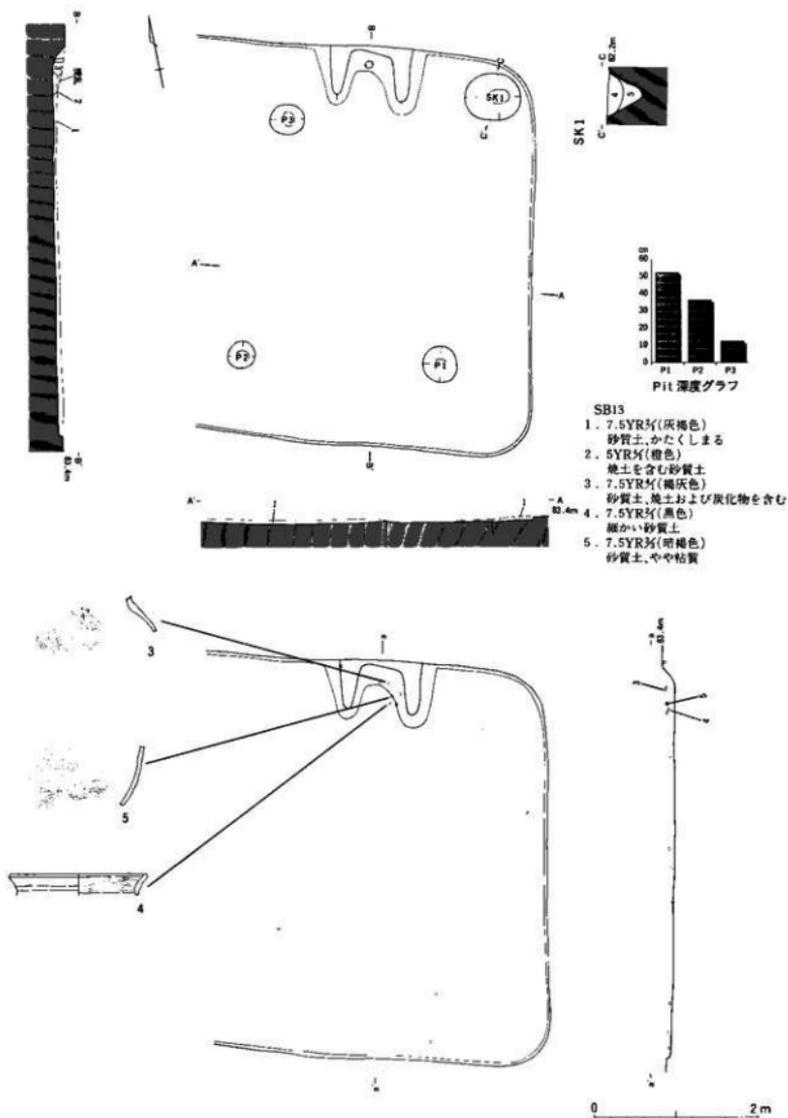
### SB14 (第33図)

位置	CC19	平面形	長方形	主軸方位	N-2'-E
規模 (cm)	380×240×14	面積	9.1㎡	時期	弥生時代中期

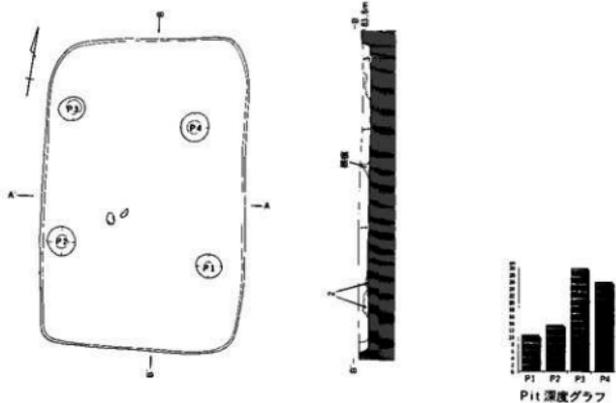
平面形態は隅丸の長方形を呈し、壁高は平均して14cm強を測る。地山を掘りこみ床面レベルは安定しているが上部をかなり刮削されている。地床炉など火処は検出していない。Pit 1~4はそれぞれ北・南壁より奥まった位置に均等に配置される。深度は11~30cmを測るが、北側に位置する2基が深めとなる。

### 出土遺物 (第34図・第93図7~9)

出土遺物数は37点であり、多くが覆土下部から検出している。弥生深鉢形土器(1~4)、甕形土器(5)、壺形土器(6~9)がある。深鉢形土器は貝田町式条痕深鉢である。1はかなり大型の部類に入ると考えられるが、口縁端部に面をもち、外面に横位の条痕、内面に列点紋及び半截竹状工具による刺突を連続させた波状紋をもつ。2~4は同一個体と考えられる胴部破片である。甕形土器内外面にはハケ調整が施される。壺形土器は櫛指紋を特徴とし、櫛指平行沈線、平行沈線間内櫛指斜行沈線、押し紋がみられる。なお、7の細頸壺には赤彩痕が一部残る。以上の特徴をもつ条痕深鉢、細頸壺の存在より弥生時代中期と考える。第93図7はホルンフェルス製の打製石斧である。横長剥片素材であり、刃部及び基部を欠損する。同図8・9は有茎の石鏃である。8はチャート製、9は下呂石製であり分厚な剥片を素材としている。

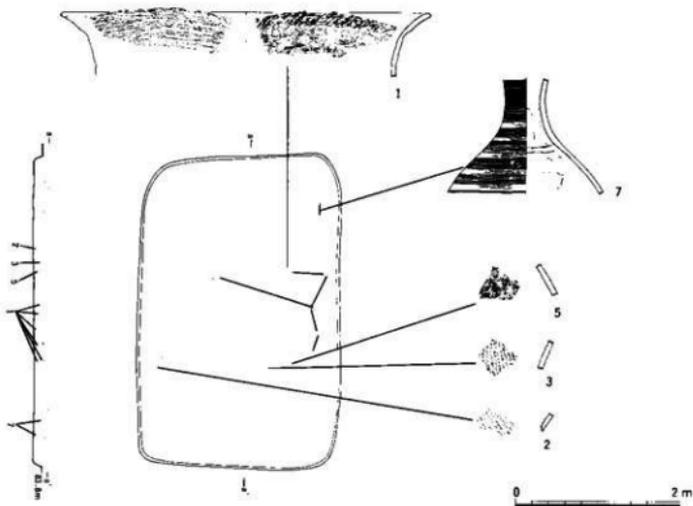


第32図 SB13遺構実測図・遺物分布図

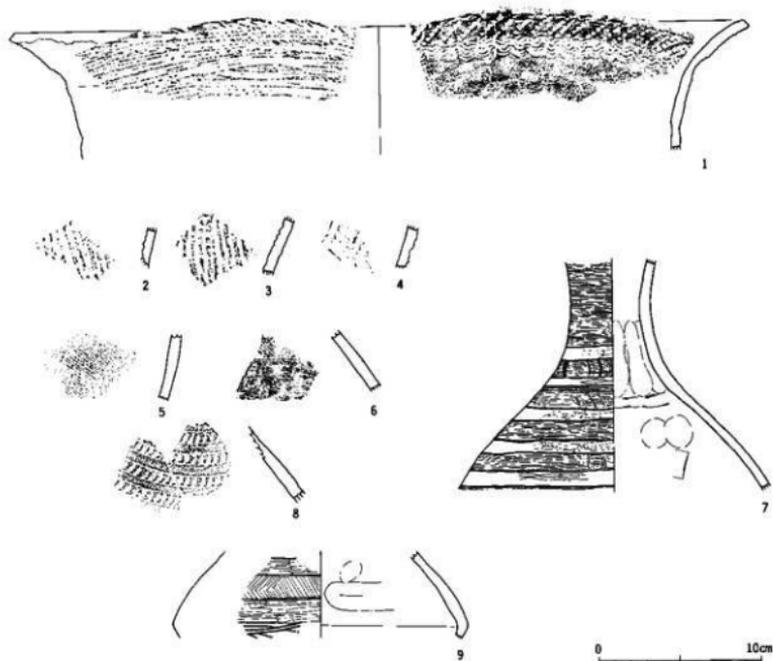


SB14

1. 7.5YR5(黒褐色) 砂質土
2. 7.5YR5(黒色) 細かい砂質土、一部に残る
3. 7.5YR5(にぶい褐色)砂質土、底部に堆積



第33図 SB14遺構実測図・遺物分布図



第34図 SB14出土遺物実測図

SB15 (第35図)

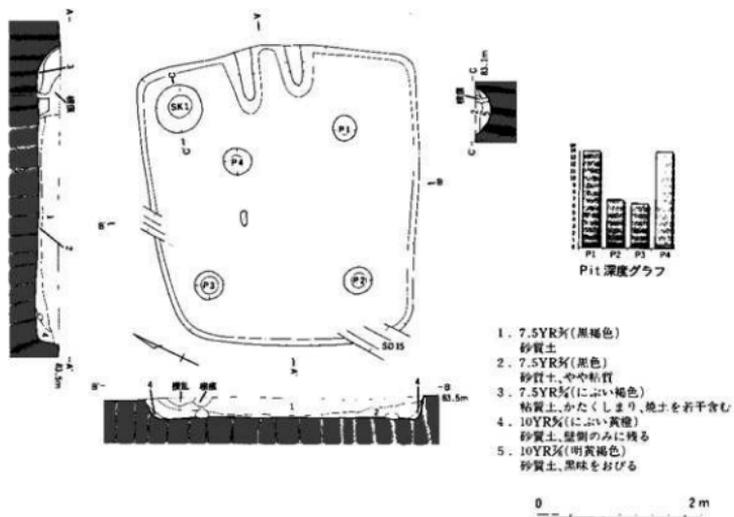
位置	EE22、23・FF22、23	平面形	方形	主軸方位	N-62°-E
規模 (cm)	360×330×28	面積	11.2m <sup>2</sup>	時期	—

西端をSD14により切られるが、溝底部は覆土内で終結し床面には達していない。床面積的には小型の範疇に入る。地山を掘りこみ明黄褐色土をたたきしめ床面としており、安定している。カマドは東壁に位置している。他住居と共通するが、残存する両袖部は下部には粘質な褐色土、上部には粘質な黒褐色土を用いて構築しており、袖部内側はよく焼化している。やや不均衡であるが、Pit 1～4が配置的には主柱穴であろう。深度は7～14cmとやや浅めである。SK 1は貯蔵穴であり、例外的にカマド左側に配置される。規模は56×58cm、深さ20cmを測り、断面はすり鉢状を呈する。

出土遺物 (第36図)

出土遺物数は7点と極端に少なく、住居廃絶のあり方を逆に考える必要があるのかもしれない。2点(1・2)の深鉢形土器は口縁部資料である。逆ハの字状に開く形態をとり、1は端部に面をもち外面に細い隆帯を巡らし斜刻を加えている。外面には共に横位の条痕、内面は1は列点分、2は波状分が施される。この深鉢形土器は貝田町式条痕深鉢である。覆土上層より出土しており混入と考えら

れる。他に遺物は無く詳細は不明であるが、住居形態・位置などからSB16との関連が考えられ、近接した時期が想定される。



第35図 SB15遺構実測図

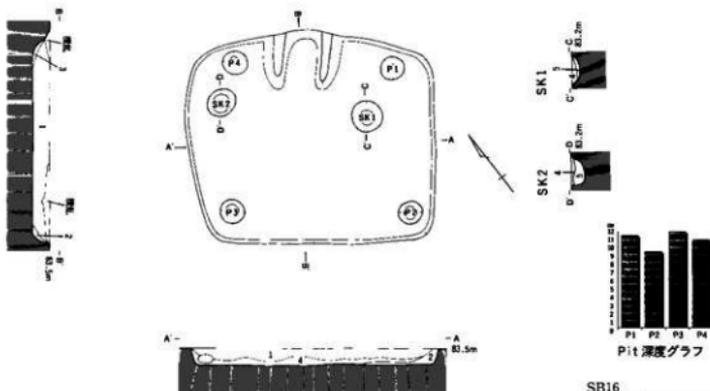


第36図 SB15出土遺物実測図

#### SB16 (第37図)

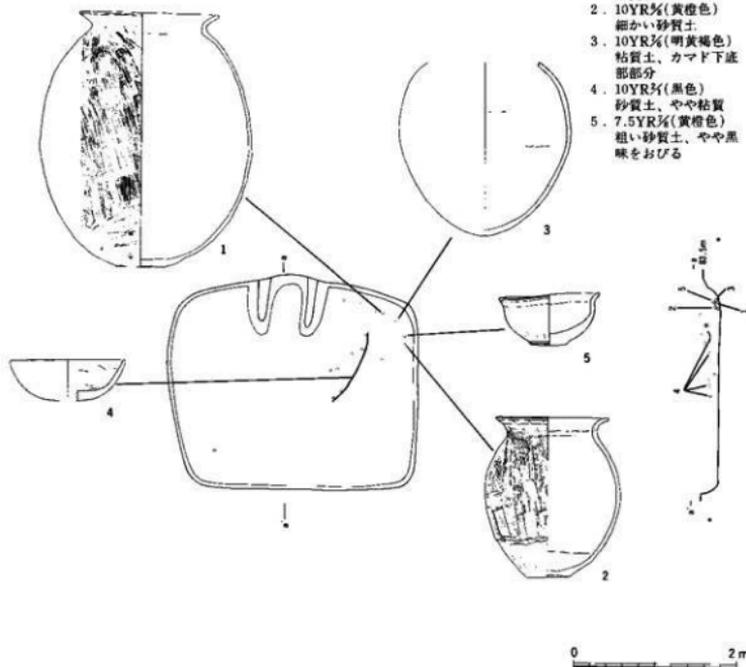
位置	FF 24	平面形	長方形	主軸方位	N-36°-E
規模 (cm)	260×300×24		面積	7.1m <sup>2</sup>	時期
					6世紀前半

非常に小型の住居であるが構造的にSB16に似る。地山を掘りこみ、にぶい黄褐色土をたたきしめ床面としており安定している。カマドは東壁ほぼ中央に位置するが、主軸方位が北に寄るため火処配置は北というべきであろう。両袖部を残し、燃焼部から煙道部への立ち上がりは緩く傾斜している。ただし、カマド付近覆土内においても焼土ブロックは検出していない。Pit 1～4が支柱穴であろう。深度は10～26cmを測る。Pit 1・4内側に2基の土坑を確認している。それぞれの規模はSK 1が40×36cm、深さ10cm、SK 2が32×36cm、深さ16cmを測る。柱穴より平面及び断面形態が大きく土坑としたが、配置的に貯蔵穴とするのはやや疑問が残る。



SB16

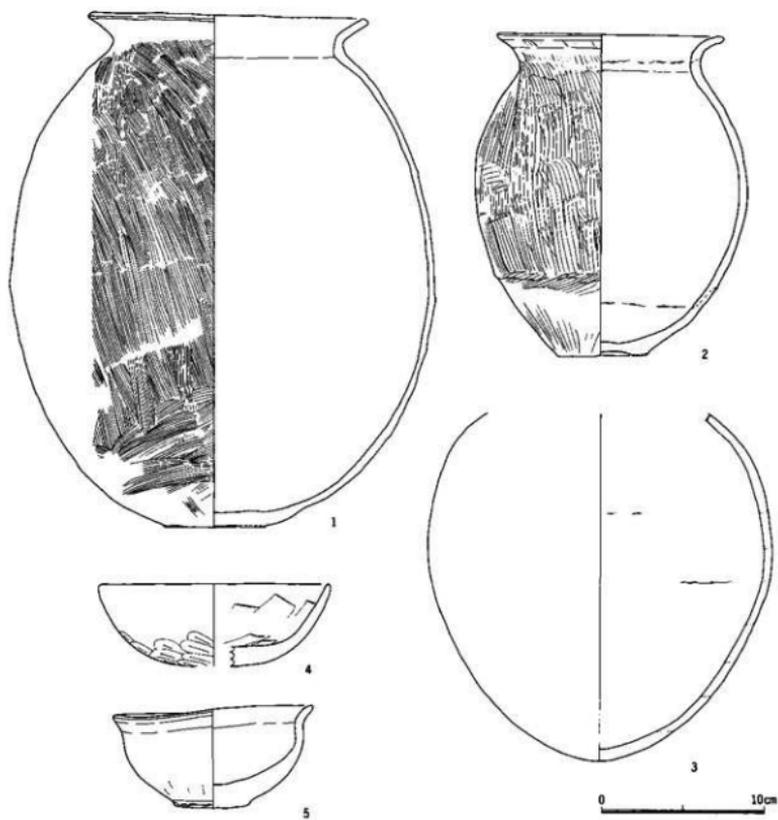
1. 7.5YR $\alpha$ (黒褐色) 砂質土
2. 10YR $\alpha$ (黄橙色) 細かい砂質土
3. 10YR $\alpha$ (明黄褐色) 粘質土、カマド下底部分
4. 10YR $\alpha$ (黒色) 砂質土、やや粘質
5. 7.5YR $\alpha$ (黄棕色) 粗い砂質土、やや黒味をおびる



第37図 SB16遺構実測図・遺物分布図

出土遺跡（第38図）

出土遺物は19点であるが、貯蔵穴周辺において集中して出土している。土師器甕B類（1）、土師器甕F類（2）、土師器甕I類（3）、土師器坏（4、5）がある。土師器甕B類である1は口縁部の強い横ナデ、胴部のハケ調整の緻密さ、相欠はぎ接合、底部のリング状粘土紐添付による平底化（平底a）などタイプ標式となりうるものである。ただし、相欠はぎ接合以下の底部部分全体にハケ調整が施され、5世紀末の資料とはやや製作技術に異なる点をもつ。甕F類2はまさに甕B類の小型化したものであり、非常に精緻な作出である。甕I類3は丸底を呈し、胎土・調整とも異質な特徴をもつ。土師器坏については、4は体部が丸みをもって立ち上がり口縁端部を丸くおさめるのに対し、5は口縁部が外折し、端部に面を形成している。土師器甕B類及びF類（製作技術面）より6世紀前半と考える。

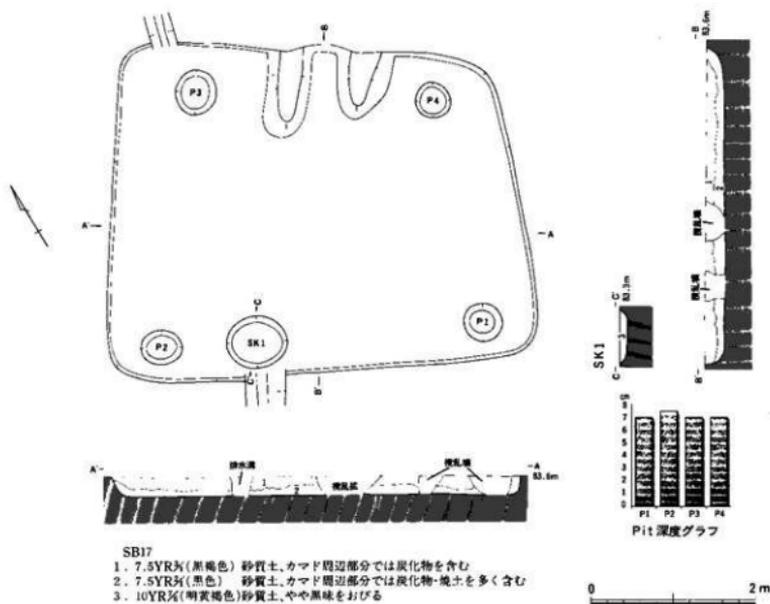


第38図 SB 16出土遺物実測図

## SB17 (第39図)

位置	GG26・27	平面形	長方形	主軸方位	N-28°-E
規模 (cm)	400×500×25	面積	19.2㎡	時期	—

西側部分を排水溝が縦断するが、覆土内で終結している。覆土1・2層内には焼土及び炭化物の混入が非常に多く認められた。床面も本来は黄橙色土をたたきしめ構築していたと考えられるが焼化のため黒褐色化されやや削りすぎた感もあるが、壁高20~25cmを測り床面レベルも安定している。カマドは北壁やや東寄りに位置し、両袖部分が残存する。カマド内堆積についても本住居の堆積条件により他箇所との識別はできなかった。Pit 1~4が支柱穴に相当するが、深度は7cm程度と浅い。64×72cm、深さ10cmを測るSK1が南壁やや西寄りに構築されており貯蔵穴に相当する。



第39図 SB17遺構実測図

## 出土遺物 (第40図・第93図10)

覆土堆積状況、炭化材の存在より焼失家屋と考えられるが、出土遺物は6点にのみ非常に少なく、意図的な持ち出しを想定できるうる可能性がある。縄文土器(1)は頸部破片であり、横位の沈線が施されており、中期後半に属するもので混入と考えられる。打製石斧(第93図10)は表面に自然面をもつ横長剥片を素材とする。ホルンフェルス製で基部部分のみ残存し同じく混入である。遺物が少なく詳細は不明であるが、住居形態・位置等によりSB18との関連が考えられ、非常に近接した時期である可能性を考えている。

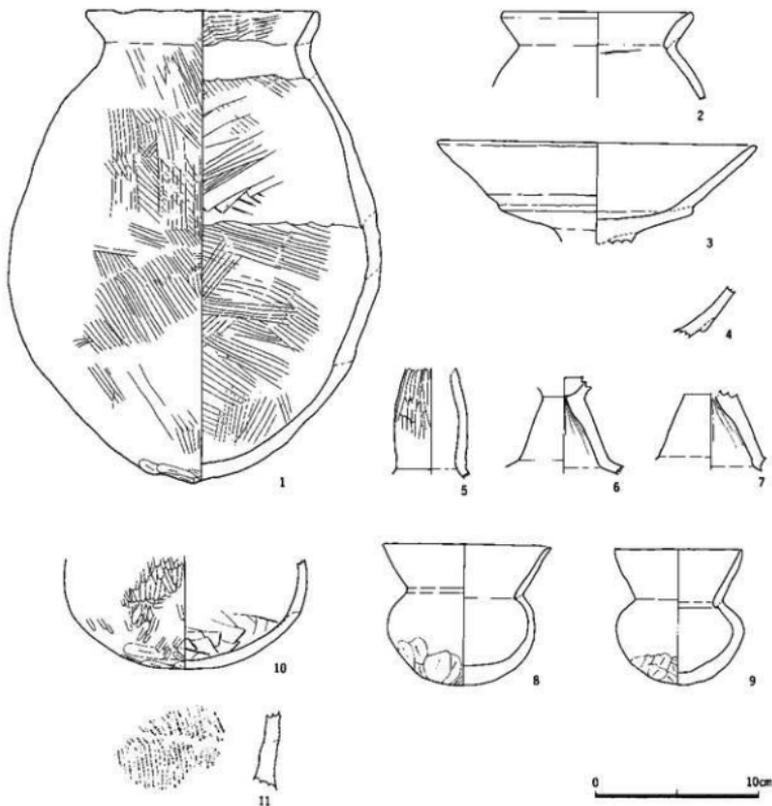


第40図 SB17出土遺物実測図

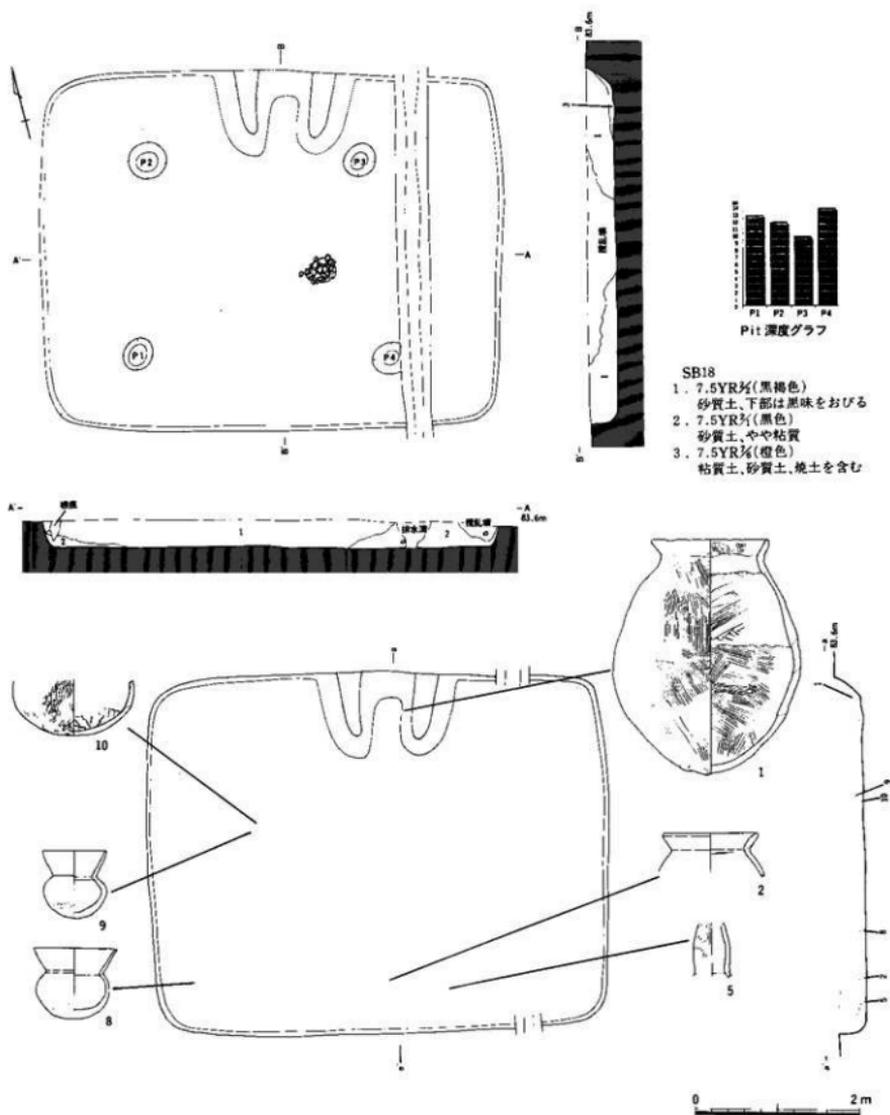
SB18 (第42図)

位置	FF26・27	平面形	長方形	主軸方位	N-13°-E
規模 (cm)	440×560×40	面積	24.3m <sup>2</sup>	時期	4世紀末～5世紀初

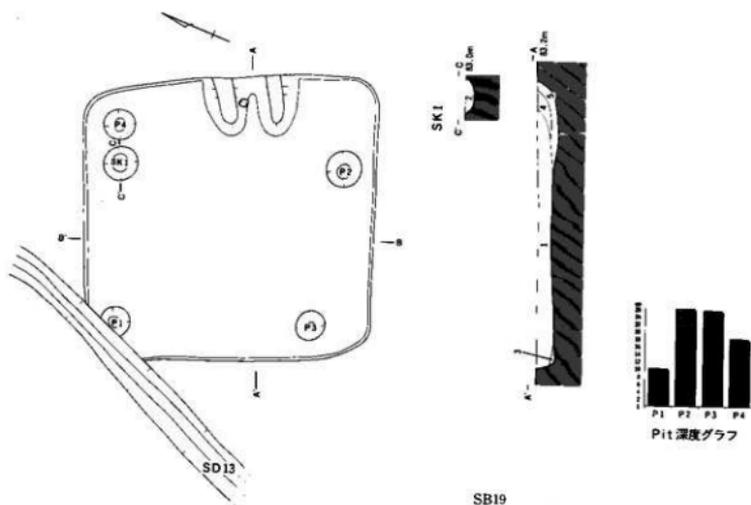
東側部分を排水溝が南北に通る床面及び Pit 4 の一部を切る。SB17同様覆土内には多くの焼土、炭化物が混じる。床面も本来は黄橙土をたたきしめてあったと考えられるが焼化のため硬化面は確認で



第41図 SB18出土遺物実測図

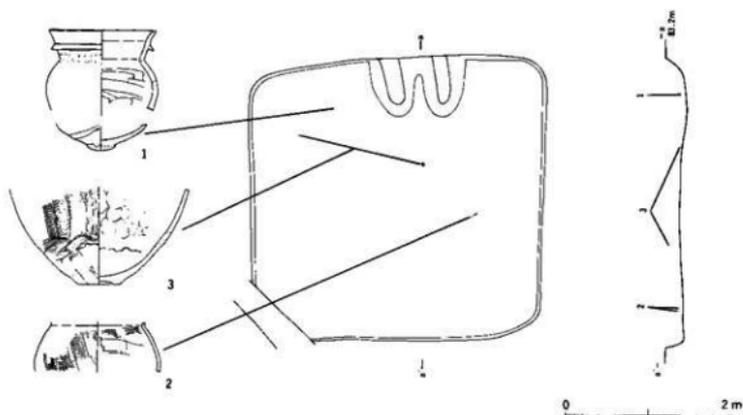


第42図 SB18遺構実測図・遺物分布図



SB19

1. 7.5YR7(黒褐色)  
砂質土、下部に炭化材を含む
2. 7.5YR7(黒色)  
砂質土、やや粘質
3. 7.5YR7(にじい橙色)  
細かい砂質土、壁面に残る
4. 7.5YR7(褐灰色)  
砂質土、かたくしまる、炭化物・糞土を含む
5. 7.5YR7(褐色)  
粘質土袖部分

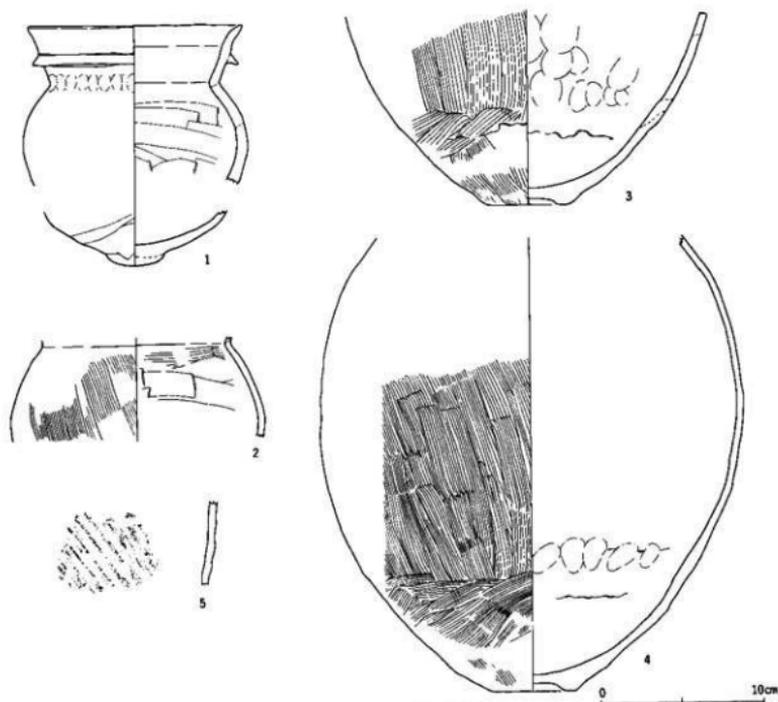


第43図 SB19遺構実測図・遺物分布図

きなかった。検出状況は焼け割れた状態であったが、中央やや東寄り床面に径40cm程の扁平な河原石が埋設してあり何らかの機能をもっていたことが推測される。カマドは北壁に位置し、燃烧部底部部分に焼土の堆積が見られた他、1の土師器甕を正位の状態で右袖部に倒れかかった状態で検出している。Pit 1～4が支柱穴に相当し、深度は10～14cmを測り東側の2基が内側に寄っている。なお、貯蔵穴はない。

#### 出土遺物（第41図）

95点の出土遺物数がある。土師器甕I類（1）、土師器甕H類（2）、土師器高坏（3～7）、土師器小型壺（8・9）、土師器直口壺（10）、弥生土器深鉢（11）がある。土師器甕I類は赤褐色を呈し器壁が厚く異質な様相を呈する。口縁部外面、胴内部上半以外は粗いハケ調整が施され丸底をもつ。高坏は坏底部に僅かな段をなして斜め上方に立ち上がる。坏部は浅く広い。脚部は5が外面にミガキ調整が見られ、6・7は内面に絞り目を残す。これらは屈折高坏の系譜に連なるものと考えられる。小型壺は底部にケズリが認められる。直口壺は外面に丁寧なミガキが施される。土師器高坏、小型壺、直口壺より松河戸Ⅱ式期（新相）併行期に比定され、4世紀末～5世紀初と考えられる。



第44図 SB19出土遺物実測図

## SB19 (第43図)

位置	CC 25・DD 25	平面形	方 形	主軸方位	N-68°-E
規模 (cm)	354×354×22	面積	11.9m <sup>2</sup>	時期	6世紀前半

北西コーナーをSD 13に切られる。覆土1層下部に炭化材を含む。地山を不均衝に掘りこみ黄褐色土をたたくしめ安定した床面を形成し、全面に硬化面が広がっていた。東壁に残存する袖部分には補強材としての河原石の混入が認められた。燃焼部分内には焼土・炭化物を含むカマド構築材である褐色土が堆積していた。なお、セクション図5層の褐色土は袖下部構築土である。Pit 1～4が支柱穴を構成し、Pit 4南に貯蔵穴であるSK 1が存在する。SK 1は規模的には柱穴と差が認められないが、その断面形態が浅いすり鉢状を呈するため貯蔵穴とした。

## 出土遺物 (第44図)

出土遺物数は19点であり、複合口縁壺(1)、土師器甕F類(2)、土師器甕B類(3・4)、弥生土器深鉢形土器(5)がある。複合口縁壺は口縁部中位に断面三角形の粘土紐を貼り付けており本来の複合口縁壺とは整形方法が異なる。土師器甕Bは胴部最大径に対し底部径が小さいが、やはり、リング状の粘土紐の貼付が見られる(平底a)。土師器甕B類より6世紀前半と考える。

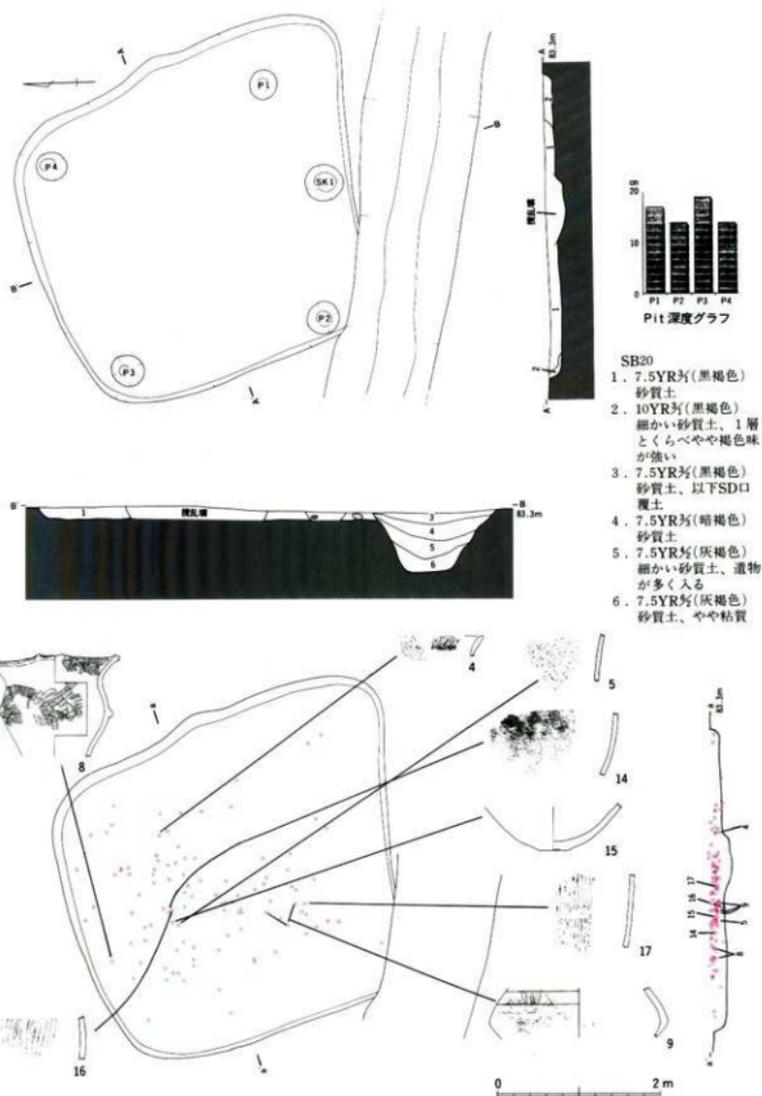
## SB20 (第45図)

位置	DD 25・26	平面形	方 形	主軸方位	N-18°-E
規模 (cm)	400×410×6	面積	15.0m <sup>2</sup>	時期	弥生前～中期

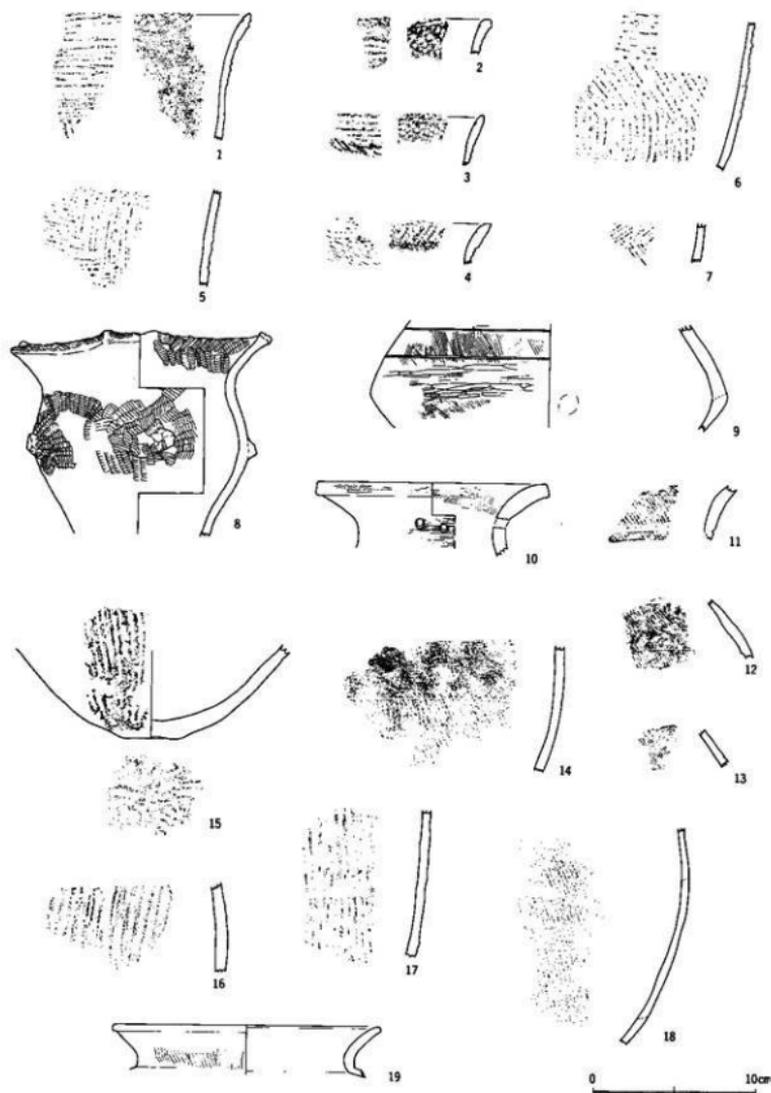
平面形態は隅丸方形を呈する。南西コーナー部分をSD10により、中央に攪乱坑により覆土及び床面が切られる。地山を掘りこみ床面とするがやや軟弱である。地床炉など火処は検出していない。Pit 1～4が柱穴である。均等に四隅に配され、深度は14～19cmを測り、断面形態はやや幅広なすり鉢状を呈する。南壁沿いに中央に48×46cm、深さ10cmを測るSK 1があるが、機能的には不明である。

## 出土遺物 (第46図・第93図11～16)

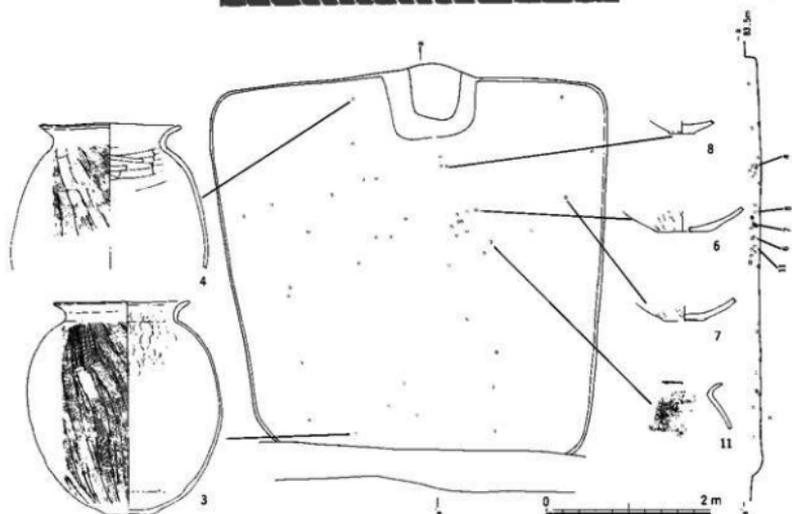
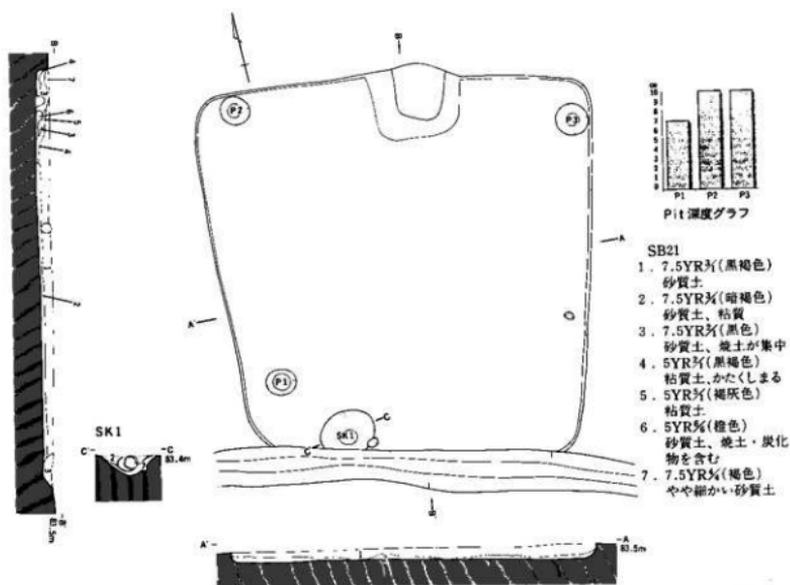
111点の出土遺物数があるが、中央部分に入る攪乱部分が希薄となる状況で検出している。弥生深鉢形土器(1～6)、不明土器(8)、壺形土器(9～13)、甕形土器(14～17)、土師器甕B(18～19)を図示した。弥生深鉢形土器は貝田町式条痕深鉢である。8は口縁部に4単位、胴部に5単位の突起がつき、口縁部・内面、胴部に櫛状工具による押引が施される。口縁部内面は羽状、胴部は突起を中心に回転施文し、疑似縄文の文様としている。壺形土器は器形を窺いしれる資料は少ないが、櫛描文を特徴とし、10は頸部に穿孔が認められる。甕形土器の内15～17は外面に条痕が施され、弥生前期に属するものである。土師器甕Bは混入である。第93図11はホルフェルス製の打製石斧である。縦長剥片を素材とし、形態を整える程度の調整が入る。第93図12は下呂石の分割礫である。石核素材の作出を目的としたもので、自然面を打面として2枚の剥片が剥離されている。第93図13が12が作業上進行した分割礫素材の石核である。分割時のボジ面を打面として剥片剥離作業を行っている。第93図13はチャート製のクサビ形石器である。第93図15・16は有茎の石鏃である。15はチャート製、16は下呂石製である。検出状況は弥生前期及び中期に属する遺物が混在する様相を呈しており、その時期幅の中で焔属先を考えたい。



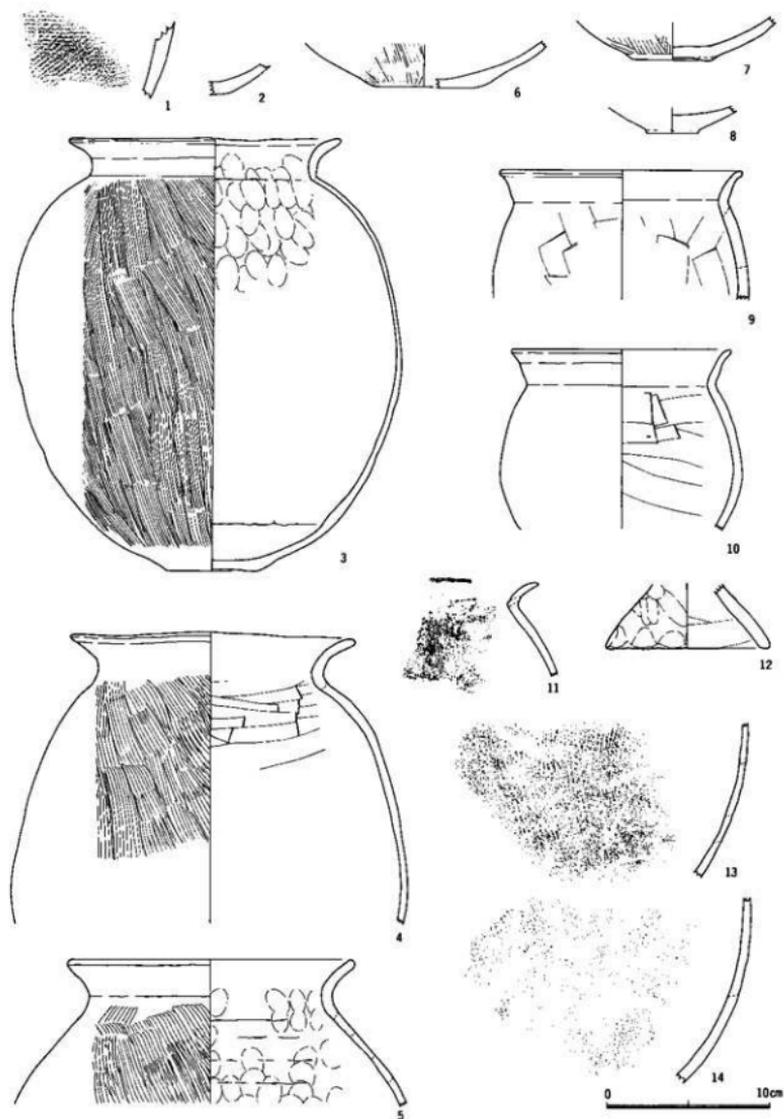
第45図 SB20遺構実測図・遺物分布図



第46图 SB20出土遺物実測図



第47図 SB21遺構実測図・遺物分布図



第48图 SB21出土器物类例图

## SB21 (第47図)

位置	GG17・18	平面形	方形	主軸方位	N-10°-E
規模 (cm)	(480)×454×18	面積	19.9㎡	時期	6世紀前半

南壁をSD10に切られる他は遺存状態は良好である。地山を掘りこみ浅黄橙色土をたたきしめた上部に褐灰色粘質土を貼り床面としているため全面に硬化面が認められた。カマドは北壁やや東寄りに位置し倒壊した状況で検出した。燃焼部中央に河原石を縦位に立てた石製支脚が存在し、その前部に焼土ブロックが残存する。その上部にはカマド構築土である粘質の灰褐色土及び黒褐色土（灰褐色土混じり）が堆積していた。煙道部分は比高差はないが垂直に近く立ち上がっている。Pit 1～3が柱穴に相当すると考えられるが、南西コーナー部分では検出していない。南壁際に位置する貯蔵穴であるSK 1は60×66cm、深さ24cmの規模をもつが、内部より3の土師器甕を横位の状態で検出している。SK 1覆土の状況より貯蔵穴内部に3を遺棄した状況での埋没と考えられる。

## 出土遺物 (第48図)

68点の出土遺物数があり、須恵器甕(1)、土師器高坏(2)、土師器甕B類(3・4・5・7・13・14)、土師器甕F類(8・11)、土師器甕H類(9・10)を図示した。貯蔵穴より出土した3は全体的な製作技法甕B類の特徴をもつが、器形・ハケ施土具が異なり甕B亜種とも呼べるものである。高坏は坏底部部分に僅かな稜をもって斜めに立ち上がっている。小型甕は甕B類の小型化した甕F類の他、内外面にナデが施される甕H類が見られる。須恵器甕は内面が磨り消されている特徴をもち、土師器甕B類より6世紀(前半)と考える。

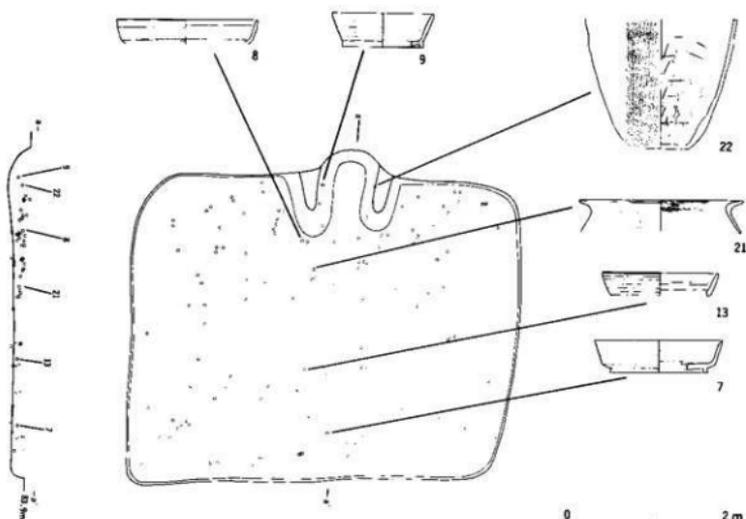
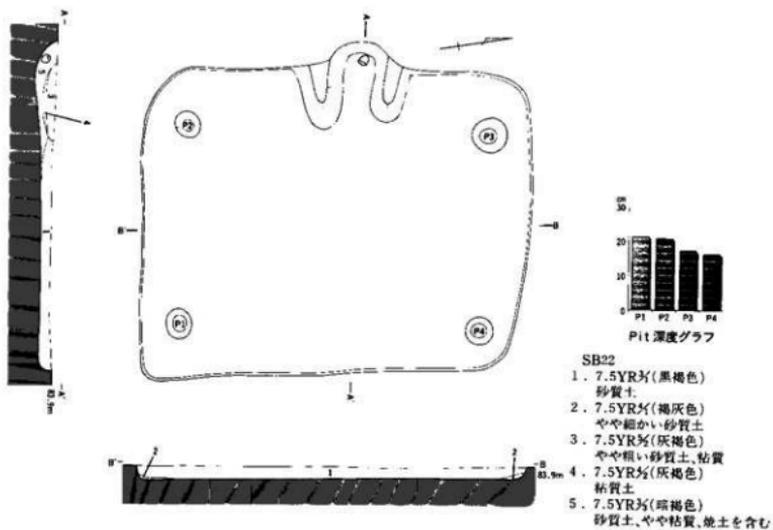
## SB22 (第49図)

位置	II20・JJ20	平面形	長方形	主軸方位	N-79°-W
規模 (cm)	410×470×16	面積	17.6㎡	時期	8世紀後半

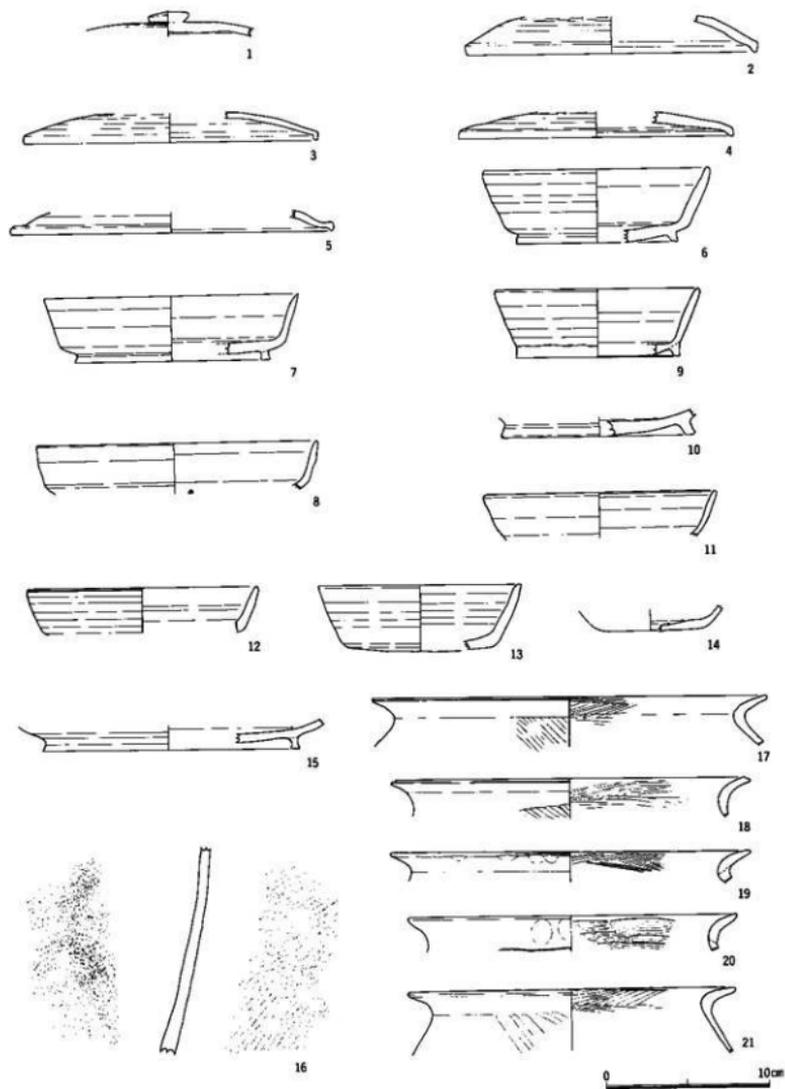
本住居のみ主軸方位を全く逆にする。床面は粘質な灰褐色土を貼り構築し、硬化面が全体に認められた。カマドは西壁ほぼ中央に位置する。両袖間の堆積は最下部に焼土、炭化物を含む暗褐色土、その上部にカマド構築土である粘質な灰褐色土が残存しており、ほぼ倒壊状態を示すものと考えられる。袖部は粘質な褐灰色土で構築され、補強材として土師器甕片が混入されている。なお、燃焼部奥部に石製支脚として機能していたと考えられる河原石の上部部分が残存していた。均等に配置するPit 1～4が主柱穴で、深度も17～22cmと安定している。なお、貯蔵穴は検出していない。

## 出土遺物 (第50・51図・第94図17～23)

149点の出土遺物数がある。須恵器坏蓋(1～4)、須恵器佐波理模倣碗蓋(5)、須恵器有台坏(6～12)、須恵器無台坏(13～14)、須恵器佐波理模倣碗皿(15)、須恵器甕(16)、土師器甕D類(17～25)、縄文土器深鉢(26～33)、石鏃(第94図17～22)、石核(第94図(23))がある。坏蓋の擬宝珠状鈕は小振りで、口縁端部の折り返しは弱く端面は角丸である。3は転用硯として使用痕が認められる。佐波理模倣蓋も口縁端部の折り返しは弱い。有台坏は浅く大型のものが多く、高台が底面の外縁近くに付けられるものも多く9はその典型であろう。無台坏は底部外面が回転ヘラ切り後無調整のものとなデが施されるものがある。須恵器甕は内部の当て具は陶製である。土師器甕はいずれもD類である。

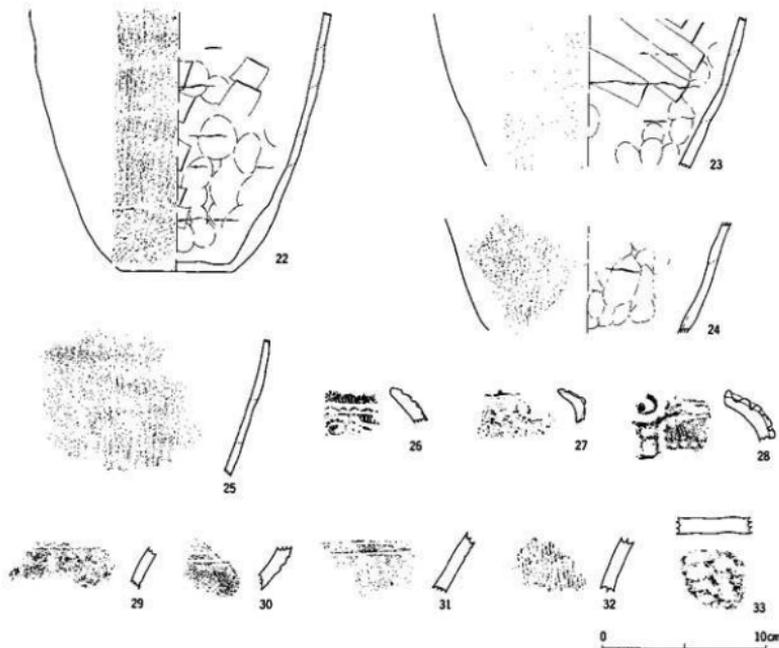


第49図 SB22遺構実測図・遺物分布図



第50图 SB22出土遺物実測図1

口縁部は短く外反し、内面にハケを残す。胴部のハケ目はやや粗く径の広い平底をもつが、器壁は薄くやや長胴化の傾向をもつ。縄文深鉢、石器類は混入と考えられる。深鉢はいずれもキャリバー形を呈するが、地文に縞糸文をもつものと無文のものがある。縄文時代中期後半に帰属する資料である。石鏃は17・22が下呂石製であり他はチャート製である。形態にバリエーションがあり、複数時期にまたがるものであろう。23は右側縁部を欠損するが、チャート製の板状剥片を素材とする石核である。上下の狭小な平坦面を打面として剥片剥離を行っている。上下の前後関係はランダムである。須恵器坏蓋及び有台坏、無台坏は美濃須恵縄年0B1・2～1Y-12号窯式に比定される幅をもつ。土師器甕D類は長胴化、径の広い平底bをもち8世紀後半に帰属する特徴をもち、須恵器の編年観とも矛盾しない。

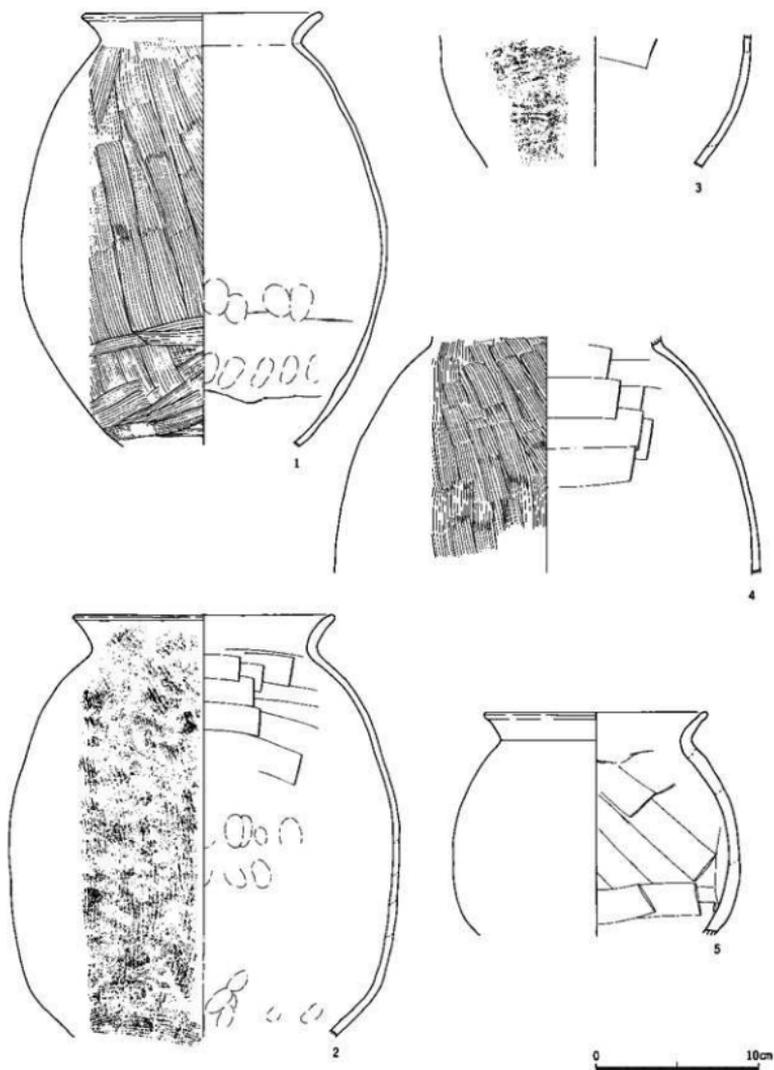


第51図 SB22出土遺物実測図2

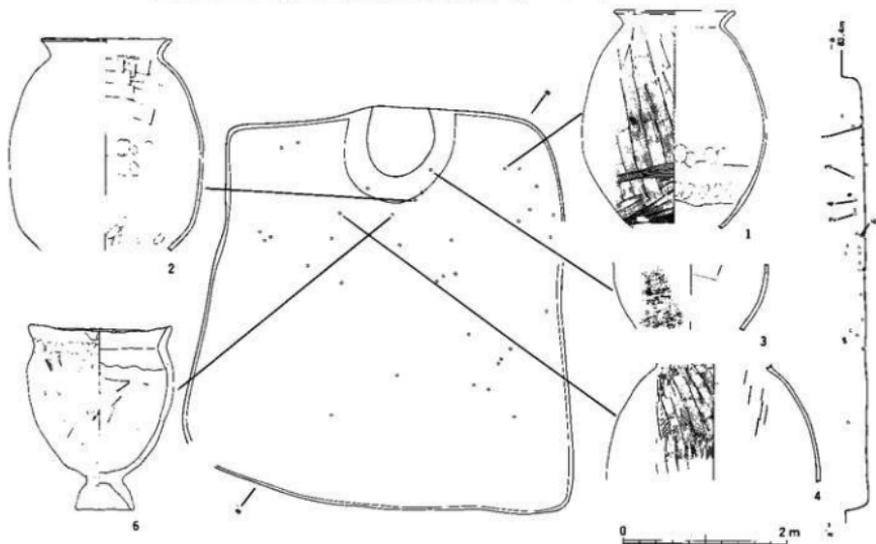
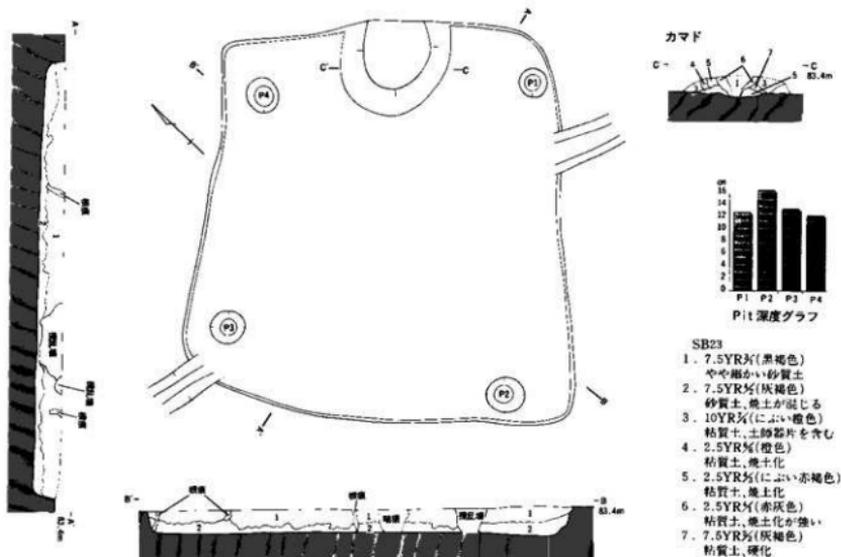
SB23 (第53図)

位置	EE21・FF21・22	平面形	長方形	主軸方位	N-49°-E
規模 (cm)	490×430×32	面積	21.0m <sup>2</sup>	時期	6世紀前半

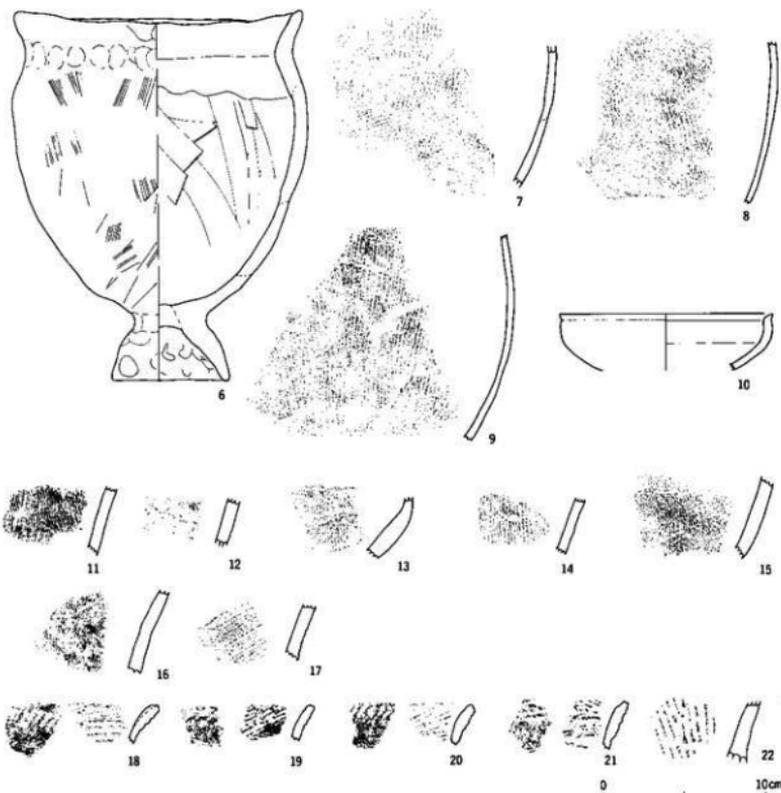
中央部分を排水溝により切られるが、覆土内で終結し床面まで達していない。南東及び南西コーナー部分はやや外方に広がり平面形態が台形状を呈する。地山を掘りこみ浅黄橙色土を敷くが硬化面は特に認められない。カマドは東壁ほぼ中央に位置する。内部の堆積は被熱による焼化深度の違いとして理解され、底部及び住居覆土1層が流入する両側が特に強く認められる。袖部分に相当する部分には



第52图 SB23出土遗物实测图1



第53図 SB23遺構実測図・遺物分布図



第54図 SB 23出土遺物実測図2

土師器甕片の混入が認められた。カマド手前で6の台付甕を、南側部分で1の甕検出している。Pit 1～4が主柱穴であり、深度は12～16cmを測る。それぞれの断面形態は幅広なすり鉢状にちかい。なお、貯蔵穴は検出していない。

#### 出土遺物（第52・54図・第94図24）

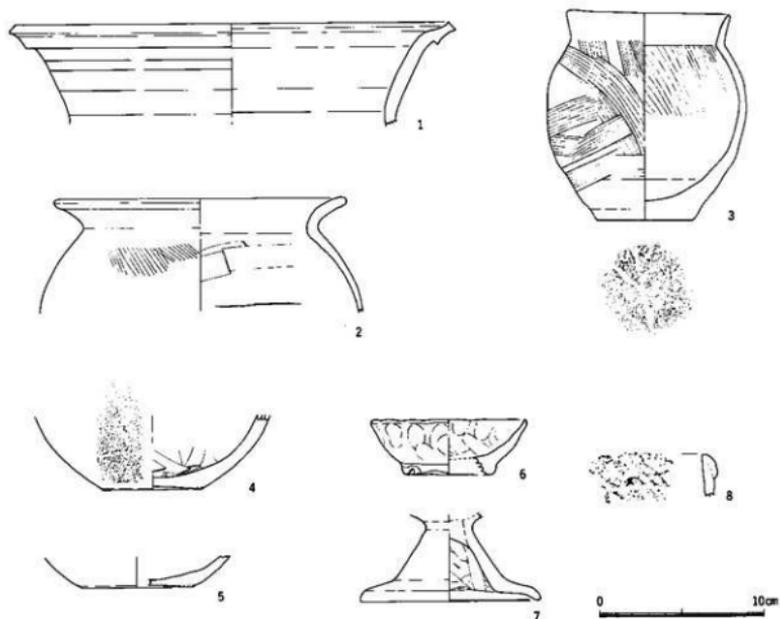
40点の出土遺物数がある。土師器甕B類（1・2・4・7～9）、甕H類（3・5）、甕I類（6）、土師器坏（10）、縄文土器深鉢（11～17）、弥生土器深鉢（18～22）、石核（第94図24）がある。土師器甕B 1・2・4はいずれもカマド周辺で押し潰れた状態で検出している。1は口縁部横ナデ後胴部のハケが施されている。甕I類は台付甕である。口縁部整形段階の指頭圧痕を残し胴部外面にはハケ後ナデ消しが認められる。台部端を内面に折り返すが、やはり指頭整形痕を残す。縄文土器深鉢及び

弥生土器深鉢、石核は覆土上層から出土しており混入と考えられる。11～17は1点を除き燃糸文を地文としキャリパー形を呈し、12は無地文に頸部に波状沈線がめぐるものと考えられ縄文時代中期後半に帰属するものであろう。石核は下呂石製である。分割礫を素材とし、折断面を打面として上端より剥片剥離を行った後表面のボジ面を打面として下部より剥片剥離を行っている。18～22は貝田町式条痕深鉢の特徴をもつ。土師器甕B類より6世紀前半と考える。

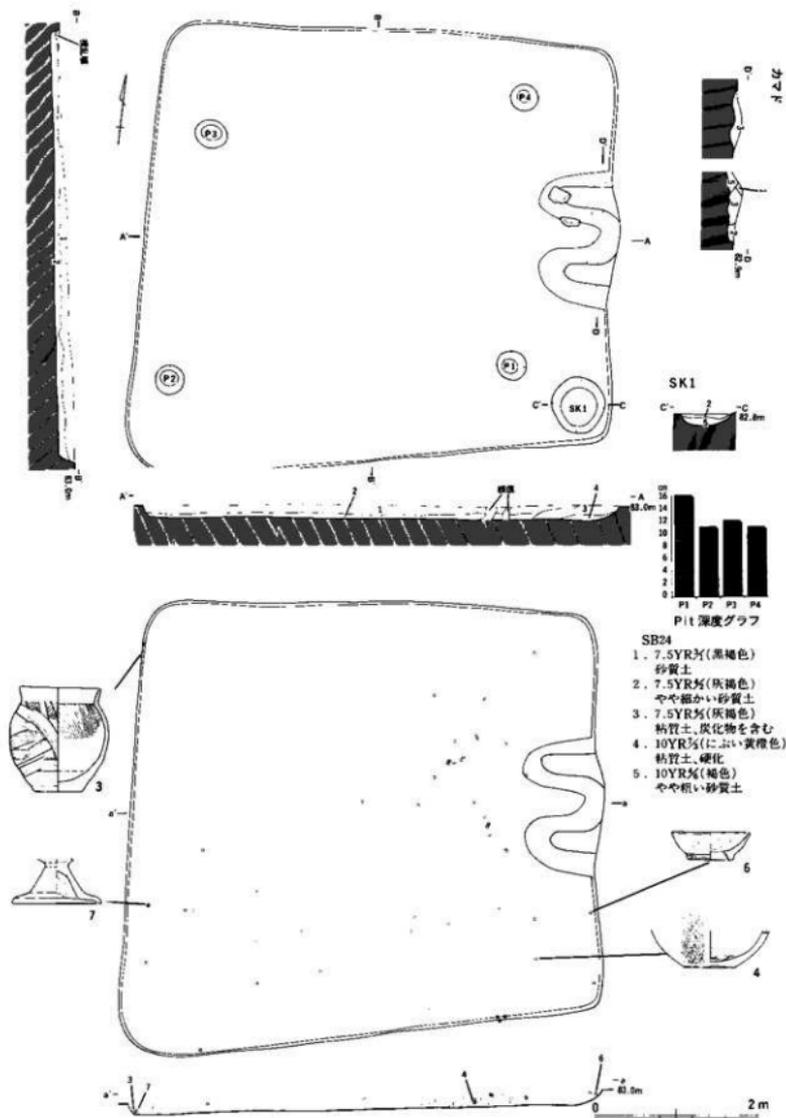
SB24 (第56図)

位置	BB23	平面形	方 形	主軸方位	N-85°-E
規模 (cm)	580×540×20	面積	28.6㎡	時期	5世紀末～6世紀初

主軸方位はほぼ東に向ける大型の住居である。南西コーナー部分がやや突出する。地山を不均衡に掘りこみ鈍い黄橙色土をたたきしめ床面とし安定したレベルをもつ。カマドは東壁に位置する。袖部分が残存するが断割り図に見られるように粘質の灰褐色土を固め構築している。燃烧部底部部分にはこの灰褐色土が焼化され硬化、変色した4層が堆積している、袖部先端に見られる“サバ石”（砂岩）は袖部の袖強材ではなく天井部の一部を構成する両袖部間の先端部を結んでいた端部分であったと考えられる。やや内側に配置される Pit 1～4 が主柱穴であり、深度は11～16cmを測る。南東コーナーに位置する SK 1 は貯蔵穴で、68×66cm、深さ14cmの規模をもつ。断面形態は浅いすり鉢状を呈する。



第55図 SB24出土遺物実測図



第56図 SB24遺構実測図・遺物分布図

#### 出土遺物 (第55図・第94図26)

出土遺物数は58点である。須恵器甕(1)、土師器甕B類(2・4・5)、土師器甕F類(3)、土師器手捏ね土器〔鉢〕(6)、土師器高坏(7)、縄文土器深鉢(8)、打製石斧(第94図25)を図示した。土師器甕B類2は口縁部内面粘土帯貼付時の調整であるハケ目を一部残す。甕F類である3は平底びである。底部外面に木葉痕をもつ。土師器高坏は柱状部内面がケズリ、裾部内面がナデと別々の調整が施される。縄文土器深鉢、打製石斧は混入であり、深鉢は縄文時代中期後半に属する資料である。打製石斧はホルンフェルス製で刃部と基部を欠損する。須恵器甕1はH-11号窯式に比定される。土師器甕B類、土師器高坏の存在から5世紀末～6世紀初と考える。

#### SB25 (第57図)

位置	HH 27	平面形	方形	主軸方位	N-31°-E
規模 (cm)	410×410×24	面積	16.3㎡	時期	5世紀末

主軸方位を南に向けている。遺存状態は良好である。粘質の褐色土を貼り床面を構築し、広く硬化面が認められた。壁高は平均して20cm強を測り、床面レベルも安定している。カマドは南壁やや西寄りに位置し良好な状態で検出できた。セクション図に見られるように粘質の褐色土を用いて構築し、燃焼部底部部分は焼化によりよく赤色化している。カマド上部に穿かれた煮沸具の設置部分より住居主覆土である褐色土が流入しており、その内部より6の甕、19の坏を検出している。四隅に配されるPit 1～4が主柱穴であり、深度は8～12cm程度とやや浅めである。なお、貯蔵穴は検出していない。

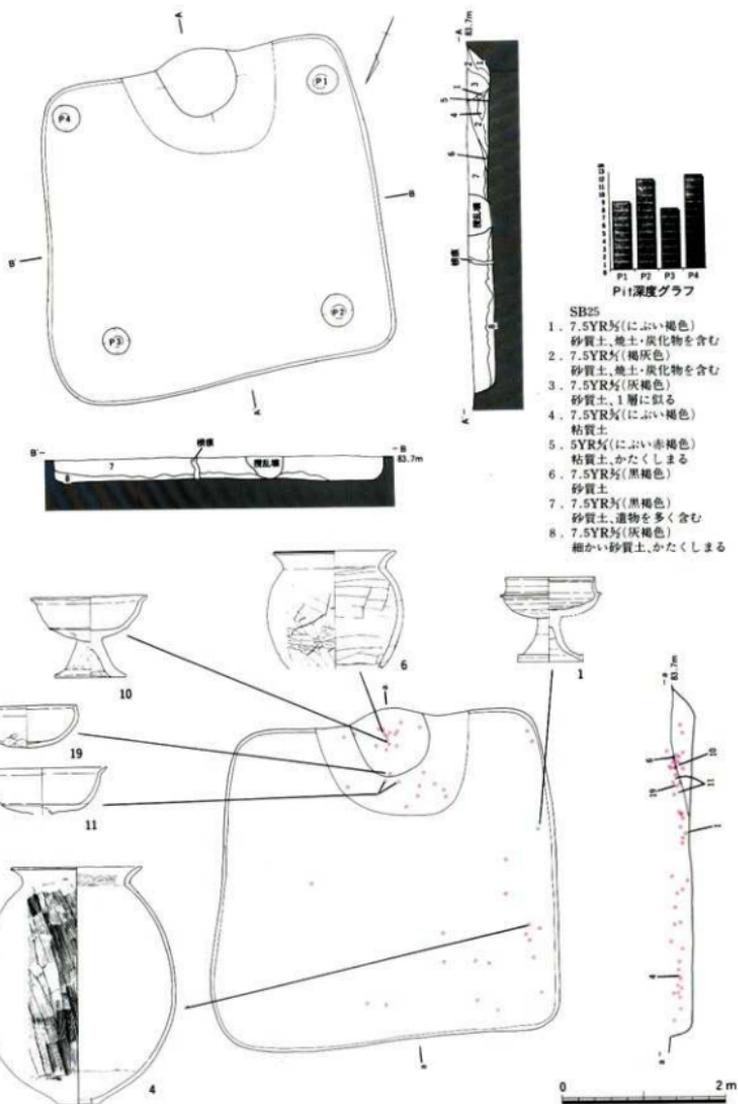
#### 出土遺物 (第58・59図・第94図25・27)

71点の出土遺物がある。須恵器有蓋高坏(1)、須恵器甕(2)、土師器甕B類(3)、土師器甕E類(5・6)、土師器H類(7・8)、土師器高坏(9～15)、直口壺(15)、壺(16～18)、土師器坏(19)、刀子(第94図25)、打製石斧(第94図27)を図示した。土師器高坏は坏底部に稜、あるいは小さな段をもち坏部が内湾するものと端部が外反するものがある。柱状部は緩やかに屈折するものが大半を占めるが、内面調整が柱部がケズリ、裾部がナデと別々の調整が施されている。15は外面にミガキ、内面に絞り痕が認められ時期の遡るものである。土師器甕H類7は形態的には甕B類の小型化したものであるが、外面調整にヘラナデが施されている。鉄製刀子は基部側を欠損し、残存する長さは5.5cmである。打製石斧は混入と考えられ、ホルンフェルス製で正面にコーテックスを残す。横長剥片を素材とするが小型の部類に入る。須恵器有蓋高坏はH-11号窯式に比定され、土師器甕B類、土師器高坏より5世紀末と考えられる。

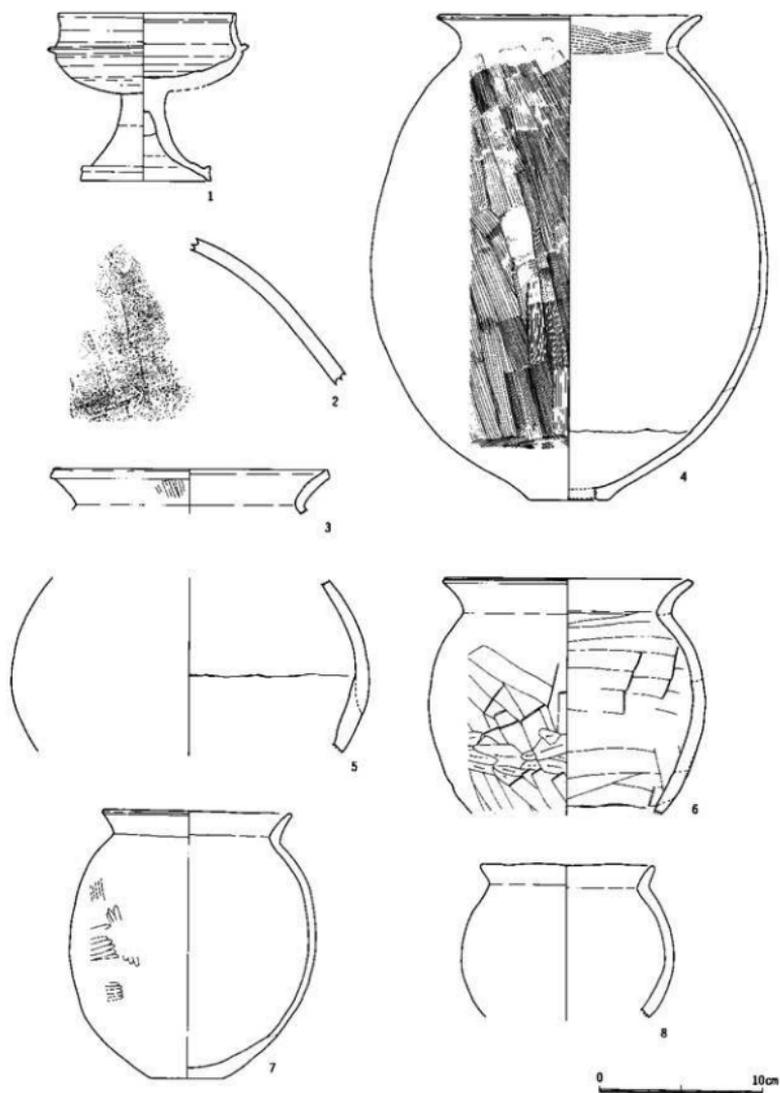
#### SB26 (第61・62図)

位置	DD 22、23・HH 22、23	平面形	方形	主軸方位	N-60°-E
規模 (cm)	600×560×34	面積	29.4㎡	時期	6世紀後半

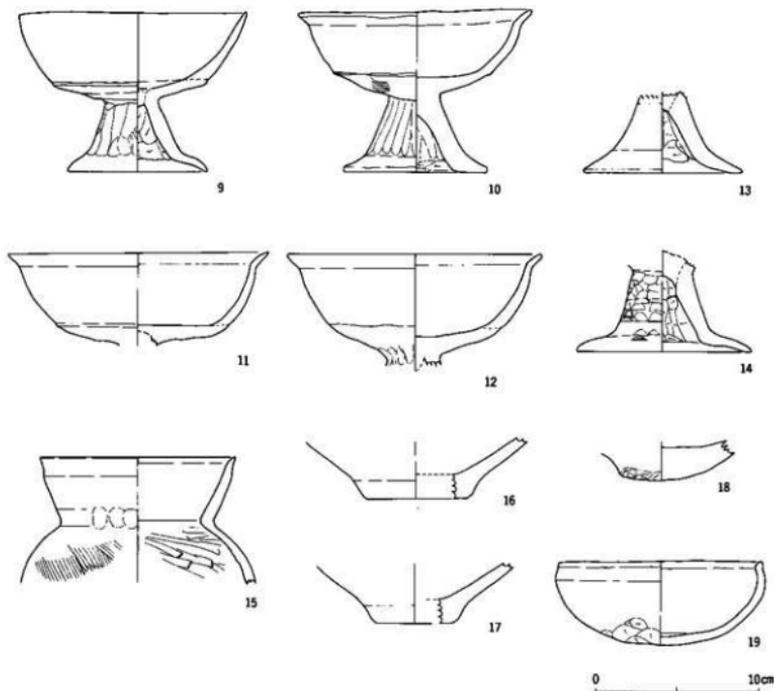
南壁よりカマドにかけて排水溝により切られる。また、南西コーナー部分には攪乱坑が入る。床面は地山を掘りこみ構築したままのため、一部に地山に含まれる礫が表出している。カマドは東壁に位置する。排水溝に中心部分が切られているが、他住居同様灰褐色粘質土で構築されていたカマドが倒



第57図 SB25遺構実測図・遺物分布図



第58图 SB25出土遺物実測図1

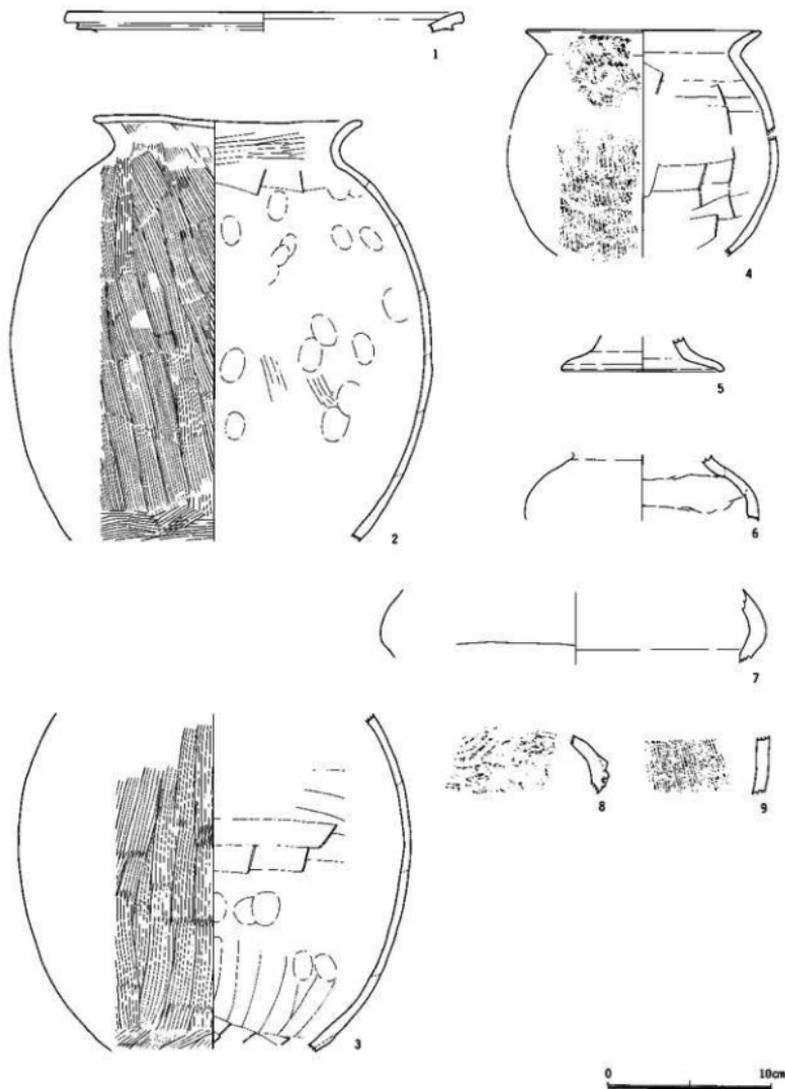


第59図 SB25出土遺物実測図2

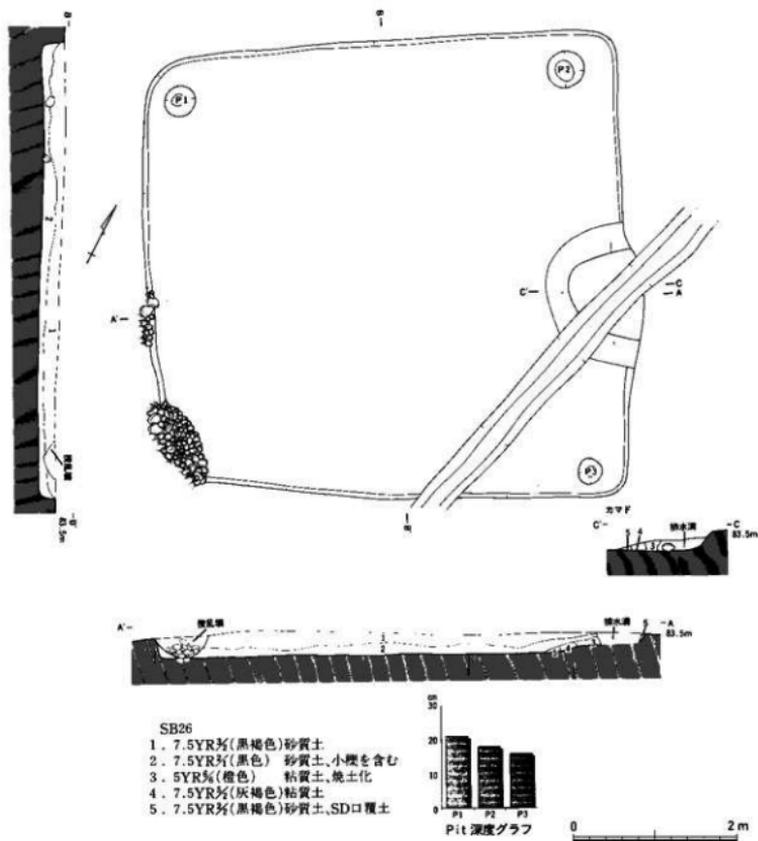
壊した状況で残存していたと考えられる。Pitは3基検出しているが、四隅に配置され深度は16～21cm程度を測る。南西コーナー部分は不定形な攪乱穴により消失している。なお、貯蔵穴は検出していない。

#### 出土遺物（第60図）

出土遺物数は50点で、須恵器甕（1）、土師器甕B類（2・3）、土師器甕F類（4）、土師器高坏（5）、土師器壺（6）、縄文土器深鉢（7～9）がある。土師器甕B類は口縁が一度立ち上がってから外折し口縁部内外に横ナデが行われるが、内面のハケ調整を一部残す。土師器甕F類も口縁部横ナデ後胴部のハケ調整が施されており、やや調整技法の退化が見られ、製作技術的に甕B類から甕C類への過渡的様相を呈しているものと考えられる。縄文土器深鉢は縄文時代中期後半に属するもので、混入と考えられる。土師器甕B類より6世紀代に帰属すると考えられるが、前述したとおり製作技術的に土師器甕C類への過渡的様相がみられ6世紀後半に位置付けたい。



第60图 SB26出土遗物实测图

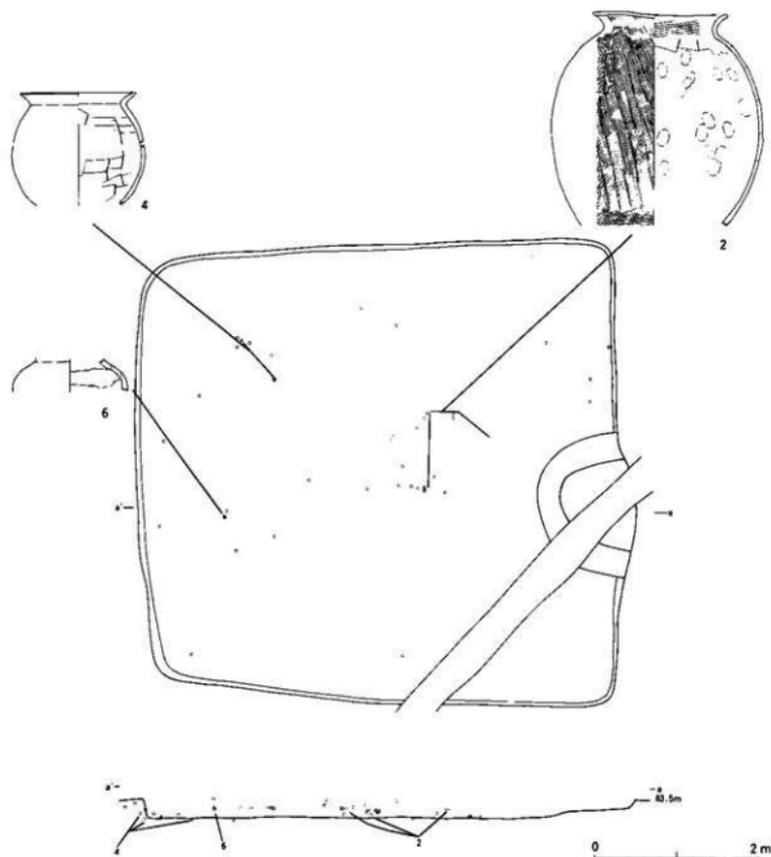


第61図 SB26遺構実測図

SB27 (第63図)

位置	JJ25・JJ26	平面形	方 形	主軸方位	N-75°-E
規模 (cm)	420×416×16	面積	16.7m <sup>2</sup>	時期	6世紀前半

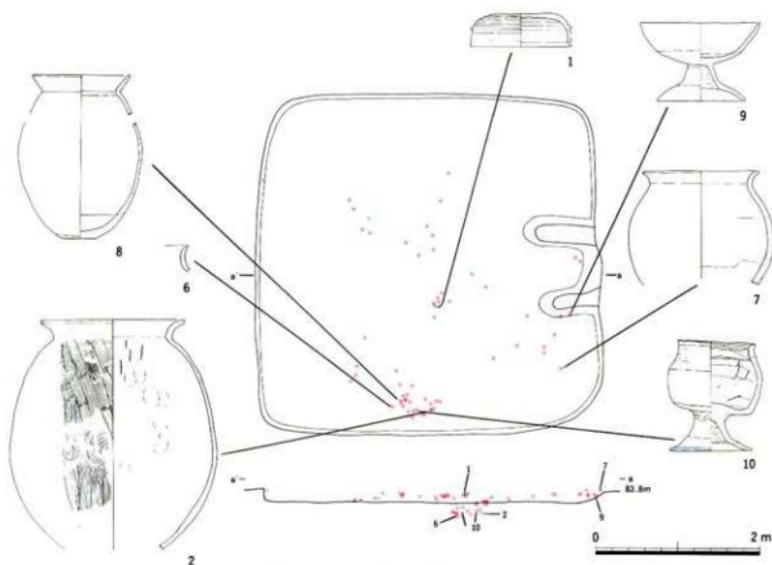
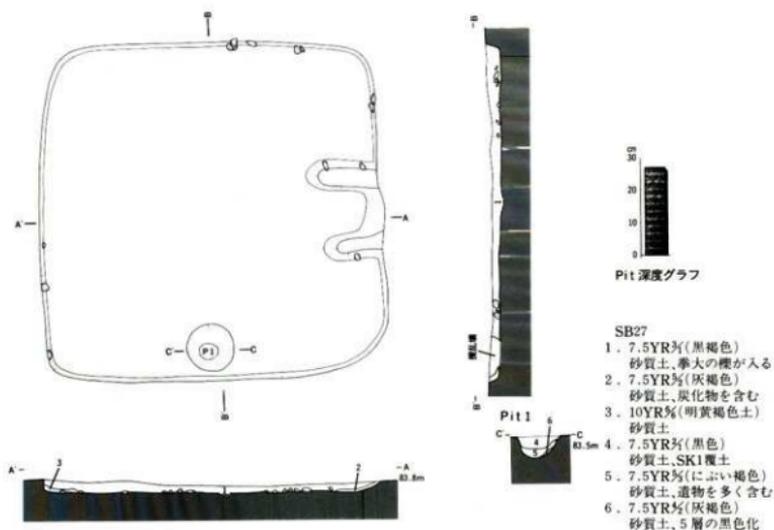
本住居が位置するJJ26・JJ27グリッド周辺は地山中の礫層が表出しており、地山を掘りこんだ床面上にはセクション図にみられるように多くの礫が上面部分を表出させている。カマドは東壁やや南より位置する。残存状態は悪く上部をかなり刮削されている。燃烧部部分底部に僅かに炭化物を含む灰褐色土が認められた。南壁沿いに中央に貯蔵穴であるSK1を検出している。56×58cm、深さ28cmの規模を測り、内部より2の土師器甕、6の土師器甕口縁部片、10の土師器高坏を検出している。なお、柱穴は検出しえなかった。



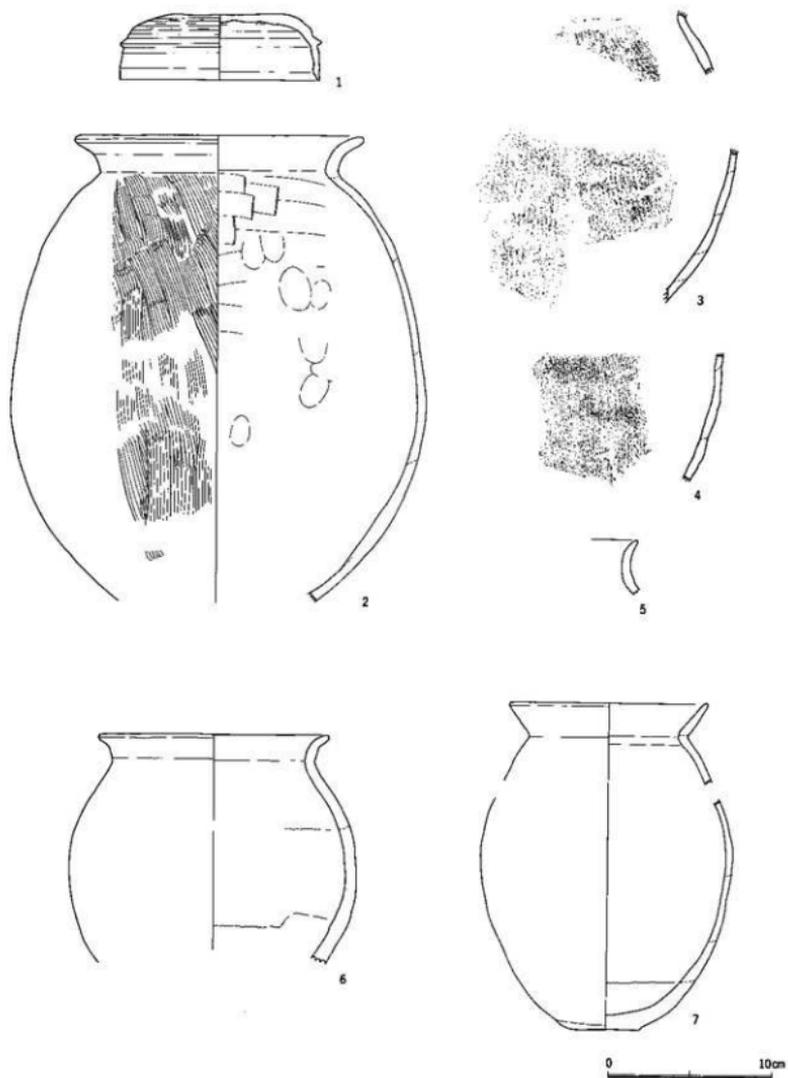
第62図 SB 26遺物分布図

出土遺物（第64・65図・第94図28）

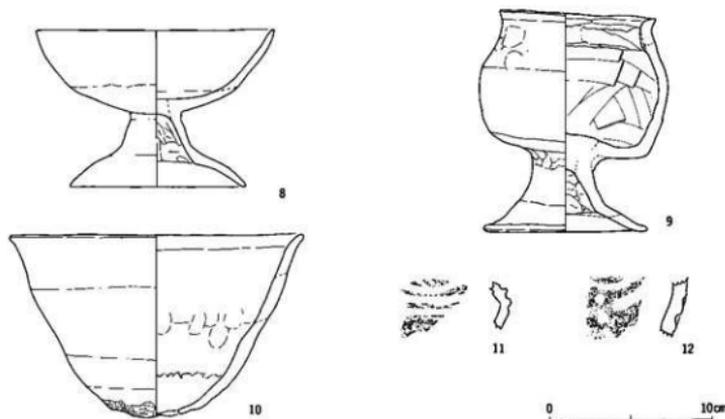
67点の出土遺物がある。須恵器坏蓋（1）、土師器甕B類（2・3～5）、土師器甕H類（6・7）、土師器高坏（8）、土師器台付鉢（9）、土師器甕（10）、縄文土器深鉢（11・12）打製石斧（第94図28）を图示した。須恵器坏蓋は天井部は扁平気味で、ほぼ全面にロクロ左回転による回転ヘラケズリ調整が施される。土師器甕H類とした7は器形的には甕F類の器形を呈し、平底aをもつ。土師器台付鉢は8の土師器高坏と同様な脚部をもつ。土師器甕は底部に焼成後の穿孔が設けられ、底部は土師器甕と同様な相欠はぎ接合が認められる。縄文土器深鉢は2点ともキャリパー形を呈し、沈線による文様構成もつ。縄文時代中期後半に属する資料で混入品である。打製石斧は磨耗が発達しコーテックス状となっている。粘板岩製である。須恵器坏蓋はH-61号窯式に比定され、6世紀前半と考える。



第63図 SB27遺構実測図・遺物分布図



第64图 SB27出土遺物実測図1



第65図 SB27出土遺物実測図2

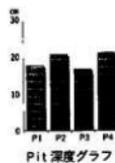
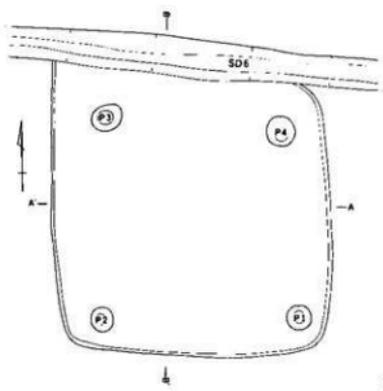
SB28 (第66図)

位置	II 21・22・JJ 21, 22	平面形	方形	長軸方位	N-2°-W
規模 (cm)	(340)×330×18	面積	11.6㎡	時期	弥生中期

北壁をSD6に切られる。長軸方向をやや西に傾け平面形態は隅丸の長方形を呈し、SB14に似る。床面は地山を掘りこんだままとするため特に硬化面は存在しない。地床炉など火処は検出していない。Pit 1～4は主柱穴と考えられるが、北側の Pit 3・4がやや内側に寄る。深度は17～22cmを測り、安定している。

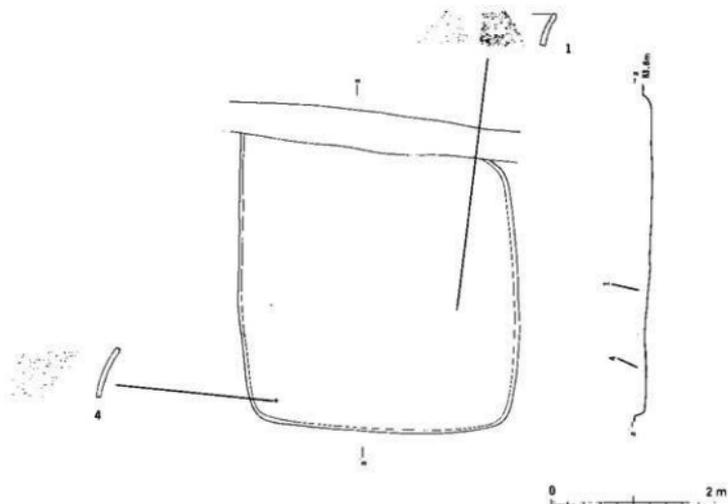
出土遺物 (第67図・第94・95図29～36)

40点の出土遺物がある。弥生深鉢形土器(1～3)、壺形土器(4～10)、縄文深鉢(11・12)を示した。弥生深鉢形土器は貝田式条痕深鉢である。3は口縁端部外面に隆帯を貼り付け縦のキザミを加えている。壺形土器は器形を窺いしれる資料はないが、櫛描紋、条痕をもつ。9はミガキ後櫛描紋を意識したような横ナダが施されている。11・12は縄文時代中期に帰属するもので、混入と考えられる。燃糸文を地紋とし、12は半截竹管による波条文をもつ。第94図29はチャート製の有基石礫である。第94図30はチャート製の横長剥片右側縁部に微細な使用痕がみられる。第94・95図31・33はホルンフェルス製・粘板岩製の打製石斧であり、31は基部のみ残存、32は基部を欠損する。第94図32は右側縁部に巾1mm程度の微細な剥離が連続的に入っておりRFと考える。第95図34・35は石核である。34はチャート製の剥片を素材とし、表裏面をそれぞれ打面としている。35は下呂石製の分割礫素材で、平坦な自然面を打面としている。第95図36は小型剥片石器とした。ホルンフェルス製の縦長剥片素材で調整剥離により形態を半月形としている。刃部はやや幅広なステップ状となる剥離が入る。正面側刃部付近で金属顕微鏡による光沢痕を確認しており、石庖丁的機能をもつ石器として考える。床面直上より検出している深鉢形土器より弥生時代中期に帰属すると考える。

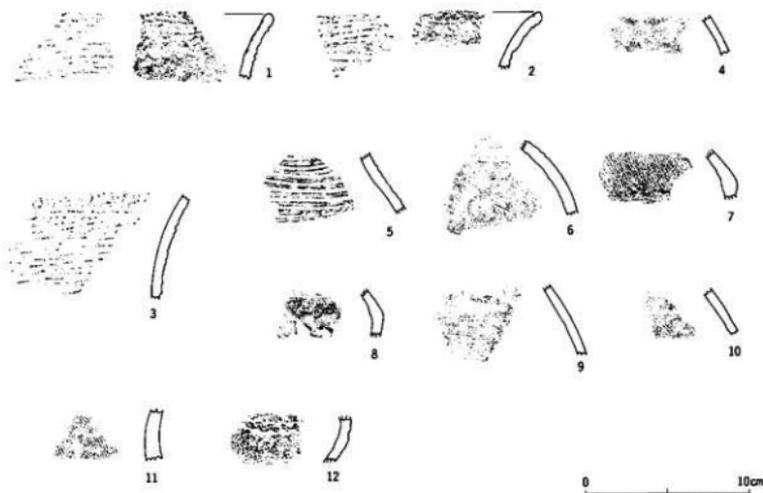


SB28

1. 7.5YR7(黒褐色)  
砂質土
2. 7.5YR7(黒色)  
やや細かい砂質土、粘質
3. 7.5YR7(褐色)  
やや粗い砂質土、SD6壤土
4. 7.5YR7(にじい橙色)  
細かい砂質土



第66図 SB28遺構実測図・遺物分布図



第67図 SB28出土遺物実測図

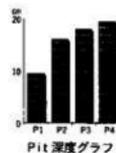
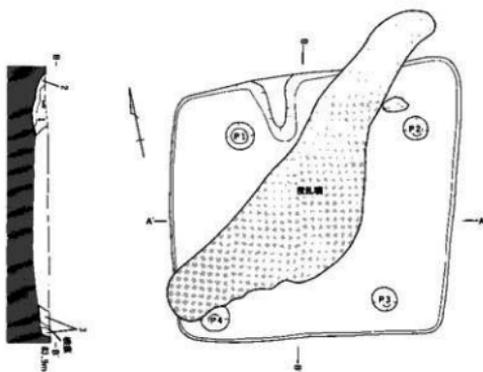
SB29 (第68図)

位置	JJ 21・JJ 22	平面形	方 形	主軸方位	N-6°-E
規模 (cm)	320×340×12	面積	11.1㎡	時期	8世紀後半～末

住居中央部分に大きく攪乱(根痕)が入る。面積的には小型の範囲である。地山を掘りこみ薄く浅黄橙色土を貼っている。カマドは北壁に位置しているが、攪乱のため片袖部分のみ残存する。僅かに残る燃焼部分には、カマド構築土である褐灰色土の堆積が認められる。カマド近く(消失している右袖部分相当付近)床面直上にある河原石は強く焼化されておりカマドとの関連が想定される。Pit 1～4は支柱穴と考えられる。深度は10～20cmとバラツキがみられる。なお、貯蔵穴は検出していないが攪乱部分に存在した可能性は考えられる。

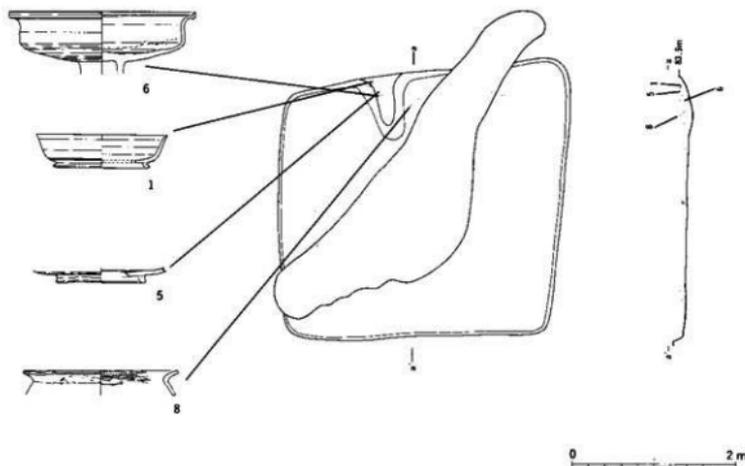
出土遺物 (第69図)

出土遺物数は22点であり、須恵器有台坏(1・3)、須恵器椀(2・4)、須恵器高坏(5)、須恵器壺(6)、土師器壺D類(7・8)、縄文土器深鉢(9・10)、弥生土器深鉢(12)を図示した。須恵器有台坏、椀は美濃須衛 IY-12・13号窯式に併行し、8世紀後半～末と考えられる。土師器壺D類も口縁部が短く屈折し、口縁内面にハケを残すなどの調整の簡素化が窺われ、径の広い平底をもつ。相欠はぎ接合はみられるが、位置的に下がり、ほぼ底部部分で行われている。これらの特徴は該期の土師器壺の典型的なものと考えられる。須恵器高坏は特殊な形態をもつ。縄文中期後半の燃糸文を地文にもつ縄文土器深鉢、弥生前期に属する条痕をもつ甕形土器は、覆土上部から出土しており混入と考えられる。

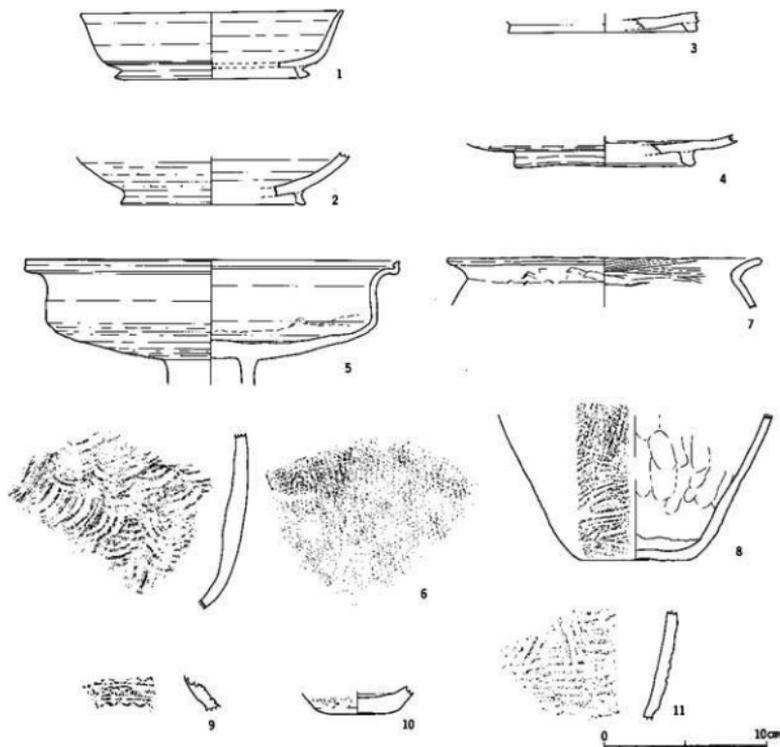


SB29

1. 7.5YR5(黒褐色) 砂質土
2. 7.5YR5(地灰色) 砂質土、かたくしまる
3. 7.5YR5(黒色) 砂質土、やや粘質



第68図 SB29遺構実測図・遺物分布図

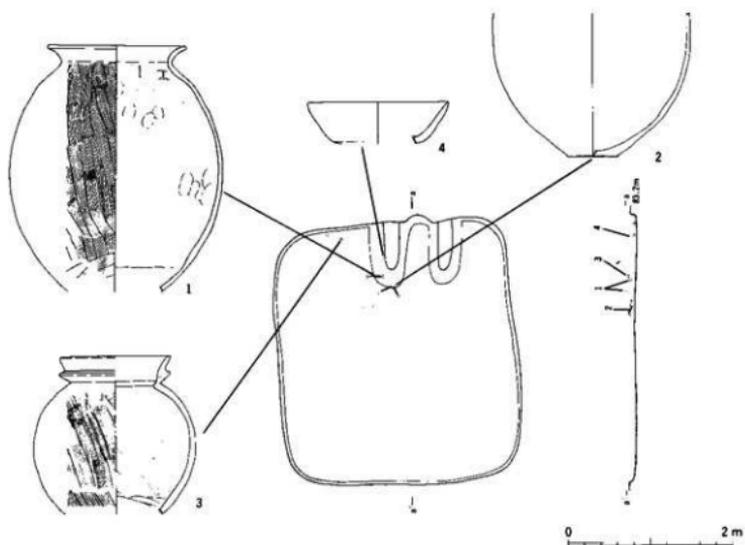
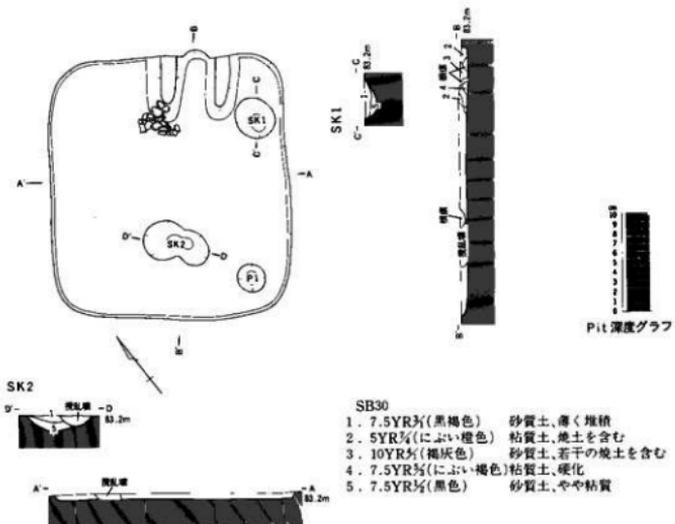


第69図 SB29出土遺物実測図

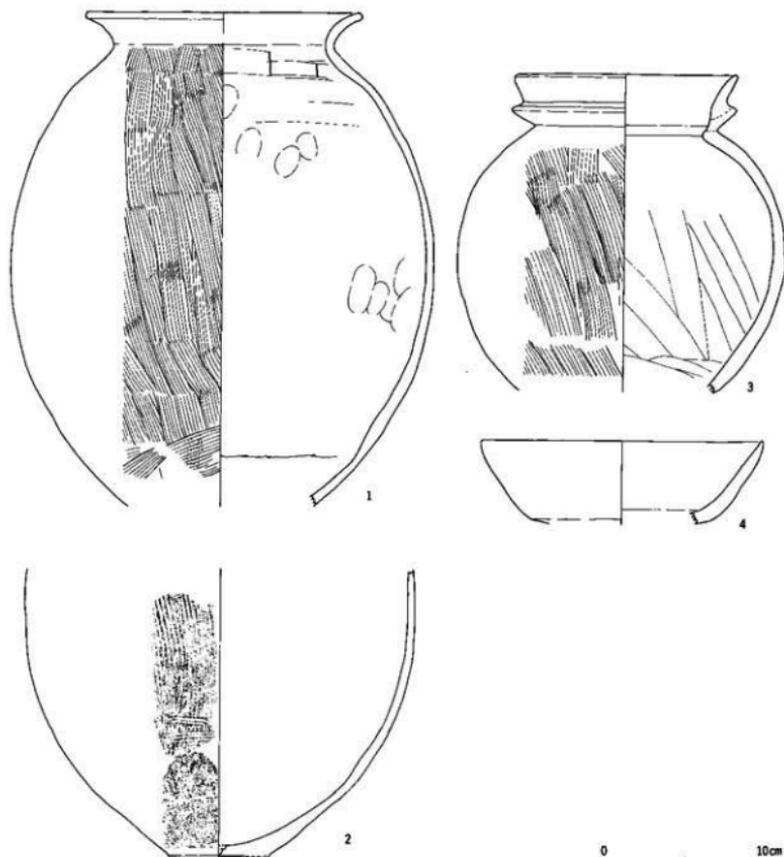
SB30 (第70図)

位置	EE 18・19	平面形	長方形	主軸方位	N-36°-E
規模 (cm)	322×290×12	面積	9.1m <sup>2</sup>	時期	5世紀末

小型の住居であり、壁高は10cm強を測るのみで上部を大きく刮削されている。床面は浅黄橙色土をたたきしめた硬化面が広がっていた。カマドは北壁に位置する。強く押しつぶされた状況を呈し、燃焼部分には焼土ブロックが非常に硬くしまりブロック状に堆積していた。左袖部手前、ほぼ床面上に拳大の河原石及び土師器壺1・2の集中箇所が存在する。これは、河原石は袖部の補強材と考えられ、その手前で土師器壺1・3が押し潰れた状況が想起される。柱穴は南西コーナー部分に1基検出したのみである。カマド東部分に位置するにあるSK1は貯蔵穴と考えられ、50×50cm、深さ14cmの規模をもち、断面形態は浅いすり鉢状を呈する。SK2は後世の掘り込みであり、住居に付属するものではない。



第70図 SB30遺構実測図・遺物分布図

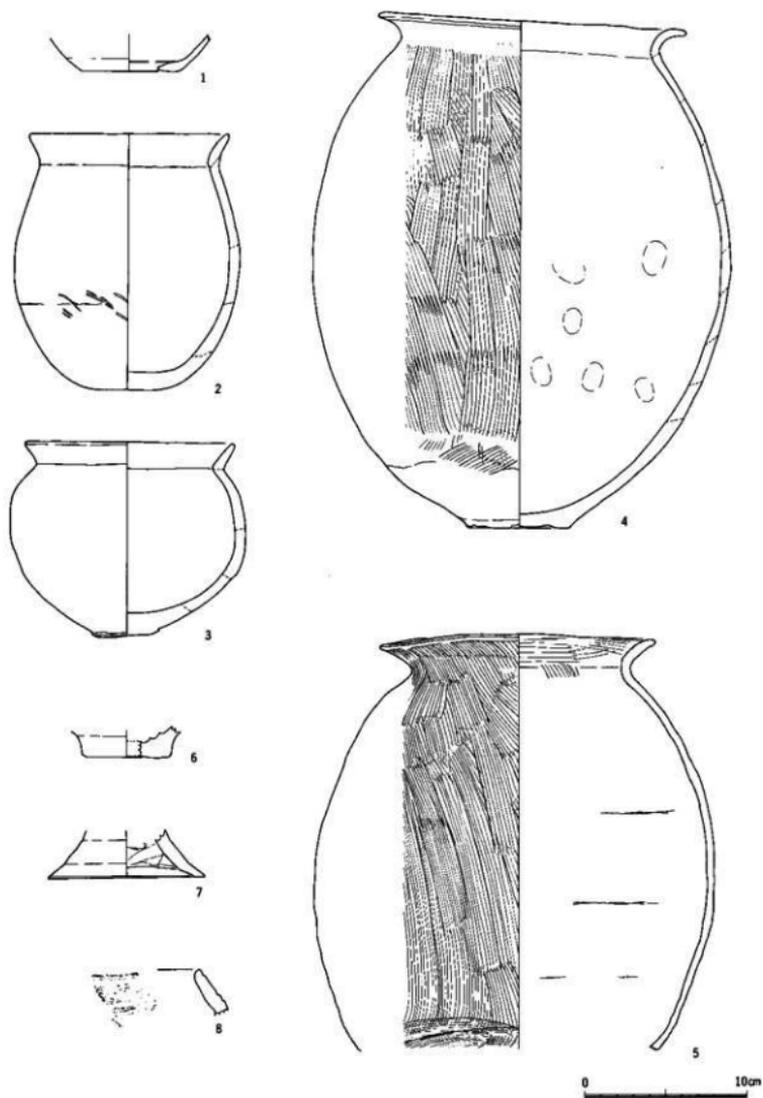


第71図 SB30出土遺物実測図

#### 出土遺物（第71図）

出土遺物数は10点であるが、カマド左袖部手前に押し潰れた状態で検出した土師器甕、土師器高坏は同一破片を一括して取り上げている。土師器甕B類（1・2）、土師器複合口縁壺（3）、土師器高坏（4）を図示した。1・2には土師器甕B類の特徴である口縁部内外面に強位横ナデが認められ、相欠はぎ接合以下胴部外面にはハケ調整は及んでいない。これはこの土師器甕が登場する古い様相と考えられる。土師器複合口縁壺は球形の胴部をもち、外面にハケ、内面に板ナデが施される。土師器高坏は坏底部に僅かに稜をもちやや内湾気味に口縁部が立ち上がる。緩やかに屈折する脚部をもつものであろう。遺物は少ないが床面直上で検出している土師器甕B類、土師器高坏より5世紀末に帰属すると考える。





第73図 SB31出土遺物実測図

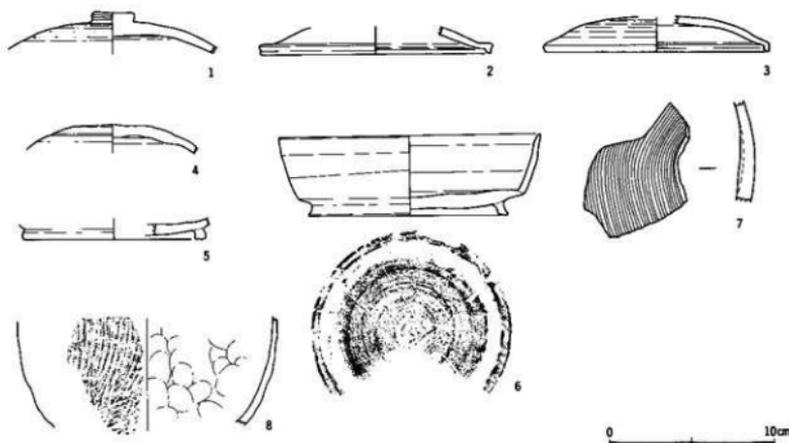
## SB31 (第72図)

位置	JJ 22・JJ 23	平面形	方 形	主軸方位	S-89'-E
規模 (cm)	348×374×23	面積	12.6㎡	時期	6世紀後～7世紀前

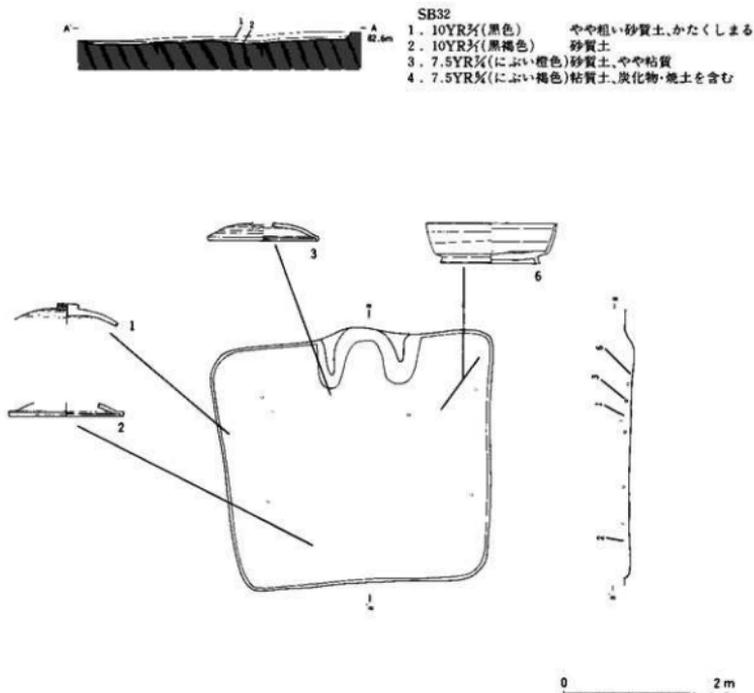
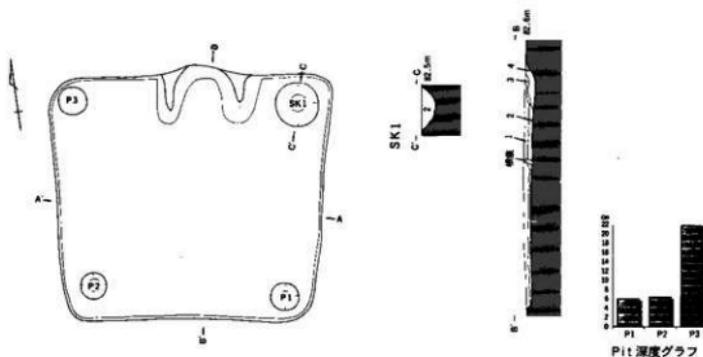
北東コーナー部分がやや膨らむが平面形態はほぼ方形を呈する。床面はにぶい黄褐色土をたたきしめ構築しているが特に硬化面は認められなかった。カマドは東壁やや南寄りに位置する。平面図は両袖部を残し掘りあげた図を掲載しているが、検出状況は東壁より方形を呈するテラス状に張り出したものであった。それを断ち割ったのがカマド断ち割り図C-C'及びD-D'である。燃烧部の奥まった位置には数cm割り込み河原石を地山上に縦位に立たせた石製支脚が存在し、その周りを焼土・炭化物を多く含んだ砂質土が充填する。その上部及び周辺をカマド構築土である粘質な褐灰色、灰褐色土が堆積し、この状況よりカマドがそのまま倒壊した様相を呈するものと考えられる。石製支脚を覆う状況で4の土師器甕を検出している。柱穴は西壁側に Pit 1・2 を検出したのみである。深度は Pit 1 が10cm、Pit 2 が4cmと浅い。南西コーナーやや西寄りに貯蔵穴であるSK 1 を検出している。規模は70×60cm、深さ40cmを測りしかりしたものである。SK 1 北側に5の土師器甕を検出している。

## 出土遺物 (第73図・第95図37)

76点の出土遺物数がある。須恵器無台坏 (1)、土師器甕H類 (2)、土師器鉢 (3)、土師器甕B類 (4・6)、土師器甕C類 (5)、土師器高坏 (7)、縄文土器深鉢 (8)、打製石斧 (第95図37) を図示した。土師器甕B類は口縁部は短く外折し内面のハケ調整を一部残し退化傾向が窺われ、土師器甕C類と共存している。径の大きな平底もつ土師器甕H類は胴部下半に最大径をもちヘラナデが施される。無台坏は美濃須衛綱年 IY-12・13号窯式-IY-1 窯式の特徴をもつが時期の下るもので混入であろう。第95図37はホルンフェルス製の打製石斧である。基部側のみ残存し、同じく混入である。土師器甕の特徴から6世紀後半～7世紀前半の中で考えておきたい



第74図 SB 32出土遺物実測図



第75図 SB32遺構実測図・遺物分布図

## SB32 (第75図)

位置	Z18・19	平面形	方形	主軸方位	N-10°-E
規模 (cm)	315×330×10	面積	9.6m <sup>2</sup>	時期	8世紀後葉～9世紀

道路下に位置し上部を大きく刮削をうけ、残存部分は強く踏み固められている。小型の範疇に帰属する住居で、床面はにぶい橙色土をたたきしめ構築されている。カマドは北壁やや東寄りに位置する。両袖部分を残す。燃焼部内には、焼土、炭化物を多く含んだ砂質土が堆積するが、その下部には焼化され赤色化したと考えられるカマド構築土（4層）の厚い堆積があり天井部分の倒壊部分と想定される。北東コーナー部分を除き四隅に Pit 1～3 の柱穴が配される。北東コーナー部分には54×54cm、深さ17cmの規模をもつ浅いすり鉢上を呈するSK1がある。貯蔵穴であり、内部より検出した有台坯身の2/3片が床面直上のものと接合している。

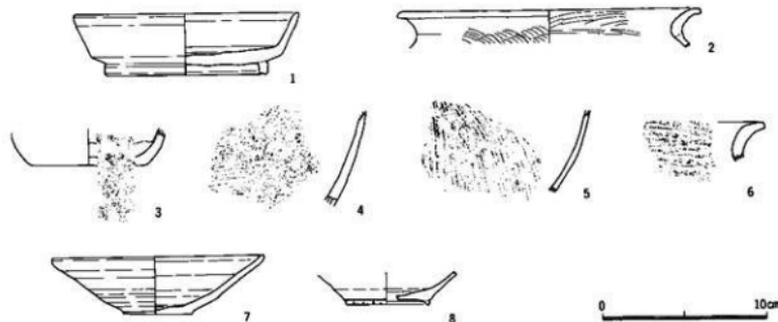
## 出土遺物 (第74図)

出土遺物数は18点と少ない。須恵器坏蓋（1～4）、有台坏（5・6）、提瓶（7）、土師器甕D類（8）がある。坏蓋2は狼投窯産と考えられ時期の下るものであり、4も7世紀代と考えられ共に混入であろう。1・3については紐の小型化、口縁端部の折り返しの傾向が窺える。有台坏6の底部外面にはヘラ記号が認められる。提瓶は時期の遅いものである。坏蓋1・3及び有台坏は美濃衛窯編年IY-12・13～IT-1の特徴を示し8世紀後葉～9世紀と考えられ、カマド内出土土師器甕D類とも矛盾はない。

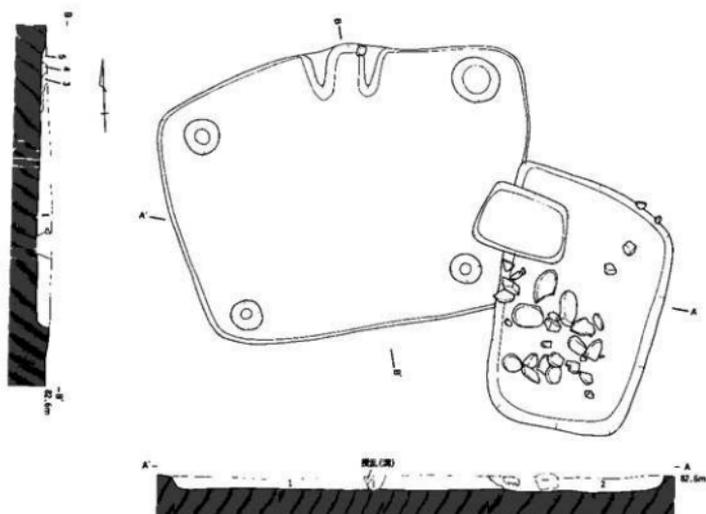
## SB33 (第77図)

位置	Z19・20	平面形	長方形	主軸方位	N-2°-W
規模 (cm)	350×450×18	面積	13.8m <sup>2</sup>	時期	8世紀後葉

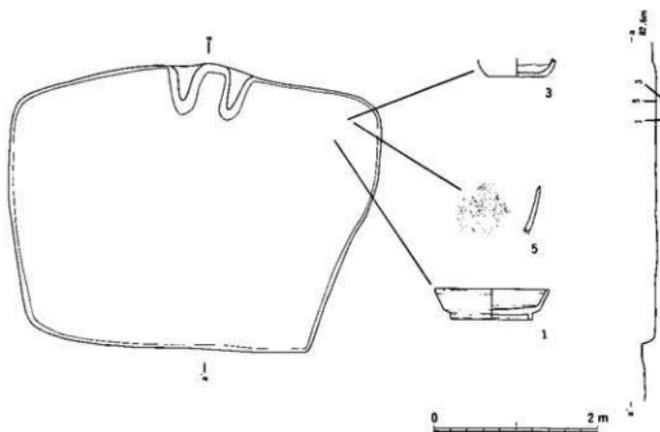
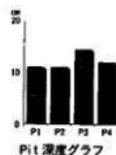
主軸方向をやや西にふり、南東コーナー部分をSZ6に切られる。遺存状態はSB32と同様であり、覆土も非常に硬くしまっている。床面は地山を掘り下げたもので全面に硬化面が広がるが本来のものか、あるいは前述の状況下による影響か判然としない。カマドは北壁に位置するが住居面積に対して狭小な袖部分が残存する。燃焼部分には焼土ブロックが認められた。柱穴は Pit 1～3 の3基を確



第76図 SB33出土遺物実測図



- SB33
- |                 |                  |
|-----------------|------------------|
| 1. 10YR5(黒色)    | やや粗い砂質土、かたくしまる   |
| 2. 10YR5(黒褐色)   | 砂質土、人頭大の川原石を含む   |
| 3. 7.5YR5(暗褐色)  | 砂質土、粘質           |
| 4. 4.5YR5(暗赤褐色) | 粘質土、焼土を含み、かたくしまる |
| 5. 5YR5(黒褐色)    | 砂質土、焼土を若干含む      |



第77図 SB33遺構実測図・遺物分布図

認している。いずれも四隅に配され、深度は11~12cmである。北東コーナーに位置するSK 1は配置的には柱穴が置かれる位置であるが、平面径が56×56cmを測り Pit 1~3 と比べ一回り大きく、深度も15cmを測り断面形態が浅いすり鉢状を呈するため区別して貯蔵穴とした。

#### 出土遺物 (第76図・第95図38)

出土遺物数は21点であり、須恵器有台坏(1)、土師器甕D類(2~6)、山茶碗(7・8)、クサビ形石器(第95図38)を図示した。有台坏は浅身で高台は角張りやや開き気味に付く。土師器甕はすべてD類に分類される。山茶碗・クサビ形石器は混入であり、山茶碗7は藤澤編年11型式に、8は7~9型式に比定される。第95図38のクサビ形石器は質の悪いチャート製であり、両側縁に載断面をもつ。有台坏はIT-12・13に比定され、8世紀後葉と考えられ土師器甕D類に伴うことに矛盾しない。

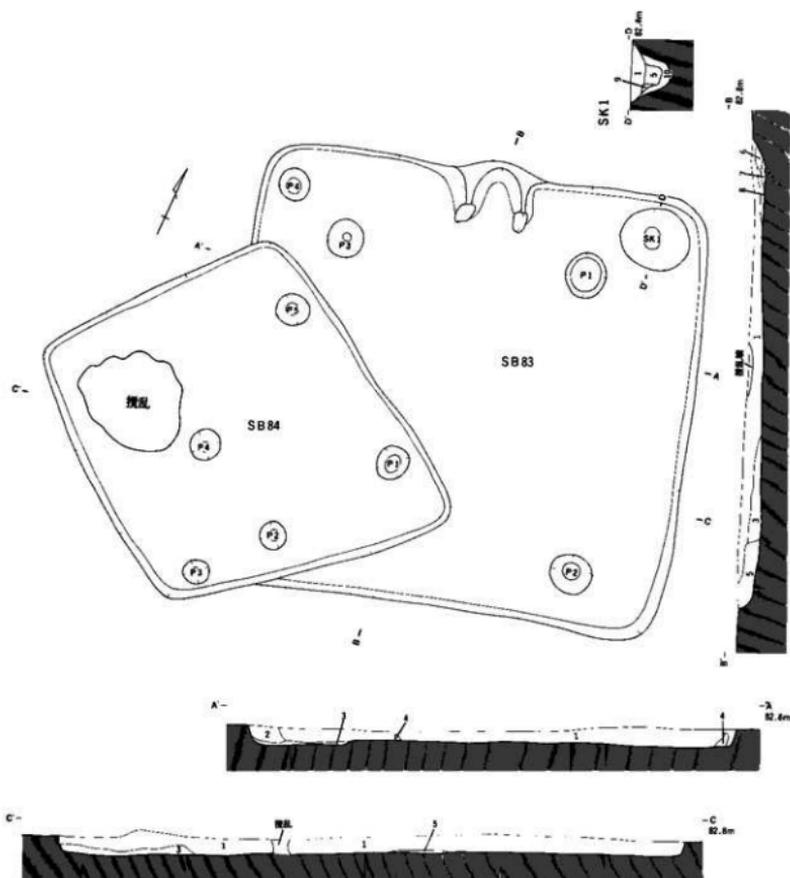
#### SB83 (第78・79図)

位置	Z 17、18・AA 17、18	平面形	方形	主軸方位	N-16°-W
規模 (cm)	552×554×24	面積	(29.4)m <sup>2</sup>	時期	7世紀前半

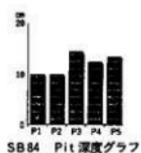
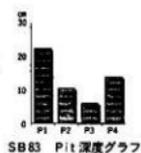
南西コーナー側をSB84に切られる。両住居は覆土からは切り合い関係は判然としなが、床面は両者とも黄橙色土をたたくしめ構築しており硬化面が広がっており、その床面の切り合いから新旧を判断している。大型の住居であり、堅高は15~20cmを測り、床面レベルも安定している。カマドは北壁ほぼ中央に位置する。両袖部先端部内には補強材、あるいは焚き口の天井部を支える支柱材と考えられる河原石が表出している。また、燃焼部内には燃上ブロックの堆積が認められた。主柱穴は配置的に Pit 1~3 が相当すると考えられ、深度は6~23cmである。南コーナー部分は、SB84内 Pit 2 が本住居の柱穴にあたと考えられ、SB84床面より深度11cmを測る。北東コーナー部分には貯蔵穴であるSK 1が配置され、74×84cm、深さ46cmの規模をもつ。SK 1内部堆積より地山を掘りこみ、その上部に粘質な黒色土を敷き使用した状況が考えられる。

#### 出土遺物 (第80・81図・第95図40~43)

58点の出土遺物数がある。須恵器坏蓋(1)、須恵器坏身(2)、須恵器佐波模倣碗蓋(3)、須恵器甕(4)、土師器甕I類(5・6)、土師器甕G I類(8)、土師器甕C類(8・10)、土師器甕H類(9)、弥生土器壺(11)、扁平片刃石斧(第95図40)、砥石(第95図41)、鉄鏃(第95図42)、金銅製耳環(第95図43)を図示した。右袖部内より出土した坏身は須衛65号窯式期に比定され、坏身2もほぼ同一時期に属するものであろう。佐波理模倣碗蓋は環状つまみに簡素化の傾向が窺え、時期の下ものである。土師器甕C類10は平底aであり、ハケ目も細かいが、伴出している7では口縁部内面にハケを残し、その調整方法に退化の傾向を示している。土師器甕I類5・6は小型の範疇に属し、径の広い平底をもち、底部外面に木葉痕がみられる。胴部外面には細かいハケを施し異質である。第95図40は結晶片岩製の扁平片刃石斧である。第95図41は砂岩製の持ち砥石である。被熱により破砕している。第95図42は鉄鏃であり、基部側に穿孔をもつ。第95図43は金銅製耳環である。環は中空ではなく、太い銅線を環状に折り曲げて、大部分が剥落しているが一部に金箔を施している部分が残存している。SB84より遺物の混入も認められるが、須恵器坏身2及び土師器甕C類の存在から7世紀前半と考える。

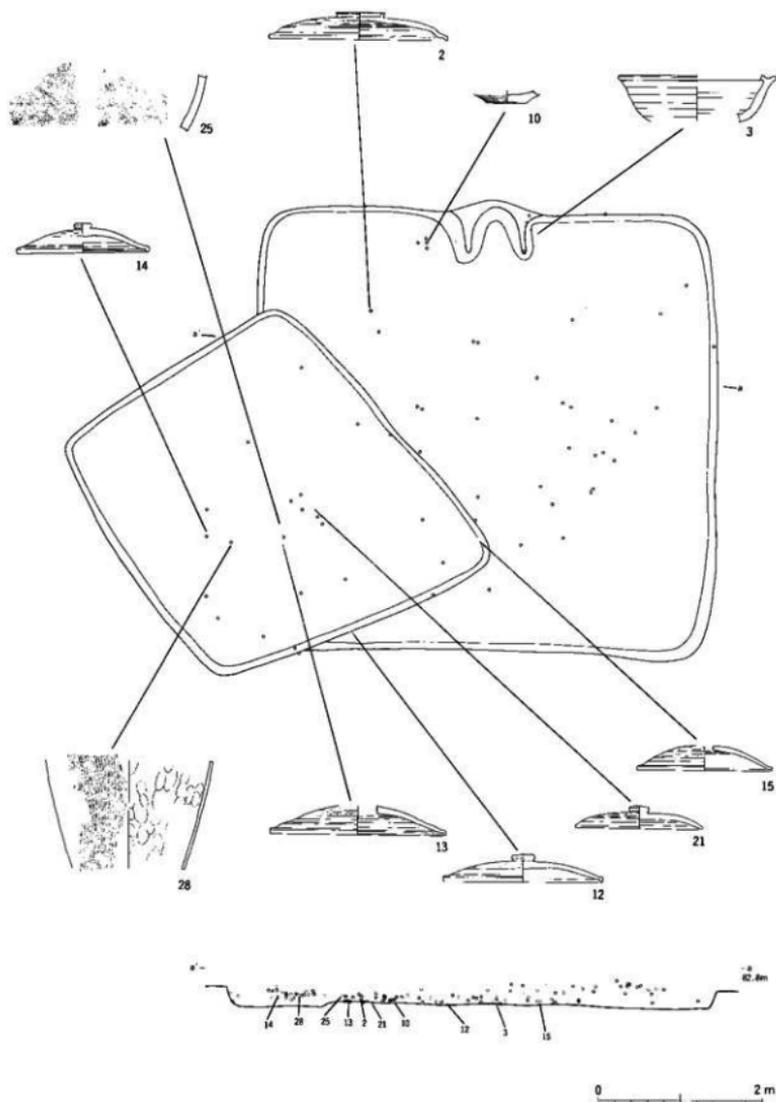


1. 10YR5(黒褐色) 砂質土、やや粘質
2. 10YR5(暗褐色) やや細かい砂質土
3. 10YR5(灰黄褐色) 砂質土、やや粘質
4. 10YR5(黄褐色) シルト質砂質土、ブロック状に入る
5. 7.5YR5(黒色) 砂質土、粘質
6. 2.5YR5(赤褐色) 粘質土、焼土化
7. 2.5YR5(暗赤褐色) 粘質土、焼土を含む
8. 10YR5(灰白色) 粘質土
9. 10YR5(黄褐色) 砂質土
10. 10YR5(黒褐色) 砂質土、粘質

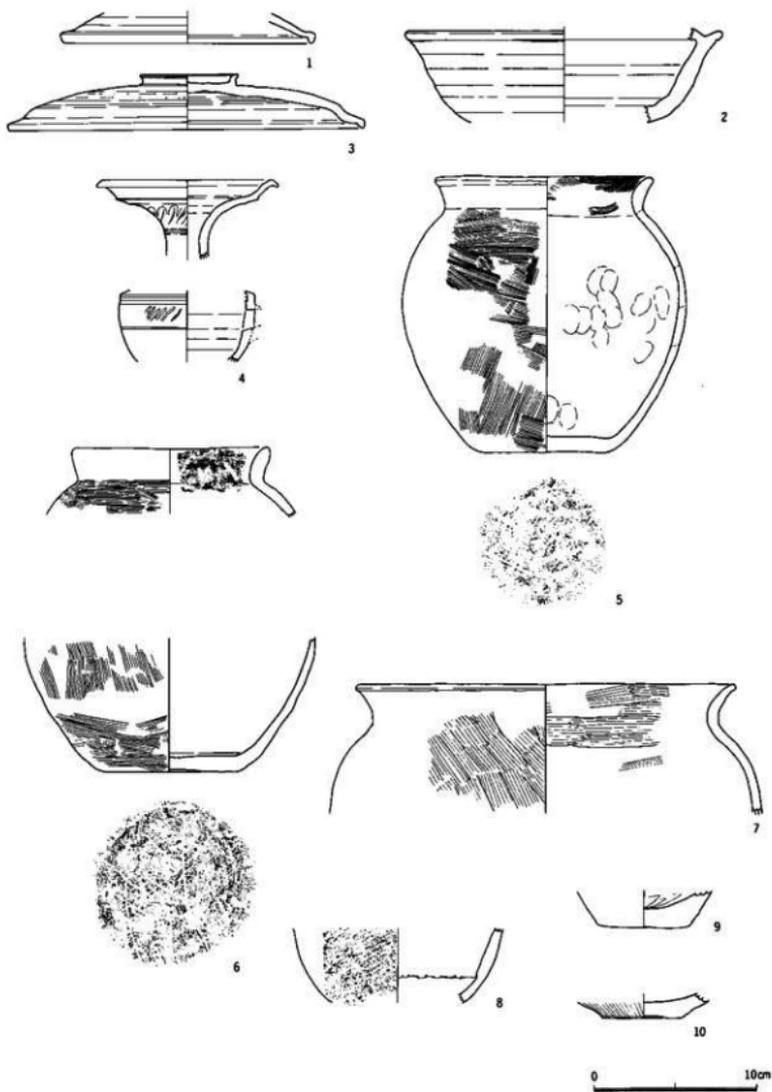


0 2 m

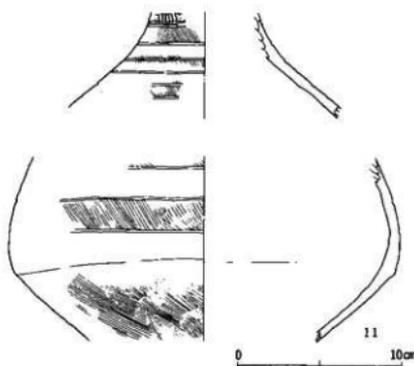
第78図 SB83・84遺構実測図



第79圖 SB 83・84遺物分布圖



第80图 SB 83出土遺物実測図1



第81図 SB83出土遺物実測図2

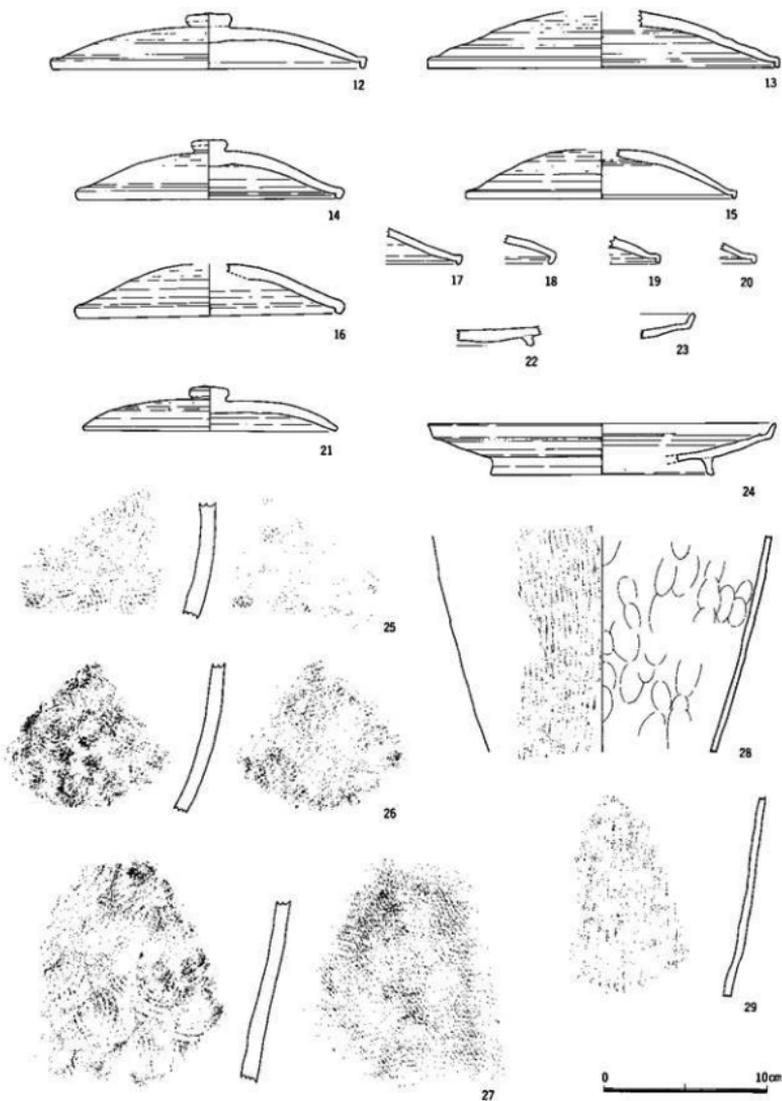
SB84 (第78・79図)

位置	Z17、18・AA17・18	平面形	方形	主軸方位	N-34°-E
規模 (cm)	366×396×22	面積	14.3m <sup>2</sup>	時期	8世紀末～9世紀初

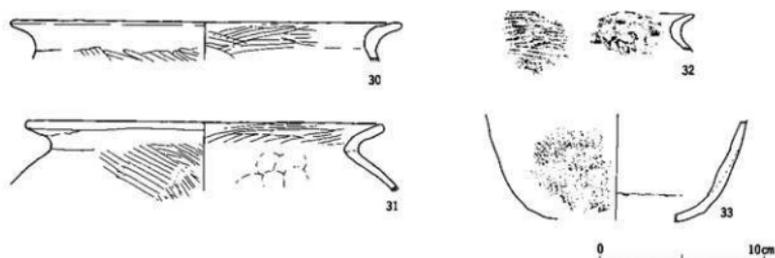
SB83南西コーナーを切り、北西コーナー部分に大きな攪乱である根痕が入る。西壁が東壁に対してやや短く、平面形態はやや歪んだ正方形を呈する。床面は、前述したとおり黄橙色土をたたきしめ構築している。カマドは消滅していたが、東壁の北側、SB83の床面上に僅かに不定形な焼化の痕跡が認められ、カマドが東壁に位置していたことがわかる。柱穴は、Pit 2が上部からの掘りこみであることを確認しており、SB83に付属するものと推定される。これにより、配置的には、Pit 1・3・5が柱穴に相当すると考えられ、攪乱部分にもう一基が存在したであろう。それぞれの深度は10～14 cmを測り、規模的にはほぼ同一である。なお、貯蔵穴は検出していない。

出土遺物 (第82・83図・第95図44)

切り合い関係をもつSB83からの出土遺物の混入も考えられるが、本住居土遺物数として60点ある。なお、遺物図版番号はSB83からの通番としてある。須恵器坏蓋(12～21)、須恵器有台坏(22)、須恵器盤(23・24)、須恵器甕(25～27)、土師器甕D類・G 2類(28～33)、石核(第95図44)を図示した。坏蓋の資料が多く揃うが、紐の小型化、口縁端部の折り返しの微弱化などの退化傾向が特徴的に認められる。土師器甕はD類が全体を占める。ハケ調整が粗く、口縁部の外反が短くなり口縁部内面のハケ調整を残すなどの製作技術の退化傾向がみられる。また、小型甕G 2類である33に相欠はぎ接合がみられるもののその接合部分がほぼ底部近くの下がっており、8世紀代にみられる特徴を示す。第95図は44は下呂石製の石核である。分割礫素材であり、自然面を打面として一面で剥片剥離作業を行っている。弥生期に属する資料で、混入である。須恵器坏蓋の多くが美濃須衛窯 IY-13～IY-1に比定され、8世紀末～9世紀初と考える。また、伴出する土師器甕D類もこれに矛盾しない。



第82图 SB 84出土遗物实测图 1



第83図 SB84出土遺物実測図2

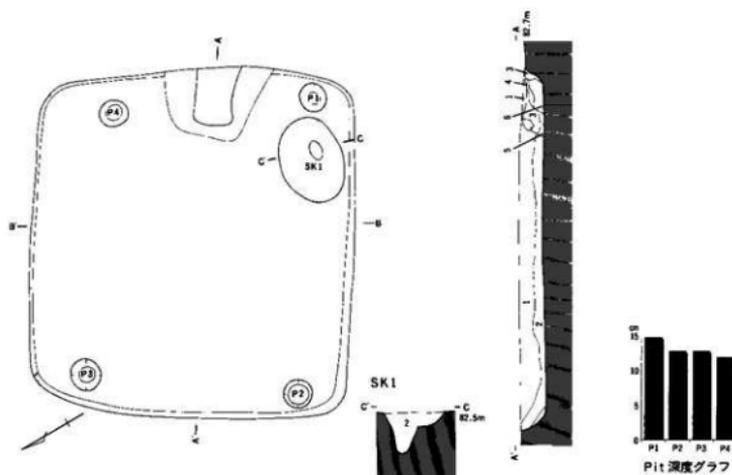
SB85 (第84図)

位置	BB 17・18	平面形	方形	主軸方位	S-59°-E
規模 (cm)	430×400×30	面積	17.2㎡	時期	6世紀後半

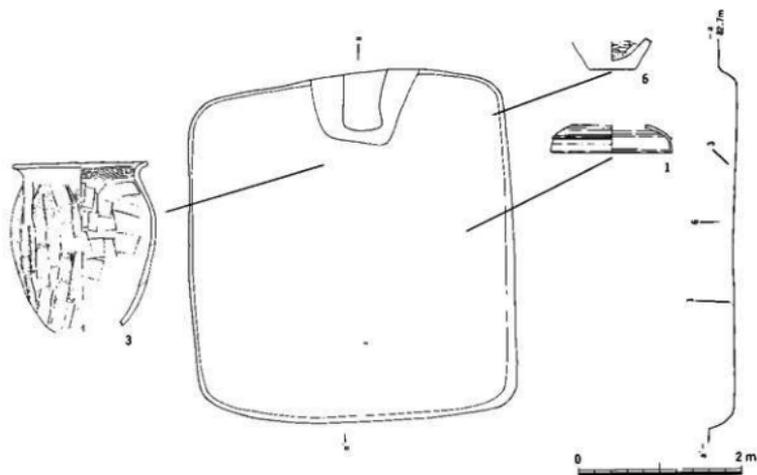
主軸方向をかなり南西にふる。遺存状態は非常に良好である。壁高は30cmを測り、浅黄橙色土をたたきしめた床面は全体に硬化面が認められ、安定している。硬化面は特にカマド前方部において顕著である。カマドは東壁やや南寄りに位置する。粘質な褐灰色土を用いて構築していたと考えられ、焚き口先端の天井部分には両袖間に“サバ石”（砂岩）が横位に橋渡しされ、焚き口補強材として機能していたものと考えられるが、検出時はかなり剥離していた。カマド天井部中央の覆土1層が堆積する箇所より4層及び6層の焼土、炭化物を多く含む砂質土が流入しており、煮沸具である甕の投入口が存在したと考えられる。燃焼部分底部には、焼土ブロックが堆積している。主柱穴は Pit 1～4 が相当する。深度も13～15cmを測りしっかりしている。貯蔵穴は南東コーナー部分にある SK 1で、104×80cm、深さ52cmの規模をもつ。その断面形態は床面より20cm下部で一度すり鉢状に底面を作り、その底面部やや南東よりもう一度先細りとなる土坑を掘りこむ二段式となるもので、特異な形状をもつ。

出土遺物 (第85図・第95図45・46)

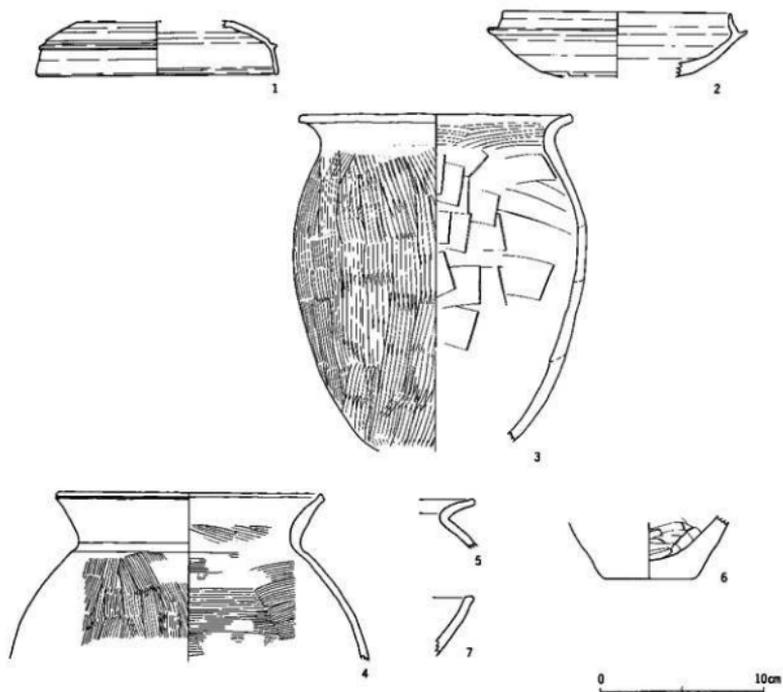
出土遺物数は32点である。須恵器坏蓋 (1)、須恵器有蓋高坏 (2)、土師器甕B類 (3)、土師器甕A類 (4)、土師器甕F類 (5)、土師器甕H類 (6)、土師器高坏 (7)、RF (第95図45)、石核 (第95図46) がある。1の坏蓋の後部は段により天井部と区切られるが、小規模である。口縁部は外に開き、端部は丸くおさめている。有蓋高坏は長脚の二段透かしとなるもので、住居からの検出例は注意をひく。土師器甕B類は口縁部内面にハケを残すが、ハケ後横ナデ施されており、精緻な作出でありB類とした。土師器甕A類は口縁端部を上方につまみ上げている。第95図45はチャート製の縦長剥片裏面左側縁に1～2mmの小剥離痕が連続しておりRFとした。第95図46は下呂石製の石核である。分割礫素材で自然面を打面とするが、剥離角が小さくなり目的とする剥片剥離作業が不可能となった残核と考える。2点の石器は混入である。坏蓋は (+) 期に比定され、6世紀後半と考える。土師器甕B類も僅かに口縁部調整に製作技術の省略化がみられ妥当と考える。



1. 10YR号(黒色) 砂質土、やや粘質
2. 10YR号(黒褐色) 細かい砂質土、1層とは漸移的
3. 7.5YR号(灰褐色) 粘質土、焼土を含む
4. 5YR号(にぶい橙色) 砂質土、焼土を含む
5. 7.5YR号(橙色) 焼土ブロック
6. 5YR号(にぶい橙色) 砂質土、焼土、炭化物を多く含む



第84図 SB 85遺構実測図・遺物分布図

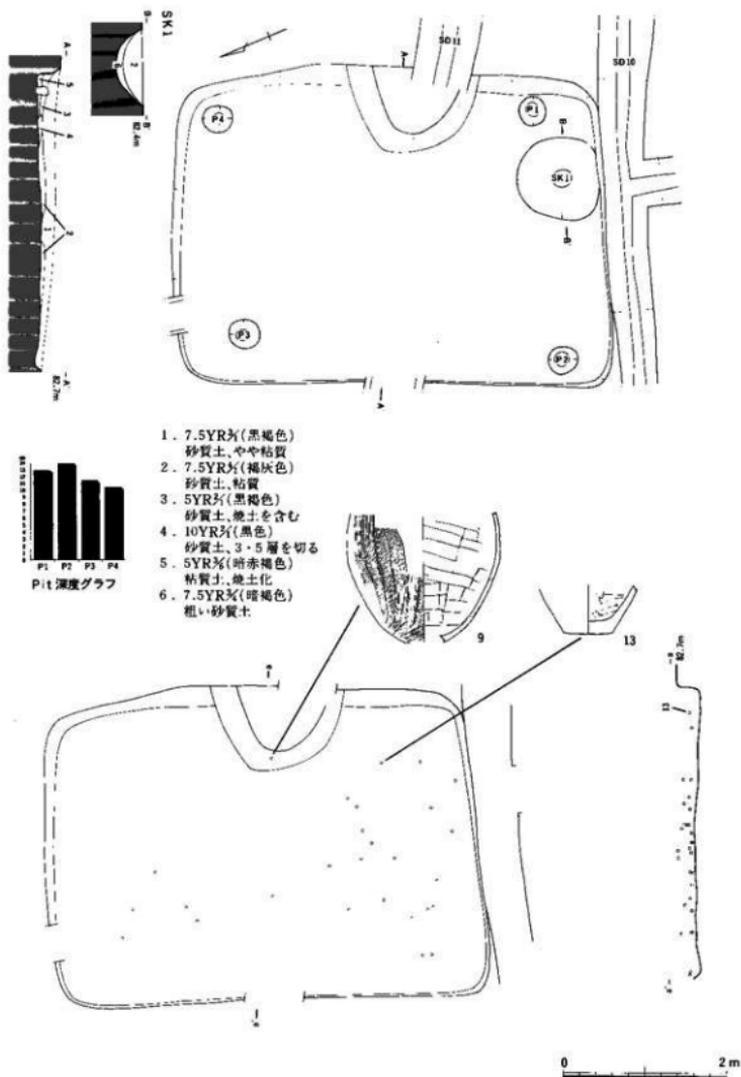


第85図 SB 85出土遺物実測図

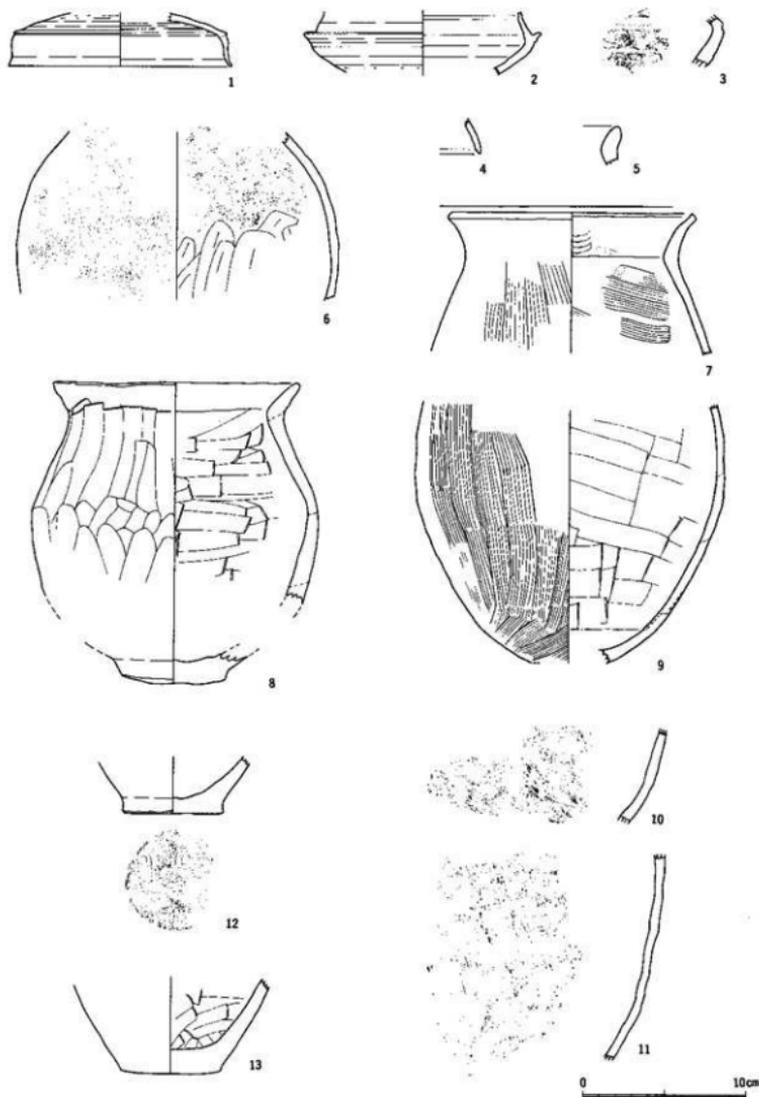
SB87 (第86図)

位置	Z 17・AA 17	平面形	長方形	主軸方位	S-67°-E
規模 (cm)	386×530×28	面積	20.4㎡	時期	6世紀前半

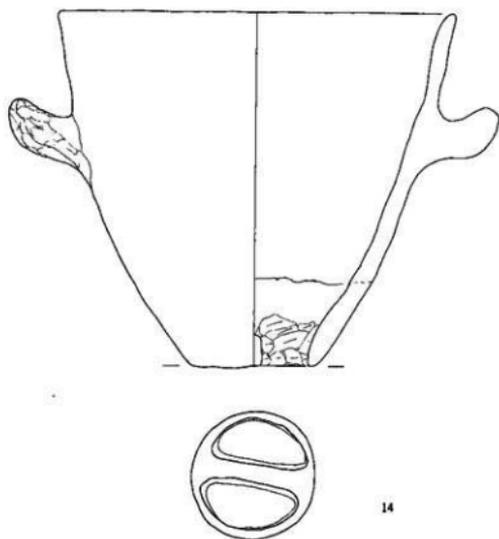
西壁はSD10と接し、SD3及びSD11に切られるが床面までには達していない。地山を掘りこみ浅黄橙色土をたたきしめ床面を構築しており、硬化面がほぼ全体に認められた。カマドは東壁やや南寄りに位置し、カマド上部をSD11により刮削され、また、押しつぶされた状況を呈しており残存状態は良くない。地山10cmほど掘りこみ縦長の河原石を石製支脚として埋め込み、周りを粘質な褐灰色土で固め燃焼部を構築している。褐灰色土上面はセクション図に見られるように焼土化(5層)しており、石製支脚の上半部は焼化の影響で折れ消失している。焚き口部手前に9の土師器甕胴部を潰れた状態で検出している。主柱穴はPit 1～4が相当し、四隅に配される。それぞれの深度は11～14cmを測る。Pit 1の西側に102×98、深さ32cmの規模をもつSK 1がある。この貯蔵穴は大きな径をもち、その断面形態は深いすり鉢状を呈している。



第86図 SB87遺構実測図・遺物分布図



第87图 SB 87出土文物实测图1



14



第88図 SB87出土遺物実測図2

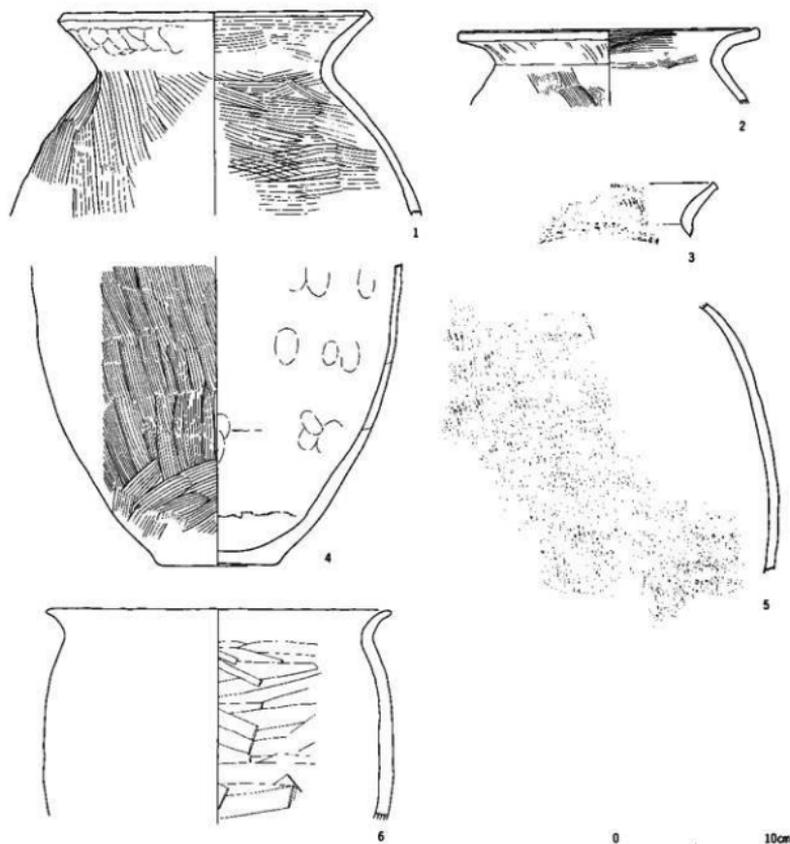
## 出土遺物 (第87・88図)

出土遺物数は33点である。須恵器坏蓋 (1・4)、須恵器坏身 (2)、須恵器礎 (3)、土師器甕F類 (5)、土師器甕A類 (6・7)、土師器甕E類 (8)、土師器甕H類 (12・13)、土師器甕B類 (9～11)、土師器甕 (14) がある。坏蓋1は後部が段により天井部と境をなす。坏身2は受部が底部との間で段により境をなし、口縁部が内傾して立ち上がっている。カマド内より検出した土師器甕B類9は相欠はぎ接合部分が認められ、底部はおそらく平底aをもつものであろう。土師器甕E、H類としたものは外面がナデ都政で底部が突出したような平底bをもつ。覆土下層より検出している。須恵器坏蓋、坏身も尾張2～3型式に比定され6世紀前半に帰属すると考えられ、カマド内出土土師器甕B類が伴うことに矛盾はない。

## SB88 (第90図)

位置	AA 14・15	平面形	方形	主軸方位	N-83°-E
規模 (cm)	592×592×18	面積	35.2m <sup>2</sup>	時期	6世紀後半

面積的には大型の住居であり主軸方向をかなり南西にふる。床面は浅黄色土をたたきしめ構築するが、西側部分で硬化面が認められた。カマドは東壁南寄りに位置する。両袖部を残すが、左袖部北側にカマド構築土と同様な粘質な褐灰色土で床面レベルより10cm程高いテラス部分を構築している。左袖部先端には補強材としての河原石が表出している。燃焼部内には河原石が焼化により破損しており、

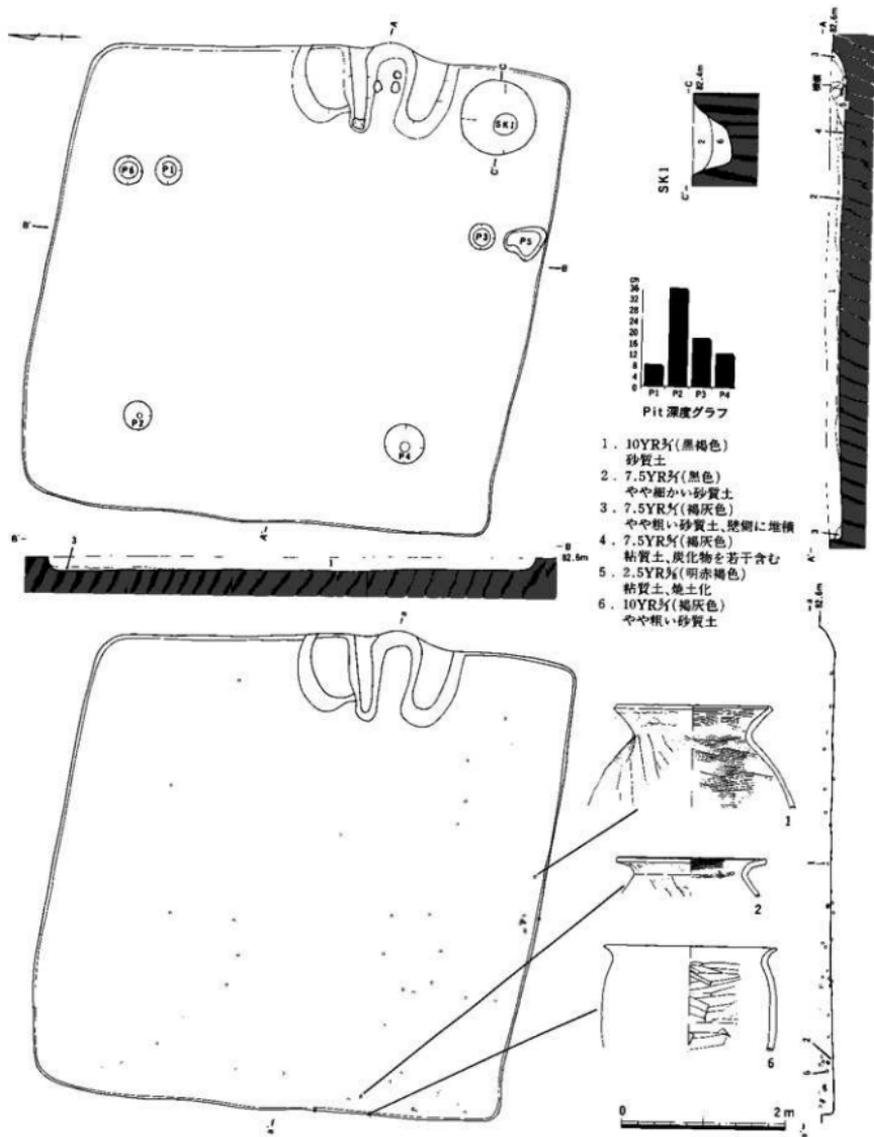


第89図 SB 88出土遺物実測図

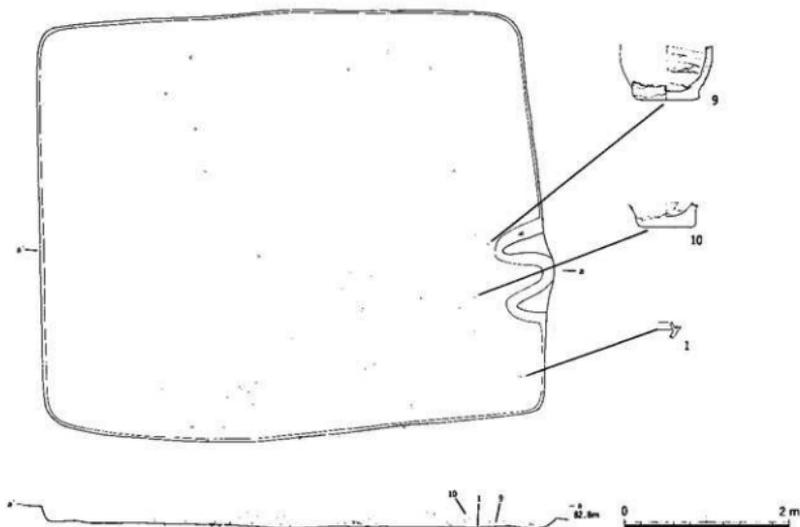
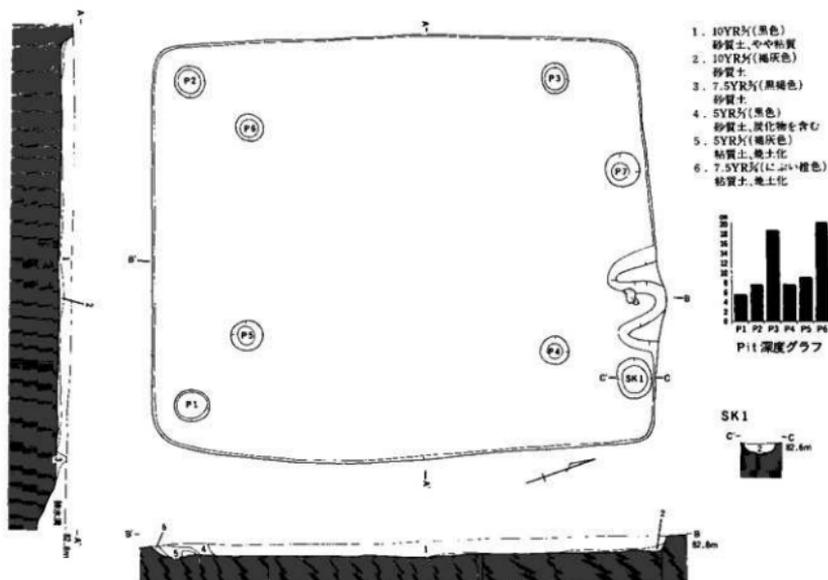
最奥部のものは地山を数cm掘りこみ縦位に立脚しており石製支脚と考えられる。石製支脚を覆い焼土化した粘質土が堆積しており、天井部の倒壊が想定される。Pitは6基検出しているが、配置的にはPit 1～4が主柱穴を構成すると考えられる。深度は8～36cmとバラツキが大きい。南東コーナー部分に90×90cm、深さ50cmの規模をもつSK 1があり、貯蔵穴に相当する。

#### 出土遺物（第89図）

出土遺物数は59点である。土師器甕A類（1）、土師器甕B類（2～5）、土師器甕E類（6）を図示した。土師器甕A類はくの字に外反する口縁部が長くのび、端部を明瞭につまみ上げている。B類とした3点は、口縁部内面のハケを横ナデにより完全に消去していない。5はカマド内出土である。

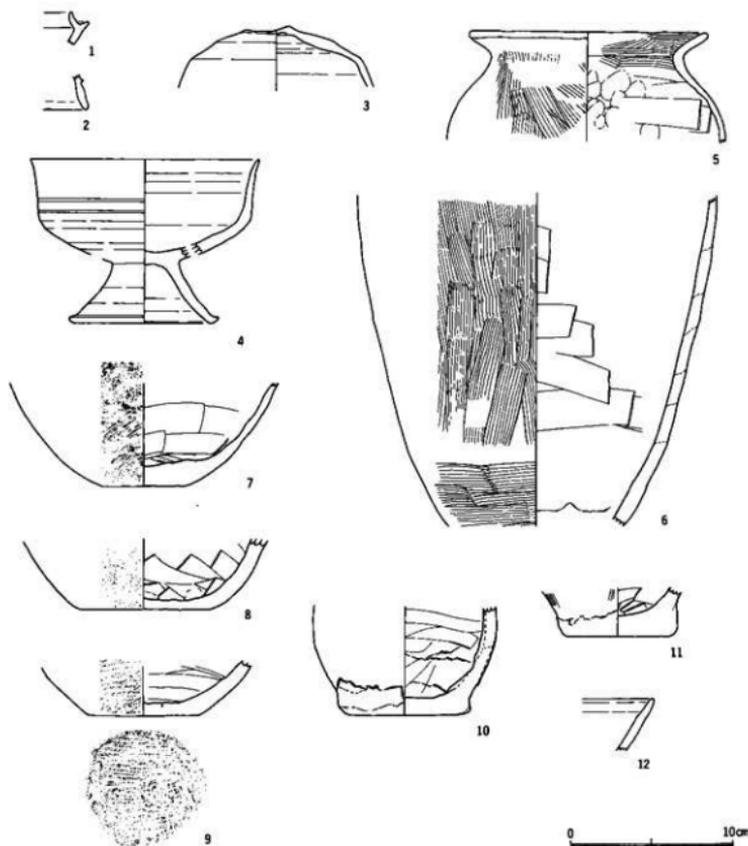


第90図 SB88遺構実測図・遺物分布図



第91図 SB89遺構実測図・遺物分布図

6は胴部外面ナアが施されており甕E類とした。甕B類は調整方法にやや省略化が認められ、また、甕A類の特徴より6世紀後半と考える。

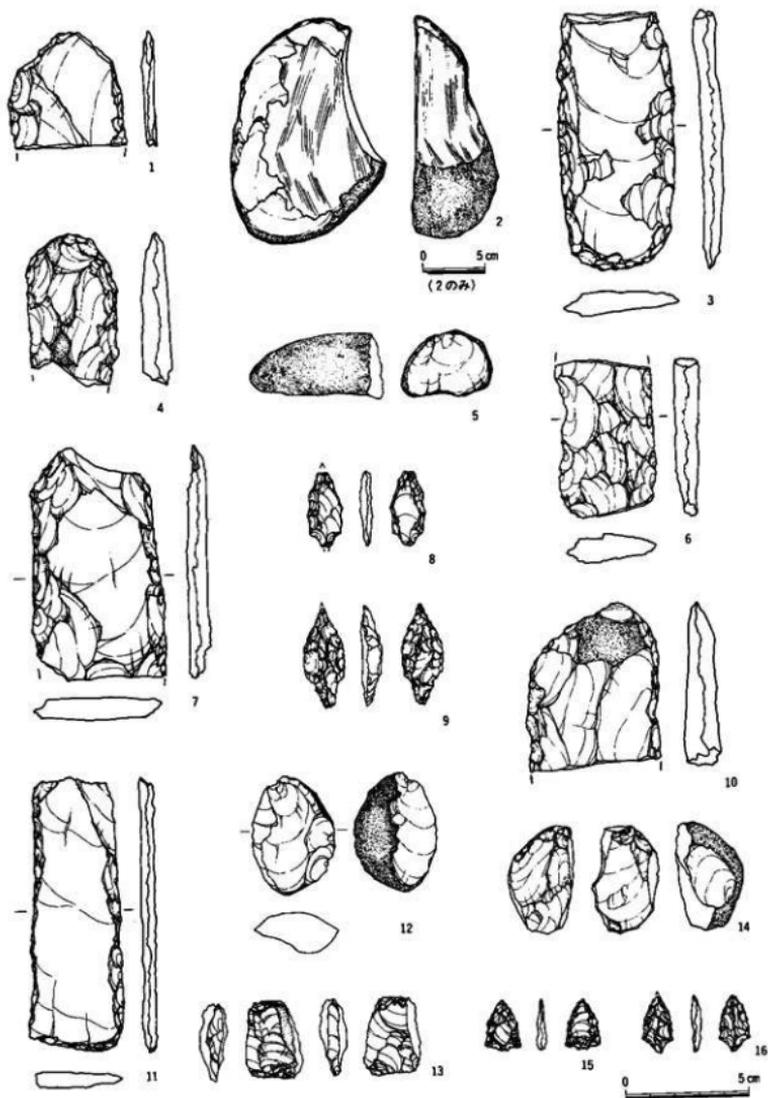


第92図 SB89出土遺物実測図

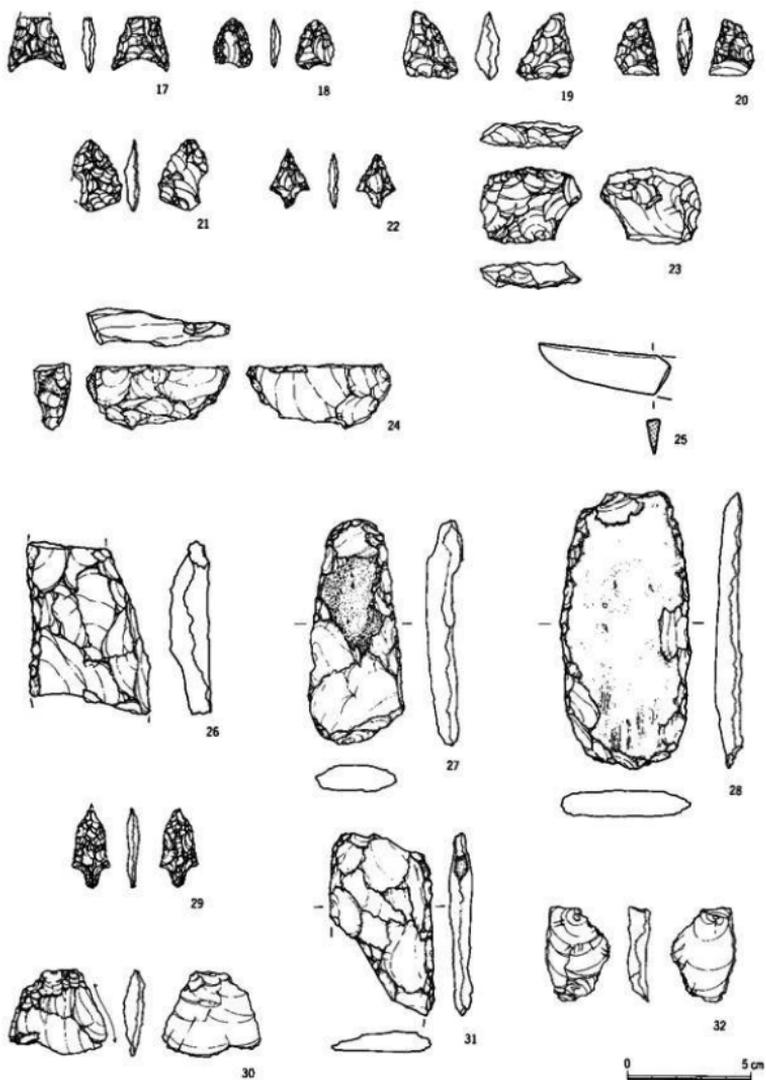
SB89 (第91図)

位置	BB 14、15・620	平面形	長方形	主軸方位	N-12°-E
規模 (cm)	620×524×16	面積	33.9m <sup>2</sup>	時期	7世紀末

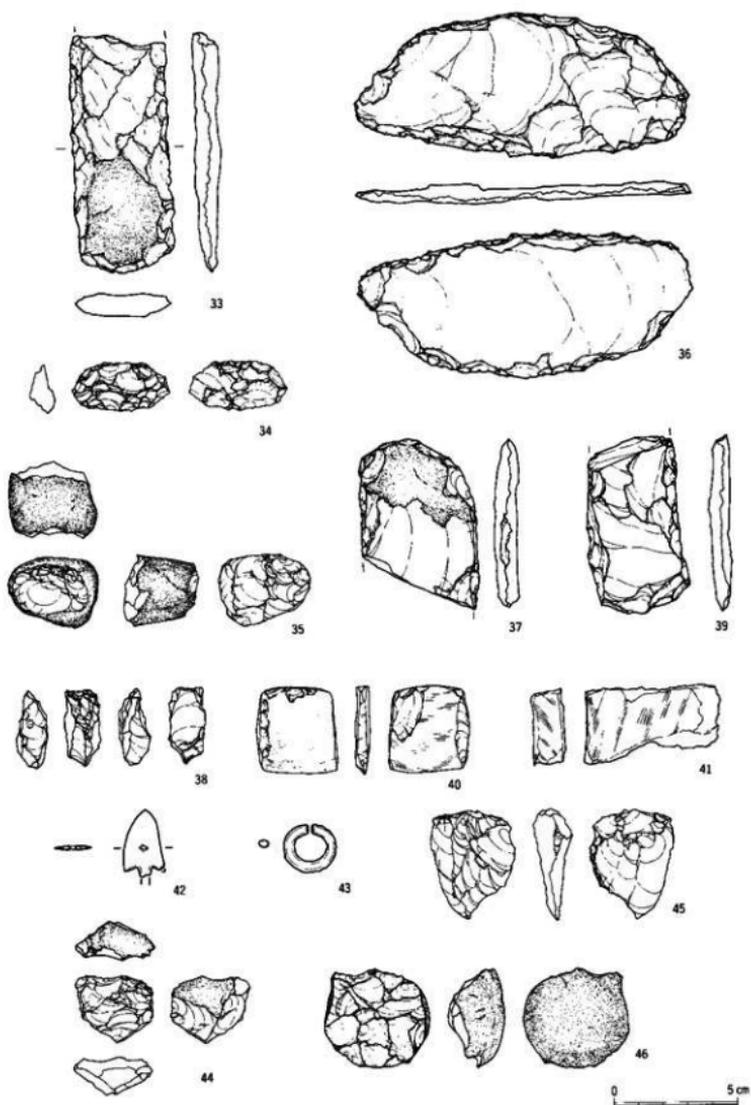
SB88同様大型の住居であるが主軸方向を違える。床面はやはり浅黄橙色土をたたきしめ構築しており、カマド周辺部において硬化面が認められた。東壁沿いに攪乱はいはいるが、壁高は10cmと僅かに残る。カマドは北壁やや東寄りに位置する。然焼部前方左袖部寄りに石製支脚であったと考えられる河



第93図 SB出土遺物(石器)実測図1



第94图 SB出土遺物(石器・鉄器)実測図2

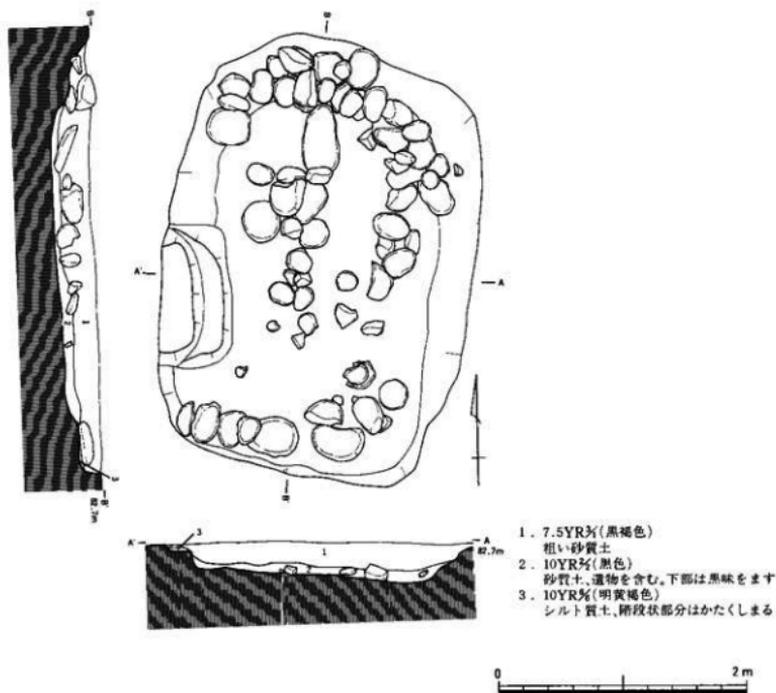


第95图 SB出土遺物(石器・鉄器)実測図3

原石が検出されているが原位置をとどめていない。この支脚を覆うようにカマド構築土である粘質な褐色土が堆積しており、よく焼化している。Pitは7基検出している。深度はバラツキがあり、配置的にも支柱穴の判断は難しい。右袖部東側に貯蔵穴のSK1がある。40×50cm、深さ10cmの規模をもち断面形態は浅い壘上を呈する。

#### 出土遺物 (第92図)

出土遺物数は57点である。須恵器坏身(1)、須恵器坏蓋(2・3)、須恵器短脚高坏(4)、土師器甕G1類(5)、土師器甕C類(5~9)、土師器甕E類(10)、土師器複合口縁壺?(11)、土師器高坏(12)を図示した。土師器坏身の受部は斜め上方に突き出し、口縁部は短く内傾する。須恵器坏蓋、高坏は時期の遡るもので混入と考える。土師器甕はC類が多く、やや長胴化の傾向が窺われ、8は底部外面にも粗いハケが施される。土師器甕Eとした9は器形は他の甕と似るが、外面がナデ調整である。1の坏身は美濃9~10型式に比定され、7世紀末と考えられ、土師器甕C類が主体的に伴う。



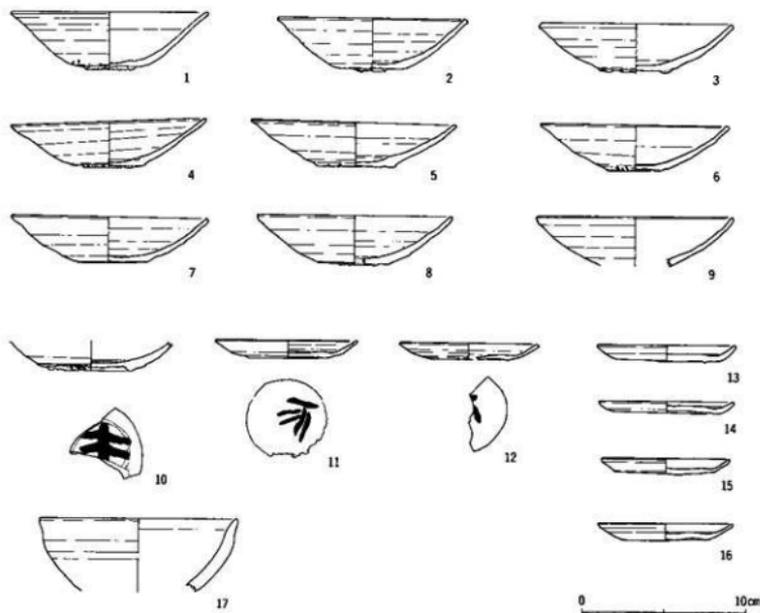
第96図 S2 遺構実測図

#### 4 土壙墓・配石墓

##### SZ2 (第96図)

位置	BB 18・CC 18	規模 (cm)	370×250×34	長軸方位	N-11°-E
----	-------------	---------	------------	------	---------

平面形態は楕円形を呈し、長軸方向を北に向ける。内部周辺に一段浅い面を設け粘質な明黄褐色土をたたきしめ硬化面を形成し、その上に河原石をめぐらしていたものと考えられる。西壁や南寄りには同じ明黄褐色土により2段からなる段階状施設を設けている。底部部分も明黄褐色土でたたきしめられた硬化面が広がっており、本来はSZ3に見られるような河原石を積み上げた石室が存在したと考えられるが、平面図で示したものが検出時の状態である。ただし、後述する同様な形態をもつと考えられるSZ3・8と伴に他の機能を考える必要があると考えられるが、現場での取上げ遺構種別のままとしておく。

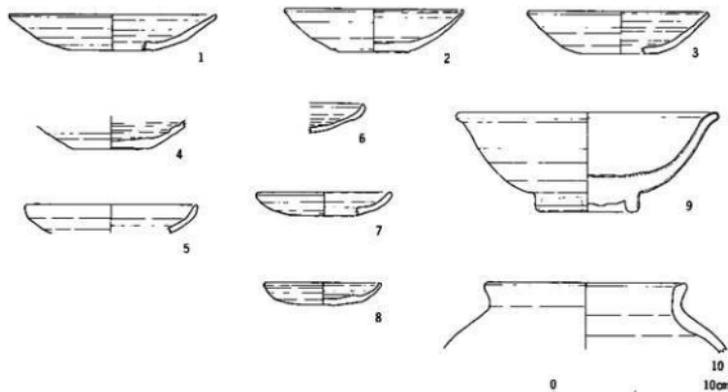


第97図 SZ2出土遺物実測図

##### 出土遺物 (第97図)

1～10は均質手山茶碗、11～16は均質手小皿である。時期的には10型式～11型式前半に属するものが主体を占める。比較的高台はしっかり付けられているが、7は高台が貼付されず、棒状工具により底部外面周縁を円形に凹ませている。10の底部外面には墨書がみられる。小皿は扁平なものが多く、底部外面周縁がわずかに凹んでいる。11・12の底部外面にも墨書がみられるが、10と同様文字か記号

かの判別ができない。17は古瀬戸の天目茶碗で、器壁が厚く口縁部が尖る。



第99図 SZ3出土遺物実測図

SZ3 (第98図)

位置	BB 17	規模 (cm)	450×300×49	長軸方位	S-77°-E
----	-------	---------	------------	------	---------

平面形態は不正な楕円形を呈し、長軸方向を東に向けSZ2とはほぼ90°異なる。内部周辺に一段浅い面を設けるが東側側が幅広く底部部分に向かって緩やかに傾斜している。検出状況は平面図(1)であり、倒壊したと考えられる河原石を取り除いた状態が平面図(2)である。東側部分に3段の河原石積み上げによる壁を作出し、西側に向かって3列・3～4段の側壁を延ばし2つの石室を設けている。石室については南側が若干幅広い。底部西側部分は急斜な壁に接し配石は無かったものと考えられる。河原石間には構築材にあたるような粘質土は認められなかった。また、倒壊していた河原石の状況から本来はもう1～2段積み上げられていたと思われる。

出土遺物(第99図・第115図1～3)

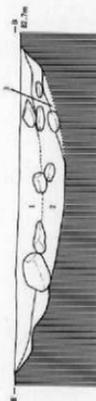
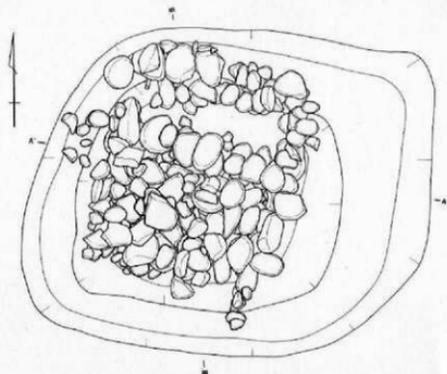
1～6は均質手山茶碗、7・8は均質手小皿であり、いずれも11型式に比定できる。9は青磁端反碗である。底部の器壁は厚く体部は丸みを帯びて立ち上がり、口縁部は外反して端部を丸く収めている。削り出し高台の外側面はほぼ直立し、内面は外傾している。軸線は約1mmの厚さで高台内面を除き施され、高台接地面は拭いとられている。10は古瀬戸の甕である。全面に錆軸が施されている。第115図1は砂岩製の敲石である。長軸方向両端にアバタ状の使用痕がみられる。第115図2は砂岩製の置き砥石と考えられるが、被熱による剥離により全形をとどめていない。第115図3刃ホルンフェルス製の打製石斧であり、刃物を欠損している。

SZ4 (第100図)

位置	EE 17	規模 (cm)	200×180×20	長軸方位	N-11°-E
----	-------	---------	------------	------	---------

平面形態は不整な円形を呈し、長軸方向を北に向ける。壁の立ち上がりは緩やかであり、断面形態

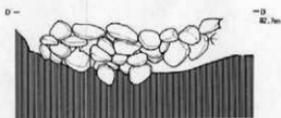
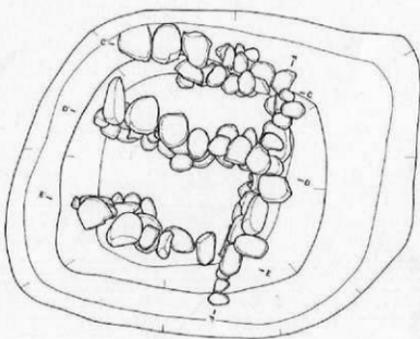
平面图 (1)

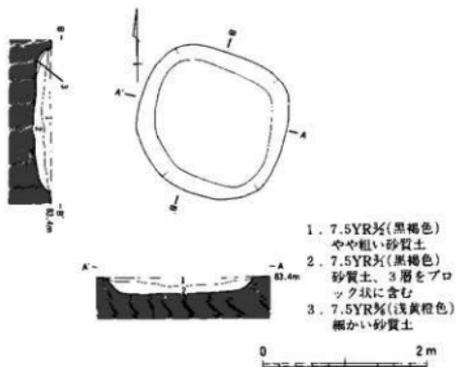


1. 7.5YR7(黑褐色)粗い砂質土
2. 7.5YR7(黑褐色)砂質土、遺物を含む
3. 7.5YR7(黒色) 砂質土、やや粘質、堆積は薄い



平面图 (2)



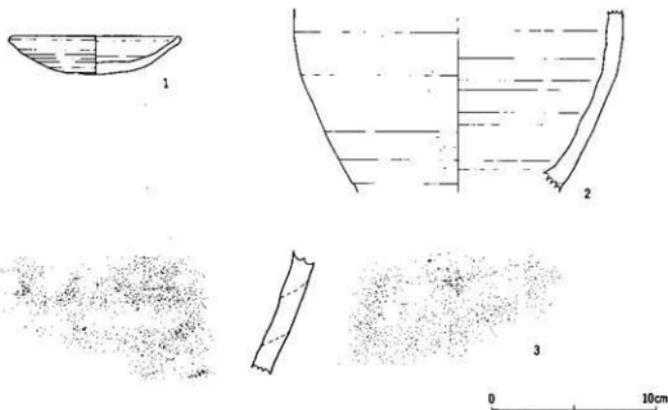


第100図 SZ 4 遺構実測図

は浅い丸底を呈する。覆土は2層に分かれ、遺物は下層より出土している。

出土遺物 (第101図)

1～6は均質手山茶碗であり、11型式に比定できる。2は古瀬戸の壺類と考えられる。体部外面に下方に回転ヘラケズリが施される。3は常滑の甕で、外面にヘラ状工具による掻き上げ痕を残す。

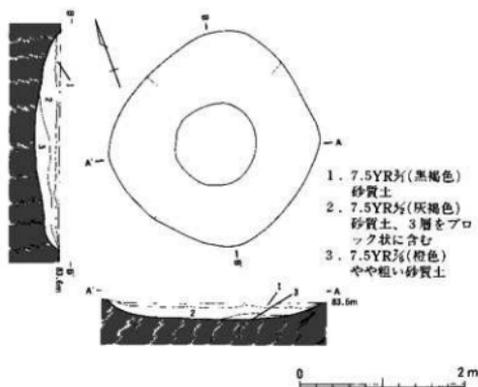


第101図 SZ 4 出土遺物実測図

S25 (第102図)

位置	FF 17・CC 17	規模 (cm)	260×240×30	長軸方位	N-56°-E
----	-------------	---------	------------	------	---------

平面形態は不整な円形を呈する。壁の立ち上がりは緩やかであり、断面形態は浅い丸底を呈する。覆土は3層に分かれ、遺物の出土は無い。

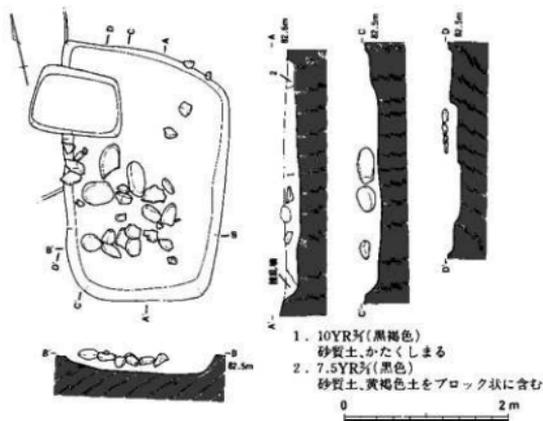


第102図 SZ5遺構実測図

SZ6 (第103図)

位置	Z 20	規模 (cm)	350×190×24	長軸方位	N-76°-E
----	------	---------	------------	------	---------

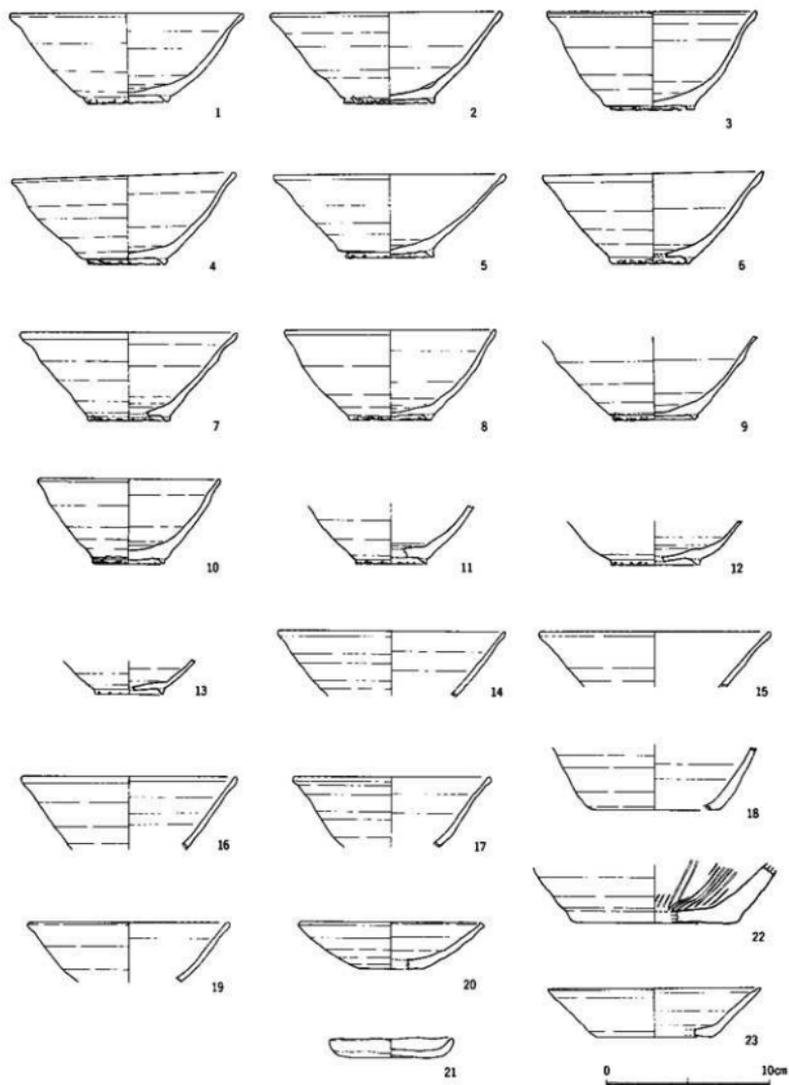
SB33を切る。北西コーナー部分がやや突出し平面形態は方形を呈する。断面形態は平底を呈し西壁側に攪乱坑が入る。底面よりやや浮いた状態で河原石が散在しており本来の配置位置は推定し難いが本遺構に伴うものと考えられる。覆土は硬くしまった黒褐色土が堆積しており、底面直上より遺物を検出している。



第103図 SZ6遺構実測図

出土遺物 (第104図)

1～20は均質手山茶碗である。時期的には7～11型式の遺物が見られるが、7～8型式のものが大半を占める。2は底部内面と体部内面と体部内面の境界付近に長さ2.8cmにわたり指により大きく挟



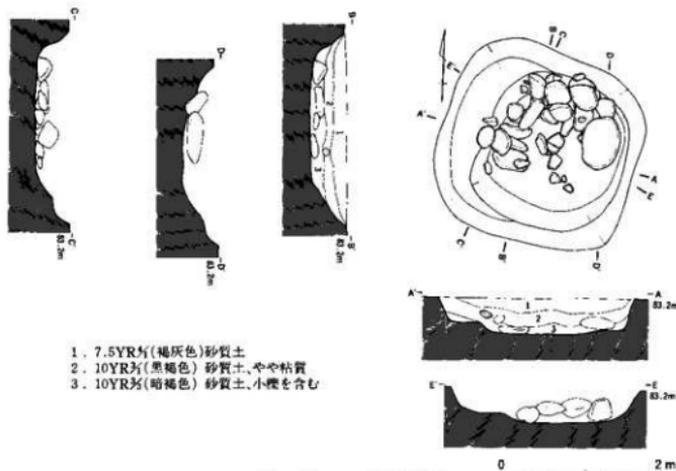
第104图 S26出土物实测图

まれている。10はいわゆる小型の碗である。全体的に二次的な煤が付着しているものが多い。21は土師器皿である。平面形は正円に近いものの若干歪んでおり、体部外面に横ナデが施されている。また、底部外面周縁から口縁部外面にかけて切り込み円盤技法の痕跡と考えられる粘土接合痕がみられる。22は古瀬戸播鉢である。底部外面の回転糸切り痕は未調整で、体部内外部とも回転ナデ調整が、全面に銷軸が施される。23はロク土師器皿である。底部外面に回転糸切り痕が、口縁部は内面にやや強いナデが施され極端は丸くおさまられる。底部と体部の境は明瞭であり、体部内外側にはハケ状工具による回転ナデが施される。

#### SZ7 (第105図)

位置	DD 22	規模 (cm)	290×230×44	長軸方位	S-75°-E
----	-------	---------	------------	------	---------

平面形態は隅丸の方形を呈する。断面形態は2段に掘りこまれており、西壁側に浅くやや傾斜するテラス部分をもつ。下段部底面は丸底で、倒壊した状況を呈する河原石が存在し、本来は組まれているものと考えられる。覆土は3層に区分できるが、2・3層より遺物を検出している。



第105図 SZ7 遺構実測図

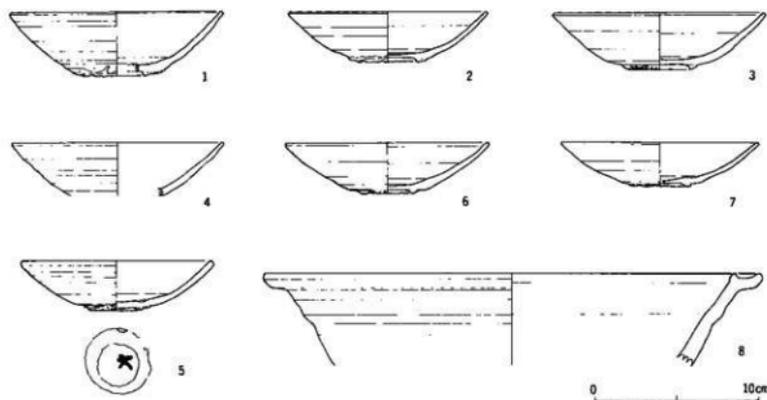
#### 出土遺物 (第106図・第115図4)

1～7は均質山手茶碗であり、いずれも10型式に比定される。5の底部外面には「大」の字の墨書がみられる。8は荒肌手の片口鉢である。体部外面のロクロ目を顕著に残し、口縁部は外折し上面に小突起をもつ。第115図4は下呂石製の石鉢であり、茎部をもつ。

#### SZ8 (第108図)

位置	DD 19	規模 (cm)	350×280×20	長軸方位	N-105°-E
----	-------	---------	------------	------	----------

平面形態は隅丸の方形を呈し、断面は浅い丸底となる。壁は緩やかに立ち上がるが、東壁側立ち上



第106図 SZ7 出土遺物実測図

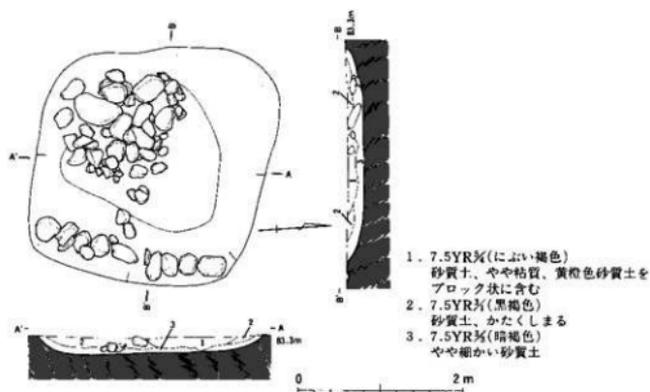


第107図 SZ8 出土遺物実測図

がり部分に1列の河原位列をもつ。底面南西側に倒壊した状況を呈する河原石の一群を検出している。覆土は3層に区分できるが1層中より磨製石包丁を検出している。

#### 出土遺物 (第107図、115図5)

1は均質手山茶碗であり、11型式に比定される。2は古瀬戸の緑釉小皿であり、底部内面に黒色特有有機物がしみ込み平滑である。磨製石包丁は粘板岩製で、刃部やや内側でわずかに光沢痕を確認している。



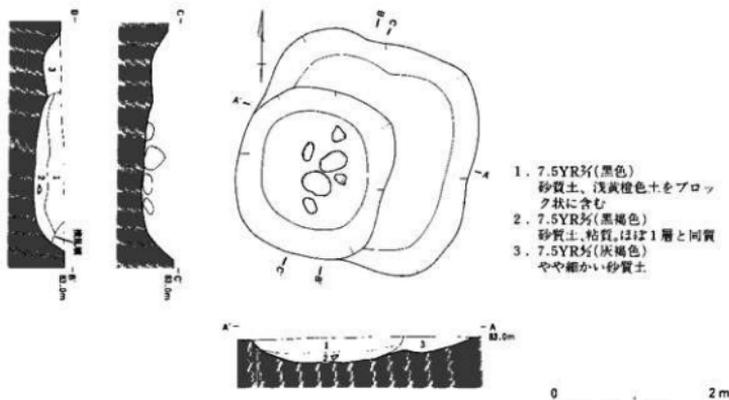
第108図 SZ8 遺構実測図

1. 7.5YR $\frac{5}{1}$ (にじみ褐色) 砂質土、やや粘質、黄褐色砂質土をブロック状に含む
2. 7.5YR $\frac{5}{1}$ (黒褐色) 砂質土、かたくしまる
3. 7.5YR $\frac{5}{1}$ (暗褐色) やや細かい砂質土

SZ9 (第109図)

位置	BB 20	規模 (cm)	220×180×36	長軸方位	N-5°-E
----	-------	---------	------------	------	--------

土坑 (SK10) を切って構築している。平面形態は、円形、断面形態は浅い丸底を呈する。底面直上には河原石が散在している。覆土は2層に区分でき、下層より遺物が出土している。



第109図 SZ9 遺構実測図

出土遺物 (第110図)

1 は須恵器坏口縁部で混入である。2 は均質手山茶碗、3 は均質手皿である。均質手山茶碗は9～10型式に比定できる。



第110図 SZ9 出土遺物実測図

SZ10 (第111図)

位置	CC 21・DD 21	規模 (cm)	330×250×24	長軸方位	N-36°-E
----	-------------	---------	------------	------	---------

中央部分を南北にSD14に切られる。平面形態は楕円形を呈し、断面形態は壁が緩やかに傾斜するすり鉢状で浅い丸底をもつ。覆土は灰褐色土が充填しており、底面直上より遺物を検出している。

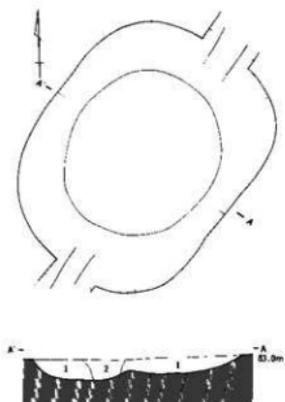
出土遺物 (第111図)

1 は均質手の片口鉢である。内外面とも外傾する高台をもち、高台端部は丸く仕上げられる。体部外面下方か回転ヘラケズリが施されている。2 は均質手小皿である。



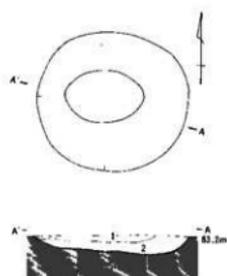
第111図 SZ10出土遺物実測図

SZ10



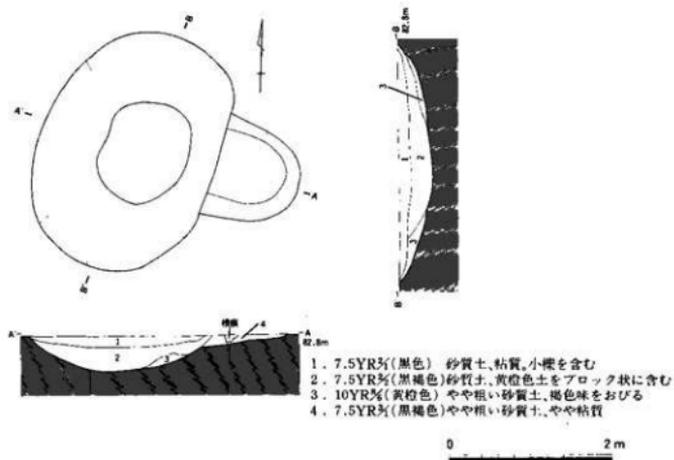
1. 7.5YR5(灰褐色)やや粗い砂質土、やや粘質  
浅黄褐色土をブロック状に含む
2. 7.5YR5(黒褐色)砂質土、SD覆土

SZ12



1. 7.5YR5(黒色) 砂質土、やや粘質
2. 7.5YR5(黒褐色)やや細かい砂質土、粘質

SZ11



1. 7.5YR5(黒色) 砂質土、粘質、小椀を含む
2. 7.5YR5(黒褐色)砂質土、黄褐色土をブロック状に含む
3. 10YR5(黄褐色) やや粗い砂質土、褐色味をおびる
4. 7.5YR5(黒褐色)やや粗い砂質土、やや粘質

第112図 SZ10・SZ11・SZ12遺構実測図

## SZ11 (第112図)

位置	AA 19	規模 (cm)	300×220×22	長軸方位	N-23°-E
----	-------	---------	------------	------	---------

土坑 (SK 4) を切って構築している。平面形態は楕円形を呈する。断面形態は深い丸底となる。覆土は3層に区分でき、2層中より遺物を検出している。

## 出土遺物 (第113図)

1は土師器甕D類で混入である。2は古瀬戸双耳小壺である。底部外面には回転糸切り痕を残す。底部外面周辺を除き鉄軸が施される。3均質手山茶碗、4は均質手小皿である。小皿の底部外面には墨書がみられるが、文字か記号か判別はできない。



第113図 SZ11出土遺物実測図

## SZ12 (第112図)

位置	BB 19	規模 (cm)	190×170×24	長軸方位	N-69°-W
----	-------	---------	------------	------	---------

平面形態は円形を呈する。断面形態は浅い丸底となる。覆土は2層に区分でき、下層より遺物を検出している。

## 出土遺物 (第114図)

1、2とも均質手山茶碗であり、1は10型式、2は11型式に比定できる。



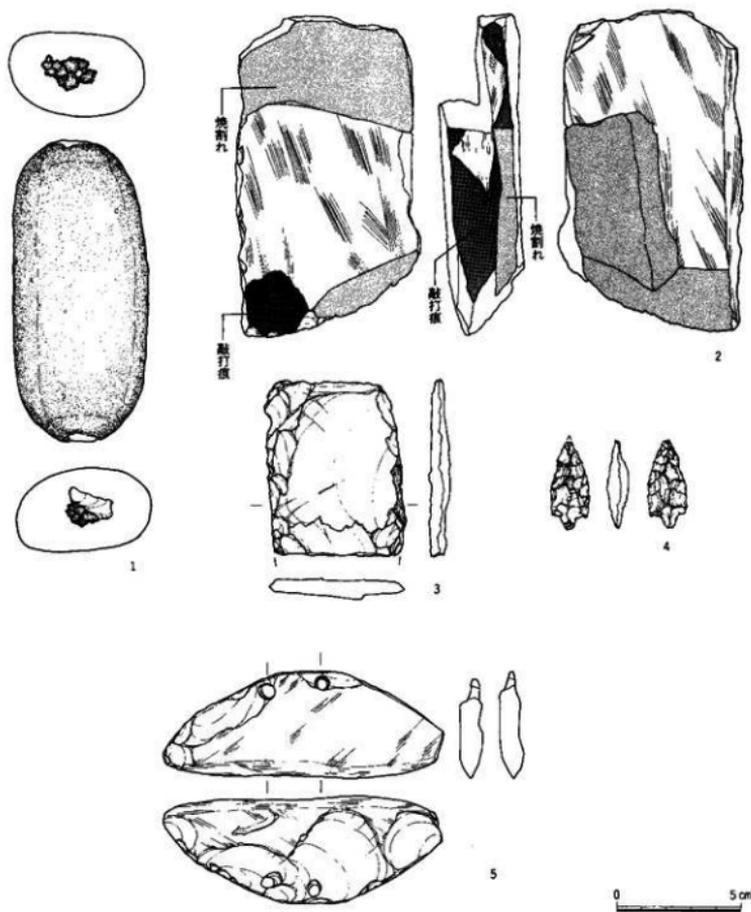
第114図 SZ12出土遺物実測図

## 5 不明遺構

## SX2 (第116図)

位置	HH 13-14	規模 (cm)	500×320×24	長軸方位	N-24°-E
----	----------	---------	------------	------	---------

平面形態は南壁がやや短いため歪んだ方形を呈する。壁の立ち上がりは緩やかに立ち上がるが、底面は平均したレベルをもつ。ただし、床面上においては柱穴などは存在しない。覆土中には大きく攪乱が入るが、2層に区分でき下層は強い粘質土である。

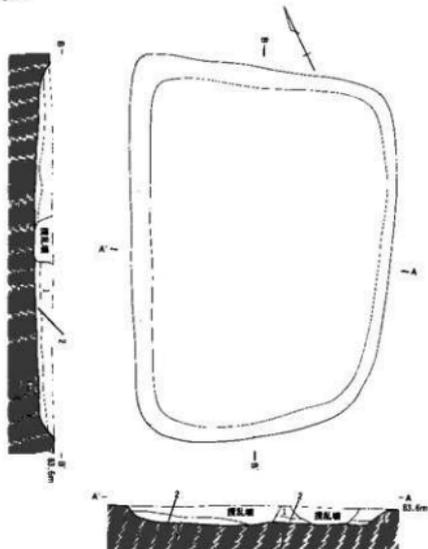


第115図 S2出土遺物(石器)実測図

出土遺物 (第119図)

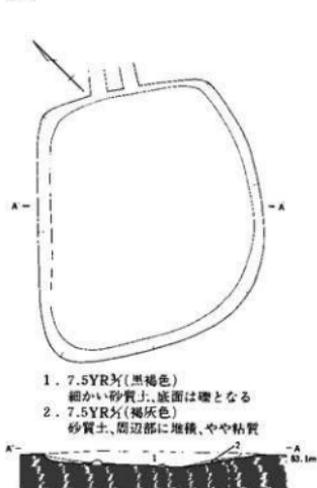
1は須恵器坏蓋、2は底形が小さく体部の立ち上がりから陶器合子とした。合子の器壁は体部に比較して極端に薄く、底部外面には回転糸切り痕等の調整は認められない。ともに1層より検出しており混入と考えられ、遺構の帰属時期は不明である。

SX2



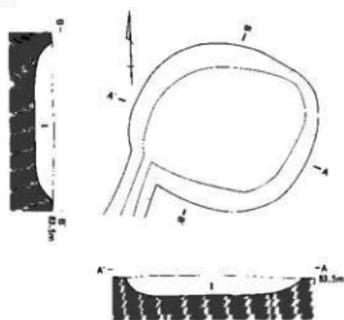
1. 7.5YR5(黒褐色)  
砂質土、黄褐色土がブロック状に入る
2. 7.5YR5(黒褐色)  
やや粗い砂質土、粘質

SX4



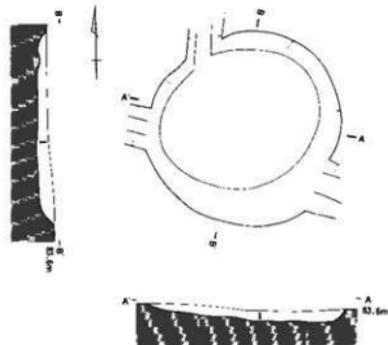
1. 7.5YR5(黒褐色)  
細かい砂質土、底面は礫となる
2. 7.5YR5(黒褐色)  
砂質土、周辺部に堆積、やや粘質

SX3



1. 7.5YR5(黒褐色)  
砂質土、粘質。浅黄褐色土をブロック状  
に含む

SX6



1. 7.5YR5(黒褐色)  
砂質土、粘質。浅黄褐色土をブロック状  
に含む

0 2m

第116図 SX2・SX3・SX4・SX6 遺構実測図

## SX3 (第116図)

位置	EE 16・FF 16	規模 (cm)	220×210×24	長軸方位	N-117°-E
----	-------------	---------	------------	------	----------

南壁側でSD 8とつながる。平面形態は円形を、断面形態を浅いすり鉢状を呈する。覆土は粘質をもつ黒褐色土が充填している。

## SX4 (第116図)

位置	DD 14・15	規模 (cm)	380×270×14	長軸方位	N-31°-E
----	----------	---------	------------	------	---------

北壁側でSD 1と繋がる。平面形態は歪んだ方形を呈する。断面形態は非常に浅いすり鉢状を呈し、底面は地山に含まれる礫が表出している。覆土は2階に区分したが、周辺部に薄く残存する褐色土が底面にも存在した可能性が考えられる。

## 出土遺物 (第119図3～5)

3は須恵器無台坏、4は須恵器壺?、5は均質手山茶碗である。4の底部外面にはへら記号がみられる。

## SX5 (第117図)

位置	BB・CC 16	規模 (cm)	560×460×80	長軸方位	N-15°-W
----	----------	---------	------------	------	---------

東壁側をSD 2に切られ、中央部分を南北にSD 3が通る。平面形態は楕円形を呈し、断面形態は深いすり鉢を呈するが、規模が他と比較すると非常に大きな構造をもつ。底部北側より河原石を積み上げた壁(長さ120cm、高さ18cm)が存在する。この壁は底面は緩い傾斜に沿うが高さは同一レベルを保つ。覆土は3層に区分でき、最下層より中世に帰属する遺物を検出している。

## 出土遺物 (第119図6～18・第120図1)

6は須恵器有台坏であり混入である。7は古瀬戸有耳壺である。体部外面に5条1単位の平行沈線が1段にわたり施され、その間に数条の平行沈線をもつ耳が貼付されている。8～13は均質手山茶碗である。9・10の内面には明瞭にコテナデが残る。14は古瀬戸軸皿、15は古瀬戸水注?、16は古瀬戸直縁大皿、17は古瀬戸目付大皿、18は古瀬戸大皿類である。古瀬戸緑軸皿の底部内面には黒色有機物と朱色の有機物と朱色の有機物がしみ込み非常に平滑であるため転用碗の可能性が考えられる。第120図1は砂岩製の持ち砥石である。表面及び側面に砥面がみられるが被熱により剥離している。

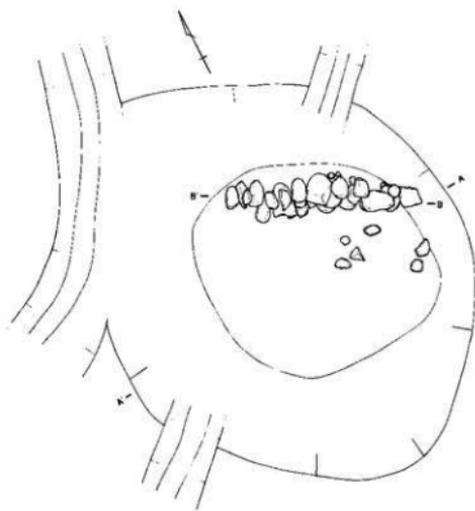
## SZ6 (第116図)

位置	GG 15・HH 15	規模 (cm)	240×220×16	長軸方位	N-40°-E
----	-------------	---------	------------	------	---------

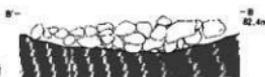
SD 6・SD 8を繋ぐ位置に構築されている。平面形態は円形を、南面形態は非常に浅いすり鉢状を呈する。覆土は黒褐色土が充填する。

## 出土遺物 (第119図19)

土師器甕C類が1点(19)検出されているが、遺構に伴うものか不明である。



1. 7.5YR5(暗褐色)  
砂質土
2. 7.5YR5(黒褐色)  
やや細かい砂質土、やや粘質
3. 7.5YR5(黒褐色)  
やや細かい砂質土、やや粘質2層とは漸  
移的に変化



第117図 SX 5 遺構実測図

0 2m

SX10 (第118図)

位置	HH 22	規模 (cm)	370×220×28	長軸方位	N-7°-E
----	-------	---------	------------	------	--------

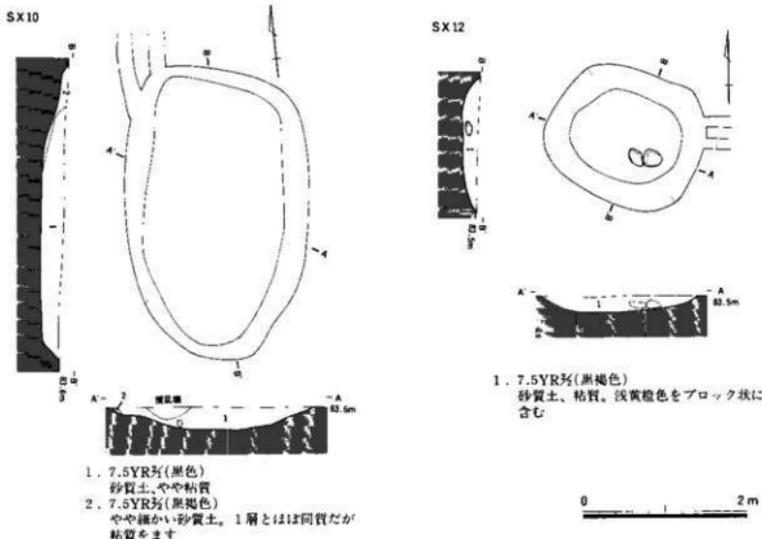
北壁側でSD15と繋がる。平面形態は歪んだ楕円形状を呈する。断面形態は、西・南壁側にやや浅い面をもち、底部部分へすり鉢状に落ち込む二段状の掘り込みとなる。覆土は2層に区分できるが、主体部分を充填するのは上層の黒色土であり、遺物を含む。

出土遺物 (第119図20)

20は古瀬戸の煮沸具である。全面に錆蝕が施され、大部外面には厚く煤が付着している。

SX12 (第118図)

位置	GG・HH 14	規模 (cm)	200×170×20	長軸方位	N-63°-W
----	----------	---------	------------	------	---------



第118図 SX10・SX12遺構実測図

東壁側でSD7と繋がるが、接続部分において溝が非常に浅くなる。平面形態は楕円形を、断面形態は浅いすり鉢を呈する。底面直上やや南東よりに河原石2個を検出している。覆土は粘質黒褐色土が充填する。

出土遺物(第119図21・22・第120図2)

21は均質手山茶碗、22は須恵器甕である。山茶碗は11型式に比定できる。第120図2はホルフェルス製の打製石斧である。基部を欠損する。刃部はリダクションが入り凹状となる。

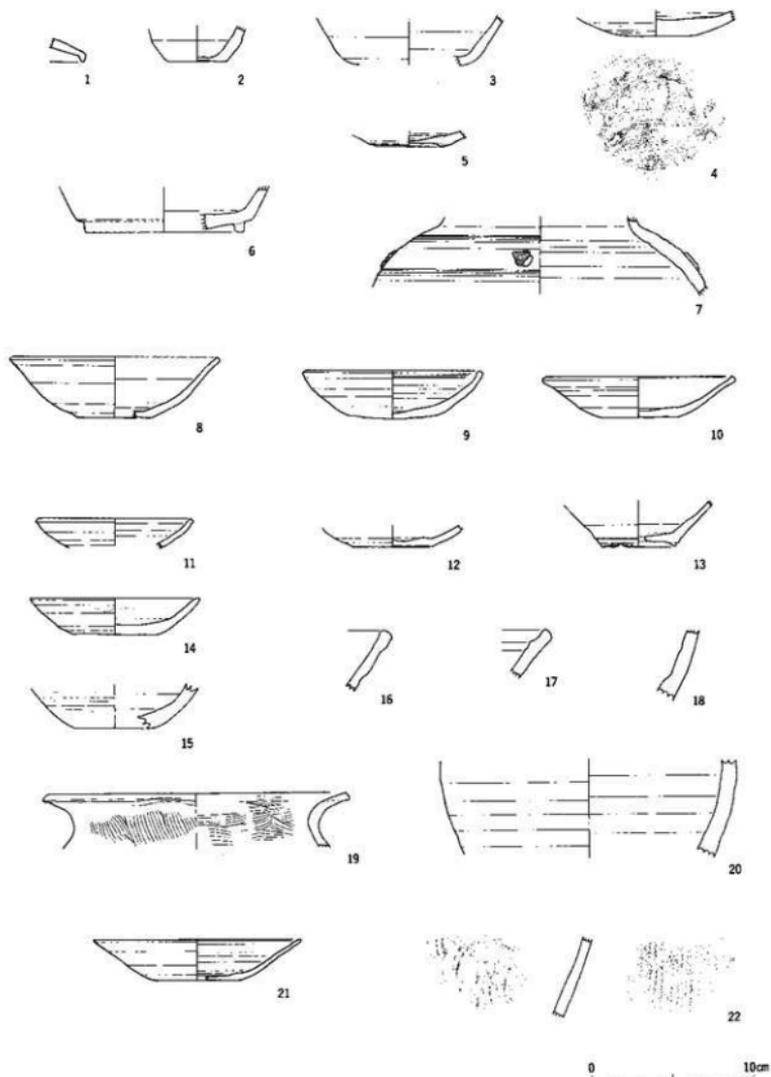
## 6 溝

SD1・9(第2図)

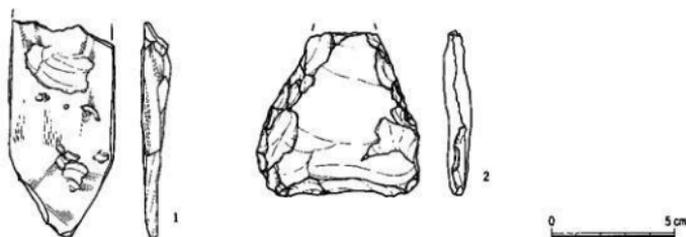
南端部はSX4と接続し、北側へはZ16区方向へ延びるが現畑道により消失している。SB9手前で2条に分岐し1a・1bとしたが、両者とも断面形態は底部部分が円底で、浅いU字状を呈する。規模は幅35~80cm、深さ18~30cmである。また、SD1a中程で方向を90°西へ違えSD9とも切り合い関係をもつがその前後関係は不明である。ただし、規模は同程度である。覆土は黒褐色土が充填する。

出土遺物(第121図・第124図1・2)

須恵器坏身(1)、須恵器甕(2)、縄文土器深鉢(20)は混入である。3~8は均質手山茶碗であり、7・8~11型式に比定される。9~16は古瀬戸である。9~11は有耳甕である。12は尊式花瓶であり、末広がりの脚部と扁平な底部が残存している。13は緑釉小皿であり、体部内面にトチン痕を1



第119図 SX出土遺物実測図



第120図 SX出土遺物(石器)実測図

ケ所残す。体部内面に黒色有機物がしみ込んでおり転用硯の可能性がある。15・16は鍋、17・18は片口鉢と考えられるが、17は体部の立ち上がり強く壺類の可能性はある。19は青磁の碗であるが、外面の文様はみられない。第124図1は砂岩製の叩石である。全面に磨痕がみられるが、特に底面部分は丁寧に平坦面を作出している。第124図2はホルンフェルンス製の打製石斧である。横長剥片素材であり、小型の範疇に入る。

#### SD2 (第2図)

Z17区より2条(2a・2b)南下し、SB10付近で合流してCC15区で90°東へ方向を変える。この先でSD3・4と合流するが、DD20区付近で擾乱のため消滅している。Z17区北側はSD1同様現畑道により消滅しているが、更に北へ延びていたものと考えられる。規模は平均して幅50cm、深さ18~20cm程度であり、底部部分が円底で浅いU字状を呈するが、SB10以北では断面形態V字形となり、深さも35~50cmとなる。覆土は黒褐色土が充填するが、SB10以北では下部に灰褐色土が入る。

#### 出土遺物(第122図1~10)

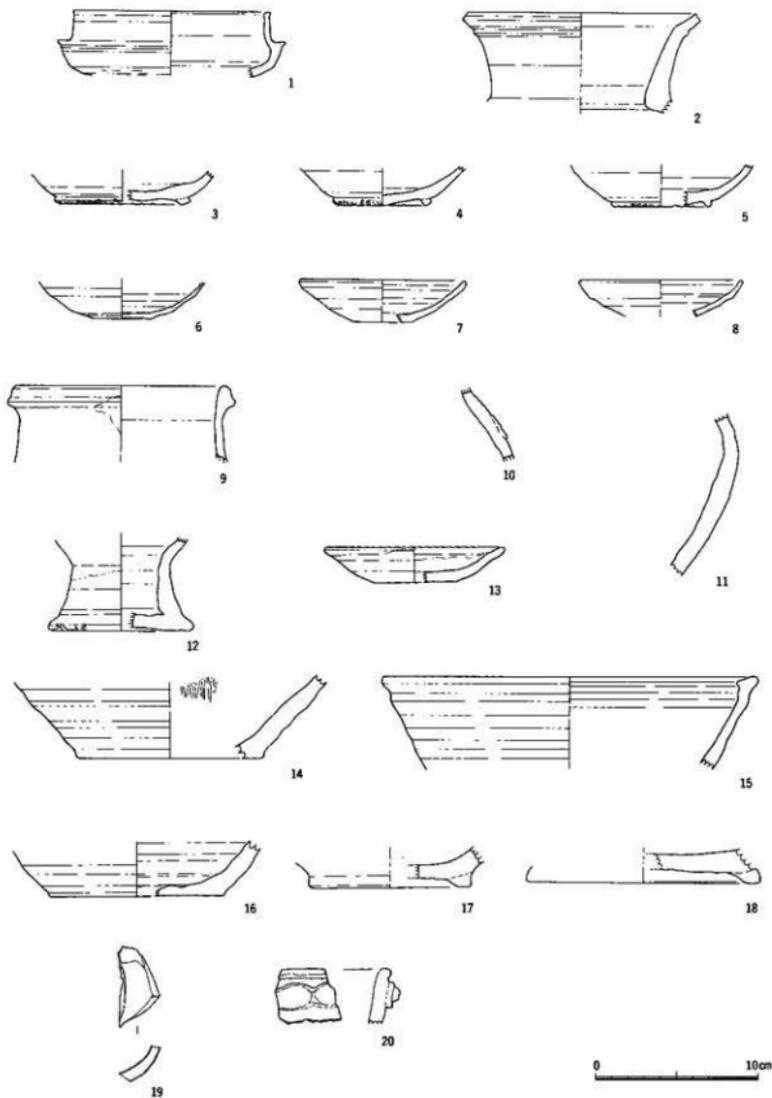
1の須恵器有台坏は混入である。2~6は均質手山茶碗であり、いずれも11型式に比定できる。7~9は古瀬戸である。8の平碗は口縁部が大きくくびれる。9の有耳壺は体部外面に3条1単位の平行沈線が2段にわたり施される。10は片口鉢である。体部は直線的に立ち上がり、口縁部はほぼ水平に張り出されるが上面の凹みは浅い。

#### SD3 (第2図)

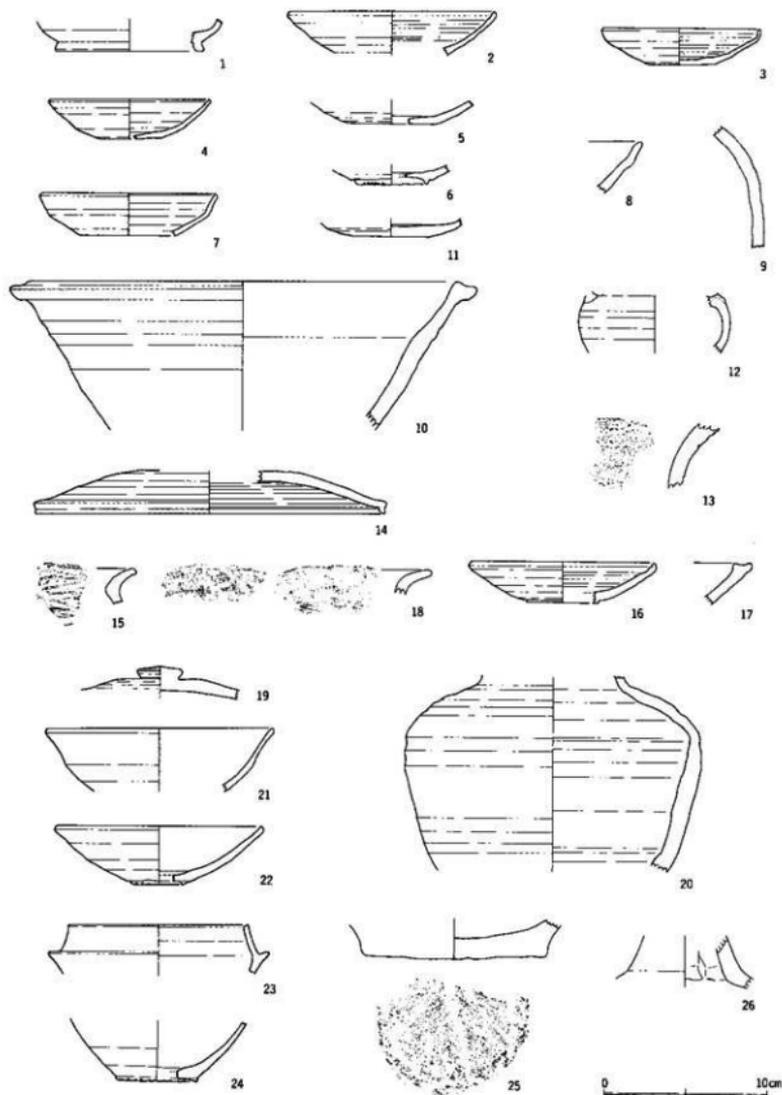
Z17区より南下しCC15区でSD2と合流するが、途中でSX5と関係をもつ。断面形態は底部部分は円底で浅いU字状を呈する。規模は幅50~60cm、深さ15~20cmである。覆土は黒褐色土が充填する。

#### 出土遺物(第122図11・12・第124図3)

11は均質山茶碗、12は古瀬戸の双耳小壺である。双耳小壺は体部外面に横耳の一部が残存し、全面に鉄釉が施される。第124図3はホルンフェルンス製の石錘である。裏面を打面として打欠き部を作出している。



第121図 SD 1a・1b出土遺物実測図



第122图 SD 2~7・13・14出土遺物実測図

#### SD 4 (第2図)

BB17区でSD 3と分岐、D16区で90°東へ方向を変えSD 1と合流する。断面形態は底部がやや平らで、浅い逆台形状を呈する。幅約60cm、深さ約20cmの規模をもち、覆土は黒褐色土が充填する。

#### 出土遺物 (第122図13)

縄文土器深鉢が1点検出されているが混入である。縄文中期に帰属する資料である。

#### SD 5 (第2図)

SD 1 コーナー部分より南下し、SD 6 と合流する。途中 2 条に分岐するが、西側部分については判然としない。断面形態は、底部部分が円底で浅いU字状を呈する。規模は幅25～40cm、深さ約10cmである。覆土は黒褐色土が充填する。

#### 出土遺物 (第122図14～17)

14の須恵器坏蓋、15の土師器甕D類は時期的に合致するが混入であろう。16は質手山茶碗であり、体部内面にコテナデ痕を残す。17は古瀬戸の御皿であり、口縁部内面に小突起をもつ。

#### SD 6 (第2図)

GG13区にコーナー部分をもち東に延び、H23区まで確認している。途中SX 6 と関係をもつ。断面形態は、底部部分は円底で非常に浅いU字状を呈する。規模は幅25～40cm、深さ約10cmである。覆土は黒褐色土が充填する。

#### 出土遺物 (第122図18～22)

18の土師器甕D類、19の須恵器坏蓋は混入である。21・22は均質手山茶碗、20は古瀬戸の釜である。釜の体部は直線的に立ち上がり、肩部は強く張り出している。全面に錆蝕が施されている。

#### SD 7 (第2図)

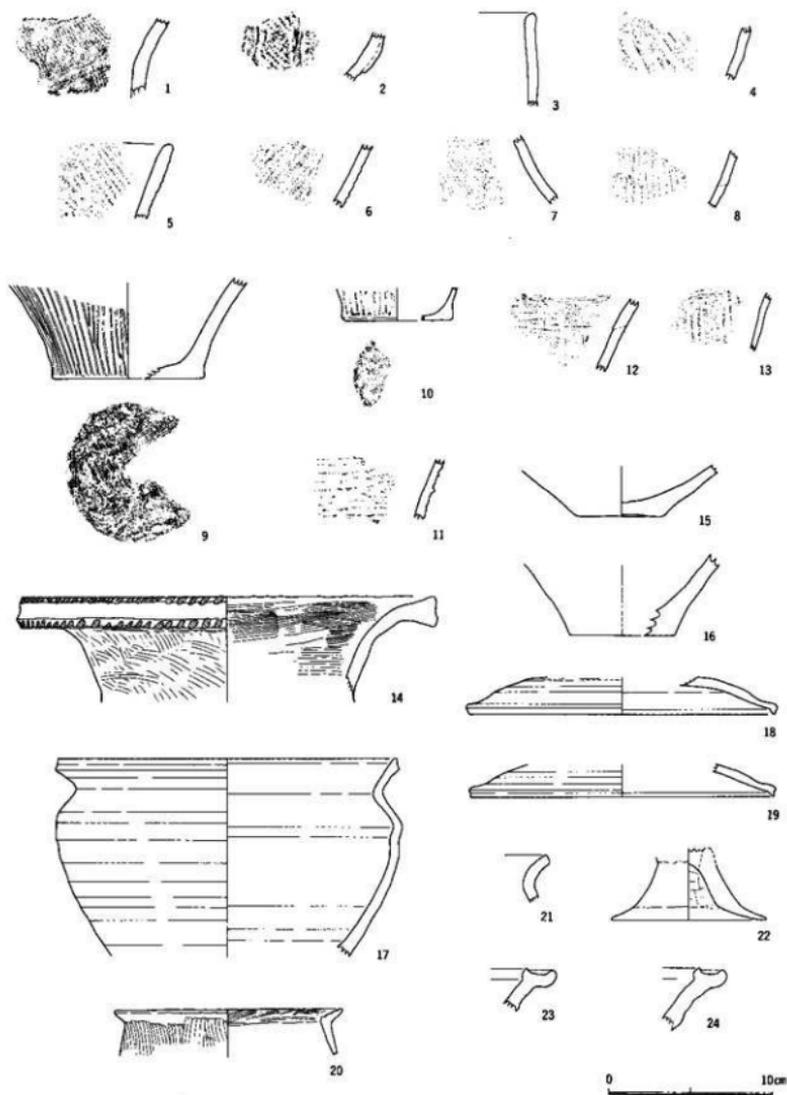
コーナー部分はもたず西端部はSX12と接続するが、ほぼSD 6 と約2.4mの幅をもち平行して走っている。SD 6 と伴に道状遺構の可能性も考えられるかもしれない。断面形態、規模、覆土ともSD 6 に似る。

#### 出土遺物 (第122図23・24)

23の須恵器坏身、24の均質手山茶碗を検出している。SD 6 より須恵器坏身は混入であろう。

#### SD10 (第2図)

C区北端部、CC列～EE列内を東西に延びる。東端部は砂利採集により切られ、西端部はSD11の合流点付近で規模を縮小させ、Z15区付近で消失している。断面形態は底部がやや丸く逆台形状を呈する。規模は幅130～150cm、深さ70～90cmである。覆土は4層に区分できるが、最下層(4層)よりは須恵器、土師器類を検出している。



第123图 SD10出土遺物実測図

#### 出土遺物（第123図・第124図4～13）

上層（1～3層）内には縄文時代中期に帰属する深鉢形土器などが出土している、4層より17の須恵器鉢、18・19の須恵器坏壺、21・22の土師器甕B類及びG類、土師器高坏を検出しており、SD10の帰属時期としたが時期幅が考えられる。23・24の粗肌手鉢も混入と考えられる。第124図4～9は石鏃であり、縄文時代中期～弥生時代中期に帰属する資料である。8、9はチャート製、他は下呂石製である。基部形態からは凹基、円基、有茎に分類できる。第124図10は石錐である。基部と尖頭部を合わせもつもので、尖頭部先端を欠損する。第124図11はチャート製の石匙である。横長剥片素材で、打面側に刃部を作りだしている。第124図12はホンフェルス製の打製石斧であり、横長剥片素材である。刃部はリダクションにより凹状となる。第124図13は下呂石製の石核である。分割礫素材で、平坦な自然面を打面として分割面上で剥片剥離作業を行っている。

#### SD11（第2図）

SD10とはBB18区付近で分岐するがその関係は判然としない。SB7を切るが以後消失している。断面形態は底部がやや丸くU字状を呈する。規模は幅65cm、深さ約25cmである。覆土は黒褐色土が充填する。

#### SD12（第2図）

EE14区から南に延びGG・HH3区で直交する2条の溝と接続をもつ。断面形態は底部がやや丸くU字状を呈する。覆土はやや粘質な黒褐色土が充填する。

#### SD13（第2図）

25列内を2つの小さなコーナー部分をもって南北に延びる。断面形態は底部がやや丸く浅いU字状を呈する。規模は幅65cm、深さ約25cmである。覆土はやや粘質な暗褐色土が充填する。

#### 出土遺物（第122図）

25の縄文土器深鉢を1点検している。底部外面には木葉痕がみられる。

#### SD14（第2図）

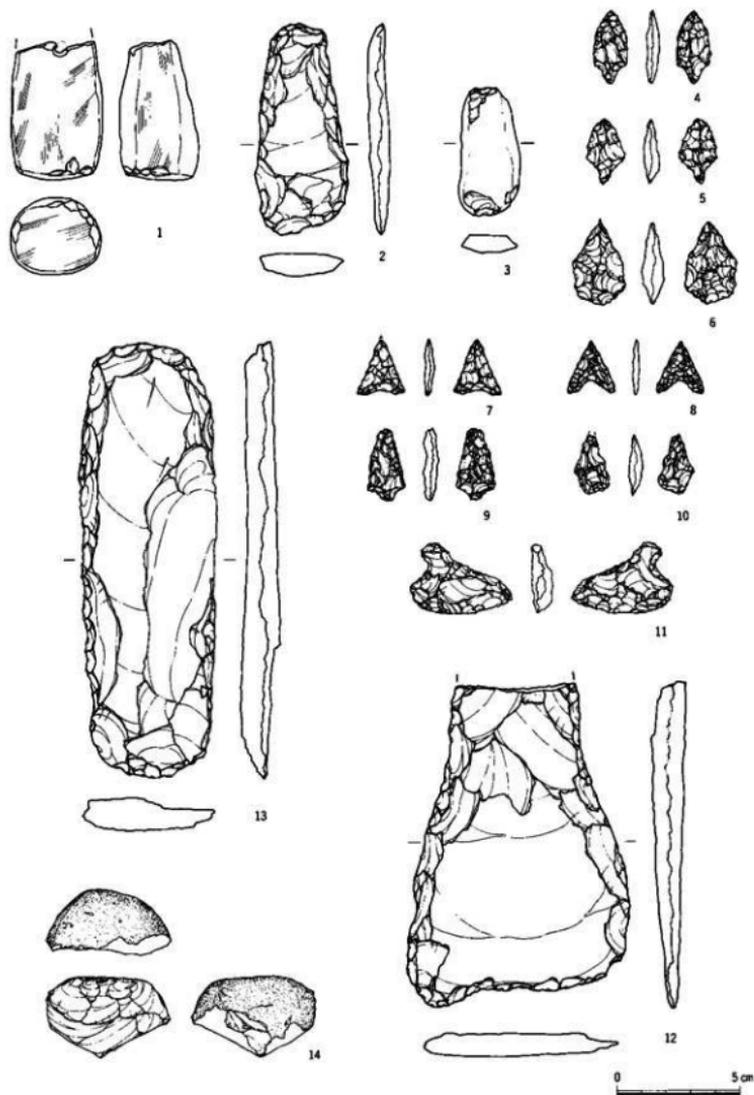
FF20区にコーナー部分をもち、西端部はSD1と合流する。北側部分はAA21区まで及び調査区外に延びる。断面形態は底部がやや丸くU字状を呈する。規模は幅35～110cm、深さ約15cmである。覆土はやや粘質な黒褐色土が充填する。

#### 出土遺物（第122図）

土師器高坏を1点検出している。柱状部内面にはケズリ、裾部にはナデが施される。

#### SD15（第2図）

SX10より北に延びSD10を切るが、以北は判然としない。断面形態は底部がやや丸く細いU字状を呈する。規模は幅40cm、深さ約20cmである。覆土はやや粘質な黒褐色土が充填する。



第124図 SD出土遺物(石器)実測図

## SD16 (第 図)

SD11よりSB83、84、を切り北に延びる。断面形態は底部がやや丸く細いU字状を呈する。規模は幅30~40cm、深さ約15cmである。覆土はやや粘質な黒褐色土が充填する。

## 7 掘立柱建物

### SH1 (第2図)

位 置	GG 15	桁行×梁行 (cm)	400×360	主軸方位	N-86°-E
-----	-------	------------	---------	------	---------

Pit36~41で構成する。柱穴プランはほぼ円形を呈し、径30~35cm、深さ25~46cmである。柱穴間は約2mと一定しているが、北側列中央のPit37がやや北側に寄っている。覆土は2層に区分でき(上層:黒褐色土、下層:褐色土)、底部は円底となる。検出遺物はない。

### SH2 (第2図)

位 置	GG 18・19	桁行×梁行 (cm)	560×380	主軸方位	N-106°-E
-----	----------	------------	---------	------	----------

Pit44~49で構成する。柱穴プランはほぼ円形を呈し、径27~80cm、深さ51~64cmである。径にバラツキがみられるが、Pit44が掘り方が2段掘りとなっており、1段目が径の広い浅い掘り方となるためであり、2段目の径をみるならば大差はない。柱穴間は約2~3mとバラツキがある。覆土は2層に区分でき(上層:黒褐色土、下層:褐色土)、底部は円底で硬くしまっている。検出遺物はない。

### SH3 (第2図)

位 置	GG 25、26・HH 25、26	桁行×梁行 (cm)	640×400	主軸方位	N-28°-E
-----	-------------------	------------	---------	------	---------

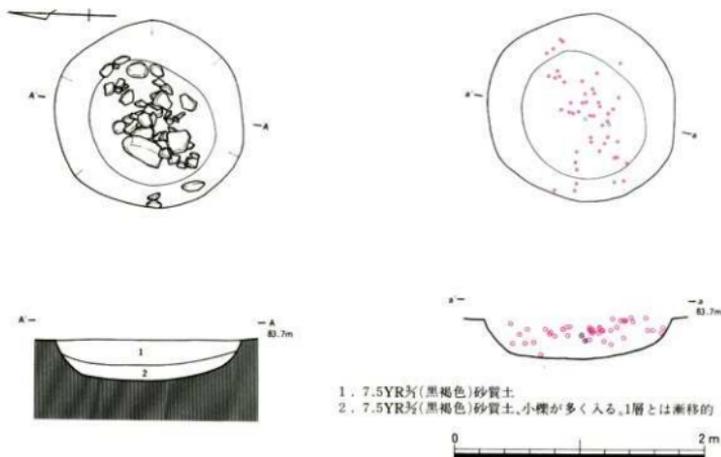
Pit118~129で構成する。柱穴プランはほぼ円形を呈し、径36~42cm、深さ22~44cmである。西側列Pit127~129がやや不安定であるが、SD13の掘り方及び底面でプランを検出しているためである。柱穴間は約1.2m程度であるが、中央間のみ約1.4mとやや巾広となる。覆土は2層に区分でき(上層:黒褐色土、下層:褐色土)、底部は円底で硬くしまっている。検出遺物はない。

## 8 土 墳

### SK50 (第125図)

位 置	II 21	平面形	円 形	規模 (cm)	76×76×18	主軸方位	N-1°-W
-----	-------	-----	-----	---------	----------	------	--------

掘り方は円形を呈し、断面形態は浅い壘状を呈する。覆土は2層に区分したが、明確な線引きではなく、極めて漸移的であり同一層と考えても問題はない。第1層下部より2層内にかけて縄文土器、剥片などを検出している。また、2層下部底面直上で拳大~人頭大の河原石を検出しており、いずれも被熱しており、被熱による剥離面をもつものが多い。また、後述するSK51も同様であるが、土器の多くが頸部より上部の資料が大半を占め、底部部分は1点も検出していない。これが、意図的なものか、耕作による土壌上部の消失に拠るものかは不明である。



1. 7.5YR3(黒褐色)砂質土  
2. 7.5YR3(黒褐色)砂質土、小礫が多く入る、1層とは漸移的

第125図 SK 50遺構実測図・遺物分布図

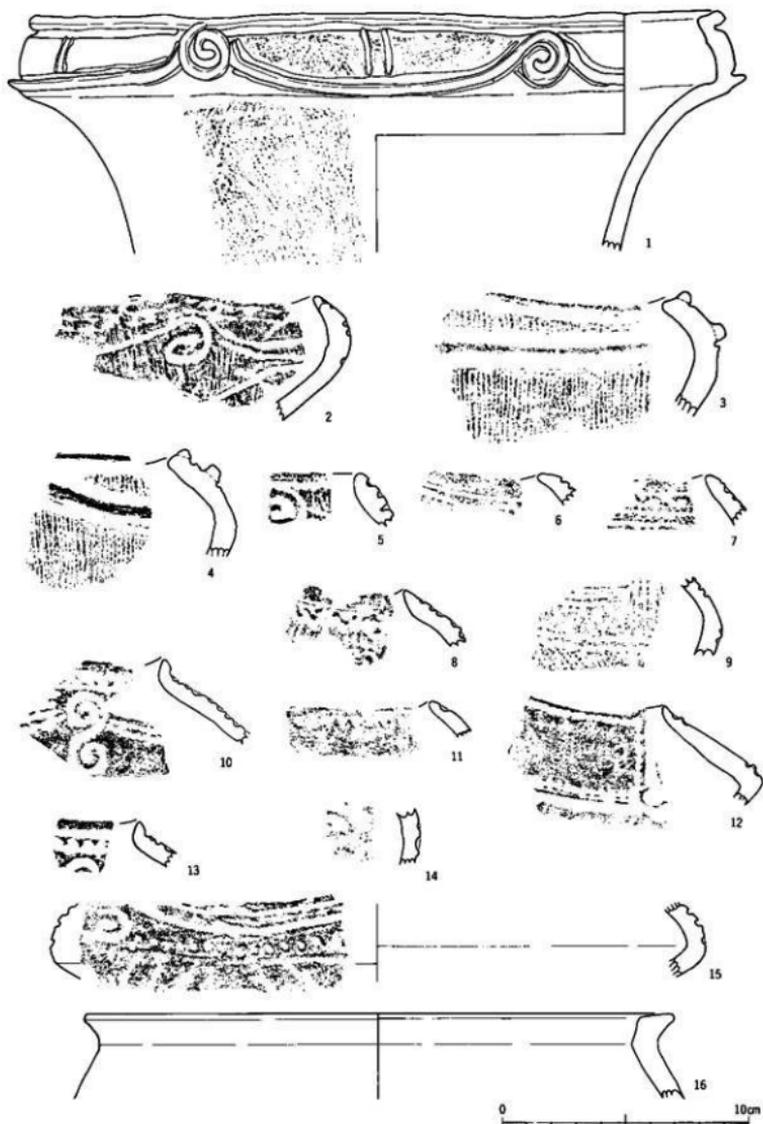
#### 出土遺物 (第126・127図)

縄土器52点、剥片6点(チャート製5点、1点は結晶片岩製の打製石斧フレーク)を検出している。これらは底面にのる焼礫内に落ち込むような状況で検出している。縄土器の多くはキャリパー形を呈し、波状縁を呈するものが主体とすると考えられる。地文に燃糸文をもつものが大半を占めるが、無地文も存在する。無地文とするものには、棒状工具による沈線で逆S字文を軸に弧状線、波状線を描くもの、(10・13)、刺突列がめぐるもの(11)、ソーメン状突帯による区画をもち刺突列がめぐるもの(12)、棒状工具による弧状沈線、刺突列がめぐるもの(14・15)があり、10・12の口縁端部は外反する。また、16は口縁端部に内傾する面をもち、非常に丁寧なナデが施される。燃糸文を地文とするものには、その文様描出方法に突帯によるもの、半截竹環状工具、あるいは、ヘラ・棒状工具による沈線によるものに大別できる。刺突列をもつものについては、交互刺突列、1～3の刺突列をもつものがある。1は燃糸文をもつが、口縁端突帯から垂下する突帯渦文に横位の突帯蕨手文を交互に連結させる文様構成をもち異質である。

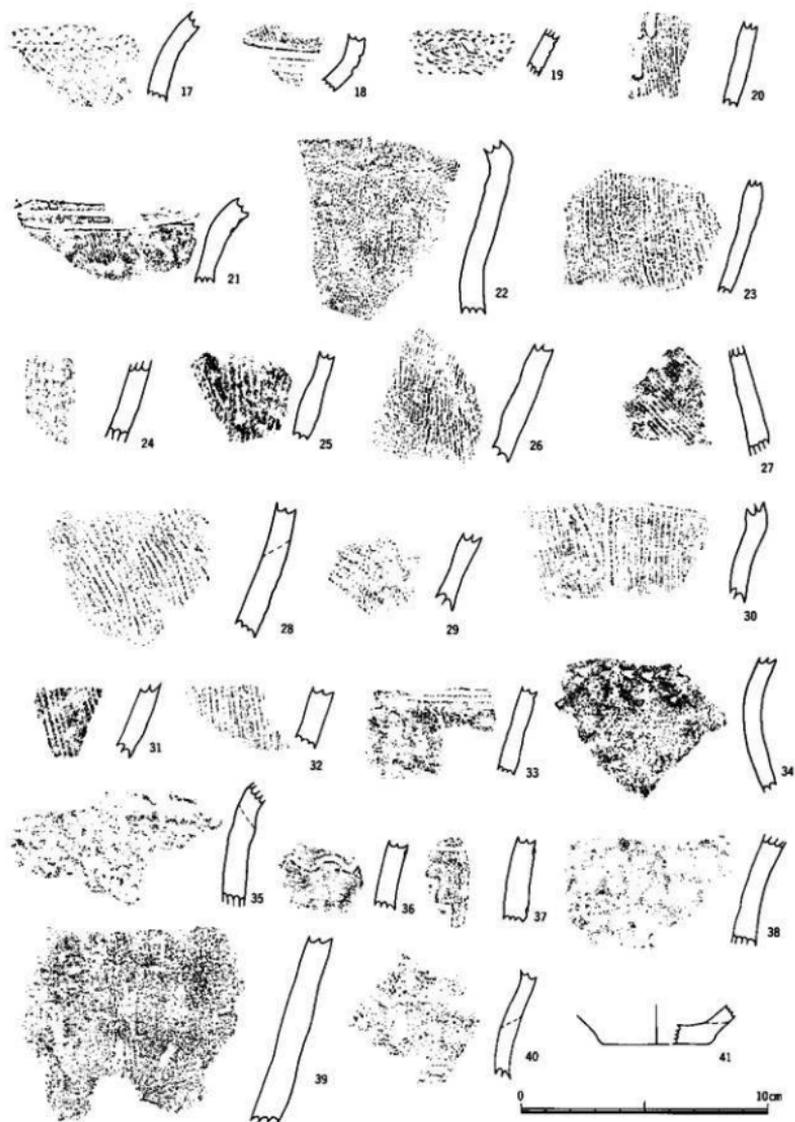
#### SK51 (第128図)

位置	HH 27	平面形	楕円形	規模 (cm)	128×106×20	主軸方位	N-1°-E
----	-------	-----	-----	---------	------------	------	--------

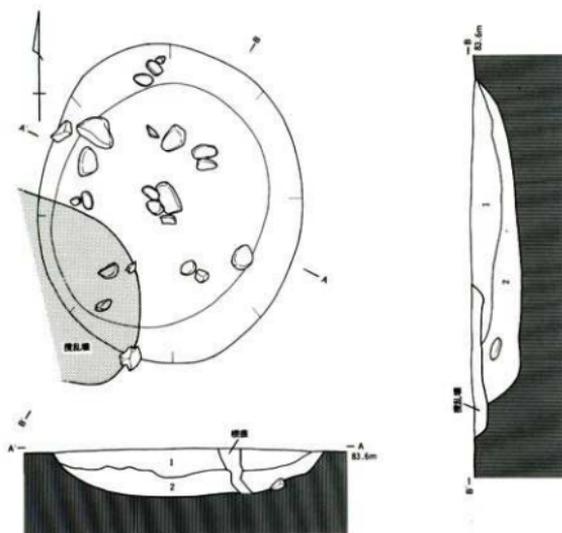
西南部分に攪乱を受ける。掘り方は楕円形を呈し、断面形態は浅い盥状を呈する。主軸方位もほぼ北を向き、覆土も2層に区分したが、検出状況はSK50と相似した作り方を示す。2層下部にはやはり被熱したと考えられる拳大～人頭大の河原石を含むが、底面中央部直上で上面が研かれているオーソクォーツタイト製ブランク、砂岩製叩き石を検出している。また、土器はやはり頭部より上部の資料が大半を占め、底部部分は存在しない。



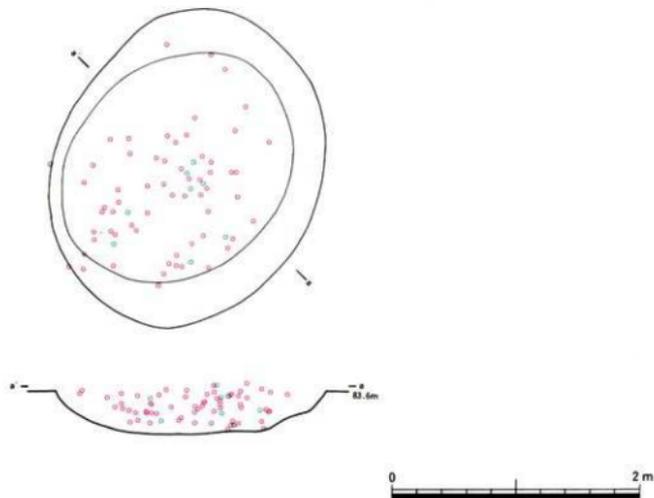
第126图 SK50出土遗物实测图1



第127图 SK 50出土遺物実測图 2



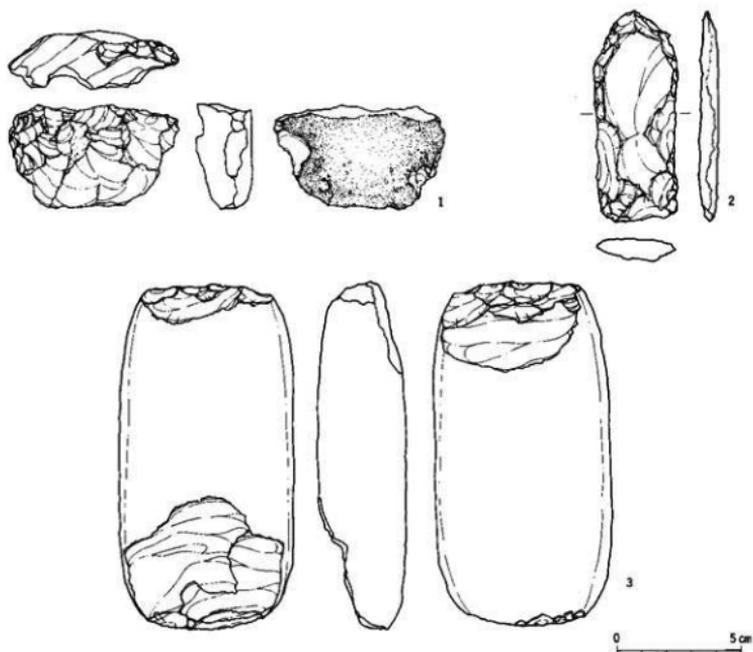
1. 7.5YR<sub>5</sub>(黒褐色)やや粗い砂質土、卵大の礫を含む
2. 7.5YR<sub>5</sub>(暗褐色)砂質土、粘質、1層とは漸移的、拳大の礫を含む



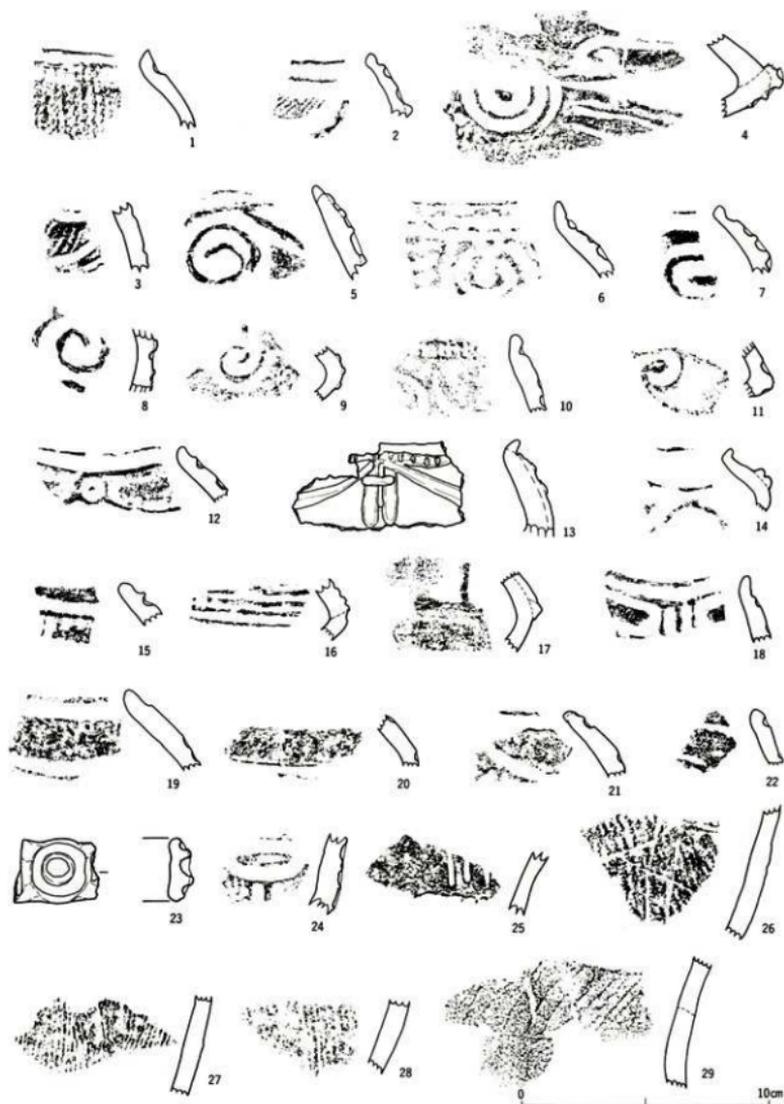
第128図 SK51遺構実測図・遺物分布図

出土遺物（第129～131図）

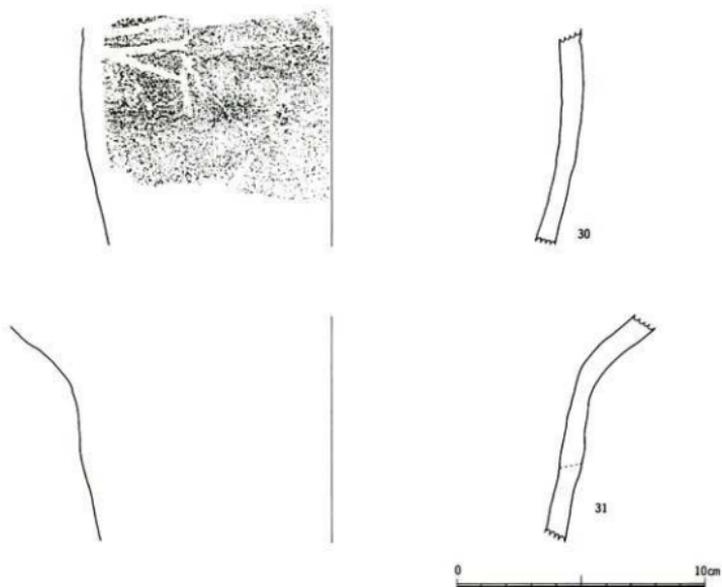
縄文土器63点、石核1点、打製石斧1点、叩き石1点、オーソクォーツアイト製ブランク1点、剥片2点（チャート製）を検出しており、検出状況はSK50に似る。ただし、前述したとおり底面中央直上でオーソクォーツアイト製ブランク（52×37×20mm、写真5）、両端に1～2枚の剥離痕をもつ砂岩製の叩き石（第129図3）を検出している。縄文土器の多くはキャリバー形を呈し、波状縁を呈するものが多い。無地文とするものが大半を占め、熱糸文を地文とするものは数例である。文様描出方法は突帯によるもの、棒状工具による沈線によるものに大別できるが、文様構成は渦文、楕円区画を描くものが主体となる。4は下部の渦文が突起状となる。刺突列をもつものも存在するが、いずれも1条に限られる。石核（第129図1）はチャート製で、分割礫を素材とする。上端の剥離面を打面として正面一面で剥片作業を行っている。打面部に黒色有機物の付着がみられる。打製石斧（第129図2）はホルンフェルス製で、刃部は直刃状となる。オーソクォーツアイトは非常に硬質な石材であり本遺跡周辺では採集できない。被熱していると考えられるが、面取りが認められ原石ではなくブランクとした。特に表面は光沢があり意識的に研いだものである。



第129図 SK51出土遺物(石器)実測図



第130图 SK 51出土遗物实测图 1



第131図 SK 51出土遺物実測図2



写真5 オーソクォーツアイト製ブランク

## 9 包含層出土遺物 (第132~138図)

包含層及び全体の様相が不明なビットなどから出土した遺物の内、主なものを掲載する。これらはほぼ遺構の遺存する時期幅と対応するものである。

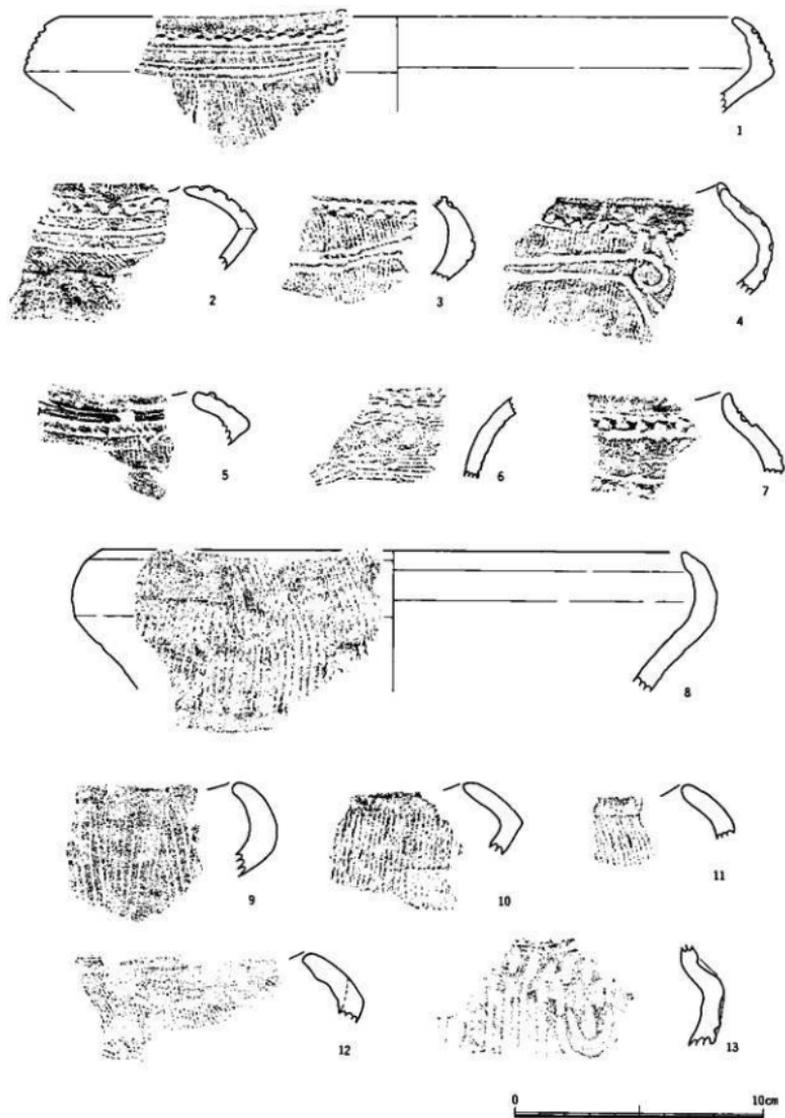
1~12は口縁部が大きく弯曲するキャリバー形を呈し、地文として熱糸文をもつ。文様として交互刺突列、刺突列、半截竹管による沈線、棒状工具による沈線、熱糸文のみのもが存在し、型式差を内包する。13は器形はキャリバー形で、短沈線列による文様をもつ。前述資料内に伴出するものである。14は装飾的な把手部分である。15は縄文無節Lを施し、2条の沈線内に刺突列をもつ。16は縄文LRを施し、刻みをもつ突帯がめぐる。15・16は弱いキャリバー形を呈する。17は沈線内に縄文無節Lを充填している。18は条痕を施す深鉢、19・20は浮線網状文系、突帯文系の浅鉢と考えられる。21・22は深鉢底部資料であり、22は底部外面に網代痕が残る。以上の資料は縄文中期後半~晩期に帰属する。

23・25・26は貝田町式条痕深鉢である。23は口縁端部外面に突帯をめぐらす。斜位、羽状、縦位の条痕が施され、口縁部内面に列点文をもつ。24・27・28は壺であり、樹描文などから貝田町式条痕深鉢に伴うもので弥生中期に帰属する。

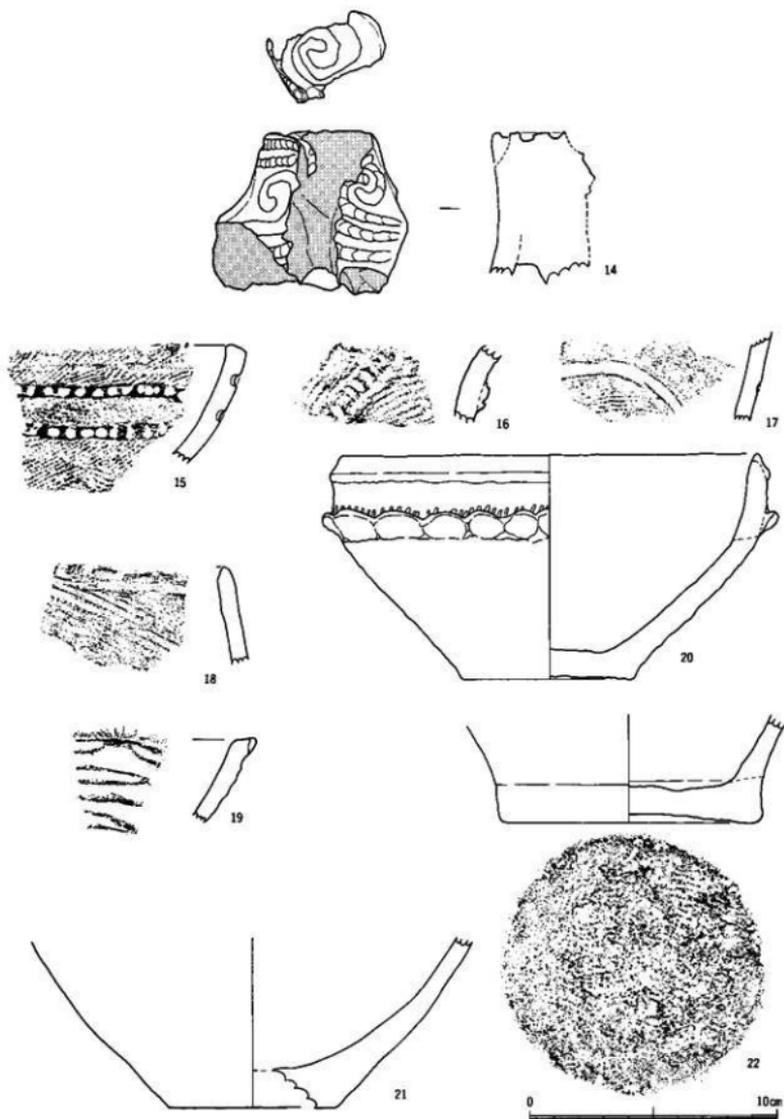
29~32は須恵器坏壺である。29は外面が著しく摩耗して平滑となっている。30は8世紀中に帰属する美濃須南産、31・32は端部の折り返しがシャープであり猿投窯と考えられ、8世紀後葉に帰属するものである。33~35は須恵器坏身であり、33は6世紀前半、34・35は7世紀前半のものである。36の無台坏、38の有台坏は美濃須南産で8世紀中、37は猿投窯で7世紀前半に帰属する。39は須恵器拓であり、底部中央に焼成前による穿孔をもつ。焼成は甘く白色を呈する。40・41は須恵器高坏であり、40は長脚二段遺かしとなる。共に7世紀前半に帰属する。42・43は須恵器甕頸部資料であり、波状文、刺突列文をもつ。44は壺の底部資料と考えられる。45は須恵器甕の口縁部で、その断面形態から8世紀前半に帰属するものであろう。

46~53は均質手山茶碗、54~56は均質手山皿である。いずれも9~11型式に帰属する。57~61、63~65は古瀬戸である。60は緑小皿で、体部内面に褐色を呈する有機物が付着しており、底部内面が平滑である。61は有耳壺の底部で内外面が外傾する付高台を有する。底部外面に回転ヘラケズリ痕が残る。体部外面に灰釉が施されている。64は播鉢で、体部内面に6条1単位の播目が施される。口縁部内面には小突起をもち、小突起に指による片口を一箇所施している。65は御目付大皿で、体部は直線的に立ち上がり口縁部は外折している。体部外面下方は回転ヘラケズリが施され、口縁部内外面に灰釉が施される。62は土鉢であり、両端部は丸くおさめている。

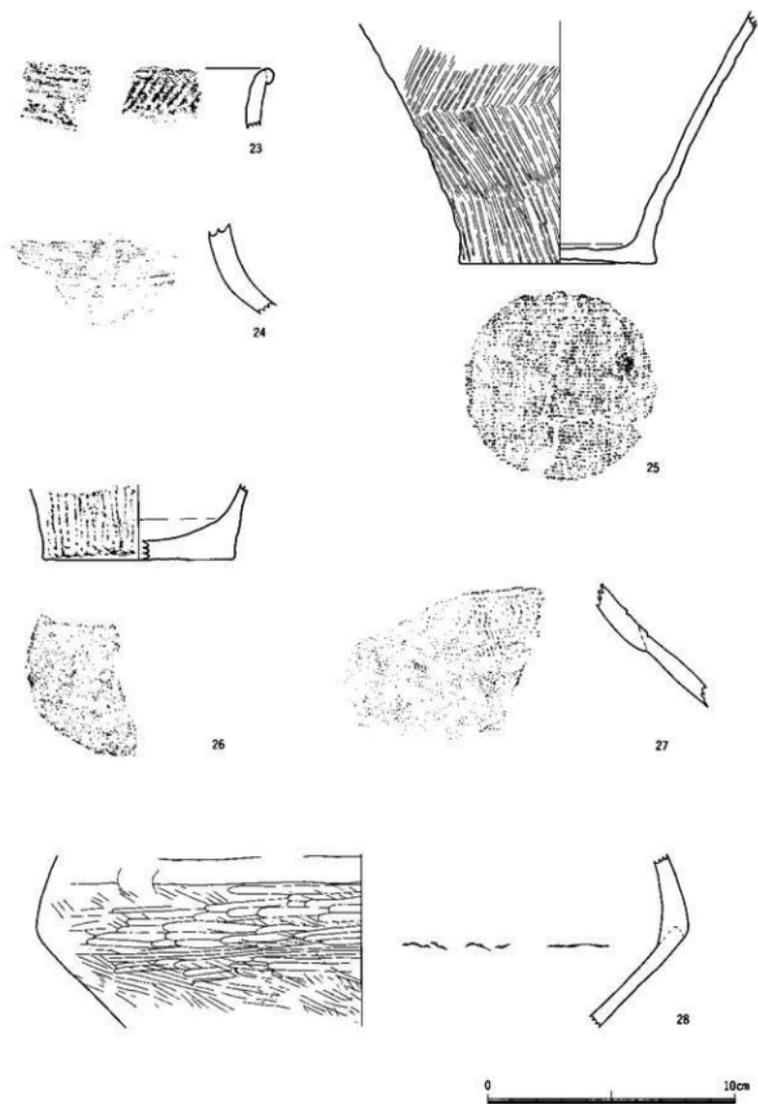
石器類は石鏃、打製石斧が多く検出されているが、大半が時期的には縄文中期後半、弥生前期~中期に帰属するものである。石鏃、石鏃はチャート製、下呂石製が大半を占めるが、剥片をみると圧倒的に下呂石が占める。打製石斧はホルンフェルス製が圧倒数を占める。第137図15は花崗岩製の凹石である。第137図16・17はチャート製の石鏃である。その形態から弥生時代に帰属するものである。22はホルンフェルス製の剥片石器である。やや厚な打点側を刃部とし、表裏より調整を加えてやや角度のある刃部を作出している。末端側は粗い調整で形態を整えている。刃部側付近には金属顕微鏡による光沢痕を確認しているが、非常に弱い。伴出土器より弥生前期~中期の時期幅の中に帰属するものと考えている。



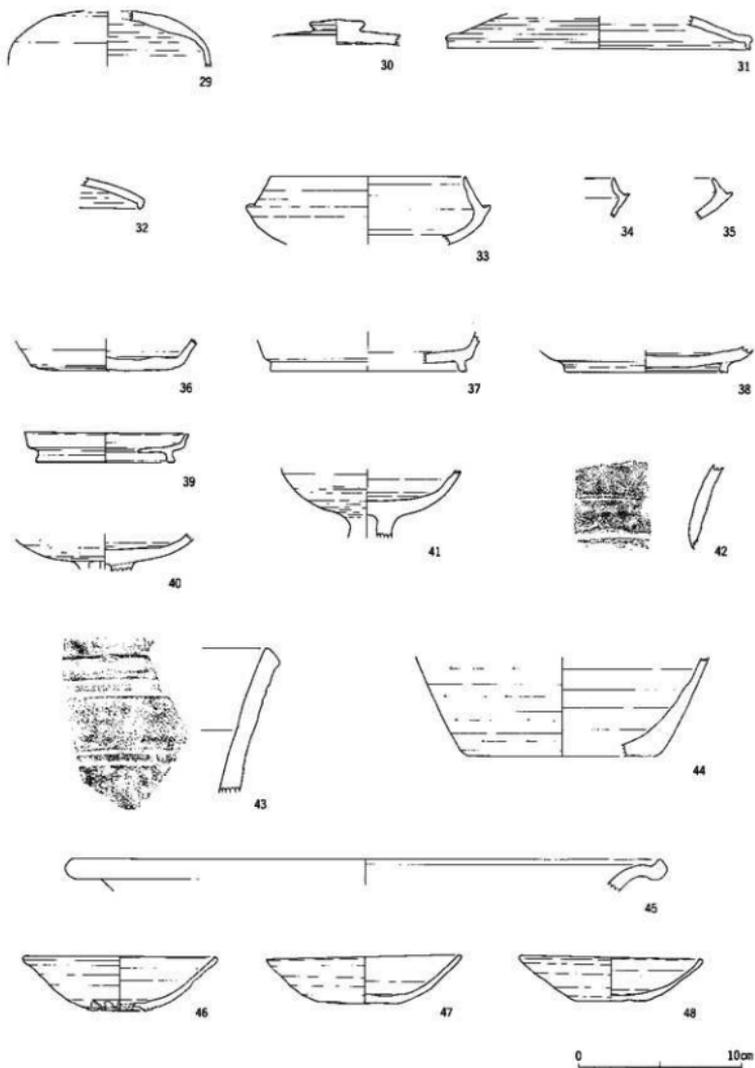
第132图 包含层出土遗物实例图1



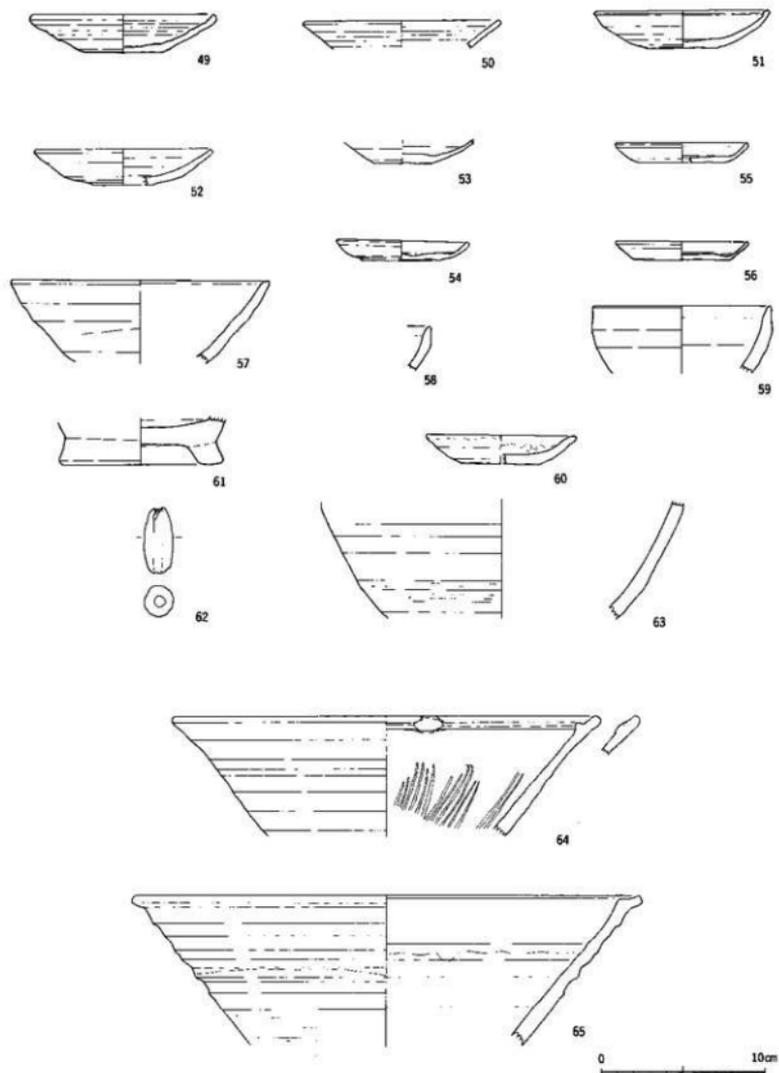
第133图 包含層出土遺物実測図2



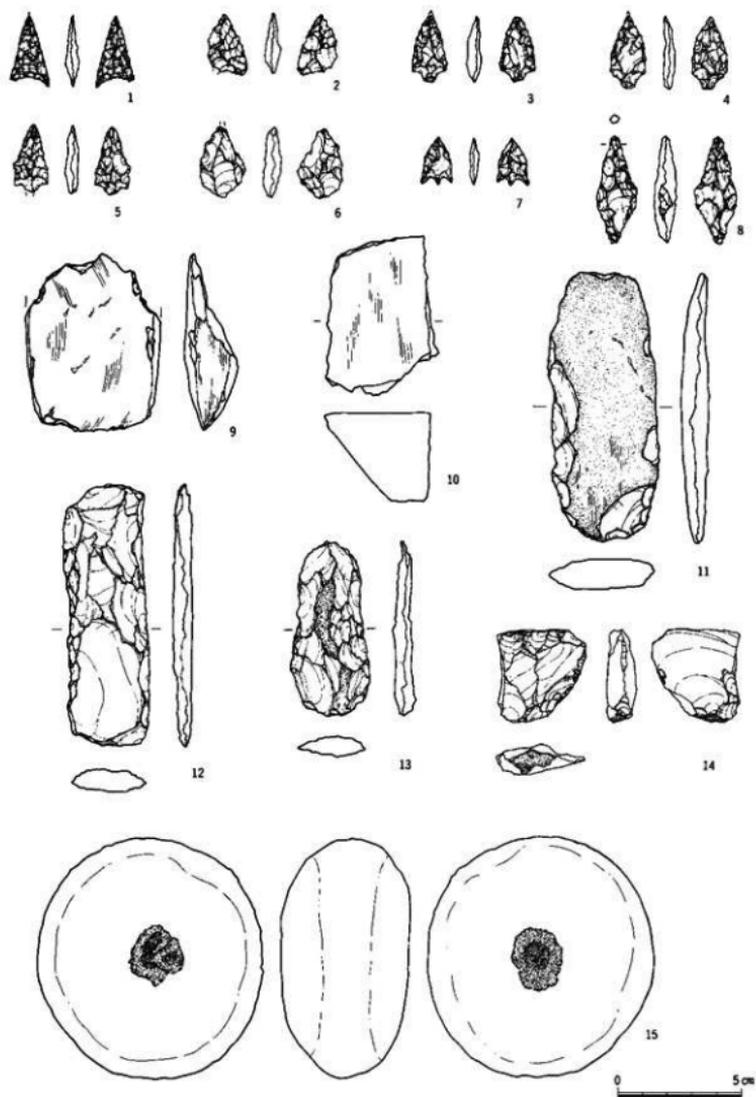
第134图 包含层出土遗物实测图3



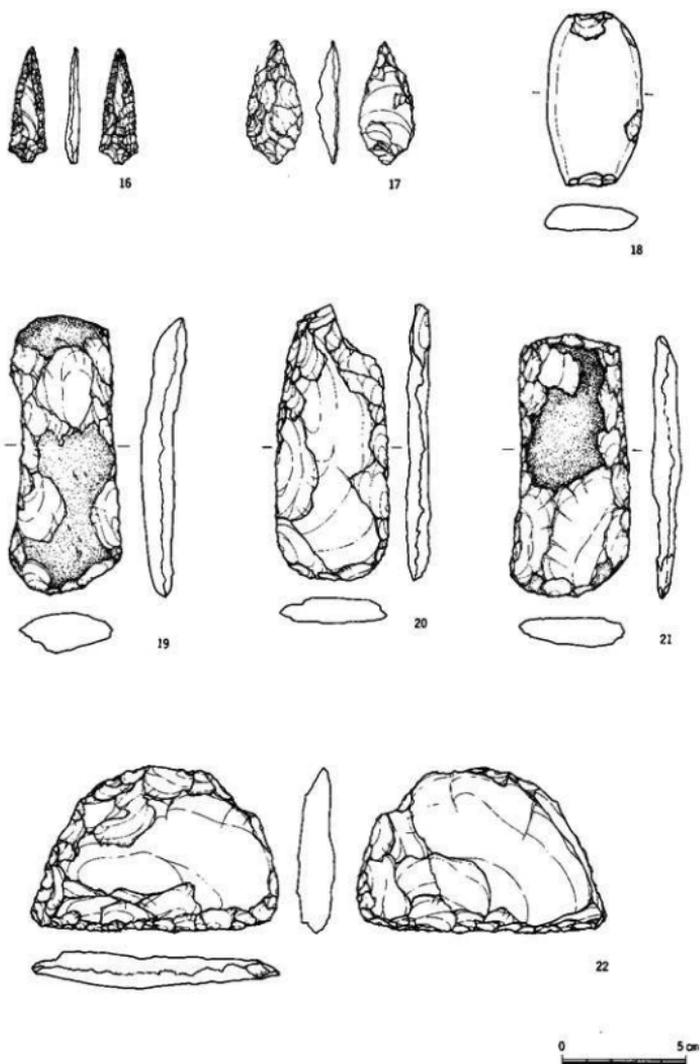
第135图 包含層出土遺物実測図4



第136図 包含層出土遺物実測図5



第137图 包含层出土遗物(石器)实测图1



第138图 包含层出土遗物(石器)实测图2

SB・SE遺物観察表 (1)

調査区	調査区番号	調査区名	調査区説明	調査区位置	調査区面積	調査区形状	調査区地質	調査区地質説明	調査区地質図	調査区地質図番号	調査区地質図スケール	調査区地質図作成者	調査区地質図作成年	調査区地質図備考
SB	1	1.1	1.1.1	1.1.1.1	1.1.1.1	1.1.1.1	1.1.1.1	1.1.1.1	1.1.1.1	1.1.1.1	1.1.1.1	1.1.1.1	1.1.1.1	1.1.1.1
	2	1.2	1.2.1	1.2.1.1	1.2.1.1	1.2.1.1	1.2.1.1	1.2.1.1	1.2.1.1	1.2.1.1	1.2.1.1	1.2.1.1	1.2.1.1	1.2.1.1
	3	1.3	1.3.1	1.3.1.1	1.3.1.1	1.3.1.1	1.3.1.1	1.3.1.1	1.3.1.1	1.3.1.1	1.3.1.1	1.3.1.1	1.3.1.1	1.3.1.1
	4	1.4	1.4.1	1.4.1.1	1.4.1.1	1.4.1.1	1.4.1.1	1.4.1.1	1.4.1.1	1.4.1.1	1.4.1.1	1.4.1.1	1.4.1.1	1.4.1.1
	5	1.5	1.5.1	1.5.1.1	1.5.1.1	1.5.1.1	1.5.1.1	1.5.1.1	1.5.1.1	1.5.1.1	1.5.1.1	1.5.1.1	1.5.1.1	1.5.1.1
	6	1.6	1.6.1	1.6.1.1	1.6.1.1	1.6.1.1	1.6.1.1	1.6.1.1	1.6.1.1	1.6.1.1	1.6.1.1	1.6.1.1	1.6.1.1	1.6.1.1
	7	1.7	1.7.1	1.7.1.1	1.7.1.1	1.7.1.1	1.7.1.1	1.7.1.1	1.7.1.1	1.7.1.1	1.7.1.1	1.7.1.1	1.7.1.1	1.7.1.1
	8	1.8	1.8.1	1.8.1.1	1.8.1.1	1.8.1.1	1.8.1.1	1.8.1.1	1.8.1.1	1.8.1.1	1.8.1.1	1.8.1.1	1.8.1.1	1.8.1.1
	9	1.9	1.9.1	1.9.1.1	1.9.1.1	1.9.1.1	1.9.1.1	1.9.1.1	1.9.1.1	1.9.1.1	1.9.1.1	1.9.1.1	1.9.1.1	1.9.1.1
	10	1.10	1.10.1	1.10.1.1	1.10.1.1	1.10.1.1	1.10.1.1	1.10.1.1	1.10.1.1	1.10.1.1	1.10.1.1	1.10.1.1	1.10.1.1	1.10.1.1
SE	11	2.1	2.1.1	2.1.1.1	2.1.1.1	2.1.1.1	2.1.1.1	2.1.1.1	2.1.1.1	2.1.1.1	2.1.1.1	2.1.1.1	2.1.1.1	2.1.1.1
	12	2.2	2.2.1	2.2.1.1	2.2.1.1	2.2.1.1	2.2.1.1	2.2.1.1	2.2.1.1	2.2.1.1	2.2.1.1	2.2.1.1	2.2.1.1	2.2.1.1
	13	2.3	2.3.1	2.3.1.1	2.3.1.1	2.3.1.1	2.3.1.1	2.3.1.1	2.3.1.1	2.3.1.1	2.3.1.1	2.3.1.1	2.3.1.1	2.3.1.1
	14	2.4	2.4.1	2.4.1.1	2.4.1.1	2.4.1.1	2.4.1.1	2.4.1.1	2.4.1.1	2.4.1.1	2.4.1.1	2.4.1.1	2.4.1.1	2.4.1.1
	15	2.5	2.5.1	2.5.1.1	2.5.1.1	2.5.1.1	2.5.1.1	2.5.1.1	2.5.1.1	2.5.1.1	2.5.1.1	2.5.1.1	2.5.1.1	2.5.1.1
	16	2.6	2.6.1	2.6.1.1	2.6.1.1	2.6.1.1	2.6.1.1	2.6.1.1	2.6.1.1	2.6.1.1	2.6.1.1	2.6.1.1	2.6.1.1	2.6.1.1
	17	2.7	2.7.1	2.7.1.1	2.7.1.1	2.7.1.1	2.7.1.1	2.7.1.1	2.7.1.1	2.7.1.1	2.7.1.1	2.7.1.1	2.7.1.1	2.7.1.1
	18	2.8	2.8.1	2.8.1.1	2.8.1.1	2.8.1.1	2.8.1.1	2.8.1.1	2.8.1.1	2.8.1.1	2.8.1.1	2.8.1.1	2.8.1.1	2.8.1.1
	19	2.9	2.9.1	2.9.1.1	2.9.1.1	2.9.1.1	2.9.1.1	2.9.1.1	2.9.1.1	2.9.1.1	2.9.1.1	2.9.1.1	2.9.1.1	2.9.1.1
	20	2.10	2.10.1	2.10.1.1	2.10.1.1	2.10.1.1	2.10.1.1	2.10.1.1	2.10.1.1	2.10.1.1	2.10.1.1	2.10.1.1	2.10.1.1	2.10.1.1



SB・SE遺物観察表(3)

遺物番号	品名	材質	形状・用途	観察事項	備考
SB001	...	...	...	...	...
SB002	...	...	...	...	...
SB003	...	...	...	...	...
SB004	...	...	...	...	...
SB005	...	...	...	...	...
SB006	...	...	...	...	...
SB007	...	...	...	...	...
SB008	...	...	...	...	...
SB009	...	...	...	...	...
SB010	...	...	...	...	...
SB011	...	...	...	...	...
SB012	...	...	...	...	...
SB013	...	...	...	...	...
SB014	...	...	...	...	...
SB015	...	...	...	...	...
SB016	...	...	...	...	...
SB017	...	...	...	...	...
SB018	...	...	...	...	...
SB019	...	...	...	...	...
SB020	...	...	...	...	...
SB021	...	...	...	...	...
SB022	...	...	...	...	...
SB023	...	...	...	...	...
SB024	...	...	...	...	...
SB025	...	...	...	...	...
SB026	...	...	...	...	...
SB027	...	...	...	...	...
SB028	...	...	...	...	...
SB029	...	...	...	...	...
SB030	...	...	...	...	...
SB031	...	...	...	...	...
SB032	...	...	...	...	...
SB033	...	...	...	...	...
SB034	...	...	...	...	...
SB035	...	...	...	...	...
SB036	...	...	...	...	...
SB037	...	...	...	...	...
SB038	...	...	...	...	...
SB039	...	...	...	...	...
SB040	...	...	...	...	...
SB041	...	...	...	...	...
SB042	...	...	...	...	...
SB043	...	...	...	...	...
SB044	...	...	...	...	...
SB045	...	...	...	...	...
SB046	...	...	...	...	...
SB047	...	...	...	...	...
SB048	...	...	...	...	...
SB049	...	...	...	...	...
SB050	...	...	...	...	...
SB051	...	...	...	...	...
SB052	...	...	...	...	...
SB053	...	...	...	...	...
SB054	...	...	...	...	...
SB055	...	...	...	...	...
SB056	...	...	...	...	...
SB057	...	...	...	...	...
SB058	...	...	...	...	...
SB059	...	...	...	...	...
SB060	...	...	...	...	...
SB061	...	...	...	...	...
SB062	...	...	...	...	...
SB063	...	...	...	...	...
SB064	...	...	...	...	...
SB065	...	...	...	...	...
SB066	...	...	...	...	...
SB067	...	...	...	...	...
SB068	...	...	...	...	...
SB069	...	...	...	...	...
SB070	...	...	...	...	...
SB071	...	...	...	...	...
SB072	...	...	...	...	...
SB073	...	...	...	...	...
SB074	...	...	...	...	...
SB075	...	...	...	...	...
SB076	...	...	...	...	...
SB077	...	...	...	...	...
SB078	...	...	...	...	...
SB079	...	...	...	...	...
SB080	...	...	...	...	...
SB081	...	...	...	...	...
SB082	...	...	...	...	...
SB083	...	...	...	...	...
SB084	...	...	...	...	...
SB085	...	...	...	...	...
SB086	...	...	...	...	...
SB087	...	...	...	...	...
SB088	...	...	...	...	...
SB089	...	...	...	...	...
SB090	...	...	...	...	...
SB091	...	...	...	...	...
SB092	...	...	...	...	...
SB093	...	...	...	...	...
SB094	...	...	...	...	...
SB095	...	...	...	...	...
SB096	...	...	...	...	...
SB097	...	...	...	...	...
SB098	...	...	...	...	...
SB099	...	...	...	...	...
SB100	...	...	...	...	...

SB・SE 遺物観察表 (4)

品目	数量	材質	形状	寸法	重量	備考
9301	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9302	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9303	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9304	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9305	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9306	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9307	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9308	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9309	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9310	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9311	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9312	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9313	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9314	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9315	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9316	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9317	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9318	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9319	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9320	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9321	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9322	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9323	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9324	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9325	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9326	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9327	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9328	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9329	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9330	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9331	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9332	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9333	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9334	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9335	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9336	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9337	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9338	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9339	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9340	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9341	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9342	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9343	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9344	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9345	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9346	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9347	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9348	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9349	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9350	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9351	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9352	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9353	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9354	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9355	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9356	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9357	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9358	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9359	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9360	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9361	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9362	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9363	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9364	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9365	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9366	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9367	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9368	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9369	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9370	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9371	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9372	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9373	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9374	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9375	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9376	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9377	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9378	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9379	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9380	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9381	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9382	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9383	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9384	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9385	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9386	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9387	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9388	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9389	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9390	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9391	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9392	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9393	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9394	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9395	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9396	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9397	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9398	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9399	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片
9400	1	銅	丸型	φ1.5	0.1	丸型銅片

石鏃観察表

標本番号	出土区	心材	長	幅	厚	重量	形状(長)	最大幅の位置	前後位置	基部位置	観察結果
第93048	S B 24	キート	13.1	1.5	0.5	2.1	32	99-41	基部	先端	基部
第93049	S B 24	下尻石	14.1	1.6	0.9	4.4	70	1-1	基部	先端	基部
第93050	S B 20	キート	12.3	1.4	0.5	1.1	37	91-1	基部	先端	基部
第93054	S B 20	下尻石	12.4	1.2	0.5	1	34	0-3	基部	先端	基部
第94007	S B 22	下尻石	13.1	2.1	0.5	2.1	21	0-5	基部	1号	基部
第94018	S B 22	キート	3.1	1.6	0.5	1.2	49	0-1	基部	1号	基部
第94019	S B 22	キート	2.9	2.3	0.9	4.9	2	基部	先端	基部	
第94020	S B 22	キート	2.4	1.9	0.8	3.4	2	基部	先端	基部	
第94021	S B 22	キート	2.9	2.3	0.8	3.8	36	0-3	基部	先端	基部
第94022	S B 22	下尻石	12.1	1.6	0.5	0.9	27	0-6	基部	先端	基部
第94024	S B 22	キート	12.4	1.5	0.6	2.1	26	0-9	基部	先端	基部
第94044	S B 20	下尻石	3	1.4	0.5	1.8	25	0-7	基部	先端	基部
第94085	S B 10	下尻石	2.7	1.5	0.7	1.7	34	1-1	基部	先端	基部
第94086	S B 10	キート	3.4	2.1	0.9	4.9	27	0-6	基部	先端	基部
第94087	S B 10	下尻石	2.2	1.9	0.4	1	20	0-3	基部	先端	基部
第94088	S B 10	キート	2.2	1.9	0.5	1.8	25	0-7	基部	先端	基部
第94089	S B 10	キート	12.6	1.4	0.4	2.3	33	0-4	基部	先端	基部
第94094	S B 8	下尻石	17.9	1.6	0.9	3.5	32	0-5	基部	先端	基部
第94095	池津	下尻石	3.9	1.6	0.8	1.1	20	0-5	基部	先端	基部
第94096	池津	下尻石	2.2	1.7	0.7	1.8	25	0-7	基部	先端	基部
第94097	池津	キート	12.7	1.5	0.5	1.6	33	0-4	基部	先端	基部
第94098	池津	下尻石	11.0	1.5	0.5	1.7	33	0-5	基部	先端	基部
第94099	池津	下尻石	12.4	1.4	0.6	1.5	22	0-3	基部	先端	基部
第94100	池津	下尻石	12.4	1.7	0.7	1.5	21	0-7	基部	先端	基部
第94101	池津	下尻石	1.9	1.2	0.4	0.5	17	0-3	基部	先端	基部

側線形断面についてはA1~F1、A2~F2、B1~C1、C2~C3、D1~E1、E2~F1と7分類している

鉄製品観察表

標本	出土区	種類	長	幅	厚	重量	備考
第94025	S B 25	刀子	(5.4)	1.5	0.5	7.3	
第94042	S B 83	鉄鏃	2.8	(1.6)	0.2	1.7	基部に穿孔
第94043	S B 83	金銅製耳環	2.2	2	0.4	2.5	大きい網模と環状に削り、金メッキを施す





SX・SK・包含層遺物観察表 (3)

品目	品名	出土地	石種	長さ	幅	厚	重量	刃角	刃部	折損部位	特徴	備考	
第 93 161	石製片	S B 1	ホルンフェルス	14.81	3.7	0.5	16.2	-	C	上平	基部	横長片状素材	
第 93 162	石製片	S B 4	ホルンフェルス	10.61	4.6	0.9	72.7	35	B	基部	基部	短長片状素材	
第 93 164	石製片	S B 5	ホルンフェルス	6.23	3.4	1.2	28.5	-	C	上平	基部	短平片状素材、自然崩片	
第 93 165	石製片	S B 9	ホルンフェルス	66.49	4	1.2	48.1	-	C	上平、刃部	基部	短長片状素材	
第 93 167	石製片	S B 14	ホルンフェルス	19.71	5.4	0.9	71.2	-	C	基部、刃部	基部	短長片状素材	
第 93 169	石製片	S B 17	ホルンフェルス	66.91	5.2	1.6	66.1	-	C	上平	基部	短長片状素材、自然崩片	
第 93 171	石製片	S B 20	ホルンフェルス	11.21	3.8	0.6	45.6	35	B	基部	基部	短長片状素材	
第 94 1626	石製片	S B 24	ホルンフェルス	17.41	5.1	1.6	20.4	-	C	基部、刃部	基部	横長片状素材	
第 94 1627	石製片	S B 25	ホルンフェルス	8.5	3.9	1.6	28.4	30	B	基部	基部	短平片状素材、自然崩片	
第 94 1628	石製片	S B 27	ホルンフェルス	11.41	5.4	1	36.7	31	B	基部	基部	横長片状素材	
第 94 1631	石製片	S B 28	ホルンフェルス	17.41	4.7	0.9	34	-	C	上平	基部	短長片状素材	
第 94 1633	石製片	S B 29	燧石	19.91	4.1	1.3	69.5	35	B	基部	基部	短長片状素材	
第 94 1637	石製片	S B 31	ホルンフェルス	17.21	4.7	1	46.6	-	C	上平	基部	短長片状素材、自然崩片	
第 94 1639	石製片	S B 33	ホルンフェルス	17.11	3.9	0.8	34.8	28	B	上平	基部	短長片状素材	
第 137502	石製片	S B 51	ホルンフェルス	8.5	3.2	0.7	45.5	19	D	-	基部	短長片状素材	
第 137503	石製片	S B 52	ホルンフェルス	7.1	6.5	1.2	62.6	38	B	-	基部	短長片状素材	
第 137505	石製片	S Z 3	ホルンフェルス	17.51	5.5	0.8	51	-	C	上平	基部	短長片状素材	
第 137507	石製片	S D 1	ホルンフェルス	8.7	3.8	1	39.2	38	B	-	基部	横長片状素材	
第 137508	石製片	S D 10	ホルンフェルス	13.4	8.9	1.2	171.6	30	B	-	基部	基部	横長片状素材、扇形
第 137509	石製片	S D 16	ホルンフェルス	18	5.6	1.3	215.9	30	D	-	基部	短長片状素材	
第 137511	燧石製	燧石製	ホルンフェルス	11.2	4.8	1.2	81.9	32	B	-	基部	短長片状素材、自然崩片	
第 137512	燧石製	燧石製	ホルンフェルス	10.9	3.4	0.9	45.1	30	B	-	基部	短長片状素材	
第 137513	燧石製	燧石製	燧石	7.2	3.2	0.8	22.8	32	B	-	基部	短長片状素材	

打製石斧観察表

品目	出土地	石種	長さ	幅	厚	重量	刃角	刃部	折損部位	特徴	備考	
第 93 161	S B 1	ホルンフェルス	14.81	3.7	0.5	16.2	-	C	上平	基部	横長片状素材	
第 93 162	S B 4	ホルンフェルス	10.61	4.6	0.9	72.7	35	B	基部	基部	短長片状素材	
第 93 164	S B 5	ホルンフェルス	6.23	3.4	1.2	28.5	-	C	上平	基部	短平片状素材、自然崩片	
第 93 165	S B 9	ホルンフェルス	66.49	4	1.2	48.1	-	C	上平、刃部	基部	短長片状素材	
第 93 167	S B 14	ホルンフェルス	19.71	5.4	0.9	71.2	-	C	基部、刃部	基部	短長片状素材	
第 93 169	S B 17	ホルンフェルス	66.91	5.2	1.6	66.1	-	C	上平	基部	短長片状素材、自然崩片	
第 93 171	S B 20	ホルンフェルス	11.21	3.8	0.6	45.6	35	B	基部	基部	短長片状素材	
第 94 1626	S B 24	ホルンフェルス	17.41	5.1	1.6	20.4	-	C	基部、刃部	基部	横長片状素材	
第 94 1627	S B 25	ホルンフェルス	8.5	3.9	1.6	28.4	30	B	基部	基部	短平片状素材、自然崩片	
第 94 1628	S B 27	ホルンフェルス	11.41	5.4	1	36.7	31	B	基部	基部	横長片状素材	
第 94 1631	S B 28	ホルンフェルス	17.41	4.7	0.9	34	-	C	上平	基部	短長片状素材	
第 94 1633	S B 29	燧石	19.91	4.1	1.3	69.5	35	B	基部	基部	短長片状素材	
第 94 1637	S B 31	ホルンフェルス	17.21	4.7	1	46.6	-	C	上平	基部	短長片状素材、自然崩片	
第 94 1639	S B 33	ホルンフェルス	17.11	3.9	0.8	34.8	28	B	上平	基部	短長片状素材	
第 137502	S B 51	ホルンフェルス	8.5	3.2	0.7	45.5	19	D	-	基部	短長片状素材	
第 137503	S B 52	ホルンフェルス	7.1	6.5	1.2	62.6	38	B	-	基部	短長片状素材	
第 137505	S Z 3	ホルンフェルス	17.51	5.5	0.8	51	-	C	上平	基部	短長片状素材	
第 137507	S D 1	ホルンフェルス	8.7	3.8	1	39.2	38	B	-	基部	横長片状素材	
第 137508	S D 10	ホルンフェルス	13.4	8.9	1.2	171.6	30	B	-	基部	基部	横長片状素材、扇形
第 137509	S D 16	ホルンフェルス	18	5.6	1.3	215.9	30	D	-	基部	短長片状素材	
第 137511	燧石製	燧石製	ホルンフェルス	11.2	4.8	1.2	81.9	32	B	-	基部	短長片状素材、自然崩片
第 137512	燧石製	燧石製	ホルンフェルス	10.9	3.4	0.9	45.1	30	B	-	基部	短長片状素材
第 137513	燧石製	燧石製	燧石	7.2	3.2	0.8	22.8	32	B	-	基部	短長片状素材

石器、石製品(その他)観察表

品目	出土地	石種	長さ	幅	厚	重量	刃角	刃部	折損部位	特徴	備考
第 93 162	S B 1	燧石	17.1	12.8	7.4	1834	正敷	両面に砥面有			
第 93 163	S B 20	燧石製	ホルンフェルス	5.9	13.3	6.8	71.3	刃部砥面に微細な欠片状有			
第 93 164	S B 30	燧石	19.7	6.4	11.2	28.7	砥面に上平の跡				
第 12605	S B 51	燧石	ホルンフェルス	14.2	7.5	3.8	603	両面に微細な欠片状有			
第 12607	S B 55	燧石	燧石製	18.9	4.3	1	50.6	両面に上平の跡			
第 11501	S Z 3	燧石	12.4	5.5	3.6	400.9	両面に上平の跡				
第 11502	S Z 3	燧石	28.4	14.8	6.4	1027	両面に上平の跡				
第 11505	S Z 8	燧石製	ホルンフェルス	4.4	11.4	9.9					
第 12401	S D 1	石片	燧石製	6.9	5.6	3.3	17.1				101年 上部に穿孔有
第 12402	S D 3	石製	燧石製	5.4	2.5	1					
第 124010	S D 10	石製	チャート	0.3	1.2	0.6	1.5	両面に欠損			
第 124011	S D 16	石製	チャート	3	4.1	1	9.4	両面に欠損			
第 137518	燧石製	燧石	下石	4.4	1.8	1	5.2	欠損部有			
第 137519	燧石製	燧石	燧石	12.1	10.1	3.1	799	裏面に凹有			

刃部については、A—素材時のまま、B—調整を加える、C—欠損と3分類している

磨製石斧観察表

品目	出土地	石種	長さ	幅	厚	重量	刃角	刃部	折損部位	備考
第 95 D40	S B30	結晶片岩	3.5	3.3	0.6	14.5	37	片刃		
第 137169	燧石製	結晶片岩	(7.2)	5.5	(2.0)	103.4	38	両刃	刃部ののみ	定典式

## 第IV章 自然科学分析

### 1 牧野小山遺跡の住居跡出土炭化材の放射性炭素年代測定

山形 秀樹

#### 1. 放射性炭素年代測定について

試料は、アルカリ・酸処理を施して不純物を除去し、炭化処理をした後リチウムと混合して反応管内に入れ、真空ポンプで引きながら800℃まで加熱して炭化リチウム（カーバイド）を生成後、加水分解によりアセチレンを生成した。

測定は、約一ヶ月放置した後、精製したアセチレンを比例計数管（400cc）を用いて、 $\beta^-$ 線を計数して年代値を算出した。その結果は下記に示す。

なお、年代値の算出には $^{14}\text{C}$ の半減期としてLibbyの半減期5,570年を使用した。また、付記した年代誤差は、計数値の標準偏差 $\sigma$ に基づいて算出し、標準偏差（One sigma）に相当する年代である。試料の $\beta^-$ 線計数率と自然計数率との差が $2\sigma$ 以下の時は、 $3\sigma$ に相当する年代を下限の年代値として表示し、試料の $\beta^-$ 線計数率と現在の標準炭素（Modern standard carbon）の計数率との差が $2\sigma$ 以下の時は、Modernと表示し、 $^{14}\text{C}(\text{Sample}) / ^{14}\text{C}(\text{Modern})$ の値を付記し、 $^{14}\text{C}(\text{Sample}) / ^{14}\text{C}(\text{Modern}) < 1$ であれば、yrBPの値を付記する。

暦年代の補正は、大気中の $^{14}\text{C}$ 濃度が一定で半減期が5,568年として算出された $^{14}\text{C}$ 年代値（yrBP）に対し、過去の宇宙線強度の変動による大気中の $^{14}\text{C}$ 濃度の変動および半減期の違い（ $^{14}\text{C}$ の半減期5,730 $\pm$ 30年）を補正して、より正確な年代を求めるものであり、具体的には年代既知の樹木年輪の $^{14}\text{C}$ 年代の詳細な測定値を用いて補正曲線を作成し、これを用いて暦年代を算出する。補正暦年代の算出にCALIB3.0 [Stuiver and Reimer, 1993: IBM-PC用: Reference (Stuiver & Pearson, 1993)]を使用した。なお、交点年代値は $^{14}\text{C}$ 年代値に相当する補正曲線上の年代値であり、 $1\sigma$ 年代幅は $^{14}\text{C}$ 年代誤差に相当する補正曲線上の年代範囲を示す。年代を検討する場合は、68%の確率で $1\sigma$ 年代幅に示すいずれかの年代になる。暦年代の補正は約一万年前からAD 1,950年までが有効であり、該当しないものについては補正暦年代を\*\*\*またはModernと表示する。また、AD 1,955\*はModernを意味する。

#### 2. 放射性炭素年代測定結果

測定 No.	試料	$^{14}\text{C}$ 年代値	補正暦年代
PLD-237	炭化材 (SB15一括)	1,490 $\pm$ 90 yrBP (AD 460年)	交点年代値 AD 600年 $1\sigma$ 年代幅 AD 460 to 480 AD 510 to 520 AD 530 to 650
PLD-238	炭化材 (SB19 II' 96-1813)	1,440 $\pm$ 80 yrBP (AD 510年)	交点年代値 AD 640年 $1\sigma$ 年代幅 AD 550 to 670
PLD-239	炭化材 (SB25カマド付近)	1,480 $\pm$ 80 yrBP (AD 470年)	交点年代値 AD 610年 $1\sigma$ 年代幅 AD 540 to 650
PLD-240	炭化材 (SB27 I 2316)	1,540 $\pm$ 80 yrBP (AD 410年)	交点年代値 AD 540年 $1\sigma$ 年代幅 AD 430 to 620

## 2 牧野小山遺跡出土の住居跡柱材の樹種同定

植田 弥生

美濃加茂市牧野に所在する当遺跡の5世紀末～6世紀前半の4軒の住居跡から採取された柱材の樹種同定結果を報告します。試料はいずれも炭化材である。

### 1. 同定の方法

樹種同定は炭化材の3方向の破断面の組織を走査電子顕微鏡で観察し行った。横断面(木口)は炭化材を手で割り新鮮面を出し、接線断面(板目)と放射断面(柃目)は片刃の剃刀を方向に沿って軽くあて弾くように割り新鮮面を出す。この3断面の試料を直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、その周囲に導電性ペーストを塗る。試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡(日本電子(株)製 JSM T-100型)で観察・写真撮影をした。

### 2. 結果

結果を表にまとめ、同定の根拠とした組織観察結果を以下に記載する。

表 牧野小山遺跡住居跡出土炭化材の樹種

遺	構	樹	種
SB15一括		コナラ属	コナラ節
SB19		クマシデ属	イヌシデ節
SB25カマド付近		コナラ属	クスギ節
SB27		コナラ属	クスギ節とヒノキ属

### 3. 樹種記載

#### 1. ヒノキ属 *Chamaecyparis* ヒノキ科 図版1 1a.-1c. (SB27)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。晩材の量は少ない。分野壁孔はヒノキ型で大きく、孔口の長軸は斜めに傾き開孔の形は狭いレンズ状や大きな楕円形、1分野に主に2個が水平に整然と配列する。ヒノキの開孔は狭いレンズ状、サワラはヒノキより開孔が広い。当試料はヒノキとサワラの開孔の型が見られ、種の識別までは出来なかった。

ヒノキ属は本州の福島県以南・四国・九州の温帯の山地に生育し、ヒノキはやや乾燥した尾根や岩上に、サワラは適湿地に生育する。材は耐久性・切削性・割裂性にすぐれ、建築材・曲物などによく使われる。

#### 2. クマシデ属イヌシデ節 *Carpinus* sect. *Eucarpinus* カバノキ科 図版1 2a.-2c. (SB19)

放射組織が集合する部分と2～数個の小型の管孔が複合し散在する部分とがある放射孔材。道管の壁孔は小型で交互状に密在、穿孔は単一である。放射組織はほぼ同性、1～3細胞幅、道管との壁孔はやや大きい。集合放射組織があり、穿孔が単一であることからイヌシデ節と同定した。なおクマシ

ア節は集合放射組織の出現頻度が低く、穿孔は横棒が10本以下の階段状のものが多いことで区別している。

イヌシデ節は暖帯および温帯に生育する落葉高木または大形低木である。山野に普通のイヌシデとアカシデ、乾いた山稜に生育するイワシデがある。

### 3. コナラ属コナラ亜属コナラ節 *Quercus*. subgen. *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 図版1 3 a.-3c. (SB15一括)

年輪の始めに中型の管孔が2～3層配列し、晩材部では薄壁で角形の小型管孔が火炎状または放射方向に配列する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、内腔にチロースがある。放射組織は単列のものも広放射組織・複合状のものがある。

コナラ節は暖帯から温帯に生育する落葉高木でカシワ・ミズナラ・コナラ・ナラガシワがある。材は重硬だが乾燥すると割れや狂いが出やすい欠点がある。人里近くの二次林に普通の樹種である。

### 4. コナラ属コナラ亜属クヌギ節 *Q.* subgen. *Quercus* sect. *Cerris* ブナ科 図版2 4a.-4c. (SB27)

年輪の始めに大型の管孔が1層配列し、その後小型で厚壁の管孔が単独で放射方向に配列し広放射組織があり、接線状・網状の柔組織が顕著な環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、チロースがある。放射組織は同性、単列のものも集合状のものがあり、道管との壁孔は櫛状である。

クヌギ節は落葉性高木でクヌギとアベマキが属する。暖帯の二次林や山林に普通で、関東ではクヌギ、瀬戸内海沿岸地方にはアベマキが多い。材は重厚で割裂性が良い。

## 4. まとめ

4軒の住居跡は発掘状況から5世紀末～6世紀前半の住居跡と推定されている。4軒の住居跡の各柱材は、コナラ属のコナラ節とクヌギ節、クマシデ属イヌシデ節、そしてヒノキ属の4分類群で各住居跡ごとに異なる樹種検出されている。この結果から、住居材にはおそらく複数の樹種が使用されていた可能性がある。いずれの樹種も古墳時代の住居跡出土建築材として報告例の多い樹種である。ただしヒノキ属は近畿から中部地方で多い傾向があり、当遺跡でのヒノキ属の出土は地域性を示唆している。ただし、ヒノキ属と同定された炭化試料は、柱材であるクヌギ節の炭化材と共に取り上げられていた細破片であった。いずれにせよ、SB27ではクヌギ節とヒノキが使用されていたことがわかった。

当遺跡から約5km東に位置する岐阜県美濃加茂市蜂屋町上蜂屋の尾崎遺跡の古墳時代後期 SB22の建築材はコナラ節3点とクリ1点であり、弥生時代中期と後期の建築材はクリとクヌギ節が多いという結果が報告されている(藤根、1993)。まだ当地域での事例数は少ないが当地域においても、コナラ節とクヌギ節を多用した弥生時代から古墳時代の全国的な樹種利用傾向(山口、1993)が示唆された。

ただし、産状をふまえた詳細な試料採取の調査結果が蓄積されるにつれ、より詳細な時期や住居の立地環境による建築材使用樹種の変遷と地域性が明らかに成りつつあるので、当地域においても資料の蓄積がもたれる。

#### 参考・引用文献

Stuiver, M. and Reimer, P. J. 1993 Extended  $^{14}\text{C}$  database and revised CALIB3.0  $^{14}\text{C}$  Age Calibration Program.

藤根 久、1993、「尾崎遺跡」 尾崎遺跡住居址出土炭化材の樹種 PP.135-139、(財)岐阜県文化保護センター。

山田昌久、1993、「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成—用材から見た人間・植物関係史」 PP.242  
植生史研究特別第1号 植生史研究会(現日本植生史学会)。

## 第V章 まとめと考察

今回の牧野小山遺跡C地点の調査において、縦穴住居39件、掘立柱建物3棟、溝などが検出されている。縄文期、弥生期、中世の遺構・遺物を除くと、時期的中心は4世紀末、あるいは5世紀初～9世紀の非常に長い期間にわたって居住地として機能しており、また、これに伴い非常に多くの遺物が出土している。ここでは、まず最初に第Ⅲ章で考察した竪穴住居の時期ごとの選地を確認し、集落の変遷を考えてみたい。ただし、試掘調査において確認しているように、住居の展開はさらに広がりを見せているのでC地点内における変遷を考えるだけでは危険を伴うが、ある程度の概観は得ることはできるであろう。ただし、前述したように住居の年代観は、出土遺物の年代観に拠っており、住居の機能した時期に直接的に一致するものではない。その上で、住居規模・形態などについて考察する。また、中世墓についても若干まとめてみたい。次に、各時期を通して出土している土師器甕について考察する。この土師器甕については、城ヶ谷和宏氏による「尾張型」<sup>1)</sup>、永井宏幸氏による「濃尾糸甕」<sup>2)</sup>、内掘信雄氏による「濃尾型」<sup>3)</sup>と呼ばれているものである。3氏それぞれについては、出現時期などについて若干の相違はあるが、これらは木曾川水系流域を中心として7世紀中葉頃に出現し、中濃・東濃・尾張地域一帯に分布するもので、胴部外面にハケ調整をもち、底部に段をなすような境をもつ平底の甕という項目で一致し、その終焉は9世紀代とされている。この土師器甕について、今回のC地点の調査によって5世紀末～9世紀後半に至までの良好な資料を得ることができ、その変遷を明らかにすることができた。その出自が当地域を中心とする地域にあり、型式学的考察の一見地である製作・調整技法を追うことにより時期的変遷を述べる事が可能となった。故に、この甕を新たに「牧野系甕」という名称で統一し、一系統の甕として整理し、今後の基礎資料としたい。

### 1 集落の変遷

#### 【4世紀末～5世紀初】

C区東端部のSB17・18がある。2軒とも焼失家屋であったが、SB17はほとんど遺物がなく、住居形態・規模の類似性などより同期に比定しており、やや問題があるかもしれない。SB18床面直上より出土している第41図3の土師器高坏、同8・9の土師器小型壺より時期を比定したが、本住居よりカマドの両袖部を確認しており、SB17も同様である。また、SB18の右袖部分に倒れかかった状況で第41図1の土師器甕を検出している。該期にカマドをもつ例は類例がなく、はたして時期比定に問題がある可能性もあるが、唯一例として挙げておく。類例の増加を待ちたい。

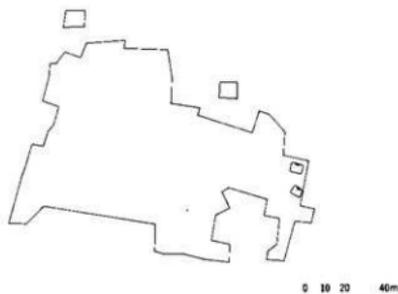
#### 【5世紀末】

西端部のSB9・10、中央部のSB30、東端部のSB25がある。大きく3つのブロックに分けられ、間に広い空間をもつ。主軸方位をやや北に向け住居を構築するが、SB25のみ主軸方位を全く逆の南に向けている。また、面積的には、SB30が非常に小型である。カマドは、SB25が良好な状況で残存する。これは壁に造り付けるもので、粘土で住居内に角に丸みをもつ方形に張り出すように構築している。SB25カマド内燃焼部より第59図10の土師器高坏をやや斜位に倒れかかった状態で検出し

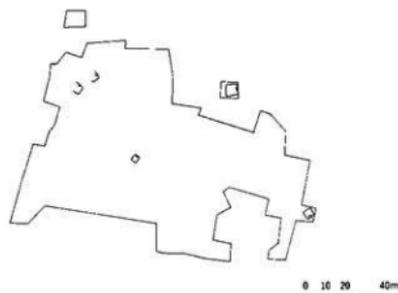
SB	主軸方位	面積	平面形	カマド位置	その他
SB17	N-28°-E	19.2	長方形	北壁	貯蔵穴B
SB25	N-13°-E	24.3	長方形	北壁	
SB 9	N-37°-E	(17.2)	方形	北壁	貯蔵穴B
SB10	N-45°-E	(14.5)	方形	北壁	
SB25	S-31°-E	16.3	方形	南壁	
SB30	N-36°-E	9.1	長方形	北壁	貯蔵穴A
SB 2	S-62°-E	11.6	長方形	東壁	貯蔵穴A
SB15	N-62°-E	11.2	方形	東壁	貯蔵穴C
SB16	N-28°-E	7.4	長方形	東壁	貯蔵穴A・C
SB19	N-68°-E	11.9	方形	東壁	貯蔵穴C
SB21	N-10°-E	19.9	方形	北壁	貯蔵穴B
SB23	N-49°-E	21.0	長方形	東壁	
SB27	N-75°-E	16.7	方形	東壁	貯蔵穴D
SB87	S-67°-E	20.4	長方形	東壁	貯蔵穴A
SB 3	N-69°-E	16.5	方形	東壁	貯蔵穴A
SB13	N-14°-E	(19.9)	長方形	北壁	貯蔵穴A
SB26	N-60°-E	29.4	方形	東壁	貯蔵穴A
SB85	S-59°-E	17.2	方形	東壁	
SB88	S-83°-E	35.2	方形	東壁	貯蔵穴A
SB 8	S-74°-E	(15.1)	長方形	東壁	
SB83	N-16°-W	(29.4)	方形	北壁	貯蔵穴A
SB 6	S-70°-E	35.9	方形	東壁	貯蔵穴A
SB 5	N- 2°-E	(15.0)	長方形	北壁	
SB89	N-12°-E	32.5	長方形	北壁	貯蔵穴A
SB 1	N- 6°-E	16.1	長方形	北壁	貯蔵穴A
SB11	N- 0°-E	8.6	長方形	北壁	
SB22	N-79°-W	17.6	長方形	西壁	
SB29	N- 6°-E	11.1	方形	北壁	
SB33	N- 2°-E	13.8	長方形	北壁	
SB32	N-10°-E	9.7	方形	北壁	貯蔵穴A
SB84	N-34°-E	14.3	方形	東壁	

注：貯蔵穴について、カマドに向かって右側に位置するものを貯蔵穴A、カマドに向かって左側に位置するものを貯蔵穴C、カマドが位置する壁に相対する壁側を入り口部と想定し、入り口部側に位置するものを貯蔵穴Bとした。なお、複数存在するものについてはその組み合わせで表記してある。他の位置のものDとしている。

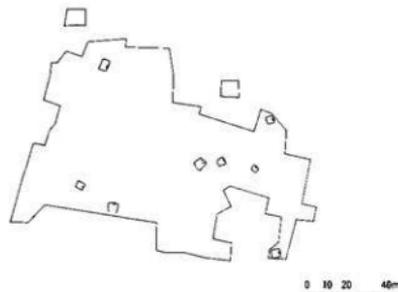
4C末～5C初



5C末



6C前半



第139図 竪穴住居変遷図1

ており、あるいは支脚として使用されていた可能性が考えられる。貯蔵穴は2軒の住居でみられるが、統一性はない。

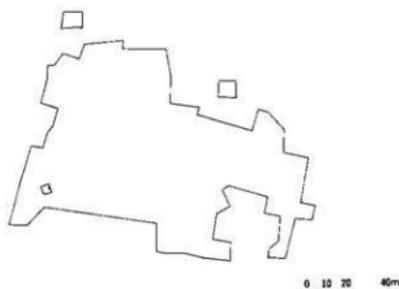
【6世紀前半】

北西部にSB87、南西部にSB2・21、東部に北からSB19、SB15・16・23、南東部にSB27が位置し、5つのブロックが想定される。ブロック間はほぼ当間隔で、集落の規模が急激に大きくなる時期でありSH1～3も位置的に該期に伴う可能性が高い。遺物は、5世紀末よりの土師器壺を主体的にもつが、土師器高坏は激減し、H-61号窯式期に比定される須恵器を若干伴う。なお、SB15はほとんど遺物がなく、SB16との住居形態・面積などの類似性から該期に比定している。主軸方位はやや東に振るものが多いが、SB2・87が大きく南に振っている。面積的には10㎡前後と20㎡前後の2分類できる。貯蔵穴はほとんどの住居がもつが、SB27のみ貯蔵穴が南壁沿いに位置している。カマドは、すべてが造り付けであり、粘土により構築し壁外へは大きな煙道部を造ることはない。SB2・21・23についてその規模の大小はあるが、カマドが良好に遺存していた。

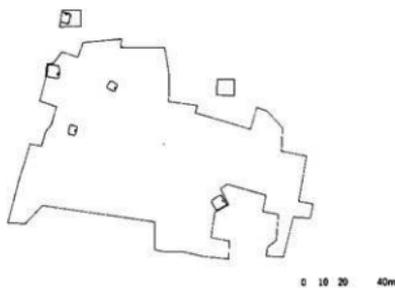
【6世紀中～後半】

6世紀後半に帰属させても問題はないが、土師器高坏が伴出しており若干古く位置付けた。SB3 1軒のみのため占地などの様相は不明である。主軸方位を東に振る。貯蔵穴A、

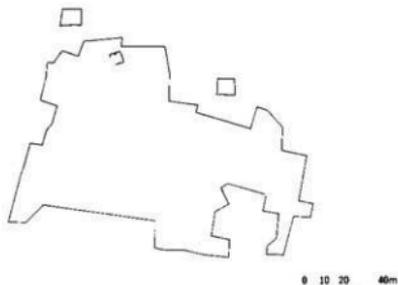
6 C中～後半



6 C後半



7 C前半



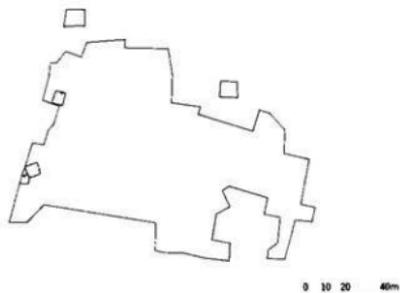
第140図 壁穴住居変遷図2

造り付けのカマドをもつが、右袖部に接するように床面より12cmほど高い狭小なテラス部分を構築している。

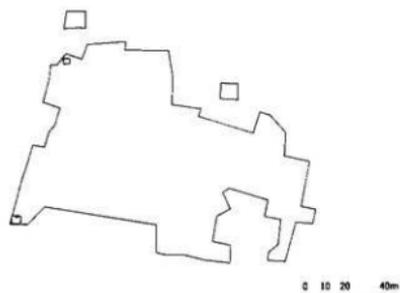
#### 【6世紀後半】

北西部に位置するSB13・85・88 東南部に位置するSB31があり、これに6世紀末に帰属するSB8を付加して考察する。また、6世紀後半～7世紀前半代に位置付けたSB31もこれに加わる可能性がある。調査区中央に大きな空間をもち、本来はC区西部、東部に広がりをもつであろう。主軸方位が東に向くもの他南に片寄るのが特徴的に認められる。面積的にはSB26・88が大きい。貯蔵穴はAタイプが多いが、その断面形態が先細りとなる。カマドはSB85に良好に遺存していた。東壁に造り付けられ粘土で方形に住居内に張り出すように構築されている。焚き口天井部には、両袖部間に扁平なサバ石（凝灰質砂岩）を橋渡ししている。燃焼部内はわずかに掘りこみ浅いピット状とし、壁をやや外方へ掘りこんで煙道部としている。その上部を灰褐色を呈する粘質土で多いカマド本体を作り出している。構築する際に粘質土内に土師器壱片、河原石などを補強材として混入させる場合もみられる。また、SB88においては、SB3でみられたような左袖部に接してカマド構築材と同じ粘質土で床面より10cm高い半方形のテラス部分を構築している。機能的には、やはり調理と関係する場を想定しておくべきであろうか。類例の増加をまちたい。

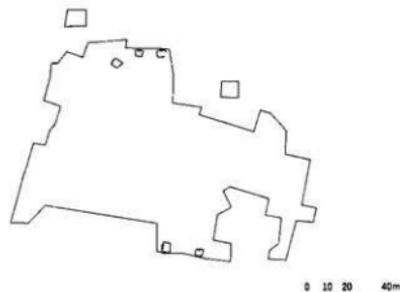
7 C後半～末



8 C前～中



8 C後半～9 C初



第141図 竪穴住居変遷図3

### 【7世紀前半】

該期は、本遺跡において非常に希薄な時期であり、C区においてもSB83の1軒のみ確認している。占地などの様相は不明である。住居内に須恵器類が多く入るようになり、土師器甕Bについては、口縁部内面のハケを残すなど製作技法の退化が始まる。主軸方位をやや西に向け、貯蔵穴Aをもつ。なお、本住居からは鉄鏃、金銅製耳環の他の住居にみられない遺物を検出している。

### 【7世紀後半～末】

西端部に位置するSB5・6・89がある。試掘調査でB区において該期の住居が多く存在し、これを考慮するならば占地的には本時期の南端部に位置するものであろう。主軸方位はSB6が大きく南に向いている。面積的には、SB5が対象区外にでるが、他の2軒は大型の部類に入る。カマドは、やはり造り付けのもので前後する時期のもので変化はない。

### 【8世紀前半】

西端部の北、南部にSB1・11がある。該期はD区に住居が多く存在し、これを考慮するとかなり距離を隔てて存在している。主軸方位はほぼ北に向けるが、面積的には大小に分かれる。SB1は貯蔵穴A、造り付けカマドをもつ。

### 【8世紀後半～9世紀初】

遺跡北部中央にSB32・33・84、南部東寄りにSB22・29がある。

また、該期はB・D区にも住居が展開しており、非常に広い範囲にわたって占地するが、その間には大きな空間をもっている。SB22以外はほぼ主軸方位を北に向ける。SB22は今回確認した住居の内唯一カマドを西壁にもつ。面積的には、いずれも小型の範疇に入り貯蔵穴をもつものが少ない。カマドはやはり造り付けのものであるが、住居面積に比例して小型となる。

以上概観してきたが、C地点においては6世紀前半に住居地としての機能を急激に広めるが、C区全体を数軒単位で5ブロックに分け占地している様相が窺われた。ブロック間の空間は耕作地としての可能性が高いと考えられるが、その証左はない。ただし、SH1～3が伴うと考えられるので一つの根拠となろう。その後、6世紀後半まえその規模は引き続くが、7世紀代には縮小する。8世紀代は主体がB・D区に移動するため規模の拡大は認められないが、本遺跡全体的な広がりとしては非常に大きなものと言えよう。C区ではみられなかったが、D区においては8世紀代に入ると住居の切り合いが顕著にみられるようになる。住居構造の一つであるカマドについては、4世紀末～5世紀初に帰属するSB18に認められ、以後9世紀代までその規模の大小はあるが、基本的には東、あるいは北壁に粘質土により造り付けのカマドを設けている。またSB2・10・25・85などのように本来のカマドの様相をとどめるものが多く、良好なカマド構造の解明資料となるであろう。SB88にみられたように、カマド軸部に接してテラス状の高台部をもつものがあり、カマドに付属する機能の場として考えられる。面積的には、6世紀後半より30㎡を超える大規模な住居が出現しており、全体的な中で占める位置が判明すれば意味を与えることが可能となろう。貯蔵穴に関しては、6世紀前半・後半に帰属する住居が保有率が高い。6世紀前半代は貯蔵穴形態には様々なものがみられるが、後半代に入ると貯蔵穴Aが主体的になる。以後、やはり貯蔵穴Aが存続するが、貯蔵穴をもつ住居、もたない住居があり、両者に主だった特徴はみられない。また、貯蔵穴の規模、断面形態には様々なものが存在する。柱穴は、基本的に4本柱と考えられる。ただし、その深度は概して浅いものが多い。各時期をとおして、本遺跡住居内に周溝は1軒も認められなかった。

## 2 土壙墓・配石墓

土壙墓・配石墓としたものは、時期的には多くが藤原朝年の7～11型式に比定され、13世紀中葉～16世紀後半にまで続くと考えられる。ただし、前述したように、SZ2（14世紀後半～16世紀後半）、SZ3（15世紀中～16世紀後半）、SZ8（15世紀中～16世紀後半）については、河原石により石室的構造——具体的には、一つの壁に対して直交する壁列を接続させ、2つの小部屋を設ける——をもつものであり、SZ3が良好な残存状況を呈している。SZ3検出時には崩れた石列群は一方の側に集中しており、意図的なものを感じる。これらは、現場での取り上げのまま中世墓として取り扱ったが、鍛冶跡など別の機能を考えるべきかもしれない。また、他の中世墓についての、土壙状のもの、配石を伴うものがあり一括できるものではない。SZ6は、やや崩れた配石をもち、主に7～8型式に比定される均質手山茶碗を多く検出しており、方形の掘りこみを呈す。SZ7・9も配石をもち、検出している均質手山茶碗は9～10型式の比定され、本来はこれらの中世墓として認識すべきであろう。

### 3 牧野系甕

#### 牧野系甕の設定

中濃・東濃・尾張地域一帯に分布し、胴部外面にハケ調整をもち、底部に段をなすような境をもつ平底の頸部外反甕であり、従来前述したように「濃尾系甕」、「濃尾型」など様々な名称が付けられている古代の土器器である。今回の調査により、その出自が東濃地域にあり、5世紀末より9世紀後半まで製作・使用されていることが確認できた（本遺跡分類寛B類→C類→D類）。ただし、時間的には1、あるいは2時期遡る可能性があり、その終焉も他遺跡では10世紀代まで確認できている。これを新たに「牧野系甕」として整理し、型式学的・見地である以下の3点の製作・調整技法をもってこの「牧野系甕」の変遷を辿り、編年を提示したい。

#### ①相欠はぎ接合

写真1～3にみられる底部と胴部の接合方法である。胴部側は内面部分にくるように、底部側は外面側にくるように器壁の半分程度の接合部分を設け、両者を接合させる方法である。永井氏により「底部内面有段接合技法」と呼称されている底部成形技法で、牧野系甕（永井氏による濃尾系甕）を最も特徴づける製作技法である。相欠はぎ接合が行われる底部と胴部部分はある程度の時間差（半乾燥状態）をもって製作されている可能性が考えられる。

#### ②平底製作技法

牧野系甕は平底甕として登場してくるが、その製作方法は、本来円底として製作した丸く突出した底部外面にリング状の粘土紐を貼付し、平底状とする製作技法である。他遺跡において多くみられる実測図においては平底としか観察できないが、しばしばリング状の粘土紐の貼付箇所がやや下位に下がり、リング状の突起として図示されているものがこれに相当すると考えられる。この製作技法によるものを平底aとし、本来平底として製作されているものを平底bとする。

#### ③口縁部成形技法

牧野系甕は頸部外反甕として特徴づけられ、従来口縁部形態、口縁端部の整形方法などによって時間の変遷が考慮されてきたが、これらでは型式学的変遷はおうことはできない。口縁部は内面に粘土を貼付して肥厚させ、その後内面にハケ調整を施す製作技法がみられる。また、初期の段階ではその後口縁内外面に強い横ナデを施し、ハケ目痕を消去するが、時間の経過とともにハケ目痕を残すようになる。粘土を貼付した際の端部の処理により口縁端部が丸くなるもの、面のなすもの、有段状となるものなど様々なバリエーションがある。

以上、3点の特徴的な製作技法の段階をおうことにより牧野系甕の消長を辿ることが可能であるが、他の伴出土器の様相、口縁・胴部形態によりこれを補足する。ただし、初段階より牧野系甕には胴部外面にナデ調整が施される甕が伴うが、非常に個別資料にバリエーションがみられ、その系統及び型式学的な変遷は現段階ではみてとれず、今回は考慮していない。

#### 〈第一期〉

今回の調査では最古の特徴を示すが、その出自は一、あるいは二時期程度遡ると考える。相欠はぎ接合、平底 a をもつが、相欠はぎ接合部分は底部より高い位置に存在する。口縁部は粘土が貼付され、貼付後ハケ調整が施されるが、その後内外面に強い横ナデが施され内面のハケ目痕、外面胴部上端のハケ目痕まで消している。相欠はぎ接合部分外面には、しばしば薄く粘土を貼付し、斜位のハケ調整を施し接合部の強化を図っている。また、相欠はぎ接合部分下位の底部外面にはハケ調整はみられず、ナデ調整などがみられ、底部と胴部が別作りで、ある程度の時間的差（半乾燥状態）をもって製作された一つの証左と考えられる。坏部が内湾する、あるいは底部に稜をもち口縁端部が外反する土師器高坏・口縁端部に内傾する面をもつ土師器坏が伴い、底部外面に木業痕をもつ小型の平底甕がある一定量存在する。

#### 〈第二期〉

技法的にはほぼ第一期を踏襲し精緻な作りである。ただし、口縁部に横ナデは施すが、ハケ目痕を残すものがしばしばみられる。また、前段階で相欠はぎ接合部のみに施されていた横・斜位ハケ調整が底部近くまで施されるものがみられるようになる。第一期の土師器高坏、坏が伴出するが、量的に減少する。

#### 〈第三期〉

相欠はぎ接合、平底 a はみられるが、相欠はぎ接合部分以下の底部外面全体に横・斜位のハケ調整が施される。口縁部内外面の横ナデが弱くなりハケ目痕を残す例が増え、胴部外面上端のハケ調整も不規則に残る例が多くなる。この期まで一部土師器高坏及び坏が残る。この期より伊勢系の甕が当地域にみられるが量的には少ない。

#### 〈第四期〉

相欠はぎ接合、平底 a はみられるが、相欠はぎ接合部分がやや 1～2 cm 程度底部近くに下がる。また、底部側の接続部分が短くなり、胴部側の接続部分にはめ込む接続方法となる。口縁部内面の横ナデが欠如し、ハケ目痕を完全に残すようになる。地域によっては胴部の長胴化が始まる時期でもあるが統一ではなく、遺跡差がみられる。他は前時期の技法を踏襲している。

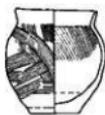
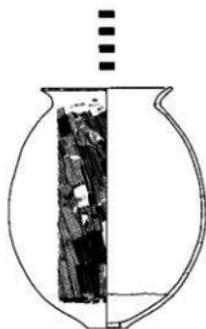
#### 〈第五期〉

大きな技法的变化として、口縁外面の横ナデと胴部外面のハケ調整の施される時間的順序が逆転し、口縁外面横ナデ後胴部のハケ調整が施される。このためハケ目痕の始まりが口縁部外面に不規則に残る。全体的にやや器壁の厚いものも存在する。相欠はぎ接合、平底 a は残る。

#### 〈第六期〉

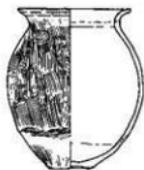
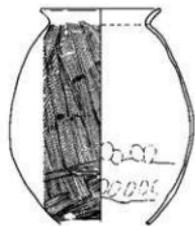
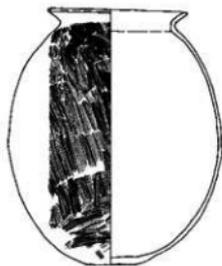
全体的な傾向として口縁部が短くなり、屈折度が強くなる。相欠はぎ接合は存在するが、接合部分はほぼ底部近くまでさがる傾向がある。平底 a が残存するが、本来の平底である平底 b がみられるようになる。口縁部外面はナデ後胴部のハケ調整が施され、口縁部内面には粗いハケ目痕を残す。胴部

第一期



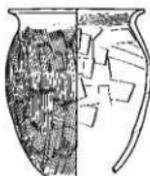
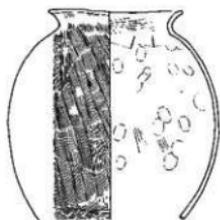
6世紀

第二期

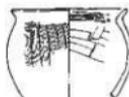
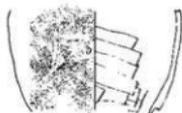


第142図 牧野系變遷圖1

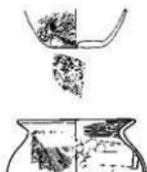
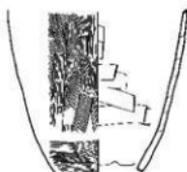
第三期



第四期



第五期

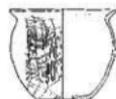


第143图 牧野系壺安瀆图 2

第六期



第七期



第144圖 牧野系甕変遷図3

第八期



第九期



第145圖 牧野系埴屋遺物4

外面のハケ目痕上端はかなりランダムとなり残存する。

#### 【第七期】

第六期の傾向を引き継ぐが、相欠はぎ接合はみられず平底のみとなる。胴部外面のはげ調整も粗く、小型品が主体的になる傾向がみとめらる。

#### 【第八期】

胴部外面のハケ目痕に特徴があり、細く深く器面に入り込む。第七期より相欠はぎ接合はみられなくなったものの胴部外面上へ中半には縦位の、底部付近には横、斜位のハケ調整を施し、相欠はぎ接合が行われていた時期のハケ調整方法の規則性のみ残している。全体的に小型品が主体的になるがしばしば大型品も存在する。10世紀代にも同壺が存在し、同様な特徴を示しており、第九期を設定することが可能と考えられる。

八期に分けその編年観を述べてきたが、前述したようにその出自は1、あるいは2時期廻る可能性が考えられ、第0期を想定しておくべきであろう。また、10世紀代においても重竹遺跡 SB43号、船山北2号窯灰原において牧野系壺が存在し、第九期をおくべきであろう。なお、伴出している須恵器などより第一期が5世紀末、第二・三期が6世紀前半・後半、第四・五期が7世紀前半・後半、第六・七期が8世紀前半・後半、第八期が9世紀として考えているがさらなる細分も可能と考えている。

東濃地域における他の遺跡を概観してみると、5世紀末に帰属する阿曾田遺跡（中津川市）のSB60A号住居に同例がみられ、6世紀前半の大野吾遺跡（恵那市）例に良好な資料が存在する。牧野系壺の内面調整は多くが板ナデ、指頭圧痕を残すが、大野吾遺跡においては内面にハケ調整を施す牧野系壺をもつ住居が存在する。東山浦遺跡（富加町）が7世紀中葉より8世紀中葉まで、川合遺跡（可児市）が7世紀後葉より8世紀前葉まで、根本遺跡（多治見市）が7世紀前半、7世紀後半～8世紀初まで、また、対岸の位置する宮之脇遺跡A地点では5世紀末以降ほぼ同様な変遷を辿るが、7世紀以後胴部の長胴化が著しく本遺跡と異なる傾向をもつ。三井遺跡（各務原市）では、7世紀後葉より9世紀後半まで、重竹遺跡では、7世紀後葉より10世紀代まで同様な変遷を辿るが、高遺跡については垂伊勢系壺の壺が量をやや多くして入り込み、牧野系壺分布域の西端の様相を示す。尾張地域へは7世紀末より拡散を始めるとされているが、周辺地域の様相及び詳細については別の機軸に論じたい。ただし、概観したようにこれらの地域における牧野系壺はほぼ先に示した変遷の中で考えることが可能であり、この牧野系壺の変遷・拡散、他系統の壺との在り方などのもつ意味を改めて考え直す必要がある。

#### 参考文献

- 1) 城ヶ谷和宏 1990 「古代尾張の土師器～6世紀後半～11世紀の様相～」『年報－平成2年度』(愛知県埋蔵文化センター)
- 2) 永井宏幸 1996 「尾張平野を中心とした古代煮沸具の変遷」『鍋と壺－そのデザイナー－』(第四回東海考古学フォーラム資料集)
- 3) 内堀信雄・井川祥子 1996 「美濃における古代土師器煮沸具の様相」『鍋と壺－そのデザイナー－』(第四回東

- 4) 前述の文献中の内堀信雄・井川祥子氏の非北野系と呼称するものと一致する。

〈参考文献〉

- 中津川市教育委員会 「阿曾田遺跡発掘調査報告書—阿木川ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査」1985
- 関市教育委員会 「重竹 —その2— 岐阜県関市下有地土地改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」1981
- 恵那市教育委員会 「阿木川川関係遺跡発掘調査報告書 花無山遺跡（大野吾遺跡）茶店遺跡跡」1982
- 美濃加茂市教育委員会 「牧野小山遺跡 県道七宗可見先道路工事埋蔵文化財調査報告書」1973
- 可見市教育委員会 「川合遺跡群 川合地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書」1994
- 岐阜県教育委員会 「三井・六軒遺跡 一般国道21号那加バイパス建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告書」1972
- 富加町教育委員会 「東山浦遺跡 庁舎建設内埋蔵文化財発掘長報告書」1978
- 岐阜県教育委員会・美濃加茂市教育委員会 「今遺跡 県道可見金山線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」  
1978
- 岐阜県教育委員会・可見町教育委員会 「川合遺跡発掘調査報告書」1978
- 佐野康雄 「牧野小山遺跡発掘調査概報」副岐阜県文化財保護センター 1996
- 多治見市教育委員会 「根本遺跡 一般国道248号道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」1995
- 各務原市教育委員会 「美濃須衛古窯跡群資料調査報告書」1979
- 尾野善裕 「猿投窯6世紀の空白をめぐる」『考古学フォーラム』3 1993
- 斎藤孝正 「須恵器の編年 4 東海」『古墳時代の研究』6 1991  
「猿投・美濃須衛」『季刊 考古学』43 1993
- 渡辺博人 「美濃の後期古墳出土づの棟相—蓋坏の型式設定とその編年思索—」『美濃の考古学』創刊号 1996
- 東海考古学フォーラム編 「鍋と甕—そのデザイン—」第四回東海考古学フォーラム資料集 1996

## 付編 牧野小山遺跡試掘調査出土遺物

### 1 はじめに

1995年度において緑ヶ丘苗畑跡地利用事業に先立ち遺跡全体を対象とした試掘調査が実施され、その成果は概報として報告されている(佐野 1996)。報告は竪穴住居を中心とする遺構の分布状況を中心としたものであり、ほぼ対象地域全面に遺構が展開すること、その中心が5世紀後半～9世紀後半と非常に長期にわたる竪穴住居群で構成され、遺跡＝集落という性格をもつ遺跡であるというものであった。また、この竪穴住居群は時期的に占有地点を変え移動している可能性があることが予測されている。ただし、出土遺物に関しては時間的制約のため概略を紹介したのにとどまり、具体的に竪穴住居の移動などの根拠を述べる用意がなかった。今回のC区の調査において、古墳時代後期～古代の土師器甕の変遷が明確となり、特にその後半部分である8世紀後半～9世紀後半に帰属する良好な資料がD区に集中しており、当地域における土師器甕編年観をより充実させるための重要な資料となると考えた。そこで今回の整理に伴い再整理を行い、A・B・D区の出土資料をここで紹介したい。なお、SB5～25はA区に、SB54～66はB区に、SB105～123はD区に位置する。これらの竪穴住居はほぼC区でみられたものと同様な遺存状態、構造をもつ。ただし、5世紀後半～6世紀代に帰属する住居はA区に多くが集中し、7世紀後半～8世紀後半に帰属する竪穴住居はC・D区集中する傾向が窺われ、最初に予測した通りA区→C・D区(遺跡南部→北部)へという集落選地の移動が確認できた。また、B・D区に所在する8世紀後半～9世紀前半代に帰属する竪穴住居群(SB65・66、108・109など)には他の時期にはみられなかった住居の複雑な切り合い関係が認められ、この要因については、何らかの理由が求められると考える。

### 2 出土遺物

#### SB5(第146・147図)

1は須恵器坏蓋であり、天井部はやや扁平気味だがH-11窯期に比定される。土師器甕B類が多く出土している(2～7)。これらのL縁部は強い横ナデが施され、L縁部内面に施されたハケ調整を残さない。また、底部の高い位置での相欠はぎ接合がみられ、底部はリング状粘土紐を貼付し平底とした平底aである。土師器甕B類と伴に小型のナデ調整の甕である土師器甕H類(8～10)、坏底部に段、あるいは稜をもつ土師器高坏(11～13)が伴う。この高坏の脚部は屈折、あるいは緩やかに広がる裾部をもつが、柱状部と裾部は別々の調整が施されている。

#### SB6(第148・149図)

1の宇田型甕は、北壁に沿い床面直上に直立した状態で検出している。土師器甕B類(2)1点の他は土師器甕E類及びH類を伴出している。3は底部に粘土を貼付し、狭小な平底aとしている。また、土師器高坏は坏部が碗状となるものが主体である。8は土師器坏であり、L縁端部に内傾する面をもつ。須恵器坏蓋(16)、甕(17)は8世紀前半代に帰属するもので混入であり、住居の帰属する時期に須恵器類は伴出していない。

#### SB7 (第149図)

2・3は口縁部破片であるが、口縁部内外の調整から土師器甕B類と考えられる。口縁部資料が多いが、坏底部に稜をもつ高坏、あるいは椀状となる高坏の両者が伴出しており、SB5の様相と近いものと考えられるが、宇田型甕はない。また、高坏の脚部については、柱状部内面にはケズリが、裾部にはナデという別々の調整が施されている。他には、土師器甕E類・H類及び台付甕の脚部が出土している。

#### SB8 (第150図)

1の須恵器坏蓋はH-11窯式期に比定され、混入であろう。2・3の須恵器坏身、4の短頸壺、5の提瓶はH-44窯式期に比定され、住居の帰属時期と考えたい。短頸壺は底部外面にヘラ記号をもつ。土師器甕はB類がみられ、8は相欠はぎ接合部分の割れであり、上部の接合部分が残存している。9は滑石製の紡錘車であり、鋸歯文がみられる。

#### SB9 (第150～152図)

1～3の須恵器坏身、高坏は城山-2号窯式期に比定できよう。土師器甕B類(4～6、10～17)が主体的に出土しており、坏底部に稜をもち、柱状部内面と裾部に別の調整が施される土師器高坏が伴出している。土師器甕B類は、口縁部の調整、相欠はぎ接合、平底aといった典型的な特徴をもつが、相欠はぎ接合部以下の底部資料外面はナデ調整のみであり、上位部分との相欠はぎ接合箇所に横ハケが施されており、それより上部の胴部の縦位のハケ調整は底部部分まで及んでいない。これは相欠はぎ接合部分を挟んでそれぞれの部分がある程度の時間幅をもって製作され、接合されたことの証左になると考えられる。

#### SB13 (第153図)

1の須恵器脚付盤は8世紀後葉に帰属するものであろう。2・3の須恵器坏蓋、7の甕は美濃須衛窯産である。5・6は壺の底部と考えられる。土師器甕はD類が主体的に伴う。甕D類は口縁部は短く外折し、粗いハケ調整が行われる。10のようにハケ目間隔が広く、非常に薄い器壁のものも現れてくる。土師器甕G2類は、6世紀より存続する底部外面に木葉痕をもつ小型平底甕であるが、胴部外面に施されるハケ調整は粗い。また、底径は大きく、相欠はぎ接合はみられない。16・17と2点の製塩土器を検出している。

#### SB14 (第154図)

1・2はOB-1期、3はNN-32期に比定される。4の須恵器有台坏、5の無台坏は8世紀後半までは下らないと考えられる。土師器甕はC類、D類、G2類がみられる。7の甕には相欠はぎ接合が認められるが、その接合部位はほぼ底部付近まで下がっている。1点の製塩土器(9)を検出している。

#### SB25 (第154図)

土師器甕E類・H類の他は良好な資料はないが、土師器高坏の存在からSB5、7と併行、あるいは

はやや時期の下る時期に帰属すると考えられる。

#### S B 54 (第155図)

1の須恵器有台坏、2の甕は8世紀代に帰属する。土師器甕は口縁部資料が多いが、D類・G2類が主体を占める。口縁部は短く外折し、粗いハケ調整が施される。底径の大きい平底bとなる。なお、14の小型甕底部外面には木葉痕がみられるが、整ったものではない。

#### S B 62 (第155・156図)

1～5の須恵器無台坏、6～9の須恵器坏蓋類は美濃須衛窯産、狭狭窯産の両者がみられるが、いずれも8世紀前半に帰属する。10の甕はやや時期的に古く7世紀後葉代に帰属し、混入である。土師器甕D類が主体を占めるが、15は口縁部にやや丁寧な調整が認められ土師器甕C類～D類への過渡的様相をもつ。また、16のような器壁が薄くハケ日間隔が広い甕が現れてくる。

#### S B 63 (第156図)

1の須恵器無台坏は7世紀後半代、2・3の須恵器甕は7世紀代のものであろう。土師器甕はC類・G1類が出土しており、伴出している須恵器類と時期的には問題はない。土師器甕C類は口縁部内面のハケ調整を残すものが特徴である。

#### S B 64 (第157・158図)

須恵器類は坏蓋(1～6)、坏身(7)、有台坏(8・9)、無台坏(10)、有台盤(12)、碗(11)、甕(13・15)、広口瓶(14)、短頸壺(25)、壺(26・27)、把手付太頸瓶(24)がある。時期的には7世紀より9世紀中までにわたるが、主体を占めるのは8世紀後半～9世紀前葉ものである。また、K-90窯式期に比定できる灰釉の碗(16～23)がまとまって出土している。土師器甕はG2類が出土しているが、大型品はなく小型品中心となる。施されるハケ調整は粗い。また、底部付近に相欠はぎ接合はないものや、歪み部分をもたせ、斜・横位のハケ調整が施され9世紀代の製作技術的特徴考えられる。

#### S B 65 (第159図)

5の須恵器坏身は7世紀前半、6の無台坏、8の小型甕は7世紀後半～8世紀前葉と考えられ、時期的にやや遅る資料で混入である。他は、美濃須衛窯産と考えられる有台坏(1～4)、坏蓋(7)は栗河1号窯に類似資料があり、8世紀後半代と考えられる。土師器甕1点が出土しているが、器壁は厚く細かいハケ調整がみられ、分類中のものには該当例がなくI類としておく。

#### S B 66 (第159～161図)

須恵器は坏蓋(1・2)、有台坏(3・4・6)、無台坏(5)、有台盤(7～9)があるが、8世紀末～9世紀中葉に帰属する。土師器甕D類・G2類が出土しているが、10の小型甕は精緻な作出である。15は底部外面にややくずれた木葉痕をもつ。また、16には相欠はぎ接合はみられず、底径の小さな平底bをもつ。大型甕が非常に薄手となっているのが特徴的である。1点のみ鉄製の紡錘車が出土している。

S B 105 (第161図)

1は美濃須衛窯産の坏蓋であり、8世紀後半の資料である。土師器甕は口縁部の製作技術、胴部のハケ調整、器厚からC類に分類できる。

S B 106 (第162図)

1の須恵器短頸壺、2の有台坏とも猿投窯産と考えられ、8世紀初めに帰属する。土師器甕は、D類・G 2類が主体であり、口縁部は短く外折し粗いハケ調整を施し、平底bとなる。9の小型甕には相欠はぎ接合がみられるが、底部に近い部分に接合部が存在する。

S B 108 (第162・163図)

1の須恵器有台坏、2の甕とも美濃須衛窯産と考えられ、8世紀後半に帰属する資料である。土師器甕はD類・G 2類がみられ、6は径の大きい平底bをもつ。内面には板ナデが施される。

S B 109 (第163・164図)

6の須恵器無台坏、8の短頸壺、9の台付長頸瓶は8世紀前半代に帰属する資料である。1～3の坏蓋、4・5の有台坏、10の甕は美濃須衛窯産であり、8世紀後葉に帰属する資料である。7の無台坏は底部資料で詳細は不明であるが、少なくとも8世紀代のものであろう。土師器甕はD類・G 2類が主体であり、16・17はハケ目間隔が広く特徴的である。また、17にはほぼ底部一段目部分に相欠はぎ接合がみられる。

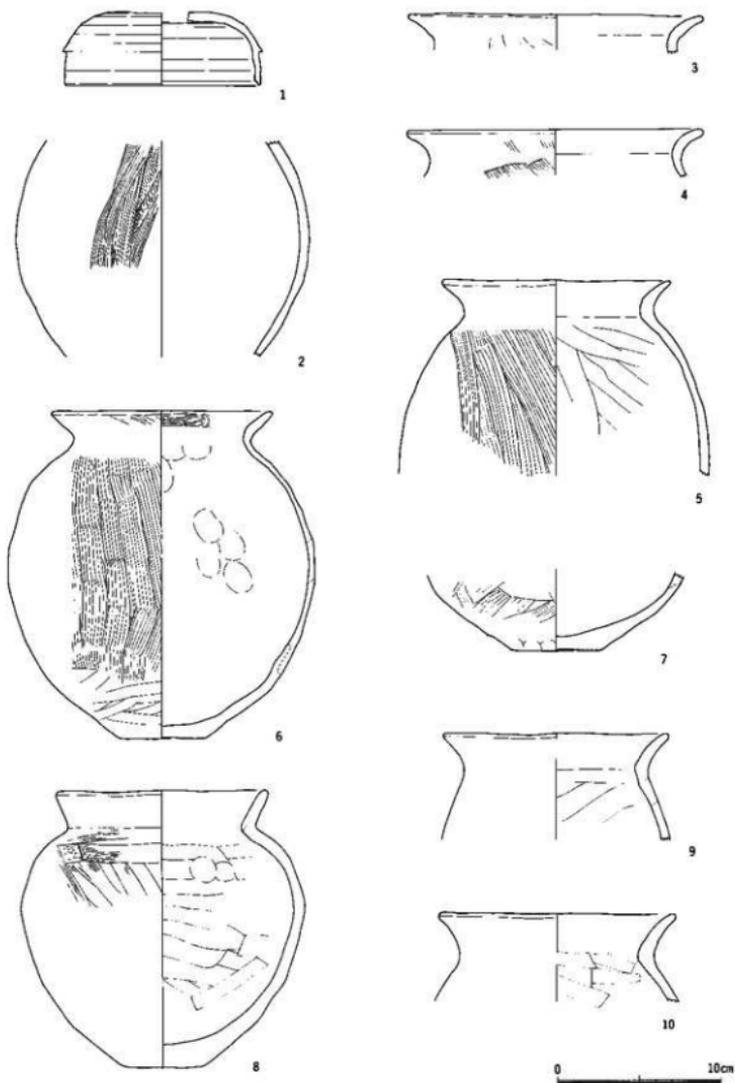
S B 113 (第164図)

須恵器類は時期幅のあるものが出土している。4の短脚高坏は7世紀前半代に、1・3の無台坏は8世紀前半代に、2の無台坏は8世紀後半にそれぞれ帰属する。土師器甕はD類・G 2類がみられ、その特徴から少なくとも8世紀を遡ることはないと考えられる。

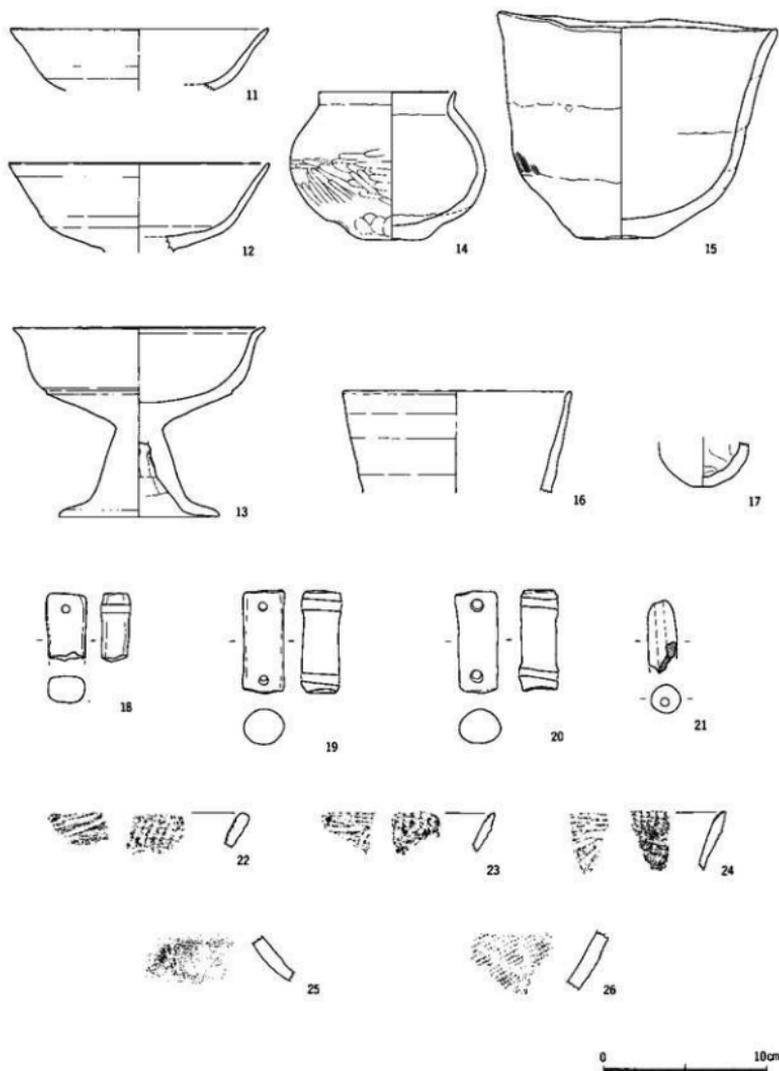
S B 123 (第165図)

須恵器類は美濃須衛窯と猿投産が相半ばして出土している。時期的には7世紀中葉～8世紀前葉に帰属すると考えられる坏蓋(1・3・5)、有台坏(7～10)、無台坏(12・13)、高坏(14・15)と8世紀後半に帰属すると考えられる坏蓋(2・4・6)に大きく分かれるが、後者は混入であろう。11は口縁部資料であるが有台坏と考えられ、下つても8世紀前半代までであろう。また、13の無台坏底部外面には墨書がみられる。土師器甕はC類・G 1類があり、底部接合方法としての相欠はぎ接合が認められるが、その位置が下がり底部に非常に近い部分で行われている。口縁部は短く、非常に粗いハケ調整が特徴的である。21の小型甕底部外面には木葉痕がみられる。また、1点製塩土器(23)が出土しており、口縁部外面に指頭圧痕が認められる。

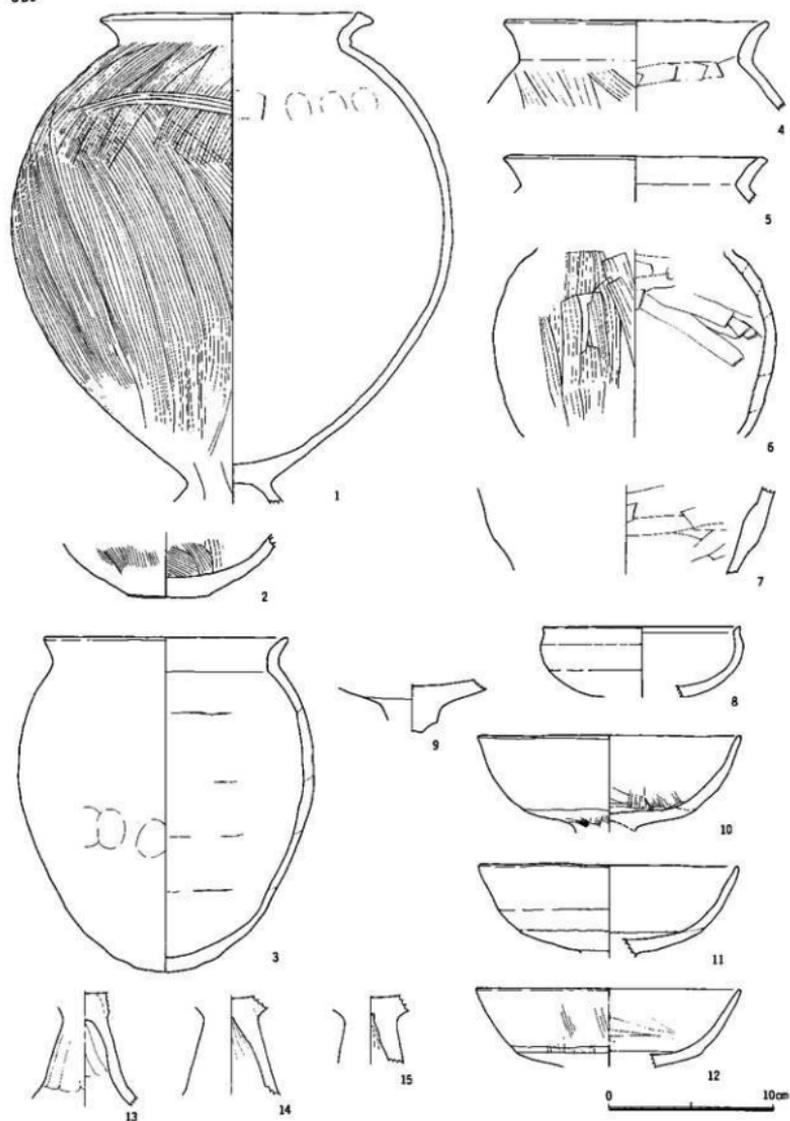
SB5



第146图 SB出土器物实测图1

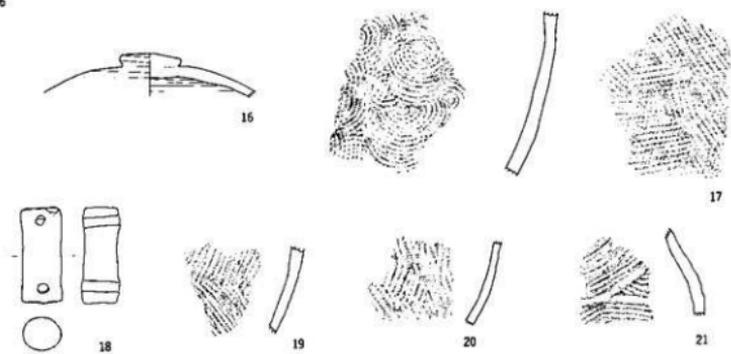


第147图 SB出土遺物実測図2

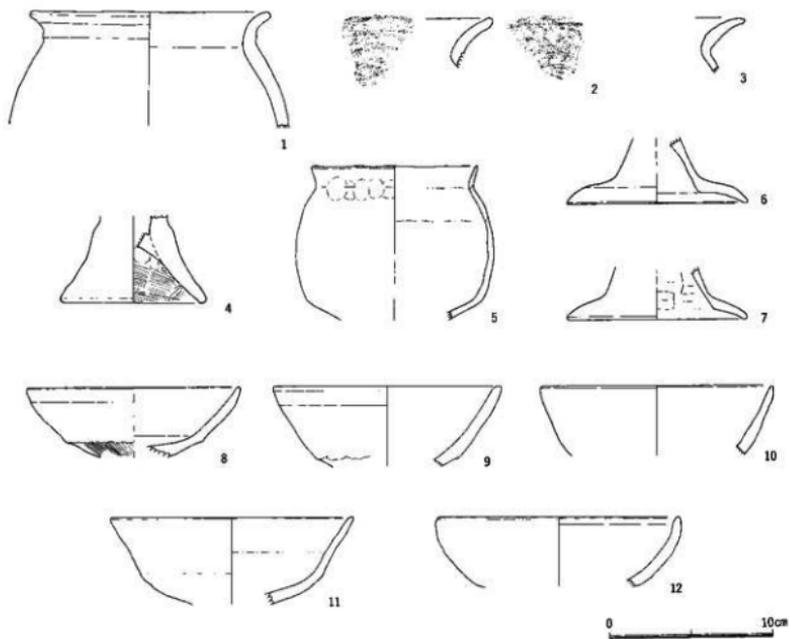


第148図 SB出土遺物実測図3

SB6



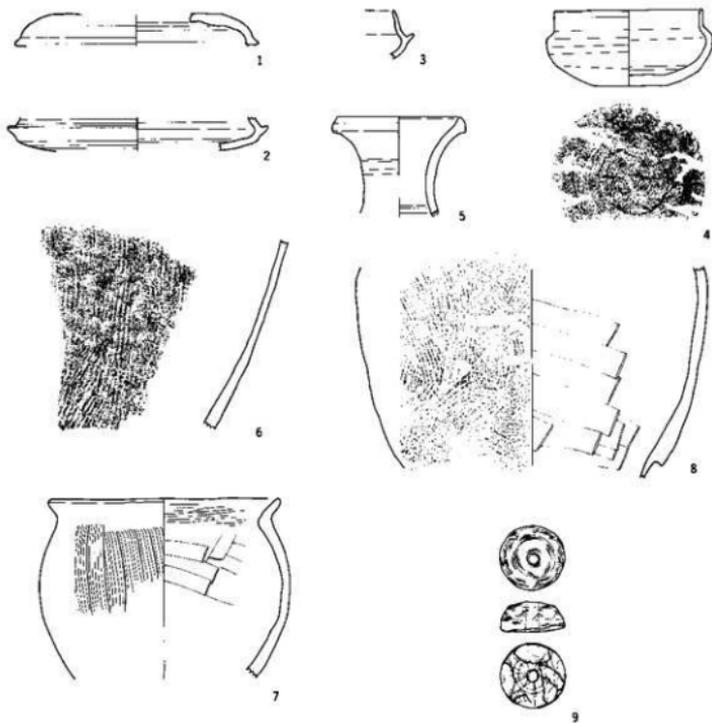
SB7



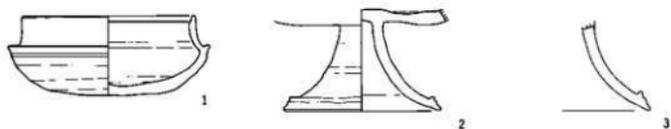
0 10cm

第149图 SB出土遗物实测图4

SB8

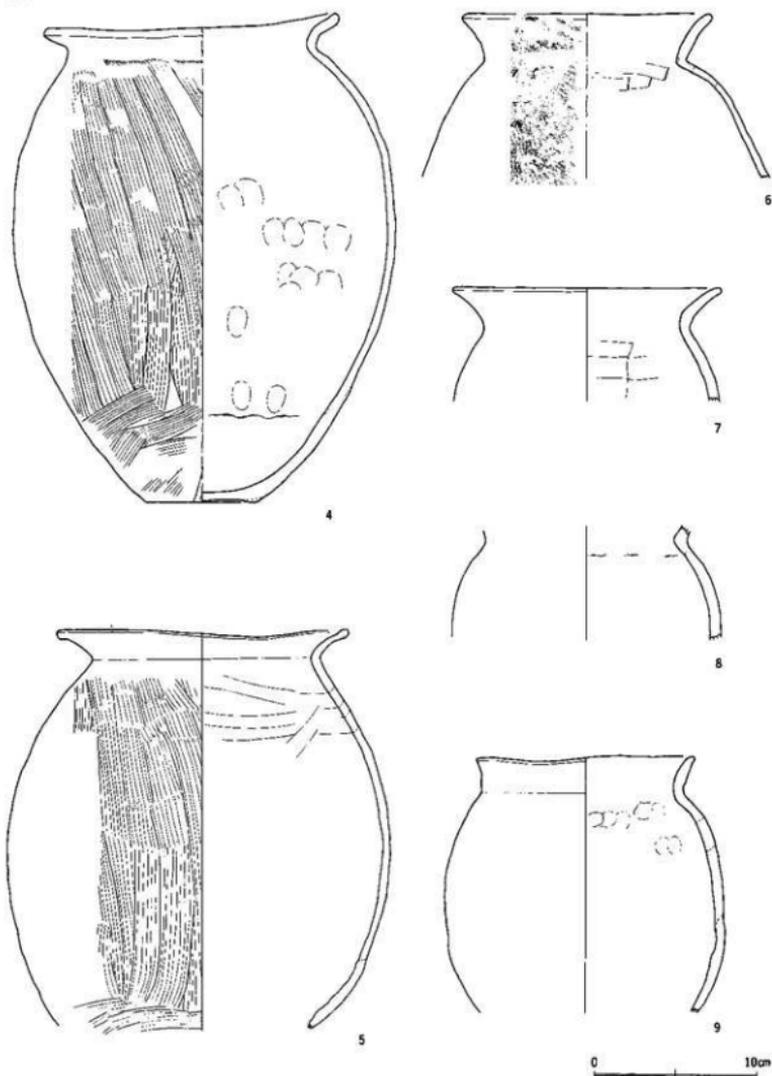


SB9

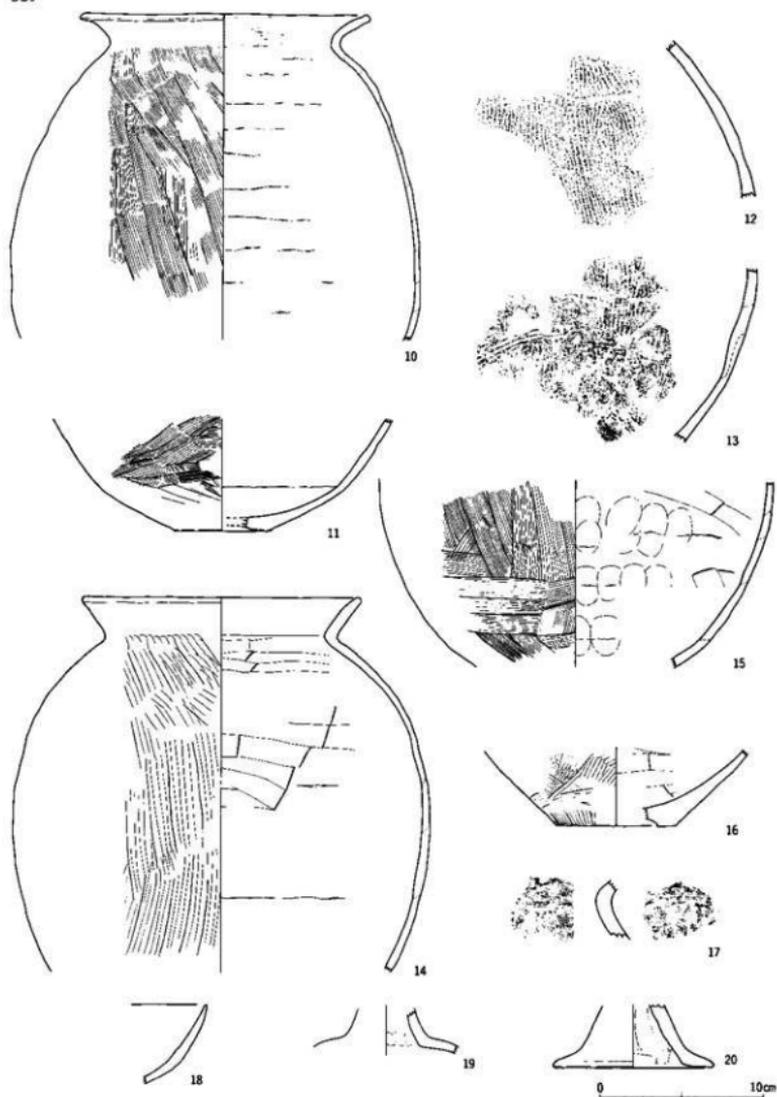


0 10cm

第150图 SB出土遺物実測図5

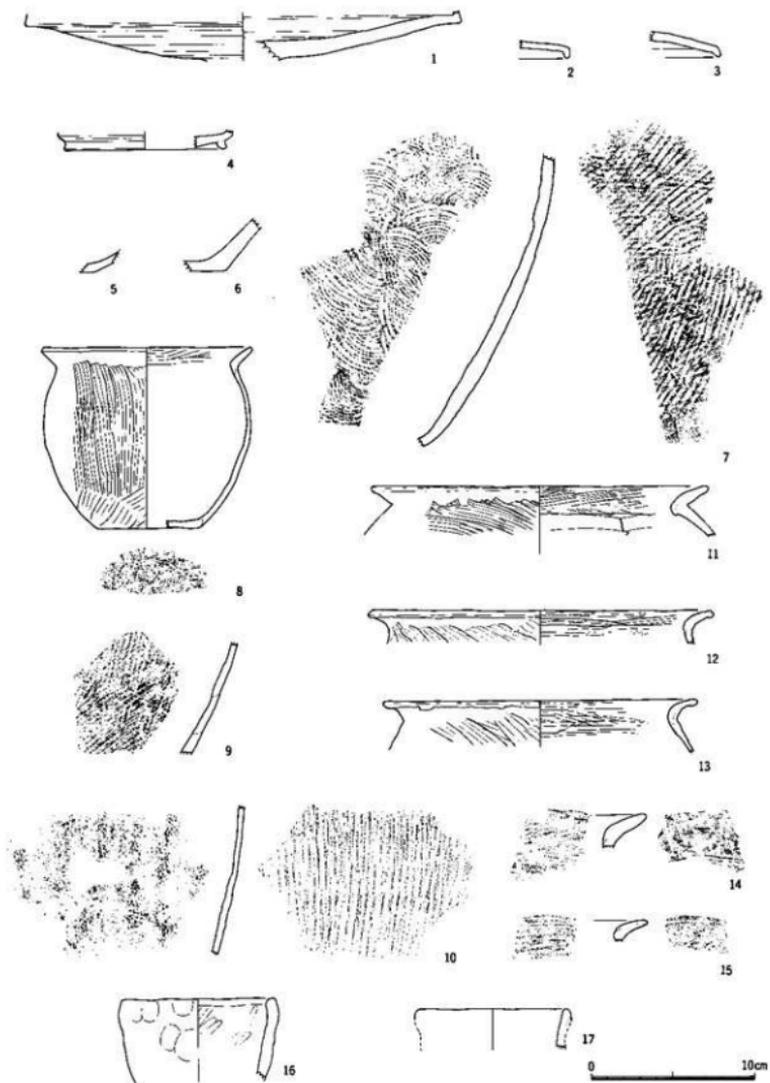


第151图 SB出土文物实例图6



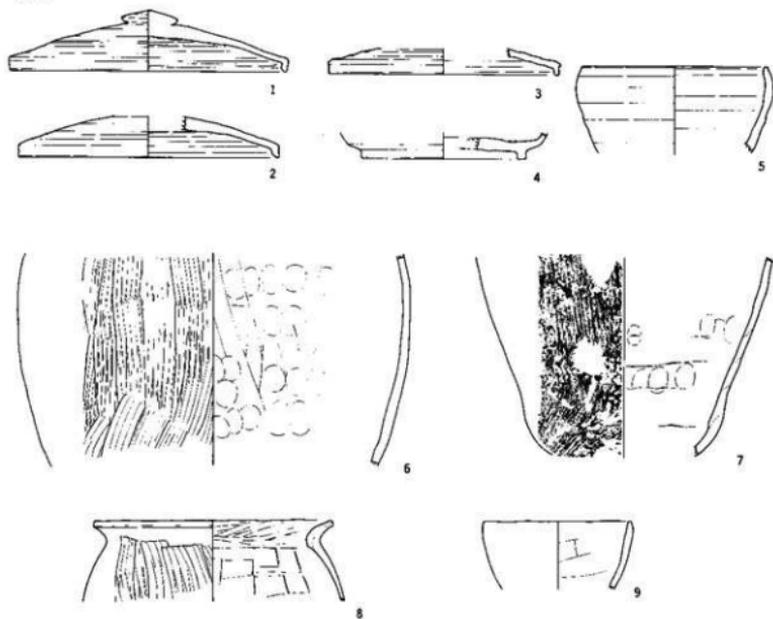
第152图 S8出土遺物実測図7

SB13

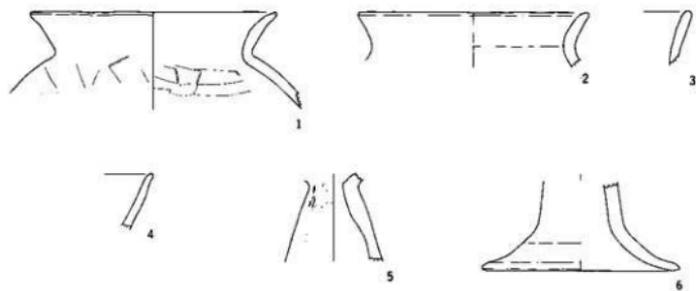


第153图 SB出土遺物実測図8

SB14



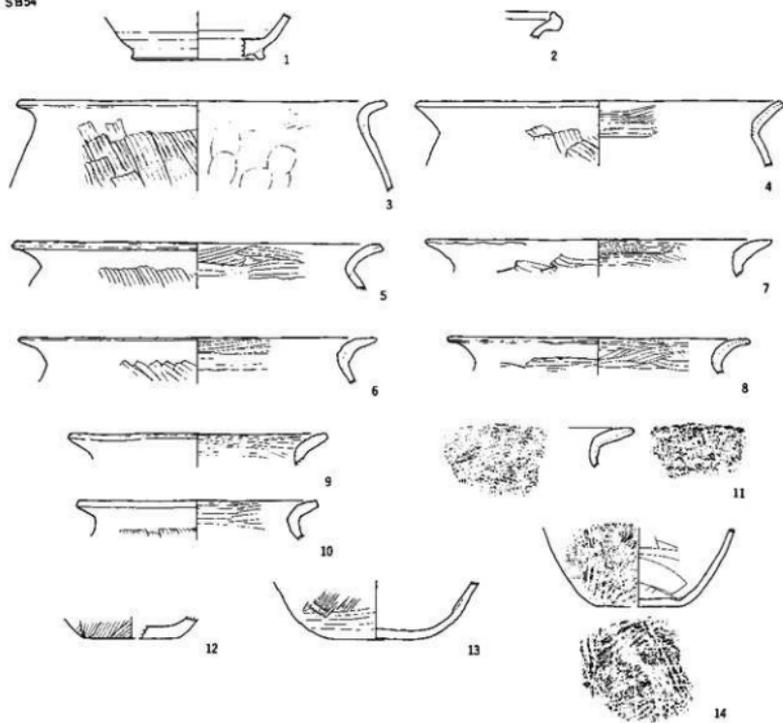
SB25



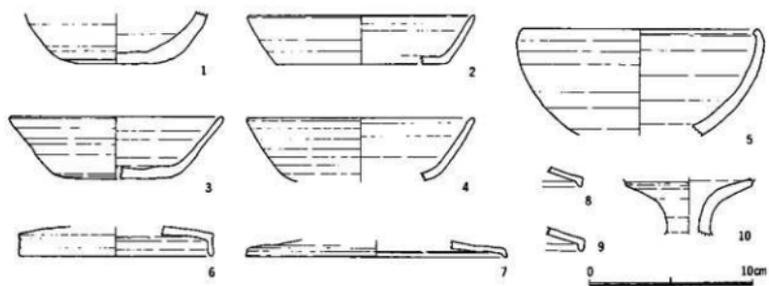
0 10cm

第154圖 SB出土遺物実測図9

SB54

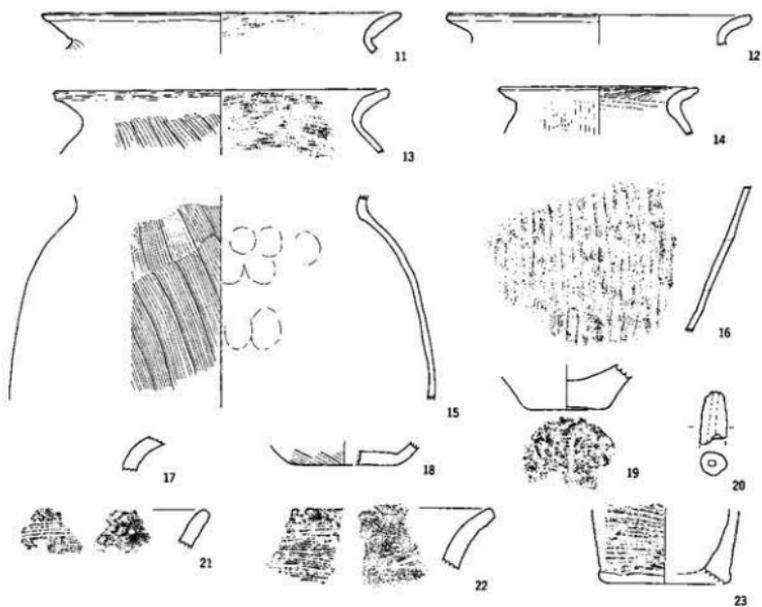


SB62

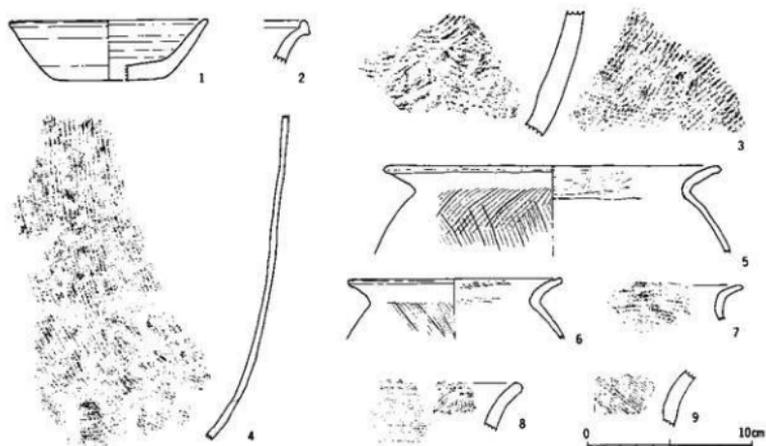


第155图 SB出土遺物実測図10

SB62

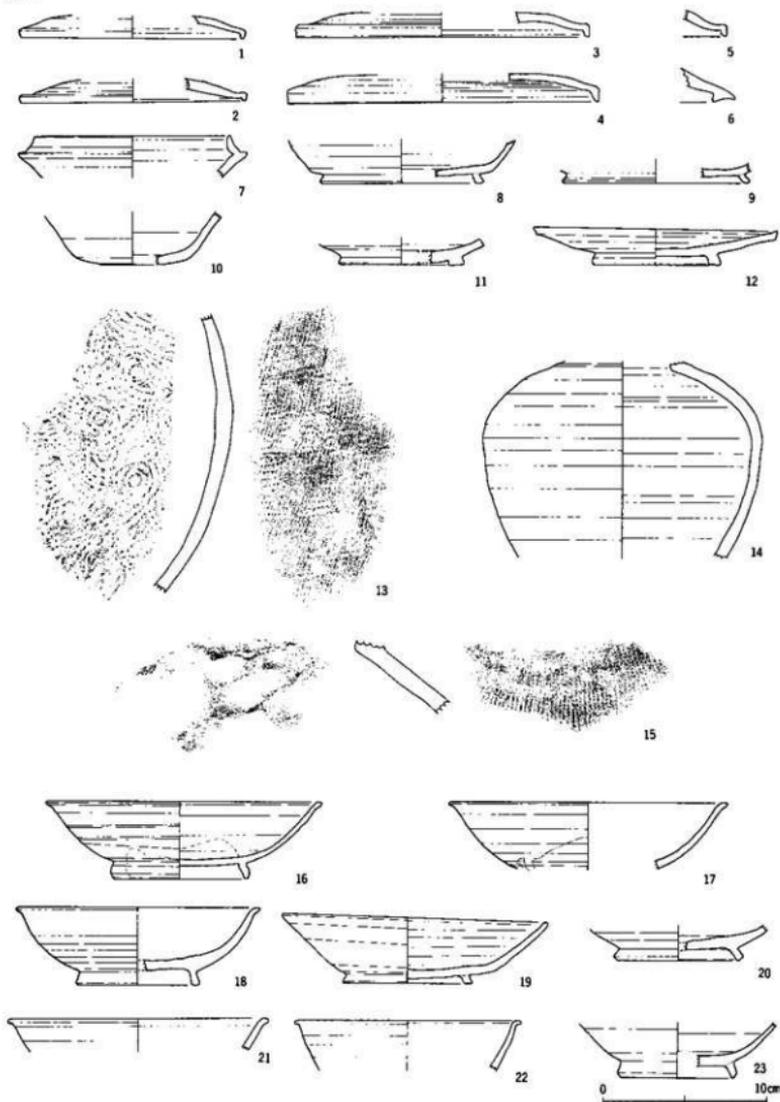


SB63

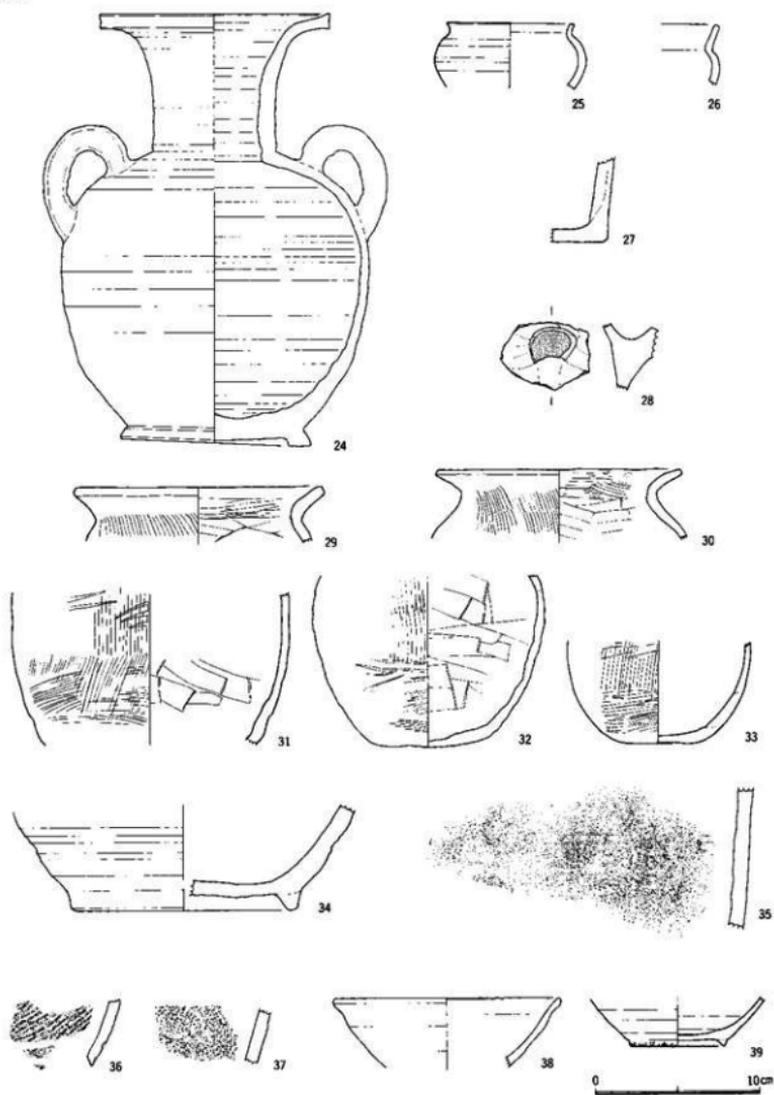


第156图 SB出土遺物実測図11

SB64

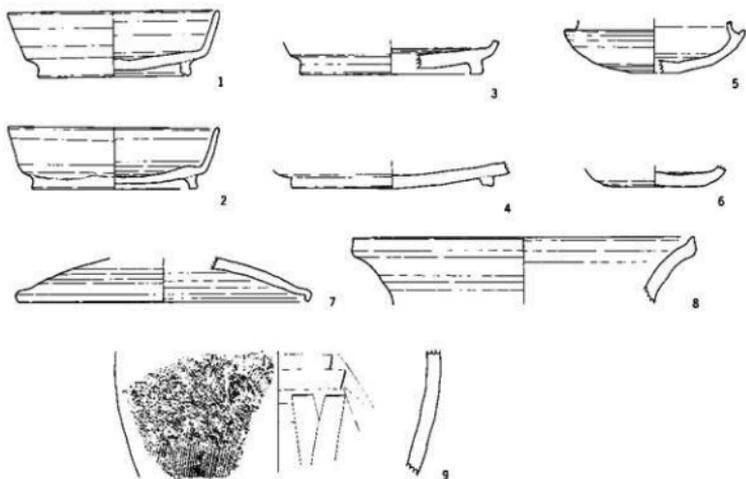


第157图 SB出土遗物实测图12

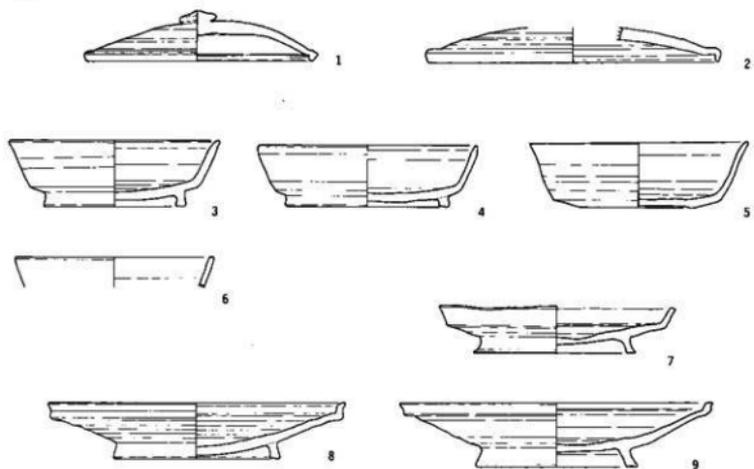


第158图 SB出土遗物实测图13

SB65



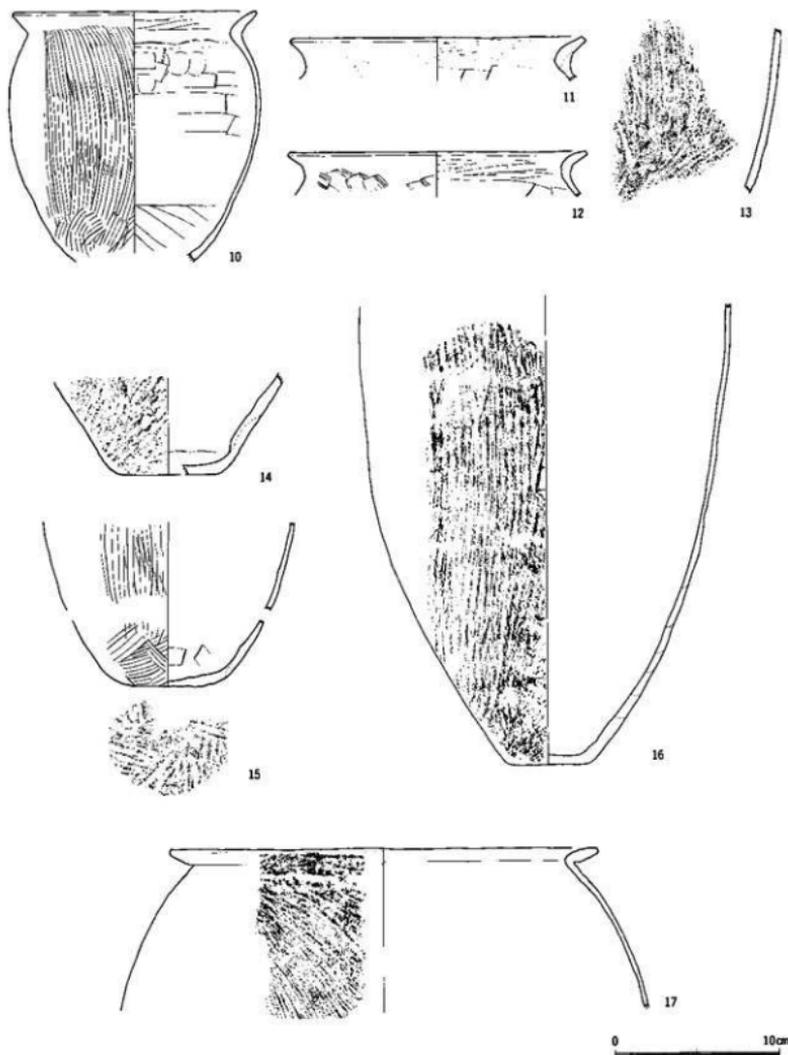
SB66



0 10cm

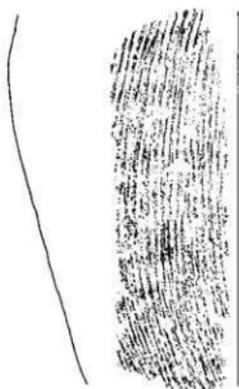
第159图 SB出土文物实测图14

SB66



第160圖 SB出土遺物実測図15

SB66



18

19

SB105



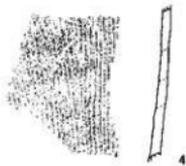
1



2



3



4

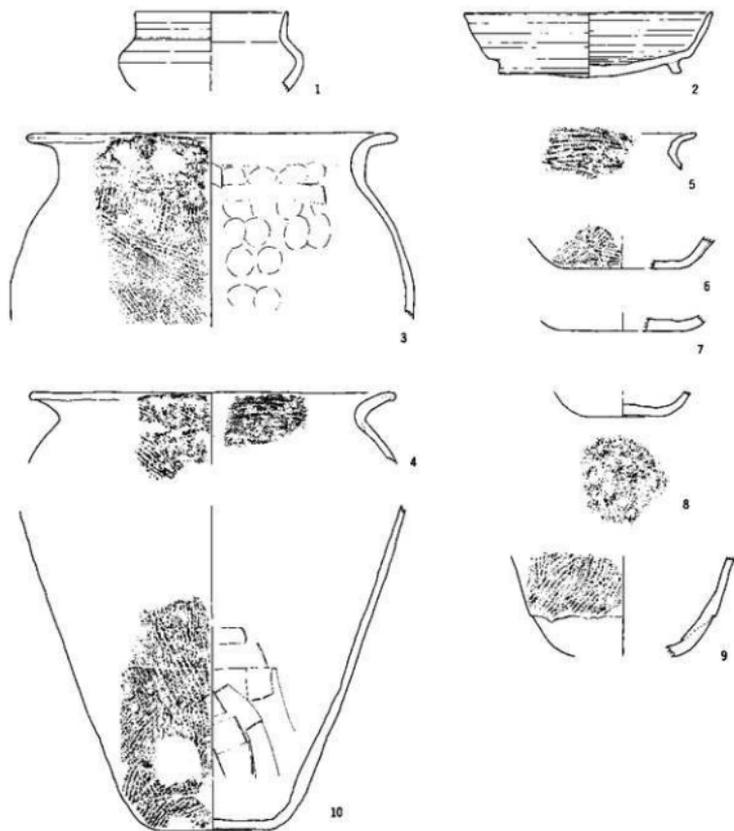


5

0 10cm

第161图 SB出土遺物実測図16

SB106

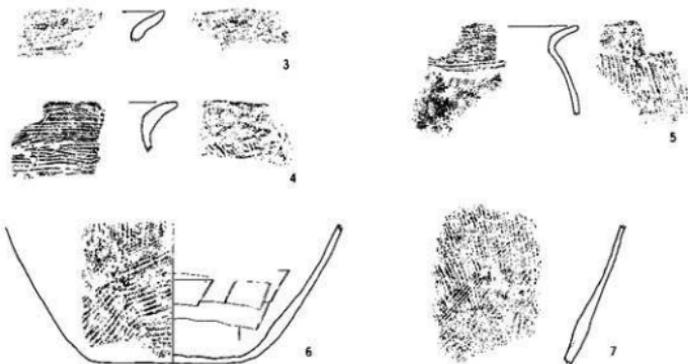


SB106

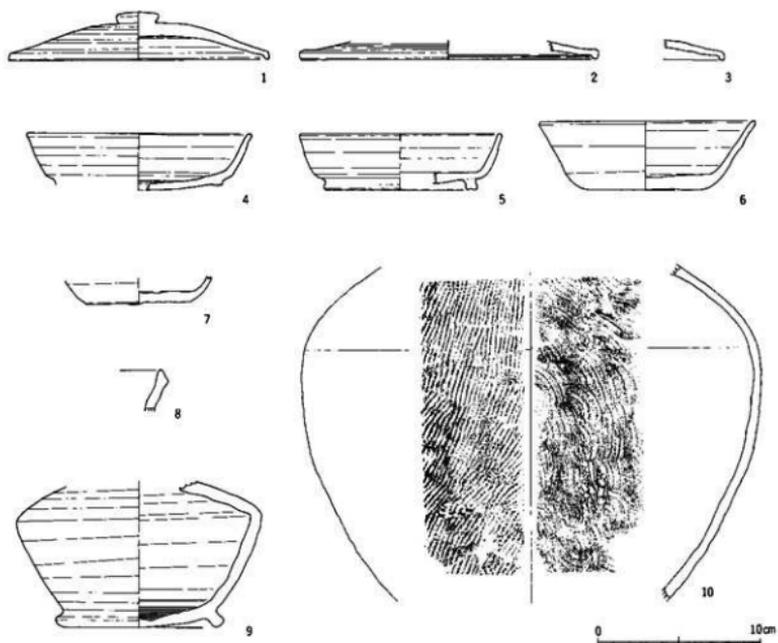


第162图 SB出土遺物実測図17

SB108

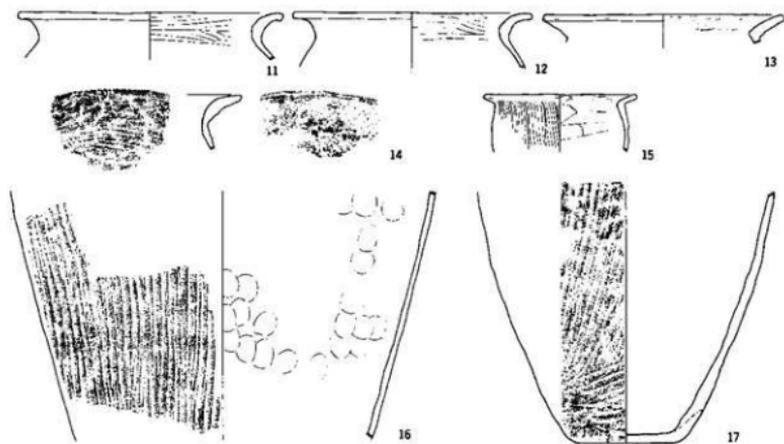


SB109

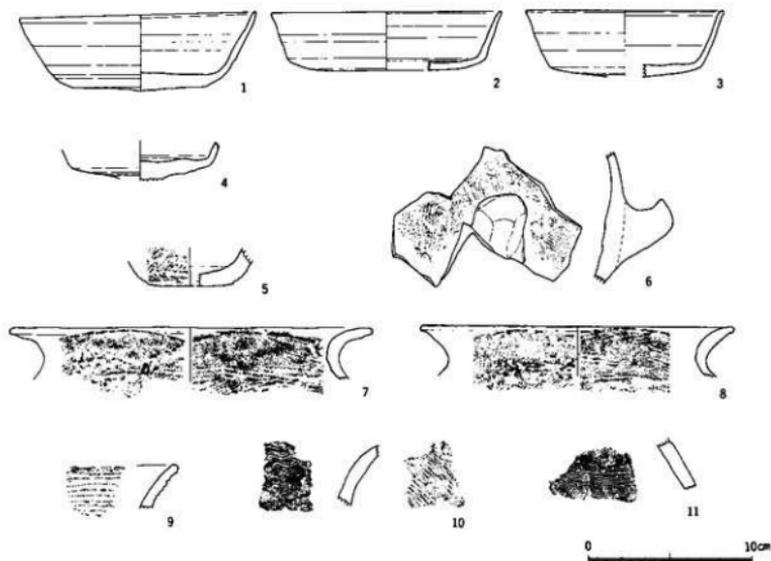


第163图 SB出土遺物実測図18

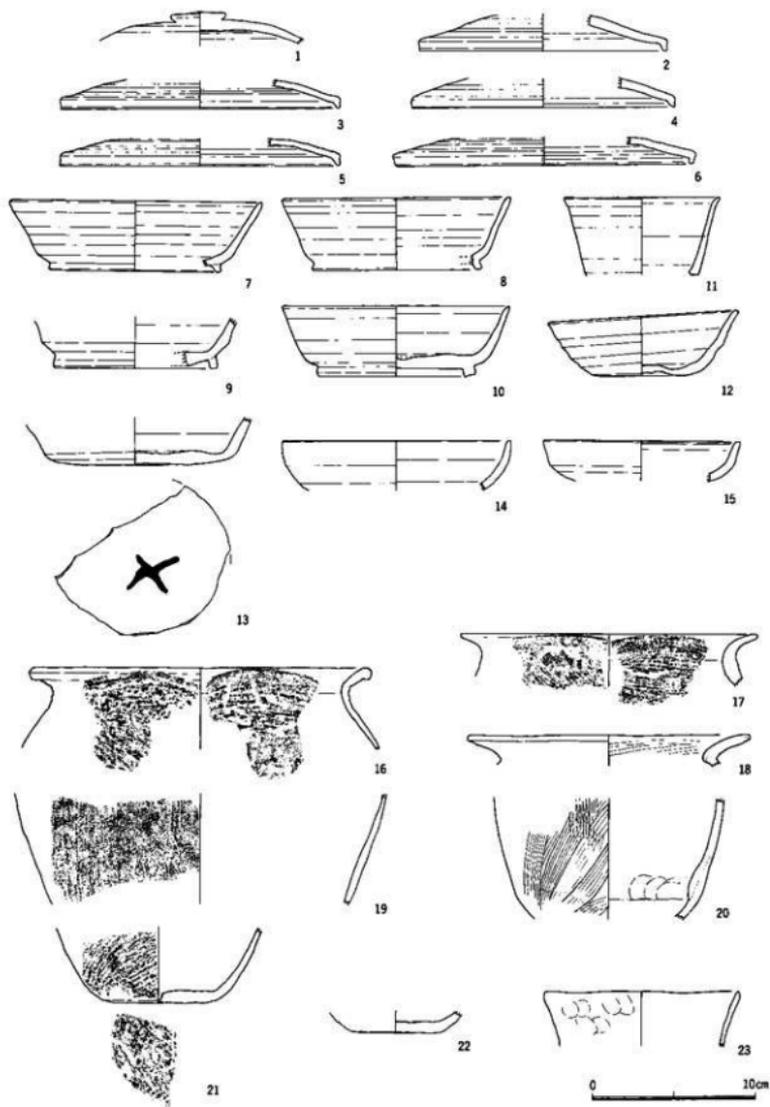
SB109



SB113



第164图 SB出土遺物実測図19

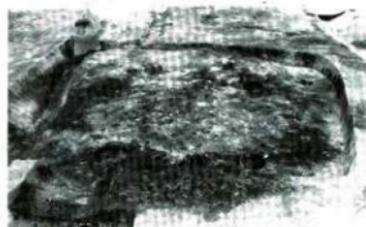


第165図 SB出土遺物実測図20

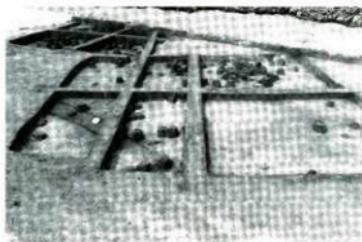
# 圖 版



1 SB2【断割後】(西より)



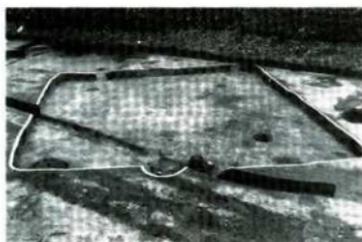
5 SB9 (南より)



2 SB5・6遺物出土状況(東より)



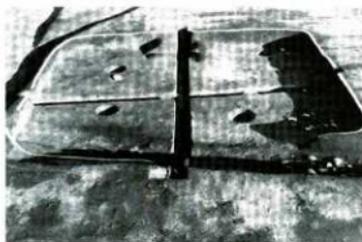
6 SB10 (南より)



3 SB6 (北より)



7 SB11 (南より)



4 SB8【断割後】(西より)



8 SB12 (西より)



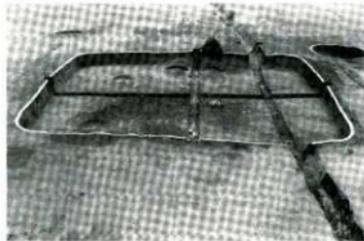
1 SB14 遺物出土状況 (南より)



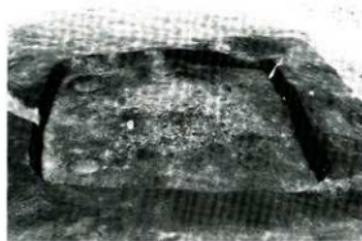
5 SB18 カマド (南より)



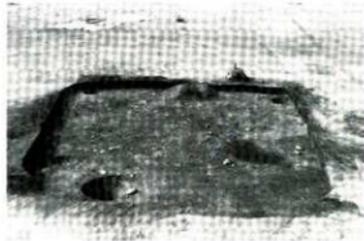
2 SB15 (西より)



6 SB18 (断割後) (南より)



3 SB16 (南より)



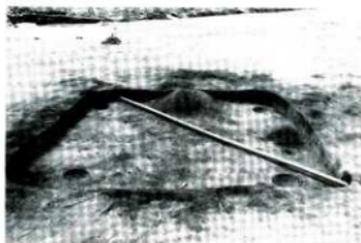
7 SB21 (南より)



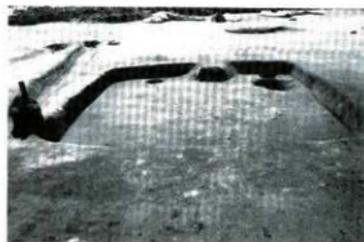
4 SB17 (南より)



8 SB22 (東より)



1 SB25 (西より)



5 SB85 (西より)



2 SB27 Pit 1 遺物出土状況 (西より)



6 SB85 カマド (西より)



3 SB32 (南より)



7 SZ3-① (西より)



4 SB33 (南より)



8 SZ3-② (西より)



1 SZ6 (南より)



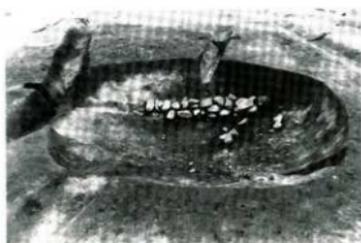
5 SK51 遺物出土状況 (東より)



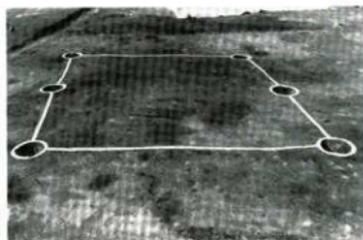
2 SZ8 (西より)



6 SK50 遺物出土状況 (東より)



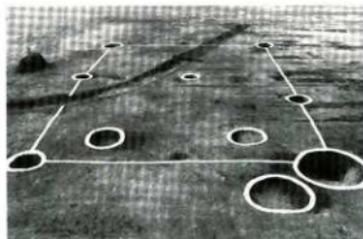
3 SX5 (南より)



7 SH1 (東より)



4 SD10 (西より)



8 SH2 (東より)



1 SB 1第5圖5



2 SB 2第8圖1



3 SB 2第8圖2



4 SB 2第8圖4



5 SB 2第8圖6



6 SB 3第9圖1



7 SB 5第13圖1



8 SB 5第13圖2



9 同上底部外面



10 SB 6第16圖9



11 SB 7第19圖1



12 SB 8第20圖1



13 SB 9第23圖14



14 SB 9第23圖15



1 SB10第26图4



2 SB11第27图2



3 SB13第31图1



4 SB14第34图7



5 SB16第38图1



6 SB16第38图2



7 SB16第38图5



8 SB16第38图3



9 SB18第41图1



10 SB18第41图8



11 SB18第41图9



12 SB19第44图1



13 SB19第44图4



1 S B 20第46图 8



5 S B 23第52图 1



9 S B 24第55图 7



2 S B 21第48图 3



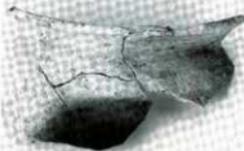
6 S B 23第54图 6



10 S B 25第58图 1



3 S B 22第50图 6



7 S B 24第55图 2



11 S B 25第58图 7



4 S B 22第51图 22



8 S B 24第55图 3



12 S B 25第58图 4



1 S B 25第58图 6



2 S B 25第59图 9



3 S B 25第59图 10



4 S B 25第58图 8



5 S B 25第59图 19



6 S B 26第60图 2



7 S B 27第64图 1



8 S B 27第64图 6



9 S B 27第64图 7



10 S B 27第65图 9



11 S B 27第65图 10



12 S B 29第69图 1



13 S B 30第71图 3



1 S B 31第73图 2



2 S B 31第73图 3



3 S B 31第73图 4



4 S B 31第73图 5



5 S B 32第74图 6



6 S B 32第74图 3



7 S B 83第80图 5



8 S B 83第80图 7



9 S B 83第80图 10



10 S B 84第82图 14



11 S B 84第82图 12



12 S B 84第83图 31



13 S B 85第85图 1



14 S B 85第85图 2



1 S B 85第85圖 3



2 S B 85第85圖 4



3 S B 87第87圖 8



4 S B 87第88圖 14



5 S B 88第89圖 4



6 S B 88第89圖 6



7 S B 88第89圖 2



8 S B 89第92圖 5



9 S B 89第92圖 6



10 S B 89第92圖 8



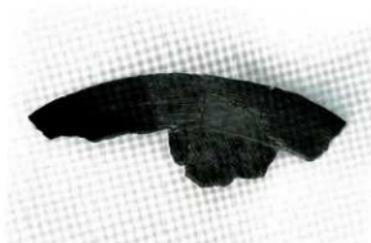
11 S B 28第95圖 36



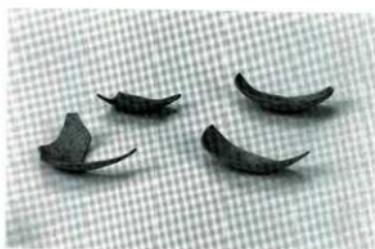
12 S Z 8 第115圖 5



13 包含層第138圖 22



1 SB14第34图1



5 SZ7第106图出土土器



2 SZ2第97图出土土器



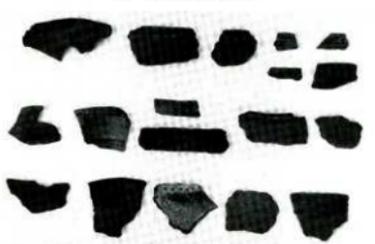
3 SZ2第97图10、11、12底部外面



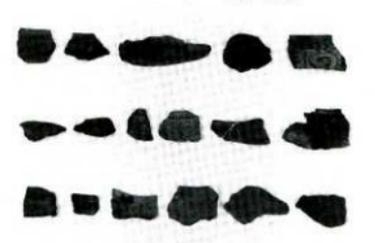
4 SZ6第104图出土土器



6 SK50第126图1



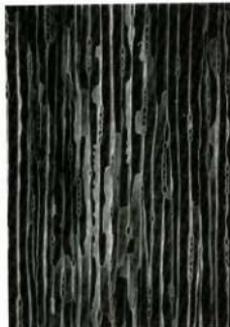
7 SK50第126、127图出土土器



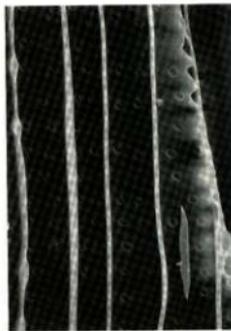
8 SK51第130图出土土器



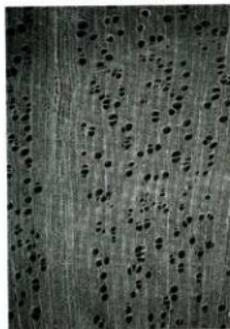
1 a. ヒノキ属 (横断面)  
SB27 bar: 1mm



1 b. 同 (接線断面) bar: 0.1mm



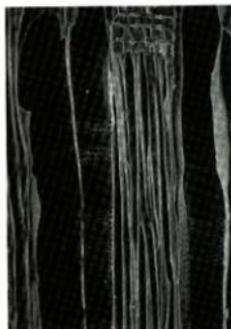
1 c. 同 (放射断面) bar: 0.05mm



2 a. クマシテ属イヌシテ節 (横断面)  
SB19 bar: 1mm



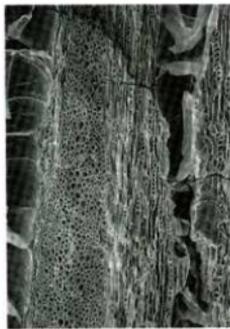
2 b. 同 (接線断面) bar: 0.1mm



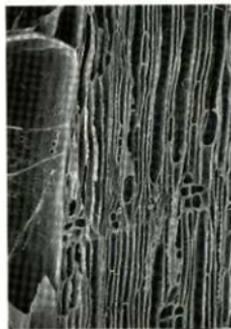
2 c. 同 (放射断面) bar: 0.1mm



3 a. コナラ属コナラ節 (横断面)  
SB15一括 bar: 1mm

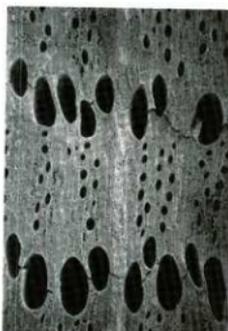


3 b. 同 (接線断面) bar: 0.1mm



3 c. 同 (放射断面) bar: 0.1mm

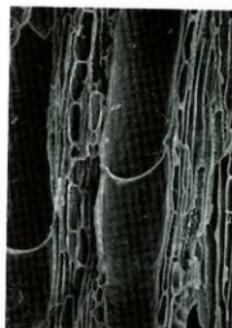
牧野小山遺跡出土住居跡の柱材 1



4 a. コナラ属クヌギ節(横断面)  
SB27 bar: 1mm



4 b. 同(接線断面) bar: 0.1mm



4 c. 同(放射断面) bar: 0.1mm

牧野小山遺跡出土住居跡の柱材 2

## 報 告 書 抄 録

ふりがな	まきのこやまいせき Cちてん						
書名	牧野小山遺跡 C地点						
副書名	緑ヶ丘苗畑跡地利用事業に伴う事前調査報告書						
巻次							
シリーズ名	岐阜県文化財保護センター調査報告書						
シリーズ番号	第39集						
編著者名	佐野康雄						
編集機関	財団法人岐阜県文化財保護センター						
所在地	〒500-8076 岐阜県岐阜市司町1(岐阜総合庁舎内)TEL.058-(264)-1111(814)						
発行年月日	西暦1998年3月31日						
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間 調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在名	市町村	遺跡番号				
岐阜県 美濃加茂市 牧野・下米田町小山 C地点	岐阜県 美濃加茂市 牧野・下米田町小山	21211	04443	35° 26' 41"	137° 03' 38"	19960401 ) 19970331 5000m <sup>2</sup>	緑ヶ丘苗畑 跡地利用事 業に伴う事 前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
牧野小山遺跡 C地点	集落	縄文 弥生 古墳時代後期 ) 古代 中世	土壇 竪穴住居跡 墓	縄文土器 (中期後半) 弥生土器 (中期) 須恵器・土師器 山茶碗			

岐阜県文代財保護センター調査報告書 第39集

## 牧野小山遺跡 C地点

1998年3月24日 印刷

1998年3月31日 発行

編集・発行 財団法人 岐阜県文化財保護センター  
岐阜県岐阜市司町1(岐阜総合庁舎内)

印刷 株式会社 太洋社